

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第52集

ほり の うち はな の き

堀之内花ノ木遺跡

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県稲沢市は濃尾平野のほぼ中央に位置し、古代には国府、国分寺がおかれ、中世においても尾張守護所が置かれるなど尾張国の政治・経済・文化の中心地として繁栄しました。特に古代律令国家期においては、市内松下町を推定地とする国府や市内矢合町に所在する国分寺を中心として、国内はもちろん都からも人々が往来し、役人、僧、庶民にいたるまで多くの人々が暮らした豊かな土地でした。

今回調査した堀之内花ノ木遺跡は国分寺の南に隣接する位置にあり、調査の結果、弥生時代後期から近世にいたる多くの遺構が確認されました。なかでも国分寺の寺域を区画する溝が確認されたことは、国分寺の規模を解明する重要な手がかりになるとともに、国分寺の盛衰、言い換えれば律令国家の盛衰を研究するための貴重な資料となることでしょう。本書に掲載した調査結果が学術的に重要なものとして、地域の歴史研究に利用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成6年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 高木 鐘三



口絵1 A1期の遺物 (SB54・SK50・SX03出土遺物)

遺跡の所在する微高地の最も高く安定した地に、弥生時代後期の小集落が形成される。この集落の継続時期は、山中式後期から廻間Ⅰ式1段階のごく短期間である。



口絵2 A2期の遺物 (SD200・SK160出土遺物)

遺跡の所在する微高地の東縁部に古墳時代前期の溝、土坑が確認された。周辺に同時期の遺構は存在せず、東方低地部に広がると推定される耕地に関連する遺構の可能性もある。遺物の時期は廻間Ⅱ式期から松河戸Ⅰ式前半期である。



口絵3 B2期の遺物 (SD13出土遺物)

尾張国分寺の寺域を区画すると考えられるSD13からは多量の瓦、須恵器が出土した。遺物の時期は折戸10号窯式期が主体である。



口絵4 B3期の遺物 (SE03出土遺物)

尾張国分寺の寺域を区画すると考えられるSD15が廃絶した後、溝上に掘削された井戸SE03は、裏込めとして国分寺の瓦を多量に使用していた。瓦の中には二次的に火をうけたものがあり、『日本紀略』の国分寺焼失記事との関連が注目される。灰釉陶器の時期は黒笹90号窯式期である。

例 言

1. 本書は愛知県稲沢市堀之内町字花ノ木に所在する堀之内花ノ木遺跡（稲沢市遺跡番号5-4）の調査報告書である
2. 調査は県道名古屋祖父江線の建設に伴う事前調査として実施し、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託をうけ、平成3年4月から平成4年1月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査は、小塚俊夫（本センター主査、現海部郡七宝町立七宝中学校教諭）、太田芳巳（本センター調査研究員）、赤塚次郎（同調査研究員）、余合昭彦（同調査研究員）、蟹江吉弘（同調査研究員）があたり、寺沢なつ江氏の協力を得た。
4. 調査、報告書の作成にあたっては次の各関係機関の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部、一宮市博物館、稲沢市教育委員会、小牧市教育委員会、佐織町公民館、甚目寺町教育委員会、知多市民俗資料館、東海市教育委員会、名古屋市見晴台考古資料館、奈良市教育委員会、美和町歴史民俗資料館
5. 調査、報告書の作成にあたっては次の方々の方々の御教示、御協力があった。
岩野見司、内田伸也、遠藤才文、大参義一、梶山 勝、鎌倉崇志、斎藤孝正、立松 彰、土本典生、中井 公、中嶋 隆、中野晴久、七原恵史、檜崎 彰一、服部哲也、日野幸治、藤澤良祐、北條献示（順不同、敬称略）
6. 瓦及び土器の胎土分析はパリノサーヴェイ株式会社が実施し、鉄滓類の分析は川崎テクノリサーチ株式会社総合検査・分析センターが実施した。
7. 報告書作成に関わる整理作業には蟹江吉弘があたり、河合明美、水野里美、吉田恒美諸氏の協力を得た。なお遺物の写真撮影については、深川 進氏の手を煩わせた。
8. 本書の執筆は、太田芳巳（本センター主査）、赤塚次郎、服部俊之（同調査研究員）、蟹江吉弘が分担し、全体の編集は蟹江が担当した。なお各執筆分担者名は目次に記した。
9. 註、参考文献については原則的に各節末に記した。
10. 遺構埋土の土色については1989年度版『新版標準土色帖』小山正忠、竹原秀雄編著を参考に記述した。
11. 調査記録の座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠する。
12. 調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第1章 序章	
第1節 調査の経緯	（太田） 1
第2節 調査の概要	（太田） 2
第3節 環境と周辺の遺跡	（太田） 4
第2章 遺構	
第1節 基本層序	（太田） 6
第2節 各期の遺構	8
(1) 時期区分	（蟹江） 8
(2) A期	（赤塚） 10
(3) B期	（蟹江） 16
(4) C期	（蟹江） 26
(5) D期	（蟹江） 33
第3章 遺物	
第1節 土器・陶磁器	34
(1) A期	（赤塚） 34
(2) B期	（蟹江） 38
(3) C期	（蟹江） 45
第2節 瓦	（蟹江） 50
第3節 土錘	（蟹江） 72
第4節 加工円盤	（蟹江） 73
第4章 自然科学分析	
第1節 重鉍物胎土分析	（株）パリノサーヴェイ・服部 76
第2節 鉄滓類の分析	（株）川崎テクノリサーチ・服部 89
第3節 堀之内花ノ木遺跡にみられた地震痕	（服部） 95
第5章 考察	
第1節 堀之内花ノ木遺跡の遺構変遷	（蟹江） 98
第2節 尾張国分寺系瓦について	（赤塚・蟹江） 102
付 表	123

図 版 目 次

- | | | | |
|------|-------------------------------|------|-------------|
| 図版 1 | A区遺構実測図 | 図版13 | A期の遺物実測図(3) |
| 図版 2 | B区遺構実測図 | 図版14 | A期の遺物実測図(4) |
| 図版 3 | C区・D a区遺構実測図 | 図版15 | A期の遺物実測図(5) |
| 図版 4 | C区・D b区・D c区遺構実測図 | 図版16 | A期の遺物実測図(6) |
| 図版 5 | E a区・E b区・F a区遺構実測図 | 図版17 | B期の遺物実測図(1) |
| 図版 6 | E b区・E c区・F a区・F b区・F c区遺構実測図 | 図版18 | B期の遺物実測図(2) |
| 図版 7 | E c区・F c区遺構実測図 | 図版19 | B期の遺物実測図(3) |
| 図版 8 | G区遺構実測図 | 図版20 | B期の遺物実測図(4) |
| 図版 9 | H区遺構実測図 | 図版21 | B期の遺物実測図(5) |
| 図版10 | H区遺構実測図 | 図版22 | B期の遺物実測図(6) |
| 図版11 | A期の遺物実測図(1) | 図版23 | C期の遺物実測図(1) |
| 図版12 | A期の遺物実測図(2) | 図版24 | C期の遺物実測図(2) |
| | | 図版25 | C期の遺物実測図(3) |

写 真 図 版 目 次

- | | | | |
|--------|------------------|--------|---------------|
| 写真図版 1 | 堀之内花ノ木遺跡C・E区 | 写真図版22 | H区SD100遺物出土状況 |
| 写真図版 2 | A区全景 | 写真図版23 | A期の遺物(1) |
| 写真図版 3 | B区全景 | 写真図版24 | A期の遺物(2) |
| 写真図版 4 | B区SE04 | 写真図版25 | B期の遺物(1) |
| 写真図版 5 | C区全景 | 写真図版26 | B期の遺物(2) |
| 写真図版 6 | C区SD13遺物出土状況 | 写真図版27 | C期の遺物(1) |
| 写真図版 7 | C区SD13遺物出土状況 | 写真図版28 | C期の遺物(2) |
| 写真図版 8 | C区SD15. 30. SE03 | 写真図版29 | 丸瓦 |
| 写真図版 9 | C区SB50. 51 | 写真図版30 | 平瓦 |
| 写真図版10 | C区SK50遺物出土状況 | 写真図版31 | 軒瓦・道具瓦 |
| 写真図版11 | E a区西半 | 写真図版32 | 土錘・加工円盤 |
| 写真図版12 | E a区東半 | | |
| 写真図版13 | E a区SB11 | | |
| 写真図版14 | E c区全景 | | |
| 写真図版15 | E c区SE06 | | |
| 写真図版16 | E c区SK100遺物出土状況 | | |
| 写真図版17 | F b区SD75 | | |
| 写真図版18 | G区全景 | | |
| 写真図版19 | G区SE02 | | |
| 写真図版20 | H区全景 | | |
| 写真図版21 | H区SD100遺物出土状況 | | |

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位置図
第2図 調査区設定図及び尾張国分寺
第3図 周辺の主要遺跡
第4図 土層堆積模式図
第5図 基本層序セクション図
第6図 主要遺構配置図 (A～C期)
第7図 SB50. 51. 52. 53. 54実測図及び
SK50遺物出土状態図
第8図 SK160遺物出土状態図
第9図 SD01. 05. 07. 45. SB01実測図
第10図 SD13遺物出土状態図
第11図 SD15. 30. SE03実測図
第12図 SB02. 03. 04実測図
第13図 SB06. 07. 08. 09実測図
第14図 SE04実測図
第15図 SE03実測図
第16図 SB05. 10. 11. 12. 14. 15実測図
第17図 Ec区土坑(塹)分類図
第18図 Ec・Fc区実測図
第19図 SE02. SE06実測図
第20図 Ec区. Fc区方形区画溝実測図
第21図 H区方形区画溝実測図
第22図 SD100遺物分布図
第23図 須恵器器種分類図
第24図 B期その他の遺物実測図
第25図 灰釉系陶器碗皿分類図
第26図 丸瓦(KAⅠ)実測図
第27図 丸瓦(KAⅡa)実測図
第28図 丸瓦(KAⅡb)実測図(1)
第29図 丸瓦(KAⅡb)実測図(2)
第30図 丸瓦(KA技法他)実測図(3)
第31図 平瓦(KB)実測図(1)
第32図 平瓦(KB)実測図(2)
第33図 平瓦(KB)実測図(3)
第34図 平瓦(KB)実測図(4)
第35図 平瓦(KB)実測図(5)
第36図 軒丸瓦(KC)実測図
第37図 軒平瓦(KD)実測図(1)
第38図 軒平瓦(KD)実測図(2)
第39図 道具瓦(KE)実測図
第40図 土錘実測図
第41図 加工円盤実測図(1)
第42図 加工円盤実測図(2)
第43図 弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての
試料の重鉱物組成ダイヤグラム
第44図 軒丸瓦. 軒平瓦の重鉱物組成ダイヤグラ
ム
第45図 丸瓦. 平瓦の重鉱物組成ダイヤグラム
第46図 土師器甕の重鉱物組成ダイヤグラム
第47図 X線回折測定結果(1)
第48図 X線回折測定結果(2)
第49図 Fb区砂脈垂直断面図
第50図 Fb区砂脈粒度積算曲線
第51図 H区砂脈平面分布図
第52図 濃尾地震における砂脈の規則性
第53図 遺構変遷図
第54図 尾張の古代寺院分布図
第55図 尾張国分寺系軒瓦変遷図
第56図 平瓦分類分布図
第57図 平瓦N類(一枚作り)分布図
第58図 丸瓦分類分布図
第59図 丸瓦ⅢB類. a手法分布図

表 目 次

第1表 調査進行表	第19表 軒丸瓦型式別出土数
第2表 主要遺構時期区分表	第20表 軒平瓦型式別出土数
第3表 E c区土坑(塋)一覽表	第21表 瓦観察表(1)
第4表 その他の遺物(B期)観察表	第22表 瓦観察表(2)
第5表 丸瓦調査区別出土量	第23表 土錘一覽表
第6表 丸瓦色調	第24表 加工円盤計測値平均一覽表
第7表 丸瓦(葺足部)厚さ	第25表 加工円盤観察表
第8表 丸瓦(玉縁部)厚さ	第26表 弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての 試料分析結果
第9表 丸瓦凹面布目数	第27表 奈良時代～平安時代にかけての試料分析 結果
第10表 丸瓦側面調整及び形状	第28表 鉄滓分析結果概要(1)
第11表 丸瓦端面形状	第29表 鉄滓分析結果概要(2)
第12表 平瓦調査区別出土量	第30表 鉄滓化学成分一覽
第13表 平瓦厚さ	第31表 尾張国分寺系軒瓦分布一覽表
第14表 平瓦色調	第32表 平瓦分類表
第15表 平瓦凸面縄目数	第33表 丸瓦分類表
第16表 平瓦側面形状	
第17表 平瓦端面形状	
第18表 平瓦凹面布目数	

発掘調査に参加された方々

石橋美和子	伊藤とよ	伊藤美佐子	伊藤百合子	上田茂寿	江川 新	大沢千尋
大竹文子	大塚早苗	織田まさゑ	垣見和昭	加藤まつ子	神谷信子	川上辰男
櫛田さとし	黒谷日佐子	近藤 勇	近藤洋子	後藤恒一	後藤久子	後藤三千代
沢田トシエ	柴山香代子	新海澄子	助川一市	祖父江節子	田口 勝義	竹川美知子
竹川みゆき	竹田幸一	田治英子	田中マサ子	棚橋豊子	東松道昭	内藤直江
仲川信子	中野絹枝	中村幸一	名川ふじ子	野口まさを	野村京子	羽田野明美
服部三枝子	服部美智代	服部美代子	久田友子	平野加奈子	平野銀一	広瀬喜巳
藤田定子	前田利昇	益田紀子	松江かほり	湊 純子	三輪美恵子	迎 広
村手照子	安井末一	安井治男	山田芳美	山本真紀子	山本宣子	雪松町子
横井太一	吉田さよ子	吉田康子	米満照子	若杉隆治	若松里美	枝木 守
国立智美(愛知大3年)	赤松一秀(花園大3年)			高田恵理子(皇学館大2年)		
澤田健一(皇学館大2年)	米山 徹(皇学館大1年)			山田麻紀子(皇学館大1年)		

第1章 序 章

第1節 調査の経緯

堀之内花ノ木遺跡（稲沢市遺跡番号5-4）は愛知県稲沢市堀之内町を中心に広がる弥生時代から中世にかけての複合遺跡であり、遺跡の北に隣接する稲沢市矢合町字椎ノ木に「尾張国分寺旧址」の石碑がある。

尾張国分寺跡の調査

尾張国分寺の発掘調査は、昭和36年、石田茂作氏を団長とする調査団によって、中部日本新聞社を中心に、愛知県、稲沢市などの協力事業として行われている。その結果、塔跡からは、洪水の影響をうけてはいるものの、ほぼ中心に近い位置で心礎が確認され、金堂跡は、基壇の築土と基壇周辺の瓦積の残部から、その位置と規模が明らかにされた¹⁾

堀之内花ノ木遺跡の調査

その後、昭和59年に、寺域南限推定地を流れる用水路の護岸改修工事にともない、稲沢市教育委員会が発掘調査を行ったが、後世の攪乱が著しく、伽藍配置²⁾の南限など、国分寺関連の遺構は確認されなかった³⁾

そして今回、県道名古屋祖父江線建設にともない、愛知県土木部より愛知県教育委員会をとおして委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが、平成3年4月から平成4年1月までの期間で、堀之内花ノ木遺跡の発掘調査を実施した。調査面積はA区 500㎡、B区 350㎡、C区1400㎡、D区 600㎡、E区1700㎡、F区 700㎡、G区 350㎡、H区1500㎡、総面積7100㎡であった。発掘調査終了後、平成4年度から5年度にかけて出土遺物の整理作業及び報告書作成を行った。

調査の結果、本遺跡は、尾張国分寺跡の一部に該当し、さらに時代的には弥生時代後期から中近世にいたる幅広い時期の複合遺跡であることが確認された。また、愛知県教育委員会を通じて県土木部に強く要望した結果、C区で検出された寺域区画溝の一部は、埋め戻しの際、山砂で遺構保存された。



第1図 遺跡位置図

註

- 1) 浅野 清編 1968『尾張国分寺の発掘調査』稲沢市教育委員会
- 2) 昭和36年の調査から石田茂作氏が想定したもので、北から南へ講堂・金堂・中門・南大門が一直線に並び、塔が金堂の南東に置かれる配置。
- 3) 日野幸治他 1983『尾張国分寺跡緊急発掘調査報告書』稲沢市文化財調査報告Ⅹ

第2節 調査の概要

調査区の設定 堀之内花ノ木遺跡の調査区は東西約450mと細長いためA～H区までの8調査区を設定した。調査区は西から東へA・B・C・E・G・H区とし、C・E区の南側には耕作地への進入路を確保するためD・F区を設定した。さらにD区・E区・F区はa、b、cに3分割した。

調査の進行 発掘調査は4月上旬から準備を進め、A・C・G区を4月下旬から7月中旬までの期間で調査した。その後、調査が終了した調査区を廃（排）土置き場として利用しつつ、10月末までにB・E区の調査を終了し、11月上旬からは進入路だったD・F区、下旬からはH区の調査に入り、1月末で現地調査をすべて終了した。なお、C区の調査成果をもとに、7月20日（土）に現地説明会を実施した。

調査成果の概要 調査の結果、確認された遺構は、出土遺物により、A期：弥生時代後期から古墳時代前期、B期：奈良から平安時代、C期：中世、D期：近世以降の4期に分けて考えることができる。

A期 C・D区の東半部からE・F区の西半部にかけて弥生時代後期の遺構が、H区の中央部で古墳時代初頭の遺構がそれぞれ検出された。主な遺構は堅穴住居9軒、土坑2基、土器集積1ヶ所、溝1条。ことにC区S B53内の土坑S K50からは弥生時代後期の良好な一括遺物が出土し、H区の土坑および溝から古墳時代前期のパレス壺、S字甕などの多くの遺物が出土した。

B期 B期の遺構はA区からE・F区の西部に集中する。なかでも特筆すべき遺構はC・D区で検出された溝（SD13・15・30）である。奈良時代の良好な一括遺物が出土したSD13は南北方向の溝であり、C区を東西方向に走るSD30と直交する。さらにSD30はC区東端で南北に分岐（SD15）する。昭和36年の調査で確認された塔、金堂とはほぼ同一の方位を有し、推定寺域の中軸線上で分岐するこれらの溝は、尾張国分寺の寺域を画する溝の可能性が高い。またSD15の一部を破壊して掘削された井戸（SE03）は尾張国分寺の廃絶時期を考える上で注目される。その他、A区からは、奈良時代の建物跡と屋敷地を画する溝を、B区からE・F区にかけて堅穴住居14軒、土坑、井戸等多数の遺構を検出した。

C期 C期の遺構は遺跡全域に展開するが、B期に比べ、微高地東半部に遺構密度が高くなる。注目すべきは、Ec区からG区にかけて検出された土坑群と、それよりもやや新しい時期の溝である。12世紀後半から13世紀前半に土坑群（土壙墓群を想定）が形成され、14世紀中頃にそれを破壊する形で溝が掘削される。東西、南北に掘られた溝は方形区画を成す。

D期 遺構は全域に散在する。B区・D区で検出された幕末期の遺物を伴う大溝2条は、明治時代作成の地籍図の水田の区画と一致する。

	1991 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1992 1月	2月	3月
A区	▨											
B区				▨								
C区	▨				7/20現地説明会							
D区								▨				
E区				▨								
F区							▨					
G区			▨									
H区									▨			

第1表 調査進行表



第2図 調査区設定図及び尾張国分寺 1:5000

第3節 環境と周辺の遺跡

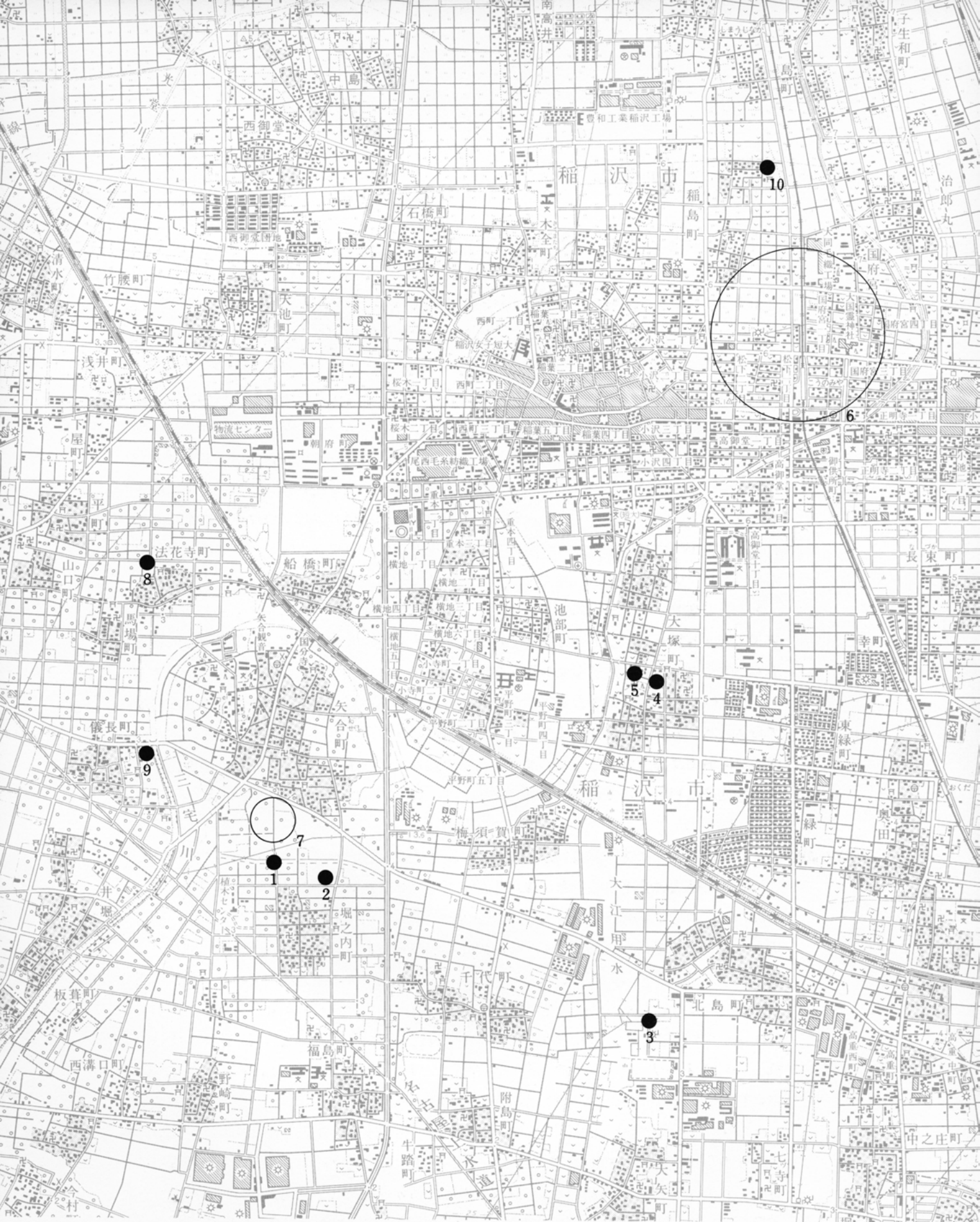
自然環境 木曾川、長良川、揖斐川の下流に広がる濃尾平野は日本を代表する平野である。この三川によりつくり出された平野は、西側よりも東側に大きく発達している。これは長良川、揖斐川に比べ木曾川の河川としての規模が数倍大きいことに起因している。濃尾平野は山地から伊勢湾に向かって扇状地堆積帯、自然堤防・後背湿地地帯、デルタ性平野と様相を変えている。

海拔高度10m前後に相当し、犬山市から南西方向に半径12kmの範囲が木曾川扇状地である。また、海拔高度2.5mに満たない一面の低湿な平野がデルタ性平野で、津島市、甚目寺町あたりから南がこれに属する。この両者の間には日光川、三宅川、五条川など支流を含めた木曾川の旧流路沿いに自然堤防、その背後に後背湿地が発達している。木曾川は現在の位置に定まる以前、幾度となく流路を変えたため自然堤防と後背湿地は複雑に錯綜している。一面平坦に見えるものの、現在では自然堤防の部分は集落や畑に、後背湿地は水田に利用されている。

木曾川の支流三宅川は、稲沢市周辺で大きく4回蛇行する。最後に大きく曲がり流路を南西にむけるあたりの左岸の微高地上に堀之内花ノ木遺跡は立地する。微高地は北にある稲沢市矢合町から遺跡の所在する堀之内町へ、さらに東南東の千代町へと続く。堀之内町、千代町の北側、県道名古屋祖父江線沿い西北西から東南東の方向に存在する低地は後背湿地と考えられる。調査区域の現況は後背湿地の一部に水田がみられるものの、ほぼ全域が畑地および農道である。この地は、苗木の栽培では全国でも有数の産地であり、畑地は苗木栽培に利用されている。

周辺の遺跡 次に堀之内花ノ木遺跡周辺の遺跡について簡単に述べる。縄文時代の遺跡については、当時の生活様式と濃尾平野の海岸線から考えても人々が生活を営むには適した場所とはいえない。近隣では一宮市の佐野遺跡、馬見塚遺跡、下り松遺跡、西春日井郡清洲町の朝日遺跡で縄文時代後期の遺構がわずかに検出されたのみであり、稲沢市内でも下津遺跡（下津蚊池町）で縄文土器が出土しているにすぎない。濃尾平野の中央以南で人々の生活の営みが明らかになってくるのは弥生時代以降であろう。稲沢市周辺では弥生時代から古墳時代にかけて大規模な集落の発達はなかったが、琵琶戸遺跡（堀之内町）、流遺跡（北島町流）、大塚遺跡（大塚町）、大塚古墳（大塚町）などから弥生土器や須恵器が出土している。特に琵琶戸遺跡は、本遺跡A期の遺構群との関連で注目される。

その後、この地は古代尾張国の中心として大きく発展する。本遺跡の北東、約3.5kmに位置する稲沢市松下1丁目が、三宅川の水運、尾張大国霊神社の存在などから尾張国府に推定されている。また、遺跡の北に隣接して尾張国分寺跡、北西に尾張国分尼寺跡（法花寺町能ノ山）、正楽寺跡（儀長町元薬師）、国府推定地の北に東畑廃寺跡（稲島町石畑）、などの古代寺院が存在し、当時の繁栄ぶりを容易に推測できよう。



- 1 堀之内花ノ木遺跡 2 琵琶戸遺跡 3 流遺跡 4 大塚遺跡 5 大塚古墳
 6 尾張国府推定地 7 尾張国分寺跡 8 尾張国分尼寺跡 9 正楽寺跡 10 東畑廃寺跡

国土地理院発行 1:25000地形図(一宮、清洲)使用

第3図 周辺の主要遺跡

第2章 遺構

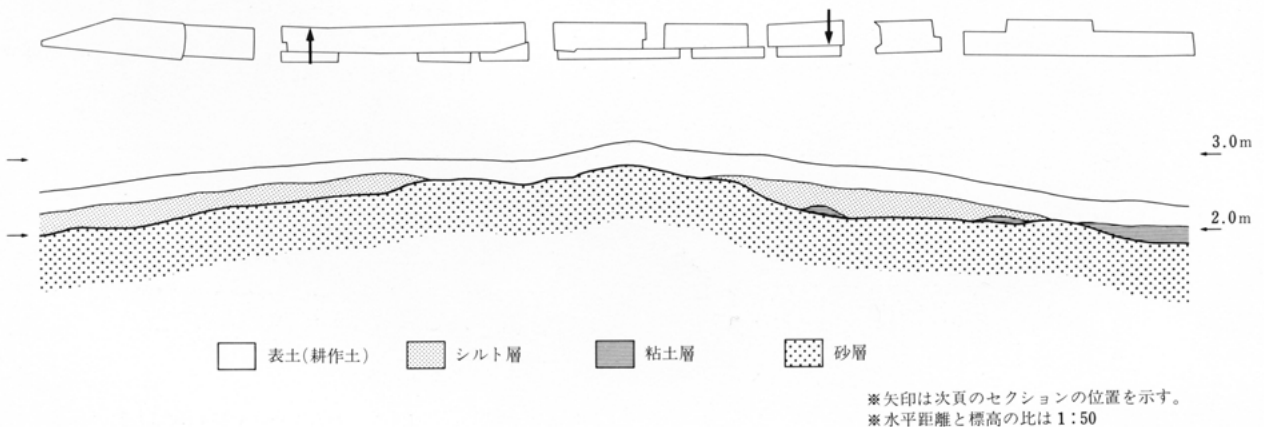
第1節 基本層序

堀之内花ノ木遺跡は標高3m前後の微高地上に立地する。東西に細長い調査区の中央にあたるC区・E区が最も高く、東西に緩やかに標高を下げていく。遺跡の中央では3.2m、遺跡の西端A区では2.7m、東端のH区では2.4mを測る。

この微高地は木曾川の支流、三宅川の自然堤防にあたり、遺跡の東端では後背湿地へと入り込んで行く。遺跡の立地する微高地の基盤砂層については海岸線に沿ってできる浜堤列という見解もあることを付記しておく。これについては本遺跡のC区の基盤砂層の標高-0.2m及び-1.2m採取のサンプルの粒度分析をしたところ、海浜性ないし海浜砂丘性の粒度組成を示す結果が得られ、その可能性が高いと指摘されている¹⁾

つぎに、遺跡の4地点についてそれぞれの基本層序をのべることにする。遺跡西部のA区からC区東端では、上から現耕作土、暗褐色シルト層、黄褐色砂層と大きく3層から構成されている。第Ⅰ層の現耕作土はにぶい黄褐色のシルト層で20~40cmの厚さを有するが、部分的には50~70cmの厚さを有する地点もある。これは栽培されていた植木を移動する際の掘削に起因する。第Ⅰ層直下で近世の遺構が検出できる。第Ⅱ層は20~40cmの厚さを有する中世及び古代の遺物包含層である。この層の直下が中世及び古代の検出面となる。第Ⅲ層はベースで黄褐色の細粒砂である。

微高地上でもっとも高い標高を測るC区の東端部、E a区、E b区では、20~40cmの表土（耕作土および農道の客土）を取り除くと、ただちに検出面となる。後世の削平が激しく古代から近世にかけての遺構が同一面で確認される。



第4図 土層堆積模式図

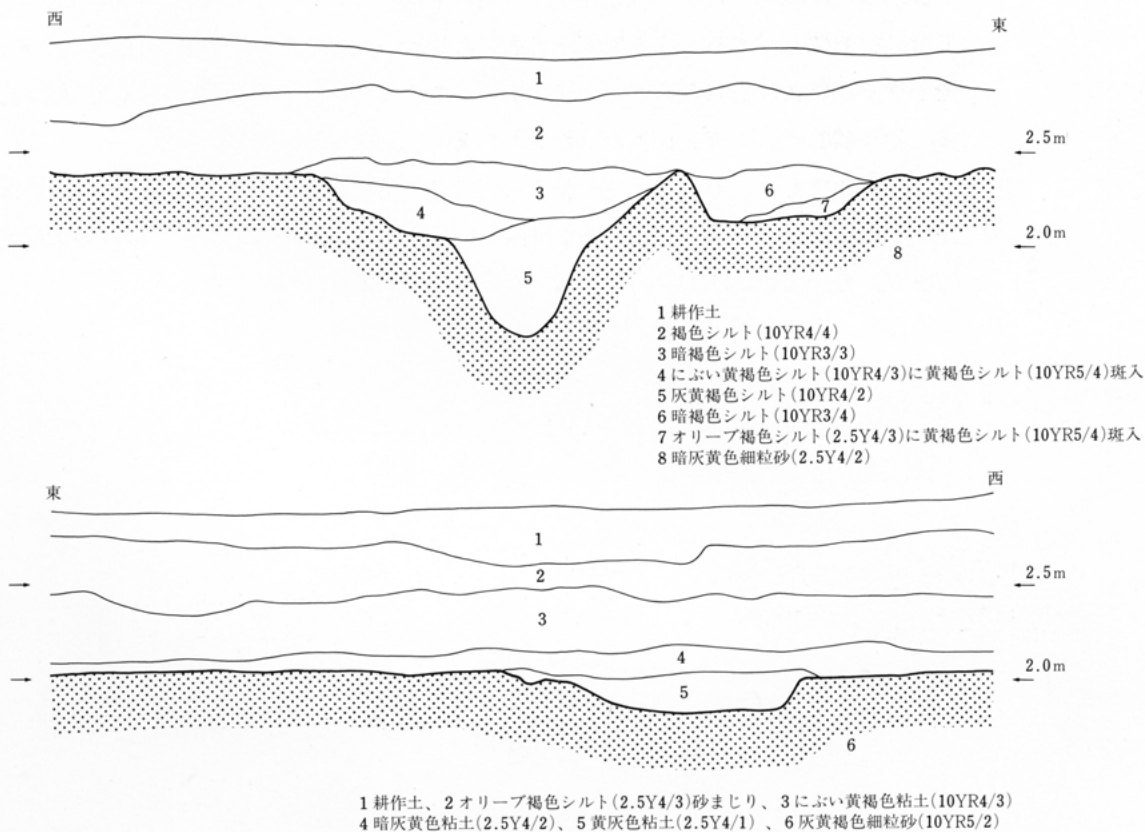
遺跡の東方のE c区では、20~60cmの表土（耕作土および農道の客土）の下に、黄褐色~褐色の2層のシルトが40~80cm堆積している。その直下が検出面で、中世の土坑等の遺構はベースの黄褐色細粒砂層を掘り込んでいる。

遺跡の東端H区では30~50cmの水田耕作土の下に5~10cmの床土があり、これらを除去した段階で、古墳時代前期から中世にかけての遺構が同一面で検出できる。ベースは黄灰色の粘質土で40cm前後の層厚を有し、その下位は中粒砂である。

以上4地点の堆積状態から、遺跡の中央部（C区東端からE a区）から東方および西方に向かってベースの黄褐色シルト層および細粒砂層が緩やかに下降することがわかる。その基盤に古代の遺構は掘り込まれている。その後、河川の洪水により自然堤防構成層であるシルト層の堆積が繰り返され、その間に中世以降の遺構が掘り込まれて現在に至ったと思われる。ただ、遺跡中央部においては、耕作等による削平が著しく、シルト層は欠損していると考えるのが妥当ではないだろうか。遺跡の東端H区においては、後背湿地性の堆積層の粘土層上に遺構の掘削と、洪水による堆積が繰り返され、最終的には水田化されたと考えられる。

註

1) 森 勇一 1992 「朝日遺跡および周辺地域の地質と古環境」『朝日遺跡Ⅱ』 愛知県埋蔵文化財センター報告書 第31集 稲沢市教育委員会



第5図 基本層序セクション図 1:200

第2節 各期の遺構

(1) 時期区分

今回、堀之内花ノ木遺跡で確認された遺構は弥生時代後期から近世まで多岐にわたるが、出土遺物から概ね下記の4期に区分することができる。本報告書では、さらに遺構の重複関係や、有機的まとまりなどから細分を試みた。

4期の設定 A期 弥生時代後期から古墳時代前期

B期 古代

C期 中世

D期 近世以降

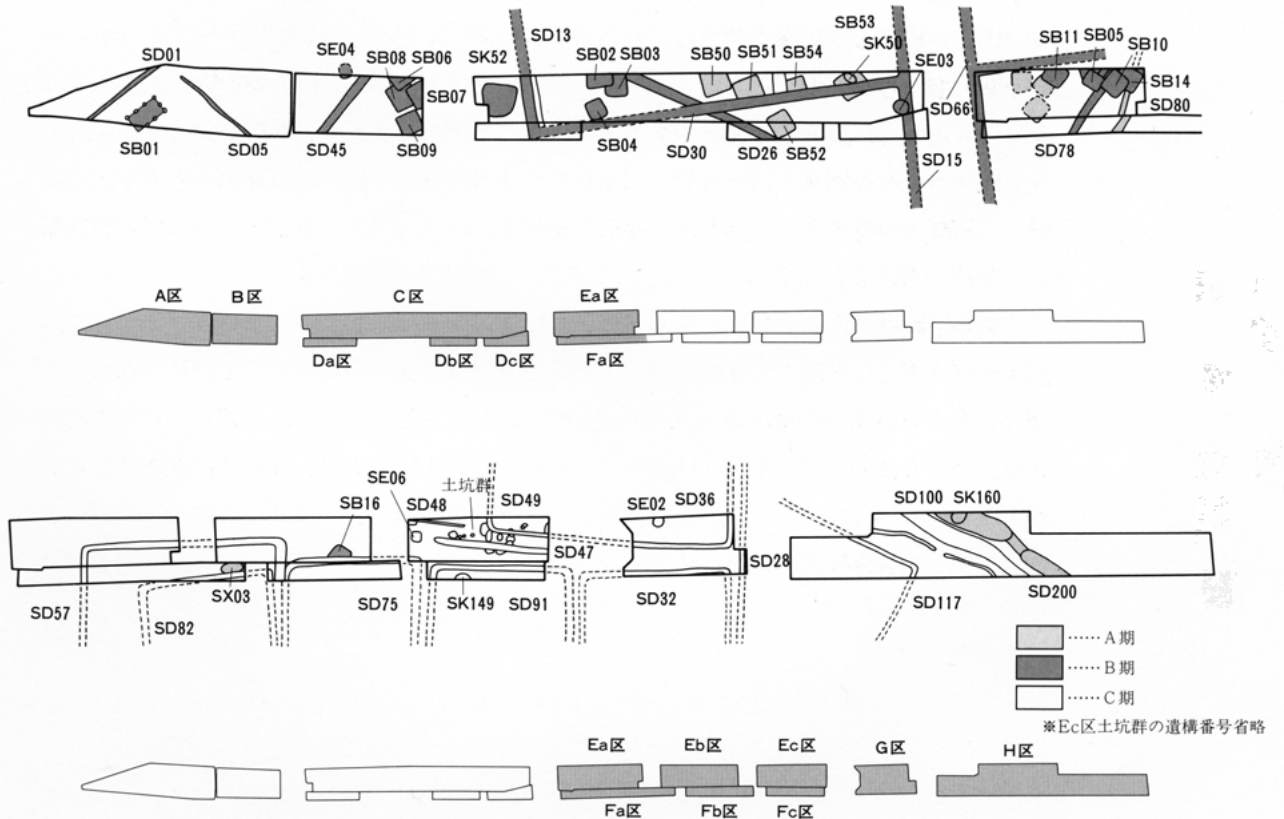
各期の細分 A期の遺構はC・D区東半部からE a・F a区に集中している。これらの遺構が広がる地点は、遺跡が所在する微高地東端に位置し、単発的な小集落が想定される。この遺構群をA1期とする。なおA1期遺構群の東、やや距離をおいてH区で確認された遺構群をA2期とする。出土遺物からA1期を弥生時代後期、A2期を古墳時代に設定する。

B期の遺構はA区からE b・F b区を中心に広がるが、これは遺跡が所在する微高地の東西幅と一致する。本報告書では、遺構の重複関係、主軸の方向、遺構のまとまりからB期をB1期からB3期に細分する。つまり昭和36年の尾張国分寺発掘調査の成果に基づき、C区を中心に展開する国分寺関連遺構と考えられる遺構群をB2期に設定し、A区からC区中央部に展開する国分寺建立以前からの遺構群をB1期、C区東端からE b区に展開する国分寺が廃絶する時期以降の遺構群をB3期とする。出土遺物からB期は猿投窯編年における高蔵寺2号窯式から黒笹90号窯式までの時期が設定できる。

C期の遺構はA区からH区に広がる。この時期の遺構は、E c区からG区で集中して確認された井戸と土坑群などをC1期、主にF a・F b・F c・G・H区で確認されたC1期の遺構群を破壊して形成される方形区画溝などをC2期とする。出土遺物からの時期設定は、概ね南部系灰釉系陶器の時期をC1期、北部系灰釉系陶器を伴う時期をC2期とした。なお「灰釉系陶器」の用語については、いわゆる「山茶碗」や、それと伴焼される他器種を総称し、灰釉陶器を除外して考える。

時 期	遺 構
A 期	A 1 SD 8 0 SB 5 1, 5 2, 5 3, 5 4, SK 5 0 SX 0 3
	A 2 SD 2 0 0 SK 1 6 0
B 期	B 1 SD 0 1, 0 5, 2 6, 4 5, 7 8 SB 0 1
	B 2 SD 1 3, 1 5, 3 0 SB 0 2, 0 3, 0 4, 0 6, 0 7, 0 8, 0 9 SE 0 4, SK 5 2
	B 3 SB 0 5, 1 0, 1 1, 1 4, 1 6 SE 0 3
C 期	C 1 SK 9 2 ~ 1 2 3 (土坑群) SE 0 6
	C 2 SD 4 7, 4 8, 4 9, 5 7, 7 5, 9 1, 1 0 0, 1 1 7 SK 1 4 9
D 期	SD 1 4, 4 1, 5 0, 6 0 SK 1 1

第2表 主要遺構時期区分表



第6図 主要遺構配置図 (A~C期)

(2) A 期

A 1 期 (弥生時代後期)

概観 調査区のほぼ中央部に展開する弥生時代後期の遺構群は、C・E区において竪穴住居を中心に確認することができた。これらの遺構はSD80以西の微高地東端部に集中し、単発的な小集落を形成していたものと想定できる。所属時期は山中式後期から廻間I式1段階にかけてのごく限られた時期と考えられる。

A 1 期の遺構は竪穴住居9軒、土坑10基、土器集積1ヵ所、溝1条。

竪穴住居 SB50 (第7図)

C区中央部に位置し、北東端を調査区外に置く竪穴住居。C・E区に展開するA 1 期の竪穴住居群の西端に位置し、SB51とは住居南東隅部を近接して検出できた。住居西壁には幅0.4mの壁溝が存在し、また北東を除く3つの支柱穴を確認することができた。柱穴は径0.5~0.7mで、床面からの深さ0.3mを測る。遺構の残存状況は壁高0.08mと悪く、床面においての炉跡等の諸施設も検出できなかった。出土遺物は埋土上位を中心に小破片が散在するのみであったが、これらの資料から山中式後期に所属するものと考えられる。住居面積は5.6×(5)m、約28㎡で正方形プランをもつ。住居方位はN-21°-W。

SB51 (第7図)

C区中央部、SB50の南東に近接して営まれた竪穴住居で、南壁部は奈良時代の溝SD30によって破壊されている。北側2ヵ所に支柱穴を確認でき、径0.5~0.6mで床面からの深さ0.25mを測る。削平が著しく床面付近のみが残存し、炉跡・踏締まり等も確認できない。出土遺物は北壁部を中心に埋土上位に散在して認められ、山中式5段階に所属する資料が主体を占める。東西4.9mで南北では4.5mが残存し、住居方位はSB50と同じくN-21°-Wである。

SB52 (第7図)

SB51の南方でC区からD区にかけて検出できた長方形プランを有する竪穴住居。西壁部は現代の攪乱によって大きく破壊されているものの、全体の形状と3つの支柱穴(径0.3m)を確認することができた。住居内埋土全体には炭化物が混在し、あるいは焼失した可能性が考えられる。出土遺物は西壁攪乱部付近からややまとまって出土し、その特徴から廻間I式1段階の資料と考えられる。壁高はわずか0.1mで削平が著しい。住居面積は東西4.2m、南北4.6mで19.3㎡。住居方位はN-32°-W。

SB53 (第7図)

C区東端に位置する竪穴住居で、中央部が奈良時代の溝であるSD30によって大きく破壊されている。なお北東隅を調査区外に置く。古代・中世期の遺構と著しく重複し、さらに住居内にはSK50が存在しており、したがって住居内の状況は不明確である。出土遺物はほとんど確認できていない。住居面積は東西5.3m、南北5mで26.5㎡。住居方位は

N-32°-W。

その他の竪穴住居としては、まずC区SB51とSB53の間にSB54が存在する。わずかに北東部が検出できたのみであるが、奈良時代の溝であるSD30付近より高杯の出土が認められた。山中式5段階に所属する資料と思われるが、6・7は廻間I式0段階に下降するものであろう。住居方位はN-23°-W。またEa区ではSB55・56・57・59と4軒の竪穴住居を確認できたが、古代・中世期の遺構との重複が著しく、残存状況は極めて悪い。さらに出土遺物も小破片に留まる。その内で、Ea区西端に存在するSB55では住居北西部1/4ほどが残存していたのみであるが、内部に1mほどの小土坑と北西柱穴を確認できた。出土遺物から山中式5段階に所属するものと考えられる。

土坑 SK50 (第7図)

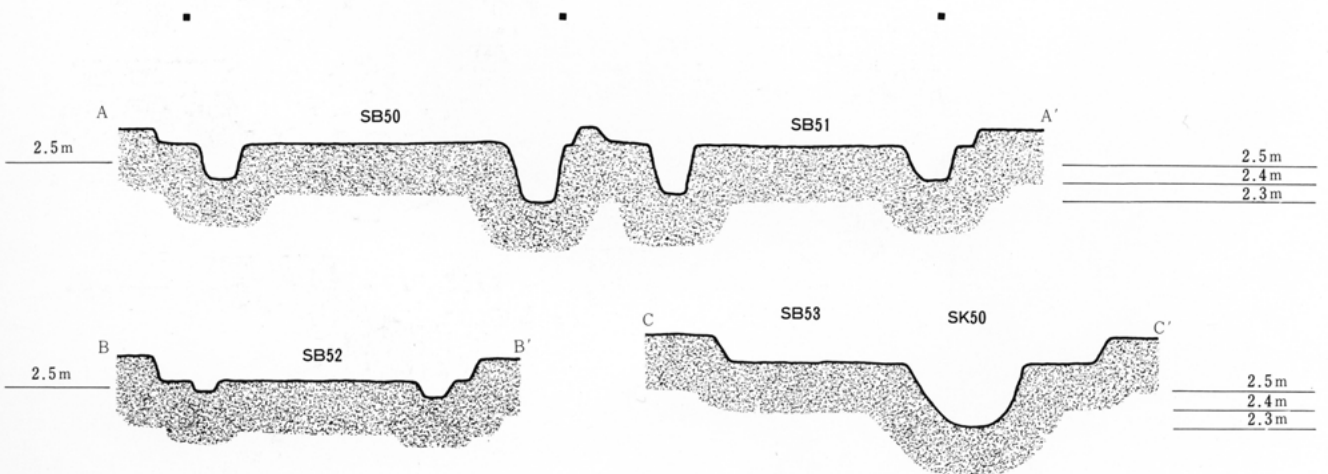
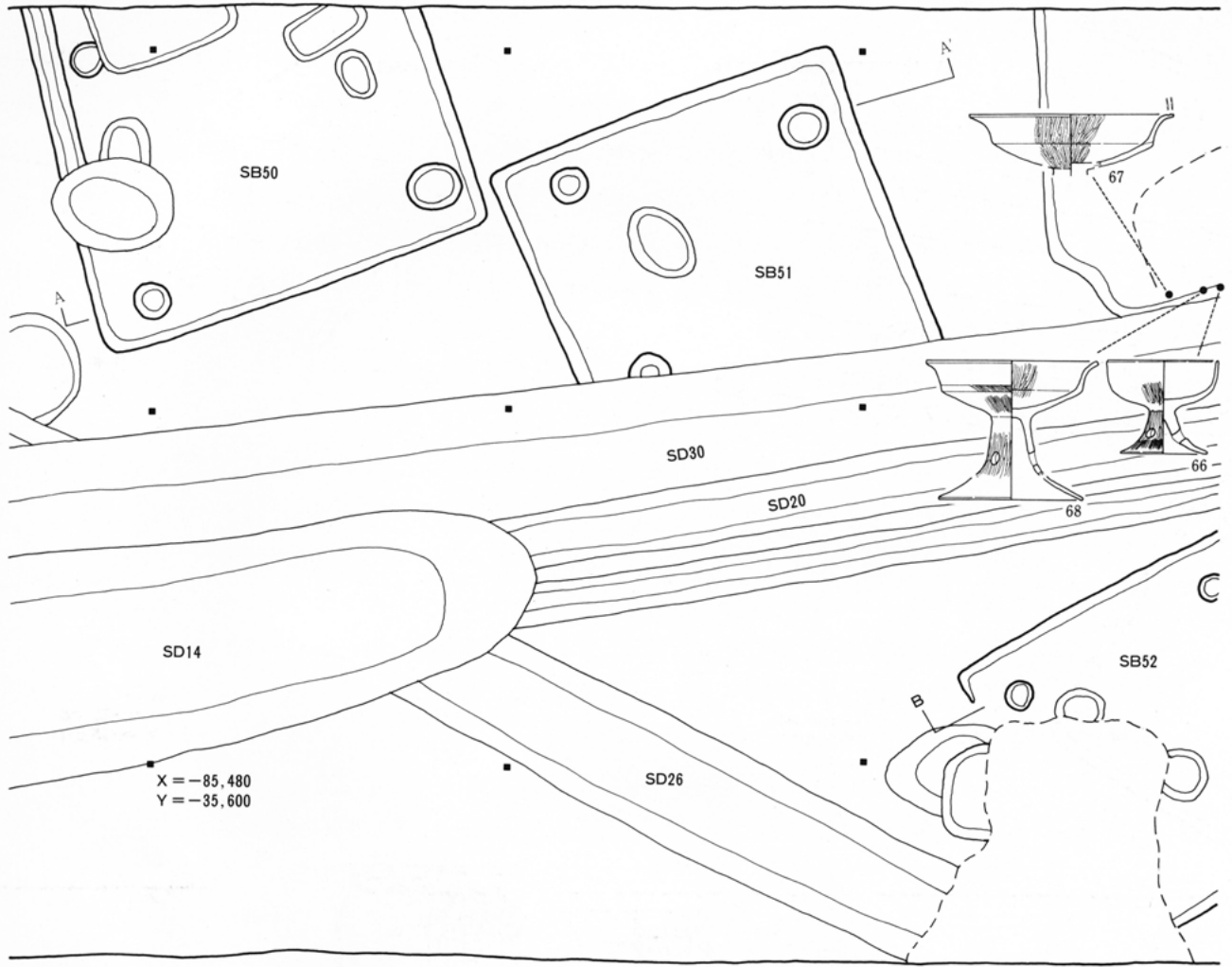
C区東端部に存在する竪穴住居SB53内に存在する土坑。埋土の堆積からはSB53の後に掘削されたことが分かるのであるが、出土土器からは明確な時期差は認められない。SK50は主軸をN-48°-Wに置き、長軸2.2m、短軸1.3mで、深さ0.35mを測る。土坑内には黒褐色シルト(10YR3/2)が均一に堆積し、内部からまとまった土器の出土が見られる。これらは山中式4段階の良好な一括資料である。なお土坑中央最下部から小型壺が出土し、他の多くの遺物は土坑内やや上位にまとまって検出された。

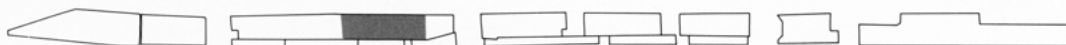
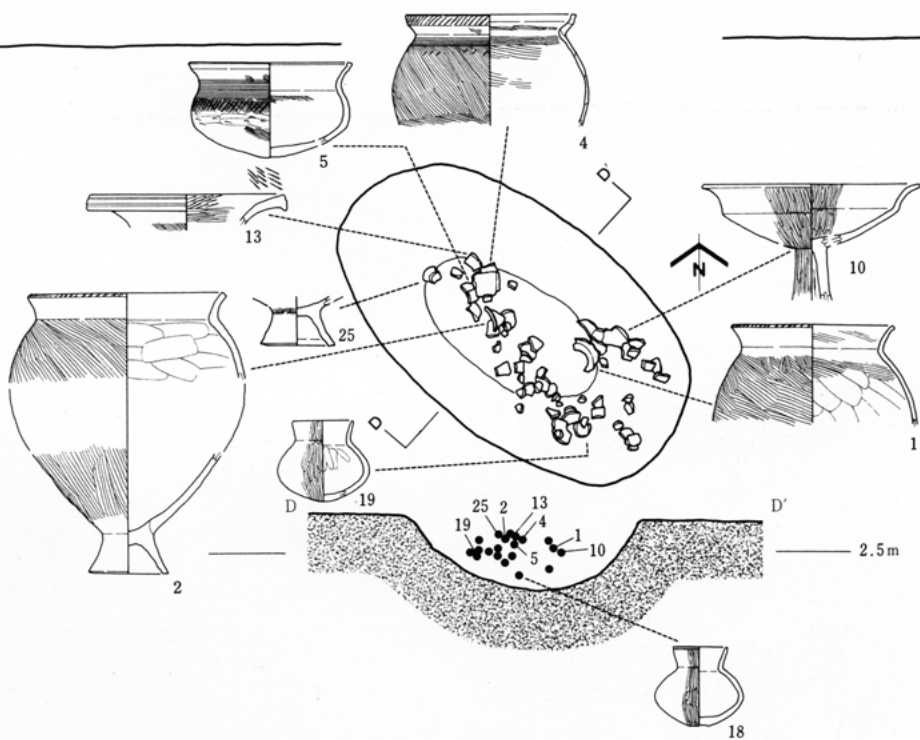
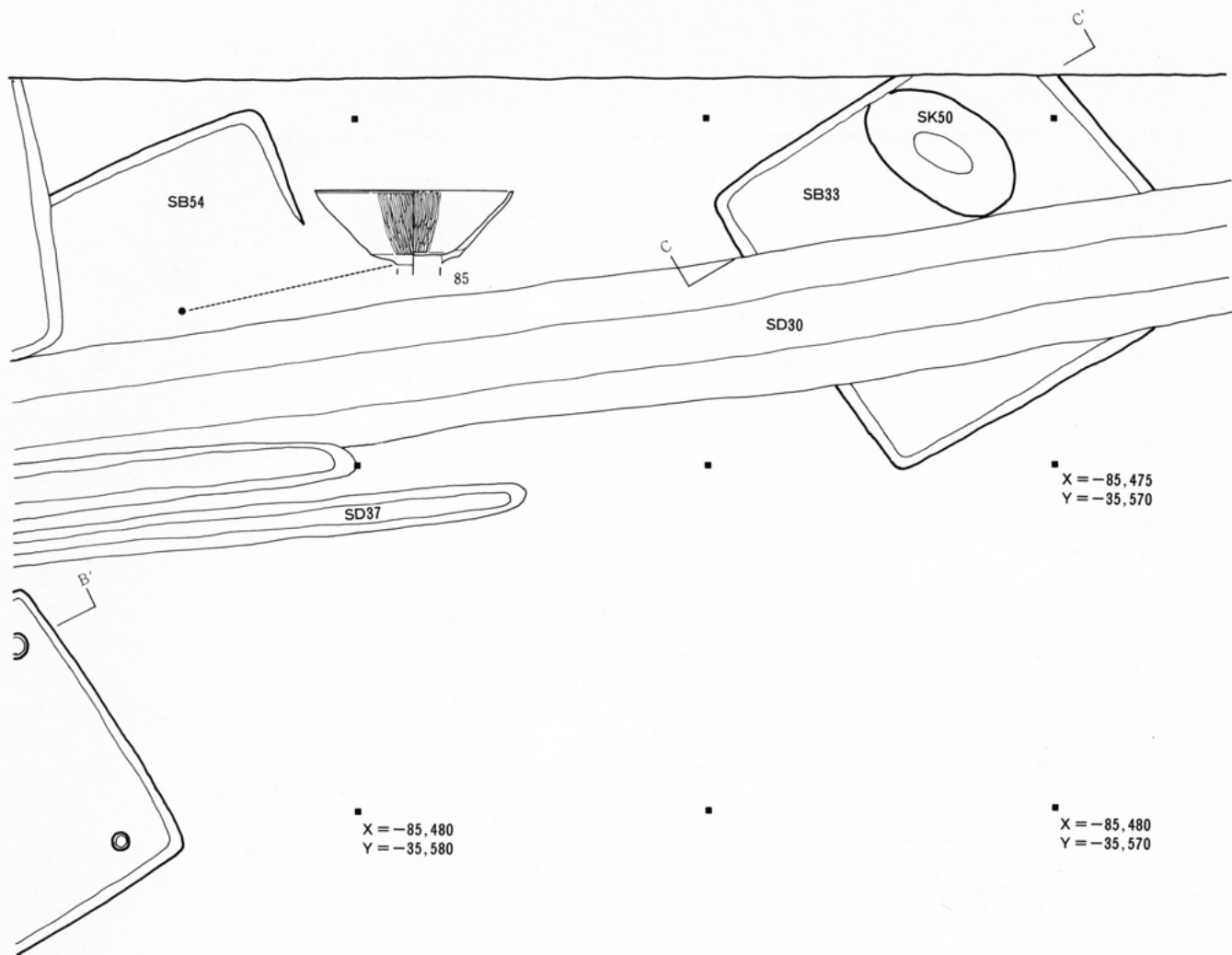
土器集積 SX03

Fa区東端に認められた落ち込みで、3mほどの広がりを確認できたが、さらに調査区外東方へ拡張する状況が見られる。暗褐色粘質シルト(7.5YR3/3)が堆積し、西掘形付近には遺物のまとまりが認められた。特に2・3・4・5は集積状況を呈していた。SX03西には径1.5mほどの土坑(SK141・145・146・148)が集中する。出土遺物はおおよそ廻間I式0段階の資料が中心と考えられる。周辺にはA1期の遺構は確認できず、またSX03より以東は微高地が徐々に下降する場所に位置している。

溝 SD80

Ea区東端からFa区にかけて南北溝を確認することができた。古代・中世期の遺構が著しく重複するが、溝幅1.0~1.5mを測り、深さ0.35mほどで断面U字形に掘削される。出土土器から山中式後期に所属するものと思われる。またSD80より以東には竪穴住居は確認されておらず、居住域を画する溝の可能性が考えられよう。





A 2 期（古墳時代前期）

概観 調査区東端のH区にて検出できた一群の遺物は、おおよそ古墳時代前期のものである。この地点は微高地東縁下の低地部に位置し、遺物の出土状況を加味しても集落景観とは大きく異なる特殊な在り方を見せている。

A 2 期の遺構は土坑 1 基、溝 1 条。

土坑 SK160（第 8 図）

H区西部北端で確認できた土坑。SK160はさらに北側調査区外に広がりを見せる。短軸2.5m、長軸3mを測り、深さ0.5mの皿状の土坑で、暗褐色粘質土(10YR3/3)が堆積する。土坑の中央部には壺を中心とした土器の集積が認められた。土坑底部に位置する土器はS字甕・パレス壺を含めおおよそ廻間Ⅱ式4段階の資料と考えられる。なおSK160は溝SD200上層によって上部が破壊され、やや遺物の混乱が認められた。長軸方向はN-32°-E。

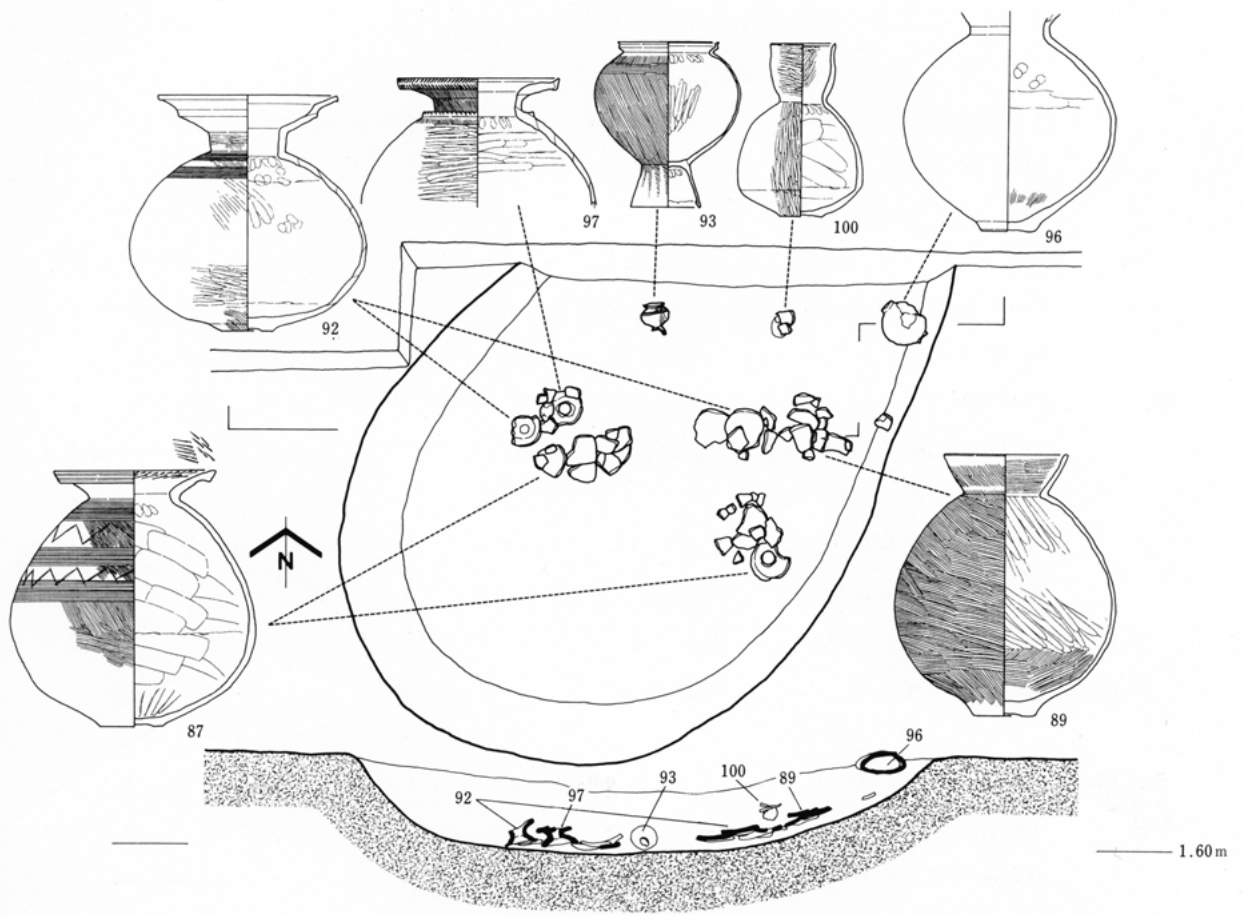
溝 SD200

H区東部に存在し、調査区を北西から南東にかけて斜めに蛇行する溝。溝幅はおおよそ2~3.5mで、深さは現状で0.2mほどを測る。SD200上位には北西部と南東部で土坑状に黒褐色粘土が堆積し、おそらくSD200の掘削後に、あらたに2つの土坑状の落ち込みを残す（あるいは掘削）ような堆積が存在していたものと思われる。北西部（SK154）では廻間Ⅲ式から松河戸Ⅰ式古段階の資料が散在し、南東部（SK161）では松河戸Ⅰ式古段階の資料を中心とした在り方を見せている。

SK160とSD200の関係

さてSK160の周辺部には当該期の遺構はまったく認められず、単発的な在り方を示している。ただSD200が廻間Ⅱ式前半期にまで遡るとすると、この溝内に意図的に掘削された特殊な土坑の可能性も考えられる。それはパレス壺・二重口縁壺をはじめとするSK160土器組成からも考慮する必要があるだろう。するとSD200が微高地東端の低地部に位置するところから、その東方に展開する耕地関連遺構と想定できるかもしれない。またこうした遺構に関連した土坑祭祀の可能性も推定できよう。

ところでSD200の遺物の出土状況と埋土の堆積状況から総合すると、以下のような遺構の変遷を復元することができる。すなわちまずSD200が微高地端の形状に沿った形で掘削され（廻間Ⅱ式前半期）、その後特殊土坑SK160が営まれる（廻間Ⅱ式4段階）。以後はSD200とSK160が徐々に埋没するかたちで、その上位に北西部（SK154）と南東部（SK161）に窪みが形成され、若干の遺物の投棄が行なわれる（松河戸式古段階）。こうした基本的な変遷が想定できるとすると、これら微高地端の低地部に営まれた遺構群の性格を、低地部に展開したであろう耕地関連の諸施設であったと総合することができよう。それはまたH区南方に存在する琵琶戸遺跡との関係であらためて考えていく必要がある。



第8図 SK160遺物出土状態図 1:40

(3) B期

B 1 期

概観

A区からE a区で検出されたSD01・SD05・SD26・SD45・SD78・SB01の主軸の方向は、明らかにB 2期の項で述べる溝(SD13・15・30)のそれと異なる。加えてSD26がSD30に破壊されていることや、SD01からB 2期に先行する時期の遺物が出土することから、B 2期以前の地割りである可能性が高く、これらの遺構をB 1期とする。ただし出土遺物の時期がB 2期と重複することから、B 2期の遺構が掘削されることによって廃絶を余儀なくされた遺構と、その後も継続して機能する遺構がある。

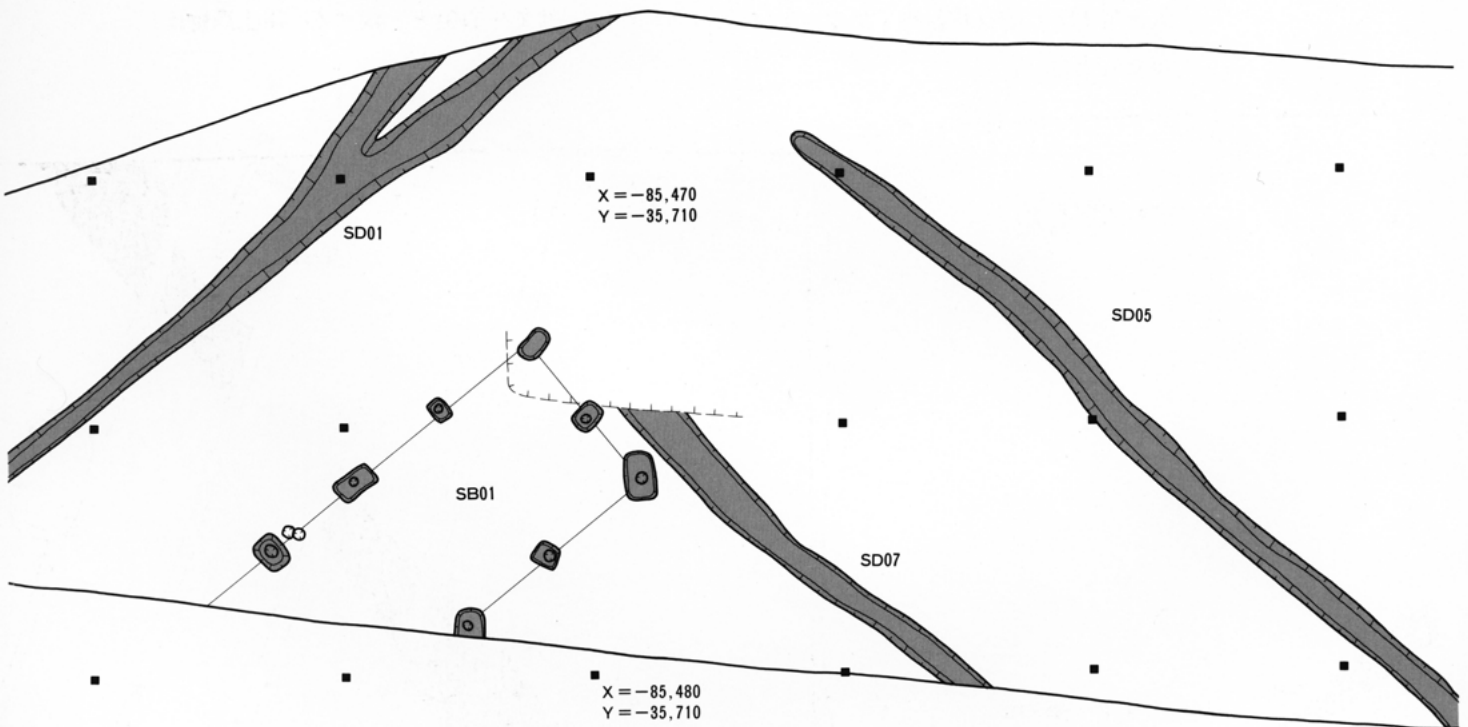
溝

SD01 (第9図)

A区中央から西半で検出した溝である。方位はN-51°-Eで、溝幅1.4m、深さ38cmを測る。断面箱形に掘削されており、埋土は暗褐色シルト(10YR3/3)が堆積する。調査区の北では2条に分かれており途中で合流している。またSD05と方形の区画を構成し、区画内にはSD01とほぼ同じ方位の主軸を有する掘立柱建物(SB01)が検出された。出土遺物は短頸壺、盤、杯蓋、杯など高蔵寺2号窯式~折戸10号窯式期に比定できる須恵器が中心。

SD05 (第9図)

A区中央から東半で検出した溝である。方位はN-49°-Wで、溝幅78cm、深さ15cmを測る。断面皿状に掘削されており、埋土は暗褐色シルト(10YR3/4)が堆積する。出土遺物は細片ながら須恵器のみであった。



第9図 SD01、05、07、45、SB01実測図 1:150

SD26

C区中央部、D a区西端で検出された溝である。溝幅1.77m、深さ31cmを測り、方位はN-64°-Wである。断面U字形に掘削され、埋土は黒褐色シルト(10YR3/2)が堆積する。C区ではSD30など多くの遺構に寸断されている。遺物は埋土最上位から土師器甕、杯蓋が出土し、中位から杯が出土しているが、小片が多く量も多くない。

SD45 (第9図)

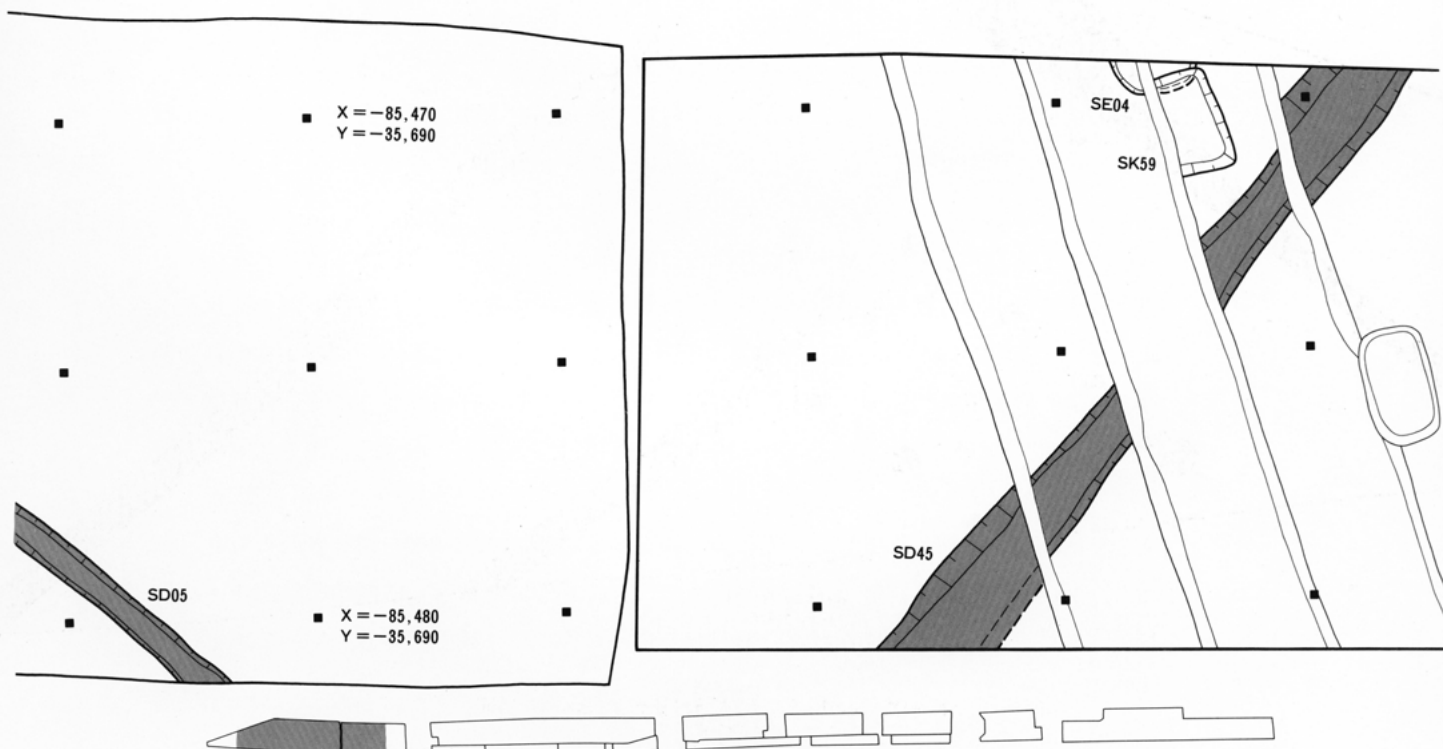
B区中央部で検出された溝である。方位はN-38°-E。溝幅1.65m、深さ57cmを測り、断面U字形に掘削されている。埋土は上部から暗褐色(10YR3/4)シルト、褐色(10YR4/4)シルト、灰黄褐色(10YR4/2)シルトの3層からなる。SD45の方位はA区のSD05との間に90°の角度を生み出すことから区画溝を想定できる。出土遺物は溝上および最上層で灰釉陶器、須恵器、土師器が、下層では須恵器のみが出土したが、遺物の主体は鳴海32号窯～折戸10号窯式期であり、杯、碗が中心である。

SD78

E a・F a区で検出された幅1.4m、深さ38cmを測る溝で、断面U字形に掘削されており、埋土は暗褐色シルト(10YR3/4)が堆積する。E a区でSB10および中近世の溝(SD56・57・65・79)に、F a区で中世の井戸(SE05)に破壊寸断されている。方位はN-28°-E。出土遺物は細片ながら須恵器が確認されている。

掘立柱建物 SB01

A区SD01・05・07に囲まれた中に建てられた2×?間(桁間約2.25m等間、梁間約1.65m等間)の掘立柱建物である。主軸の方位はN-51°-EでSD01と一致する。出土遺物はほとんどない。



B 2 期

概観

B 2 期の遺構で特筆すべきは、溝（SD13・SD15・SD30）である。昭和36年の調査で確認された塔、金堂の主軸とはほぼ一致する方位を有する南北の溝SD13からは折戸10号窯式期を主体とする良好な一括遺物が出土し、これと直交する東西の溝SD30からは黒笹90号窯式期までの遺物が出土している。SD30はC区西端で南北に分岐しており（SD15）、この地点がちょうど国分寺の中軸線の延長上にあたる。さらに字名が「大門」であることなどから、これらの遺構は当遺跡が所在する微高地の中央部に造営された国分寺寺域の南端部分である可能性が高い。なお遺構検出段階から多くの鉄滓がみられたため分析した結果、SD13からは鍛冶滓片が、SD30からは炉壁片がそれぞれ出土しており、近隣に鍛冶工房跡の存在が想定できる（分析結果は第4章に記載）。

またC区で確認された堅穴住居群（SB02・03・04）はSB02内の土坑（SK166）に瓦が集積される様相から、寺城南端に築かれた小屋的な建物と考えたい。B区の堅穴住居群（SB06～09）と井戸（SE04）は寺域の西に隣接した集落と考えられる。なおB・C区を中心として、微高地上に展開する遺構の多くは上層の削平が著しく、現地表面直下が遺構検出面であるため残存状態が良くない。

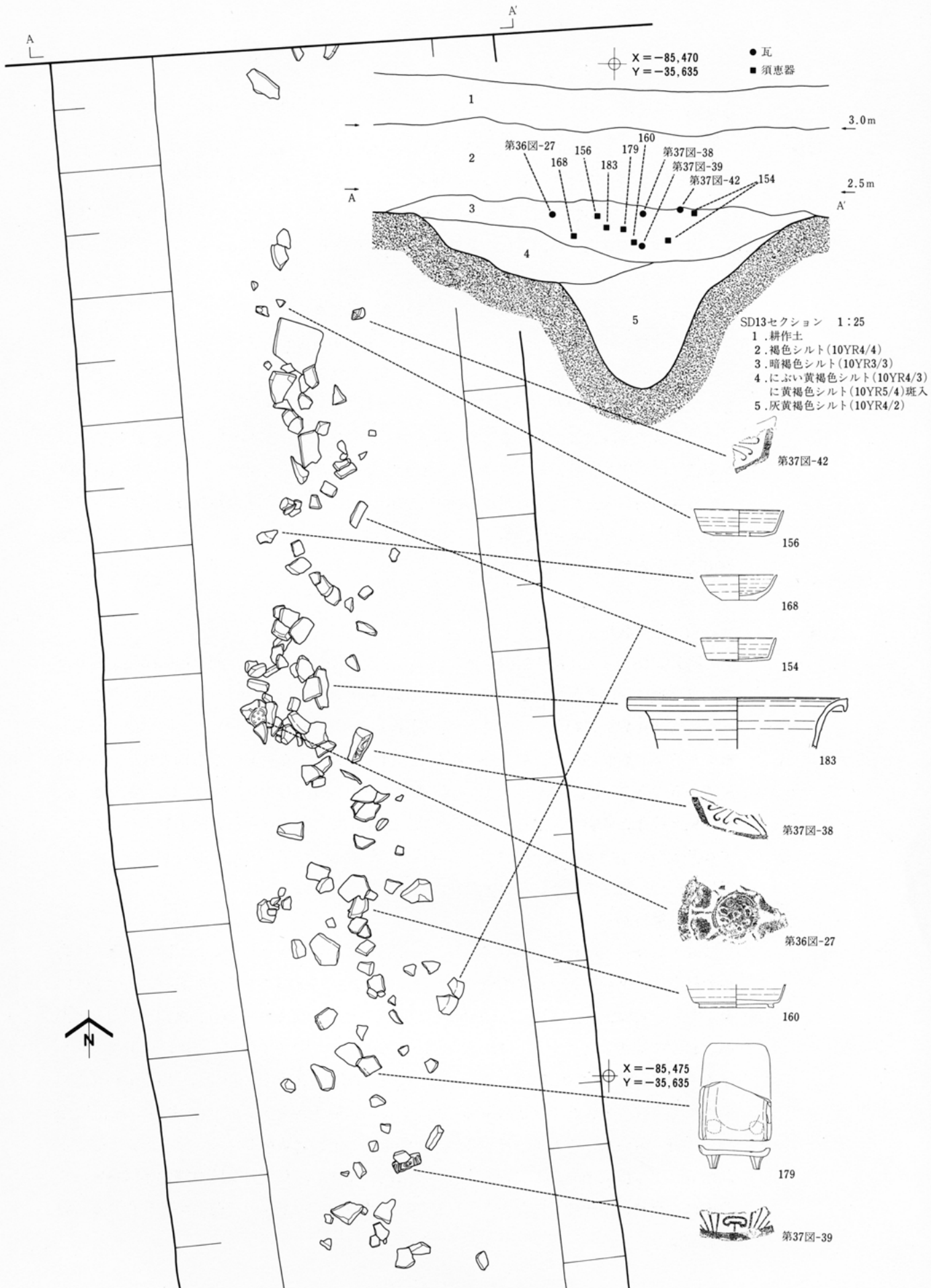
溝

SD13（第10図）

C区およびDa区西端で検出された溝である。溝幅2.2～2.3m、深さ70～80cmを測り、断面V字形に掘削されている。埋土は上から暗褐色シルト層（10YR3/3）、にぶい黄褐色シルト層（10YR4/3、黄褐色シルト斑入）、灰黄褐色シルト層（10YR4/2）の3層に分かれる。セクションの観察から、上部2層は掘り直し後の堆積である可能性を指摘できる。方位はN-7°-Wであり、ほぼ磁北と一致する。遺物は埋土上層に集積し、杯蓋、杯、椀、盤、鉢、甕、風字硯など多彩な須恵器と国分寺軒丸瓦MⅢ、MV型式と軒平瓦HⅠ型式をはじめとする多量の瓦が出土している。須恵器は折戸10号窯式期を主体とし、鳴海32号窯～井ヶ谷78号窯式期に比定できる。なおSD13からは鍛冶滓片が出土している。

SD15（第11図）

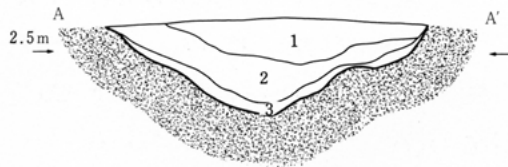
C区およびDc区東端で検出された、SD30と直交し、南北に分岐した溝である。微高地の最高部に掘削されたこの遺構の検出面は現地表面下15cm程であり、上層の削平は想像に難くない。溝幅2.1m、深さ36cmを測り、断面U字形に掘削されており、溝の一部をB3期のSE03に破壊されている。埋土は上部から褐色シルト層（10YR4/4）、にぶい黄褐色シルト層（10YR4/3）の2層である。方位はSD13と同様で、磁北と一致する。出土遺物は上層を近世の土坑（SK45）などに攪乱されているため混入がみられるが、主体は黒笹14号窯～黒笹90号窯式期である。SD15の東に隣接する道路は昭和36年の国分寺調査で推定された寺域中軸線であり、この地の字名は「大門」である。なおEa区西端で確認されたSD66は、規模、主軸の方位などからSD15と東西対称をなす溝の可能性が指摘できる（溝間約12m）。



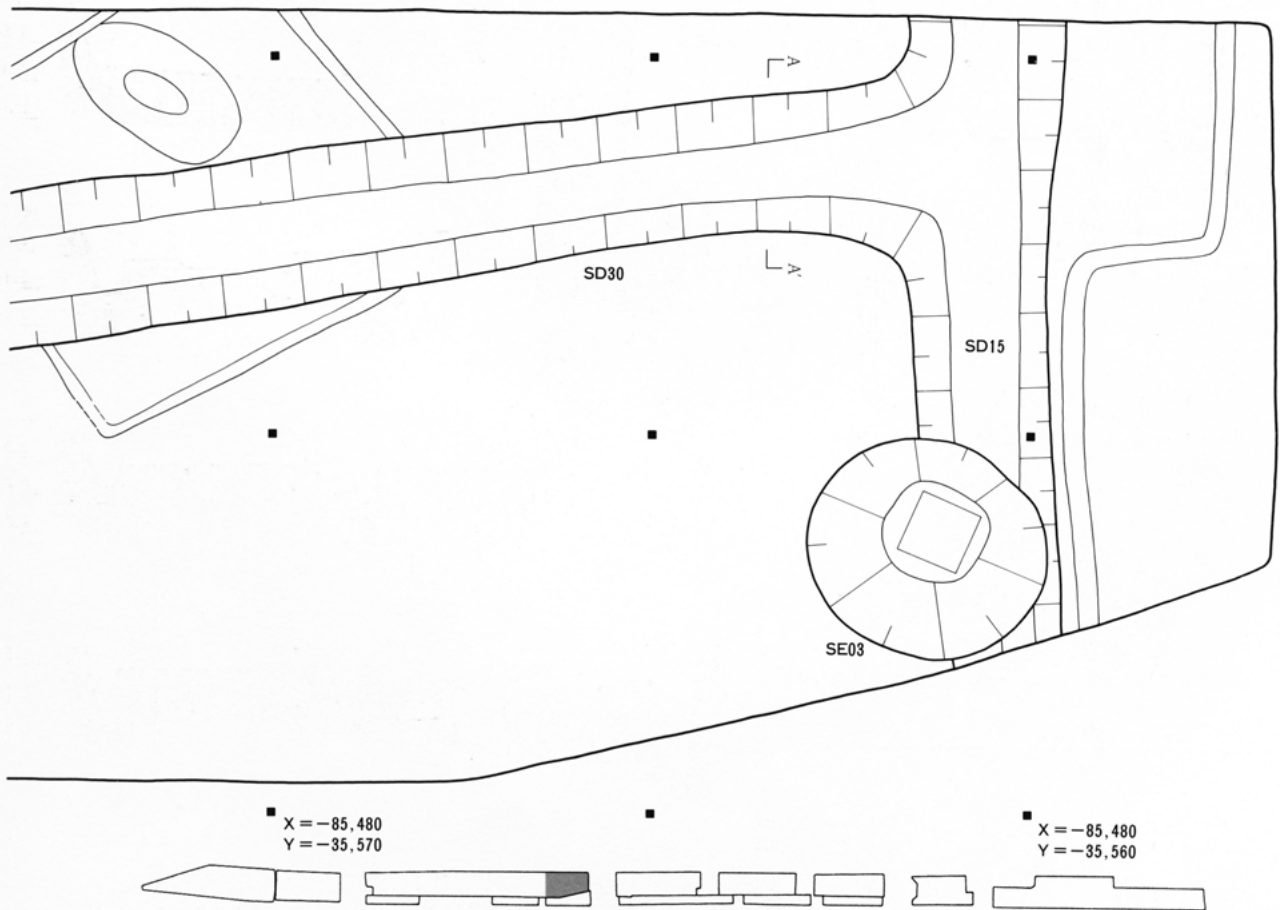
第10図 SD13遺物出土状態図 1:25

SD30 (第11図)

C区を東西に走る溝である。上層を削平され、さらに中近世のSD14・20・37と著しく重複するため残存状態は良くないが、溝幅1.5~2m、深さ40~47cmを測り、断面U字形に掘削されている。埋土は上部からにぶい黄褐色シルト層(10YR4/3)、暗褐色シルト層(10YR3/3)、黄褐色砂層(2.5Y5/3、黄褐色シルト斑入)の3層である。方位はN-82°-Eであり、SD13と直交すると思われる(SD13との交点はSD14に破壊されている)。またC区東端部で南北に走るSD15と直交し、分岐している。出土遺物に混乱がみられるが、黒笹14号窯~黒笹90号窯式期の須恵器と灰釉陶器が中心で、灰釉陶器のなかには黒笹14号窯式期の双耳椀、墨書陶器がみられた。なお、SD30下層からは炉材用粘土を主成分とする炉壁もしくは火床材が出土しており注目される。なお、国分寺中軸線より東側の寺域区画溝(SD30対称)については、Ea区北、調査区外に位置すると想定され、トレンチ調査の結果、溝の南肩を確認した。



SD30セクション 1:40
 1. にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)
 2. 暗褐色シルト(10YR3/3)
 3. 黄褐色砂(2.5Y5/3)に基盤ブロック(2.5Y5/4)斑入



竪穴住居 SB02 (第12図)

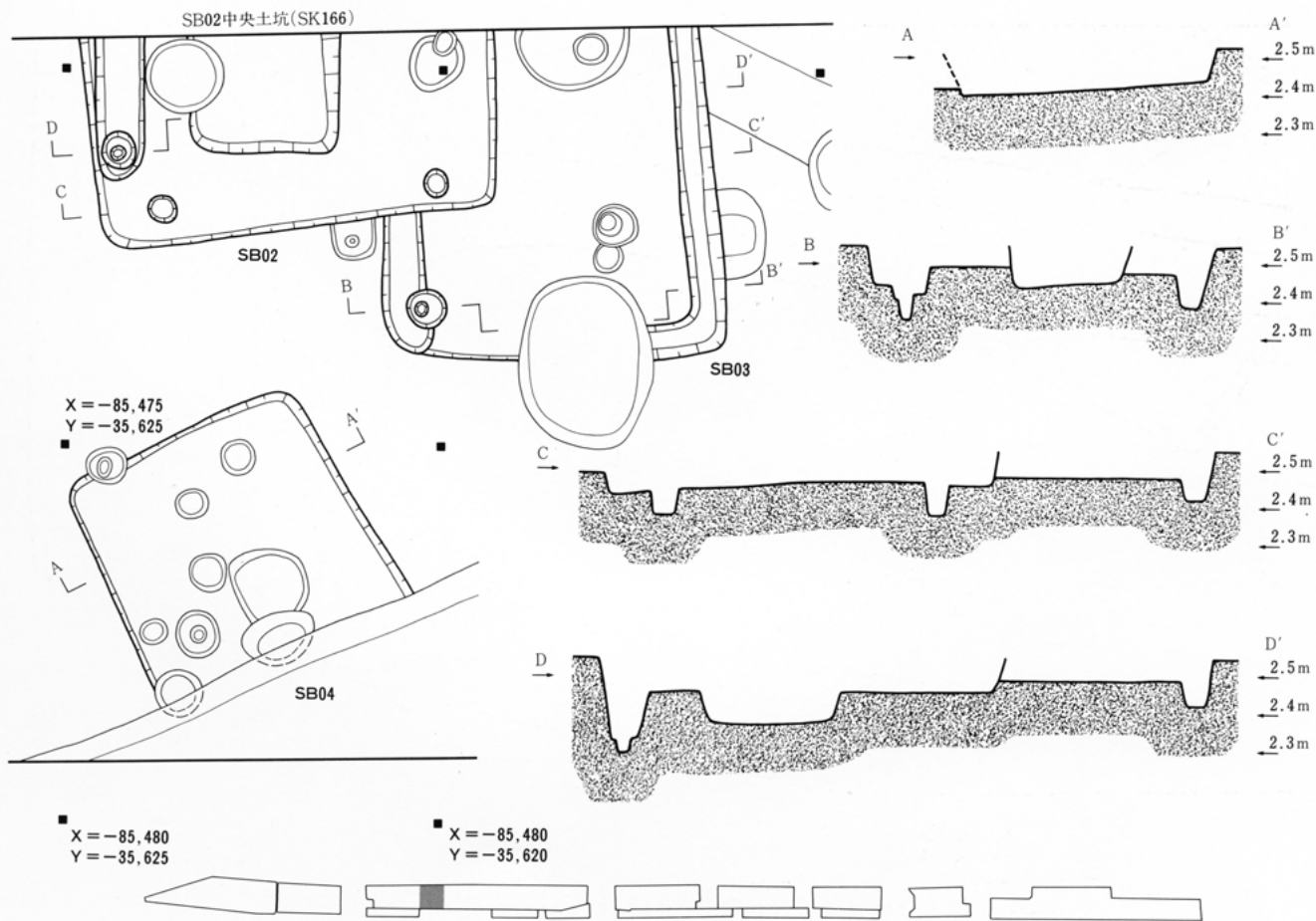
C区西部において、SB03の北西部を破壊して掘削された竪穴住居。北半を調査区外に残すため全体のプランは明らかでないが、東西5.25mを測る。深さは8cmしか残存しないが、西壁に幅65cmの壁溝を有し、床面のほぼ中央に1.95m×?、深さ10cmのSK166が掘削される。支柱穴は南東、南西隅で確認された。方位はN-3°-W。出土遺物は僅かだが、杯、土師器甕が埋土上位から出土している。SK166は瓦が集積する。

SB03 (第12図)

C区のSB02に北西隅を破壊された竪穴住居。北半を調査区外に残し、上層の削平が著しいため残存状態は良くないが、東西4.42m、深さ7cmを測り、東西に比べ南北が長いプランをもつ。南西隅に支柱穴が検出され、幅60cmの壁溝が西側と東~北側(L字)に巡る。方位はN-7°-W。出土遺物は須恵器の細片を中心に数も僅かである。

SB04 (第12図)

C区において、SB03の南で検出された竪穴住居。南辺付近をSK11に破壊されているため全体のプランは不明だが東西3.4m、深さは9cm残存するのみであった。住居内に多くのピット状の遺構を検出したが、住居に伴う柱穴は確認しえなかった。方位はN-25°-Wであり、SB02・03と大きく異なる。出土遺物は杯蓋、土師器甕が出土している。



第12図 SB02、03、04実測図 1:100

SB06 (第13図)

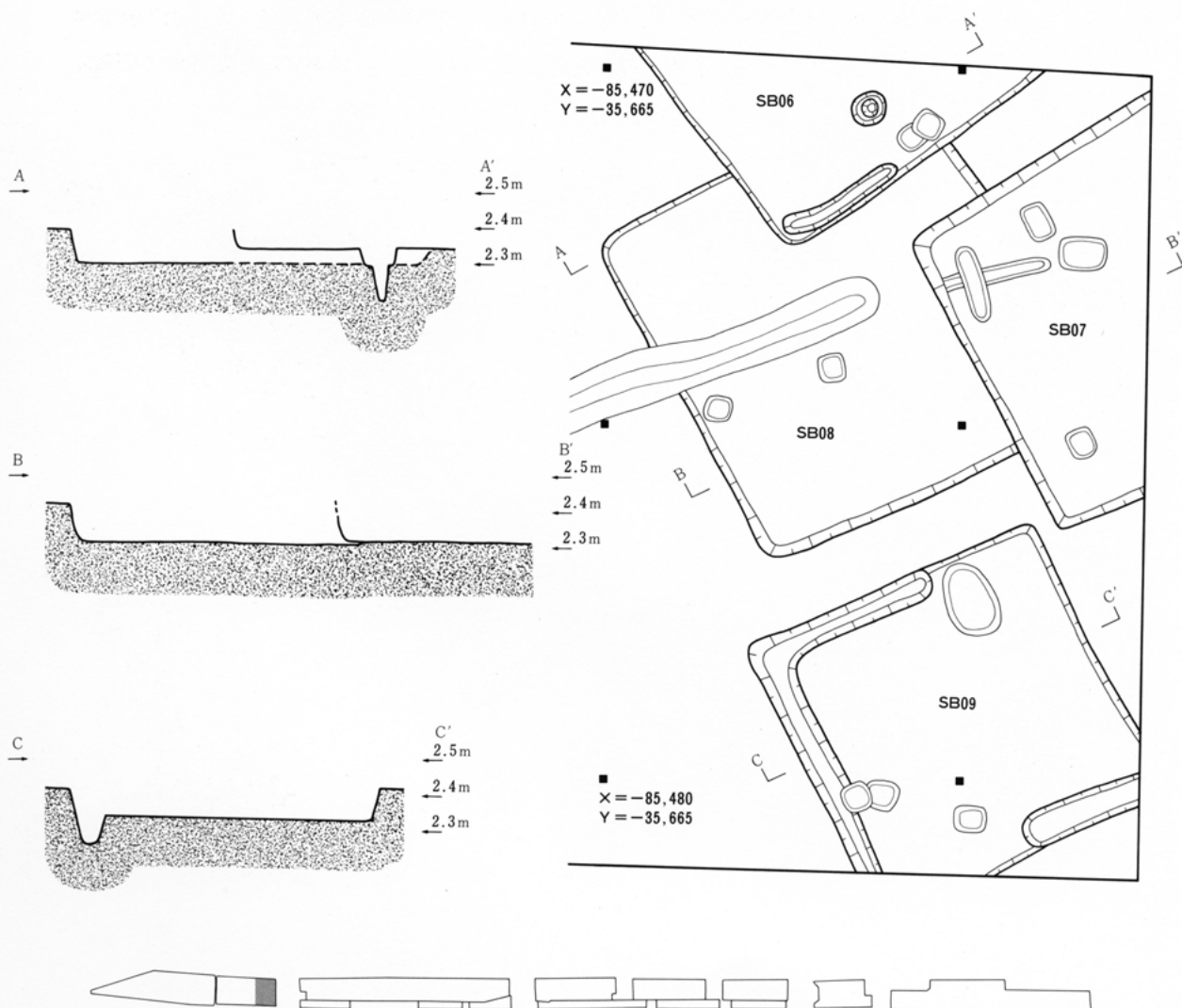
B区北東隅で検出された竪穴住居。SB08の北側を破壊して掘削されており、北側半分以上を調査区外に残す。削平が著しく、検出された遺構の深さは6cmほどであり、支柱穴と認められる遺構は検出できなかったが、径22cm、深さ29cmのピット(P17)と南辺の一部に壁溝を確認した。方位はN-37°-W。出土遺物は須恵器を主体とする。

SB07 (第13図)

B区北東隅で検出された竪穴住居。SB08の東側を破壊して掘削されており、東側半分以上を調査区外に残す。南北4.68m、深さは9cmの残存であった。柱穴などの遺構も確認しえなかった。方位はN-29°-W。出土遺物は黒笹14号窯式期に所属する。

SB08 (第13図)

B区北東隅で検出された南北5.14m、東西5m(25.7㎡)、深さ10cmの竪穴住居。SB06とSB07に北側、東側を破壊されている。柱穴などの遺構は確認できなかった。方位はN-29°-W。出土遺物は折戸10号窯～井ヶ谷78号窯式期に所属する。



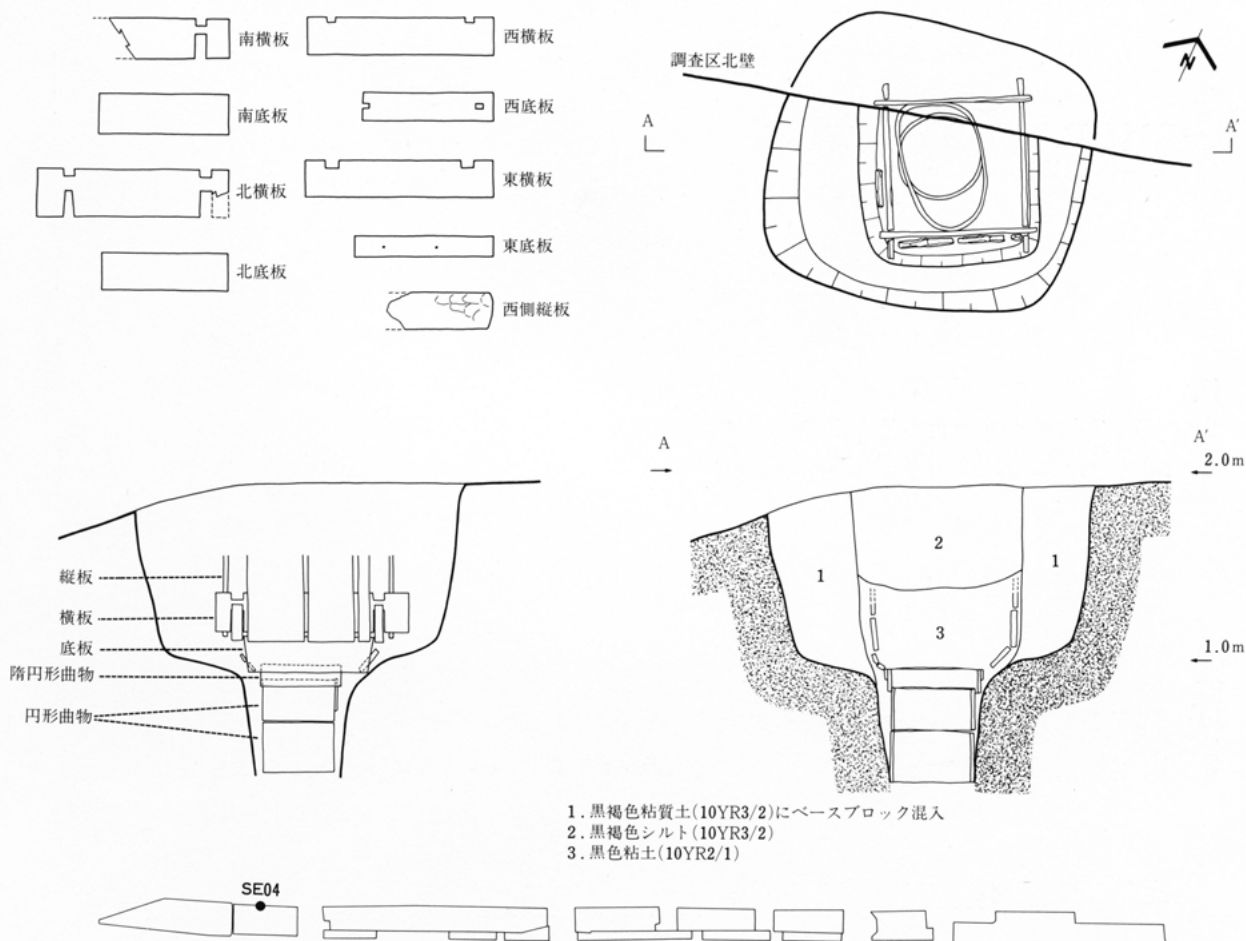
SB09 (第13図)

B区南東隅で検出された南北4.4m、東西4.35m (19.1㎡)、深さ10cmの竪穴住居。柱穴などの遺構は確認できなかったが、壁溝が北側西半から西側 (L字)、南側東半で確認された。方位はN-27°-W。出土遺物は井ヶ谷78号窯式期に所属する。

その他C区西端で検出された南北6.5m、東西6.9m、深さ25cmの不定形土坑SK52も竪穴住居である可能性が高い。

SE04 (第14図)

B区中央部北端で検出。掘形上層をSD41・46・SK59に破壊される。隅丸方形 (1.6m × ?) の掘形を有し、絶対高約0.3mまで掘削 (絶対高0.7m以下は砂層) された、木枠、曲物を有する井戸である。木枠は長さ1m前後、幅19.5~25cmの横板の両端上下に切込みをいれて69×68cmの方形に組み上げ、さらに外側を板杭で補強している。また井戸枠の下部には横板と曲物の間に4枚の底板を配している (底板のうち2枚には釘穴や柄穴がある。転用材であろう)。曲物は径40.5cm、高さ22cmと26cmの2段の円形曲物を下部に配し、その上部に長径58.5cm、短径42.5cm、高さ10.8cmの楕円形曲物を1段重ねている。曲物形状の違いは、その変遷を考える上で興味深い。出土遺物は折戸10号窯式期に比定される須恵器および瓦である。



第14図 SE04実測図 1:40

B3期

概観

国分寺の寺域を区画する溝が廃絶したのち、SD15上にSE03が掘削される。SE03は国分寺で使用された瓦を大量に井戸枠の裏込めとして利用しており、井戸の掘形からは黒笹90号窯式期を主体とする灰釉陶器が出土した。Ea区およびEb区で検出された堅穴住居群(SB05・10～12・14～16)もSE03と同時期であり、国分寺廃絶後に短期間営まれた小集落と想定できる。なお堅穴住居の主軸方位は国分寺の寺域のそれと一致しない。

堅穴住居 SB05 (第16図)

Ea区東部で検出された3.42×3.13m (10.7㎡)、深さ12cmの堅穴住居。SB59・SB15を破壊して掘削されている。壁溝は南東隅を欠き、その部分に出入口を想定できる。内部中央やや南東寄りに、1.4×2m、深さ15cmで南部がさらに46cm掘り込まれた隅丸方形の土坑SK90が確認されたが、柱穴は検出しえなかった。方位はN-58°-W。出土遺物は黒笹14号窯式期に所属する。

SB10 (第16図)

Ea区において、SB05の東に隣接して検出された4.36×4.3 m (18.7㎡)、深さ14cmの堅穴住居。南東隅をSD65に破壊されているものの、北辺から東辺にかけて壁溝(L字)が確認され、北東隅に支柱穴が残存する。方位はN-48°-W。出土遺物は埋土上位に散在し、黒笹90号窯式期に所属する。

SB11 (第16図)

Ea区中央部で検出された4.4×4.28m (18.8㎡)、深さは9cmのみ残存する堅穴住居。支柱穴が南西隅と北東隅(P15)の2箇所を確認された。方位はN-57°-W。なお中央部面上に焼土が堆積し、細片ながら黒笹14号窯式期の灰釉陶器が集積していた。

SB14 (第16図)

Ea区東端で検出された堅穴住居。SB10・SD65・SK86に多くの部分を破壊される。深さは7cmのみの残存だが、北辺に壁溝を有する。方位はN-57°-W。出土遺物は埋土上位に散在し、黒笹14号窯式期に所属する。

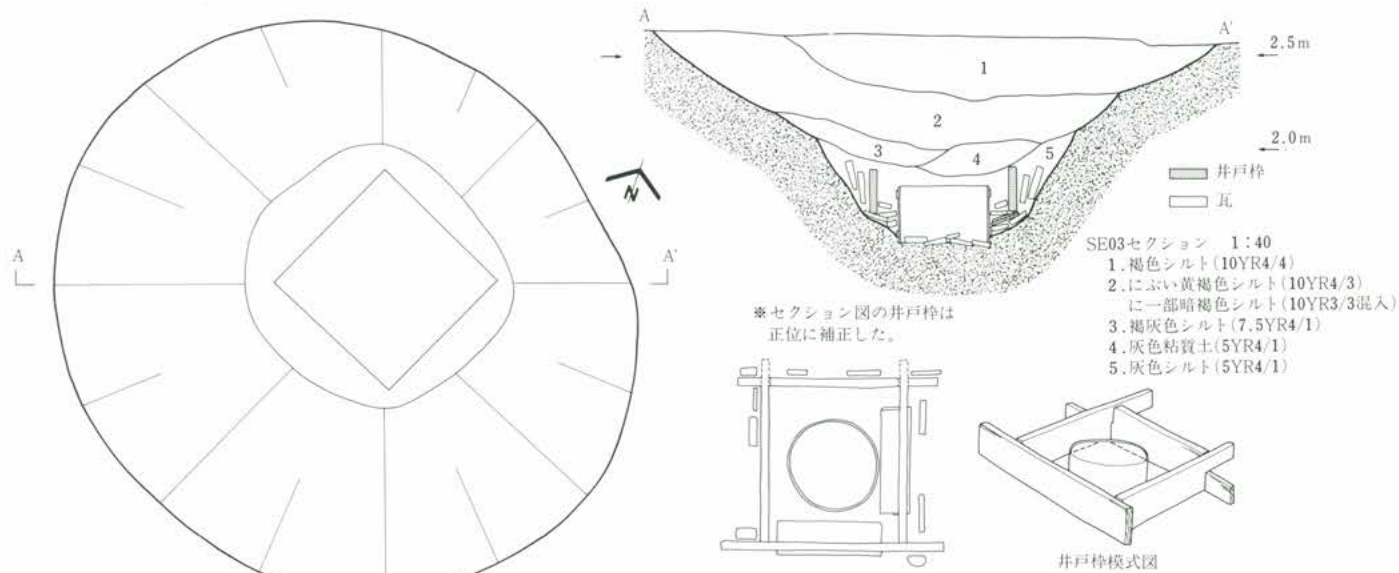
SB16

Eb区東半で検出された堅穴住居。南北辺の多くをSD74・75に破壊されているため正確なプランは不明。方位はN-54°-E。出土遺物は黒笹90号窯式期に所属する。

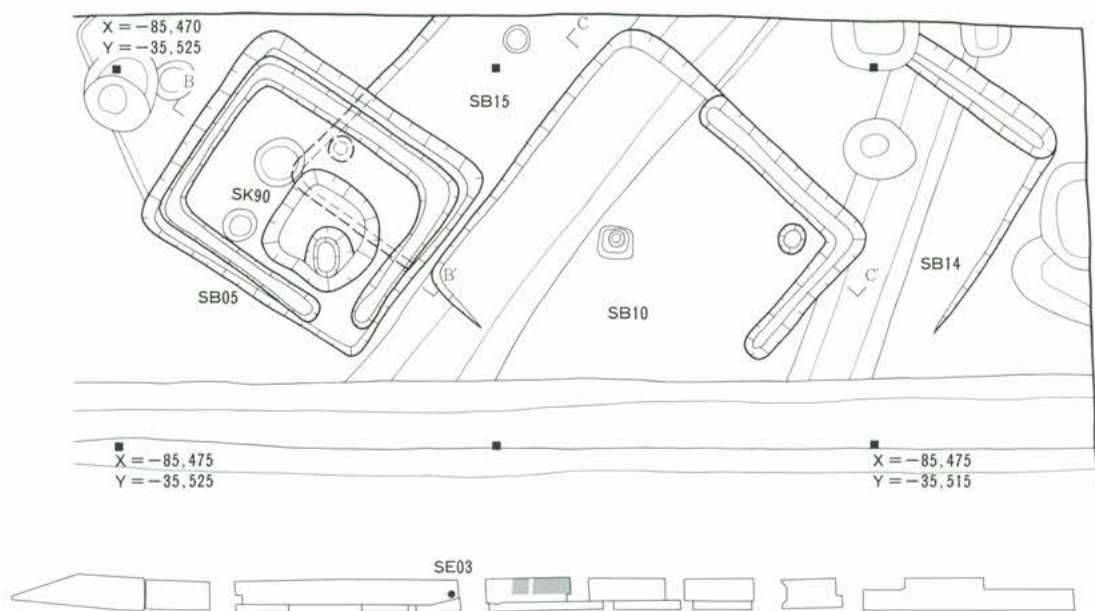
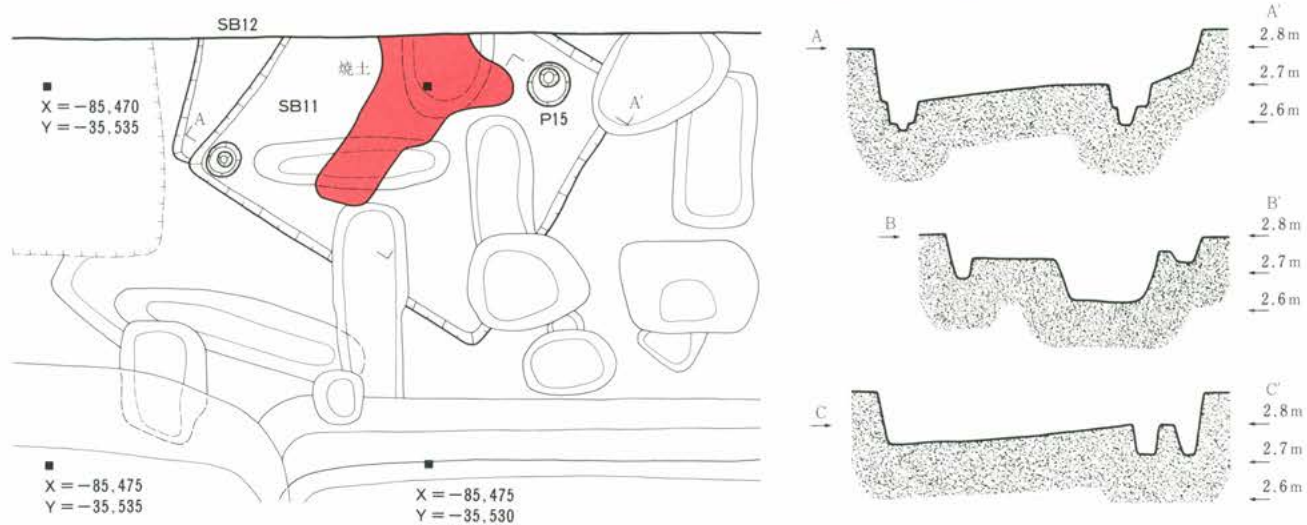
井戸

SE03 (第11・15図)

C区東端において、SD15の廃絶後に溝上に掘削された井戸。径2.99mの円形掘形を有し、深さ1m、絶対高1.6mまで掘削している。内部に81×82cmの横板の相欠き組井戸枠1段と径50cmの円形曲物1段が残存する。さらに裏込めとして国分寺瓦が集積し、その中には明らかに2次的に火をうけているものがある。瓦以外の出土遺物は掘形埋土上位から出土し、椀、皿、長頸壺、耳皿など大半が黒笹90号窯式に所属する灰釉陶器であった。



第15図 SE03実測図 1:40



第16図 SB05、10、11、12、14、15実測図 1:100

(4) C期

C1期

概観

C1期に所属する遺構は、微高地東縁のEc区からG区で集中して検出された土坑群と井戸である。土坑内から骨片などは確認されなかったが、埋土の状況、供献土器の出土状況から土坑墓群の可能性を指摘できる。出土遺物は南部系の灰釉系陶器が主体で、継続時期は12世紀後半から13世紀前半までと考えられる。

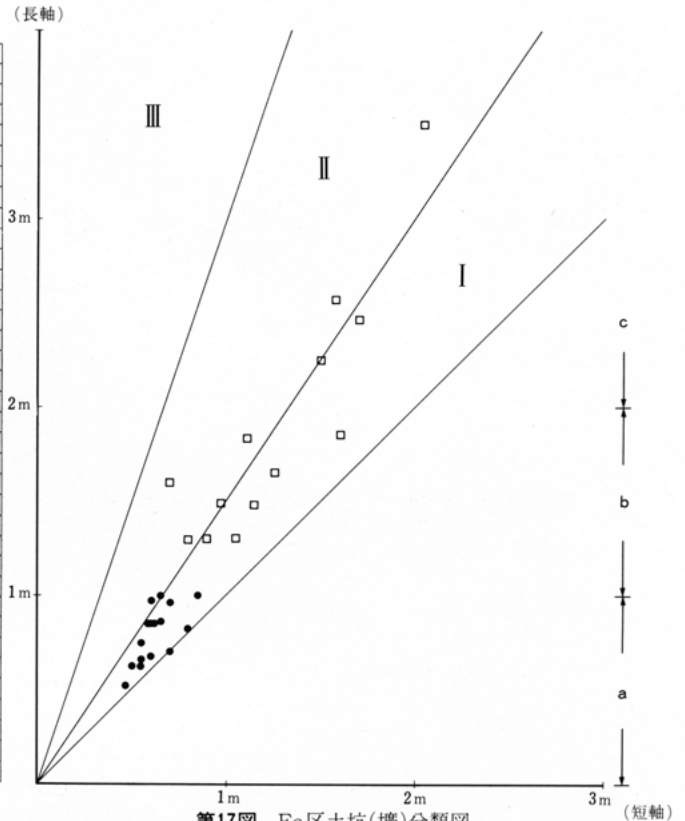
土坑(壙)の分類

土坑(壙)群は、その埋土から大きく3グループに分けられる(1、2、3群)。次に平面形状を長軸と短軸の比率である軸指数によって1~0.67をⅠ、0.67~0.33をⅡ、0.33~0.17をⅢと3区分し、さらに長軸の規模により1m以下(小型)をa、1~2m(中型)をb、2m以上(大型)をcと区分した。今回検出された土坑(壙)群はⅢ類に属するものがなく、従って平面形状による分類は軸指数と長軸規模の組合せで6類にグルーピングできる。

以上をまとめれば埋土による分類3群、平面形状による分類6類となる。以下埋土による分類を基にその特色を述べることにする。

遺構番号	長cm	短cm	深cm	断面形態	平面形態	埋土	分類
SK107	52	47	14	箱	円形(楕円)	1群	I a
SK108	62	50	19	箱	円形(楕円)	1群	I a
SK112	86	65	23	U字	円形(楕円)	1群	I a
SK93	97	70	12	箱	円形(楕円)	1群	I a
SK113	145		6	皿	方形	1群	
平均	88.4	58	14.8				
SK106	62	55	18	皿	円形(楕円)	2群	I a
SK96	65	55	7	箱	円形(楕円)	2群	I a
SK97	67	60	19	箱	円形(楕円)	2群	I a
SK95	70	70	23	箱	円形	2群	I a
SK104	75	55	11	箱	円形(楕円)	2群	I a
SK100 a	85	61	60	U字	円形(楕円)	2群	I a
SK100 b	85	61	60	U字	円形(楕円)	2群	I a
SK100 c	85	61	60	U字	円形(楕円)	2群	I a
SK123	100	85	22	皿	円形(楕円)	2群	I a
SK103	130	105	17	箱	方形	2群	I b
SK116	132	100	45	箱	方形	2群	I b
SK101	97	60	11	箱	円形(楕円)	2群	II a
SK99	100	65	26	U字	円形(楕円)	2群	II a
SK94	130	80	17	皿	方形	2群	II b
SK98	149	97	48	箱	方形	2群	II b
SK110			65	箱	方形	2群	
平均	95.46	71.33	31.8				
SK115	83	80	45	箱	円形	3群	I a
SK105	149	115	9	箱	方形	3群	I b
SK122	165	125	18	皿	方形	3群	I b
SK92	186	160	60	箱	方形	3群	I b
SK117	246	170	80	箱	方形	3群	I c
SK102	160	70	12	皿	方形	3群	II b
SK118	184	112	25	皿	方形	3群	II b
SK120	225	150	29	皿	方形	3群	II (I) c
SK109	257	158	95	箱	方形	3群	II c
SK119	350	205	51	皿	方形	3群	II c
SK114	220		31	U字	方形	3群	
平均	202.3	134.5	41.4				

第3表 Ec区土坑(壙)一覧表



第17図 Ec区土坑(壙)分類図

1群 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土が堆積する土坑 (塙)。(第17・18図、第3表)

長軸平均88.4cm、短軸平均58cm、深さ平均14.8cm、面積平均0.45㎡、体積平均0.08m³。

他のグループに比べて小規模な土坑 (塙) が目立ち、遺構数も少ない。出土遺物はほとんどない。平面形状による分類はすべて I a 類。

2群 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土が堆積する土坑 (塙)。(第17・18図、第3表)

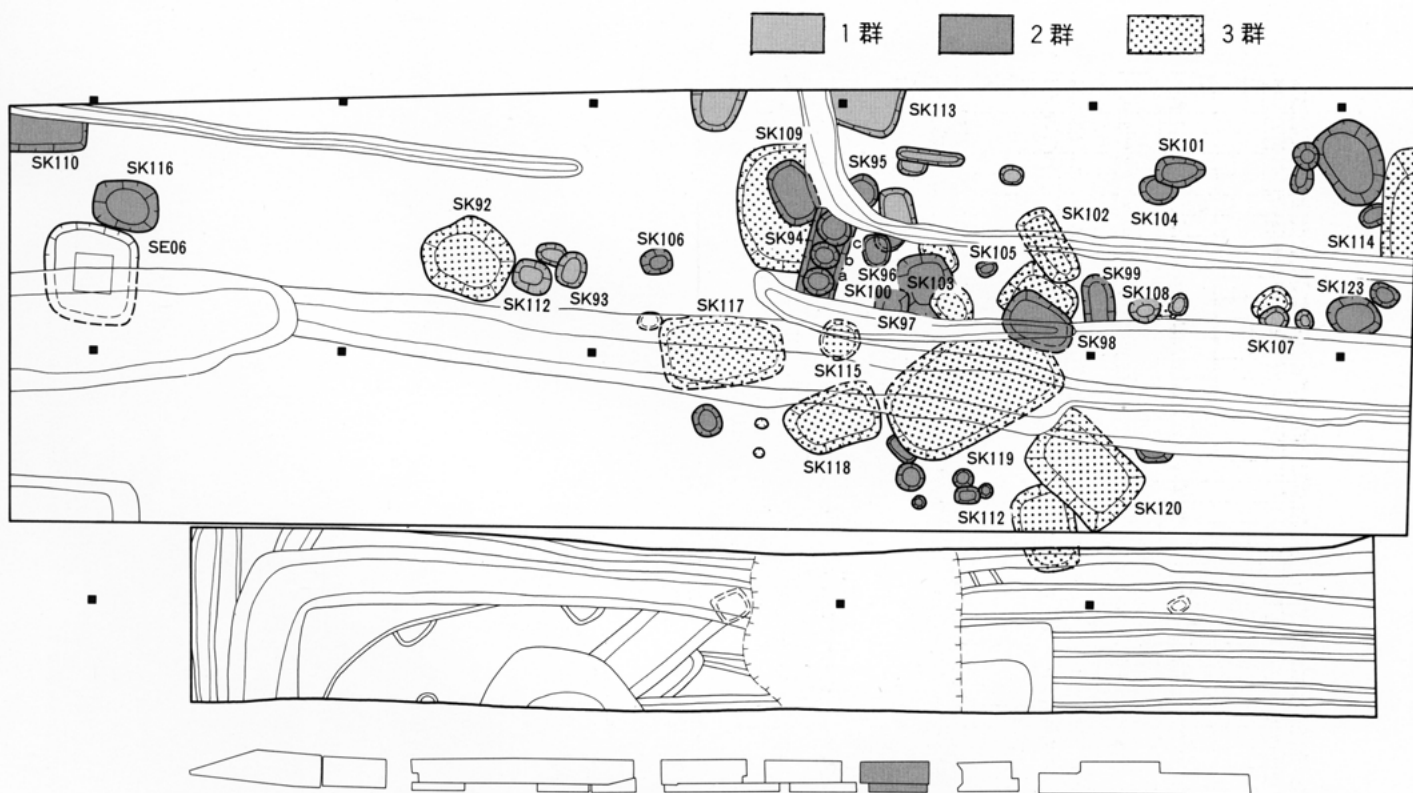
長軸平均95.5cm、短軸平均71.3cm、深さ平均31.8cm、面積平均0.72㎡、体積平均0.2m³。

中型の土坑 (I b、II b 類) は方形に、小型の土坑 (I a、II a 類) は円形に掘削される傾向がある。SK100-C から南部系の灰釉系陶器の椀、皿、鉢などが出土しているが、他の遺構はきわめて出土遺物が少なかった。なお I c、II c 類は存在しない。

3群 斑土が堆積する土坑 (塙)。(第17・18図、第3表)

長軸平均202.3cm。短軸平均134.5cm、深さ平均41.4cm、面積平均2.9㎡。体積平均1.51m³。

他のグループに比して圧倒的に大型、方形のプランが多く、I c、II c 類すべてがこの群に所属する。SK115は小型、円形の I a 類であるが、南部系の灰釉系陶器皿が1点出土している。



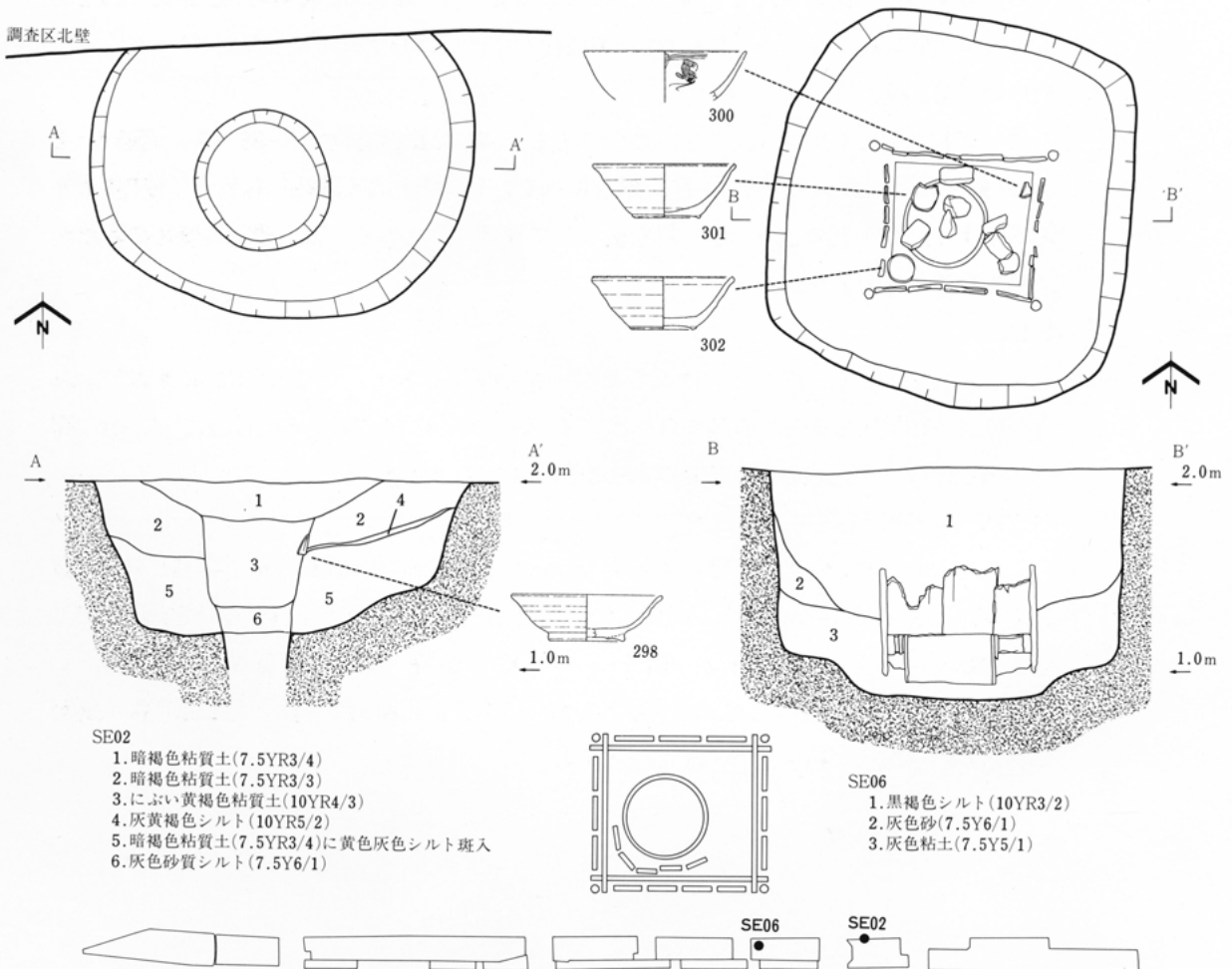
第18図 Ec・Fc区実測図 1:150

井戸 SE02 (第19図)

G区北端で検出。調査区北壁にかかっているため、全体のプランは不明だが、径1.94mの円形掘形を有し、深さ1m以上を測る(最深部のレベルは湧水のため確認しえなかった)。埋土は上から暗褐色粘質土(7.5YR3/4)、暗い褐色粘質土(7.5YR3/3)、灰黄褐色シルト(10YR5/2)、黄色・灰白色シルトブロックが斑入する暗褐色粘質土(7.5YR3/4)が堆積し、内部構造物は残存しないが、井戸枠内(推定)にはにぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)と、それに黄色・灰白色シルトブロックが斑入する層が堆積する。南部系の灰釉系陶器が出土している。

SE06 (第19図)

E c区西端で検出。2×1.9mの方形プランの掘形を有し、深さ1.2mを測る。埋土は上から黒褐色シルト(10YR3/2)、灰色砂(7.5Y6/1)、灰色粘土(7.5Y5/1)が堆積する。80×80cmの横板井戸枠の四方を外側から3枚ずつの縦板で、内側北東隅を5枚の縦板で補強している。また井戸枠の四隅外側、横板が交差する部分には竹によってさらに補強が図られている。曲物(径44cm、高さ24cm)は1段のみの残存であった。出土遺物は南部系の灰釉系陶器、青磁碗である。



C 2 期

概観

C 1 期にみられた土坑（塙）群が廃絶したのち、しばらくの時間的間隔をあけて周囲に溝を巡らせる方形区画が成立する。この遺構群はおもに F 区から東で確認されたが、西端の A 区で検出された S D 02・03 も同じ性格の遺構として考えてよいかもしれない。区画 1 辺の長さは、F b・E c 区で検出された S D 75 で約 28.6m であるが、その他については不明である。さらに H 区で検出された S D 100 は現堀之内・矢合町の境界ラインと同一の方位を有し、C 1 期の遺構群、さらには C 1 期の土坑（塙）群の北を走る。C 2 期の遺構は 14 世紀後半から 15 世紀中頃をもって廃絶している。

溝

S D 47（第 20 図）

E c 区で検出された東西の溝である。方位は N-85°-W。溝幅 40cm、深さ 27cm を測り、断面 U 字形に掘削されているが溝幅の広い部分では皿状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質土（10YR4/2）が堆積する。C 1 期の土坑（塙）群を破壊して掘削されており、出土遺物は北部系の灰釉系陶器を主体とする。

S D 48（第 20 図）

E c 区北西部で検出された東西の溝である。方位は N-85°-W。溝幅 40cm、深さ 7 cm を測る。埋土は灰黄褐色粘質土（10YR4/2）が堆積し、出土遺物はほとんどない。

S D 49（第 20 図）

E c 区北東部で検出された L 字状の溝である。方位は東西方向で N-86°-W。溝幅 37~60cm、深さ 20cm を測り、断面 U 字形に掘削されている。埋土は灰黄褐色粘質土（10YR4/2）が堆積する。C 1 期の土坑（塙）群を破壊して掘削されており、出土遺物は細片のみだが北部系の灰釉系陶器を主体とする。

S D 57

E a・E b・F a・F b 区で検出されたコ字状の溝である。方位はほぼ東西方向であり、E a・E b 区中央部で直角に南へ曲がり、S D 75 を破壊している。溝幅 1.2~2.2m、深さ 40cm を測る。出土遺物は北部系の灰釉系陶器を主体とする。

S D 75（第 20 図）

E b・F b・E c 区で検出されたコ字状の溝である。方位は東西方向で N-91°-W。溝幅 2~2.5m、深さ 40cm を測り、断面は南側に 1 m ほどのテラス部を有する U 字形である。埋土は暗褐色シルト（7.7YR3/4~10YR3/4）が堆積する。F b 区と E c 区で溝のコーナーが確認されており、北辺約 28.6m の方形区画溝である。出土遺物の主体は北部系灰釉系陶器であるが、F b 区では須恵器が多く混入する。

SD91 (第20図)

F c区で検出されたL字状の溝である。方位は東西方向でN-85°-W。溝幅70cm~1.4 m、深さ30cmを測り、断面U字形に掘削されている。埋土はにぶい黄褐色シルト(10YR4/3)が堆積する。この溝の北側には20~40cmを隔てて、同時期のSD92が平行して走る。出土遺物の主体はSD91・92ともに北部系灰釉系陶器である。

SD117 (第21図)

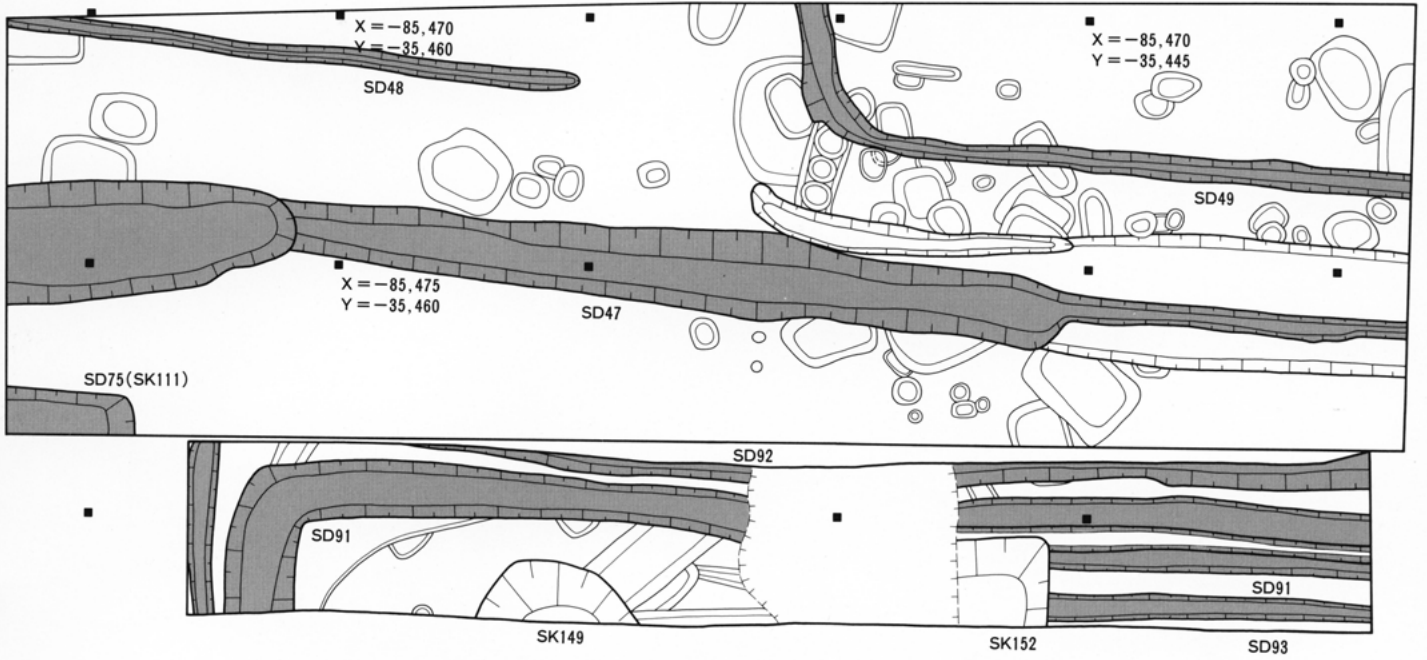
H区で検出されたL字状の溝である。方位は東西方向でN-66°-W。溝幅60cm~1.2 m、深さ32~40cmを測り、断面U字形に掘削されている。埋土は暗褐色粘質土(10YR3/3)が堆積する。この溝の北には平行してSD104・107が走り、南には平行してSD111~114が走る。また本調査区で見える限り、SD117で囲まれた範囲にピットが集中する。これらの状況からSD117は屋敷地を区画する北側の溝である可能性が考えられる。なおH区で検出された溝の方位はN-50~60°-W前後が多く、これは調査区が所在する自然堤防東端の地形に大きな影響を受けている。

SD100 (第21・22図)

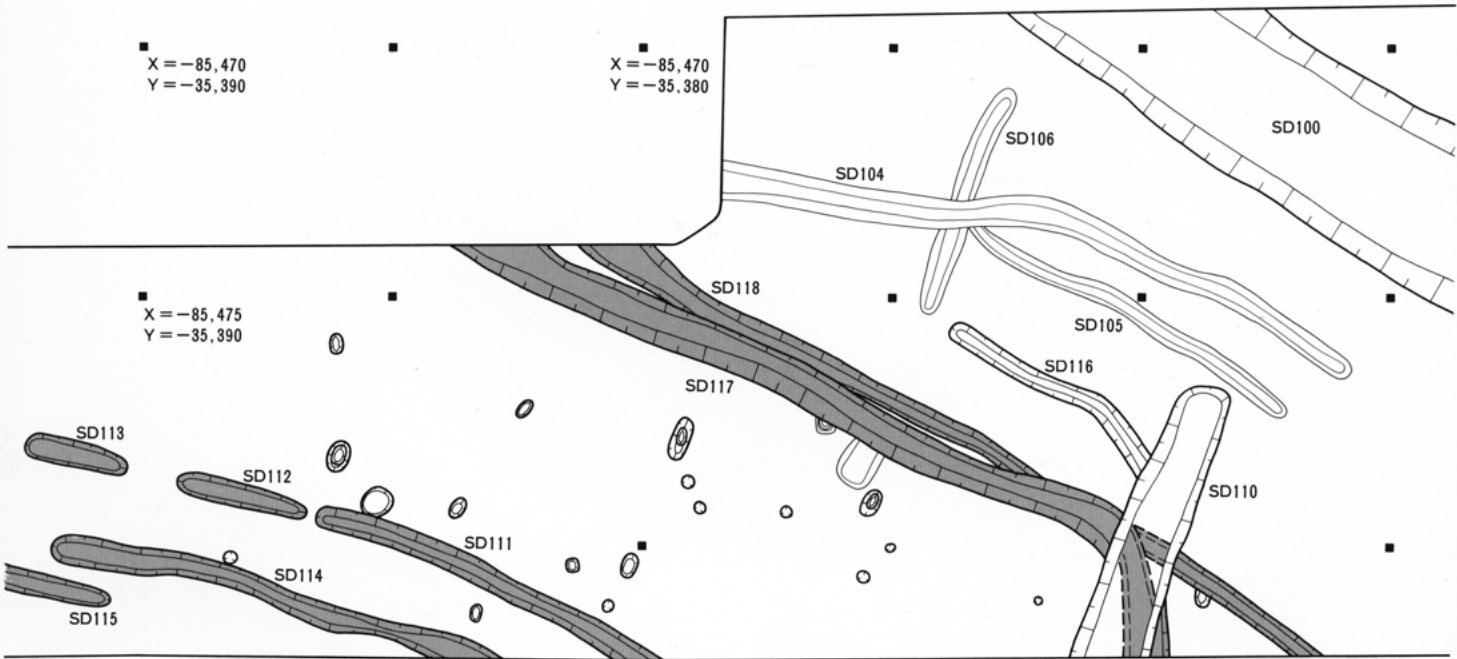
H区で検出された大溝である。方位はN-63°-W。溝幅2.3m~3.2m、深さ36~51cmを測り、セクションから少なくとも2回の掘り直しが確認された。埋土は上から灰黄褐色粘質土(10YR4/2)、暗褐色シルト(10YR4/3)に黄褐色砂(2.5Y5/3)が混じる層、暗褐色シルト(10YR3/4)の3層であり、濃尾地震のものと考えられる噴砂が溝の埋土を貫いている。この溝の北東にはN-50°-Wの方位をもつSD102・108がほぼ平行して走る。SD100の出土遺物は灰釉系陶器が主体であるが、その時期幅は非常に長く、C1期から長期間にわたって使用された溝である可能性が高い。なおSD102・108の出土遺物の主体もSD100と同様である。

土坑(井戸) SK149 (第20図)

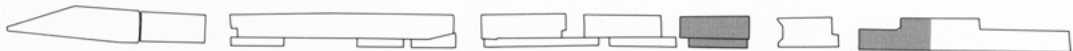
F c区で検出。遺構の半分を南壁外に残すため全体のプランは不明だが、径3.3mの円形掘形を有し、深さは1.08mを測る。埋土は上から褐色シルト(7.5YR4/3)、暗褐色シルト(7.5YR3/3)、にぶい赤褐色砂質土(2.5YR5/3)に褐灰色粘土(7.5YR4/1)がブロック状に混入する層の3層が堆積する。井戸枠等の内部構造物は調査区内では確認できなかったが遺構の検出状況から井戸であると考えられる。出土遺物は細片のみだが、北部系の灰釉系陶器が主体をなす。



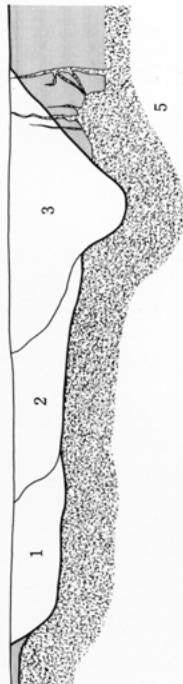
第20图 Ec区、Fc区方形区画沟实测图 1:150



第21图 H区方形区画沟实测图 1:150

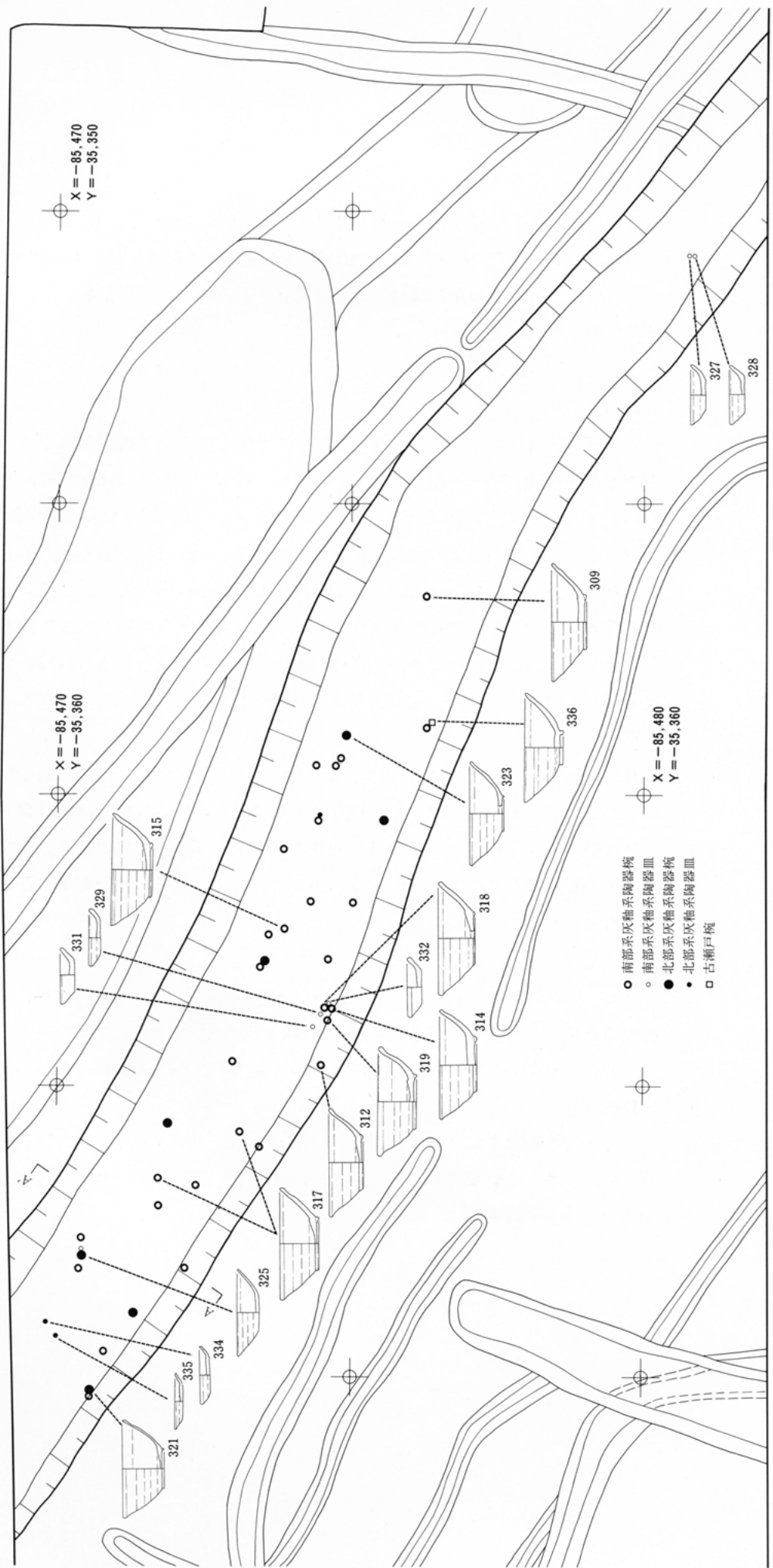


A' 2.0m



SD100セクション 1:40

1. 暗褐色シルト(10YR3/4)
2. 黄褐色シルト(10YR4/3)砂混じる。
3. 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)
4. 黄褐色粘質土(2.5Y5/4)
5. 黄褐色砂(2.5Y5/3)



- 南部系灰軸系陶器碗
- 南部系灰軸系陶器皿
- 北部系灰軸系陶器碗
- 北部系灰軸系陶器皿
- ◻ 古瀬戸碗

X = -85.480
Y = -35.360

第22図 SD100遺物分布図 1:100

(5) D期

観 B区からG区にかけて溝、土坑、水田が検出された。B～D区のSD41・SD14・SK11については明治17年に作成された稲沢市域の地籍図に記された水田のプランどおりに検出された。この時期の遺構は概して大規模で、全体のプランが把握しがたいため、遺構の性格が解りにくい。

SD14、SK11

C～D a区で検出。SD14・SK11ともに正確なプランは確認できなかったが、調査区内での深さは60～70cmを測る。埋土はSD14では褐色シルト(10YR4/4)、SK11では黄灰色粘質土(2.5Y5/1)が堆積する。調査時には溝として検出したが、明治期の地籍図にはSK11とともに1区画の水田として記載されている。SD14の下層では木杭列と横板でつくられた用水路が確認され、水田として利用される以前は溝であったと考えられる。出土遺物は幕末期(19世紀)のものが主体だが、下層部では灰釉系陶器から江戸期の遺物までが混在する。なおSD14は国分寺の寺域区画溝であると考えられるSD13・SD30の交点を破壊して掘削されており、SD30と同じ方位をもつ。

SD41

B区で検出。方位はN-13°-Wで、幅7.5m、深さ50cmを測り、埋土は灰褐色粘質土(10YR4/1)が堆積する。SD14同様地籍図により水田と確認された。出土遺物の主体は幕末期(19世紀)であるが、明治から大正期の遺物も含む。なおSD41は同じ方位を有する中世の溝SD46を破壊して掘削されており、かつて溝のあった低い部分を水田として利用したものと考えられる。

SD50

E a・E b区で検出。方位はほぼ東西方向。溝幅4.6m、深さ24cmを測り、断面U字形に掘削されている。埋土は褐色シルト(10YR4/4)が堆積する。C 2期のSD57の上層を破壊して掘削されているため、灰釉系陶器が多く混入するが、戦国期の遺物が主体である。

SD60

E a区で検出。方位はほぼ東西方向。溝幅4.1m、深さ65cmを測り、断面U字形に掘削されている。埋土は暗褐色シルト(10YR3/4)が堆積する。出土遺物から戦国～江戸期の遺構であると考えられる。

第3章 遺物

第1節 土器・陶磁器

(1) A期

A1期（弥生時代後期）

概観

弥生時代後期に所属する資料は、C・D区で検出された竪穴住居及び土壙資料が中心であり、おおそ山中式後期から廻間I式前半期の限られた間のものであり、ここではこれらを一括して取り扱うことにする。

SK50（図版11）

山中式
4段階

SK50出土品は山中式後期でも古相の山中式4段階の標識資料と考えられる。1～3は口縁端部に刺突文を施すく字口縁台付甕であり、所謂「山中型甕」である。外面のハケメは斜め方向に単一に施され、内面には板状工具によるナデが認められる。台部はハケメ後ナデを用いるものが多く見られ、端部は2・25のように鋭くヨコナデを施すことが特徴である。4は有段口縁をもつ甕で、山中様式では4段階以降新たに参入する型式である。その特徴は口縁端部外面は比較的幅広の文様面をもち、大きく斜めの刺突文が見られ、体部上位外面にはヨコハケ及び浅い刺突文が施される。外面調整は斜めのハケメで、内面にも同様なハケメ調整が認められる。5は口縁部が大きく外反した鉢であり、この形態もやはり山中式4段階から新たに登場するものと考えられる。口縁から体部にかけてヨコハケ及び刺突文を施す点も有段口縁甕と共通するようである。高杯は2種存在し、7・8・9・21・22のような加飾性が高く、杯部外面にはヨコナデ後波状文が施されるものと、10・11のような全体をタテ方向のミガキ調整を多用するものがある。前者の脚部にはやはり加飾性の高い施文が施されることが一般的である。壺は12～17までの大型の広口壺と6の中型壺、及び18～20の小型壺が存在する。外面は全体にミガキ調整が基調であり、底部は平底が基本である。13・14はパレス壺で、15・16はその体部上半に施された文様と考えられる。

SB51（図版12）

山中式
5段階

全体の形状を留める資料は見られないが、ほぼまとまりある資料と思われる。高杯はやはり2種類が見られるが、ミガキ調整を多用する30のような形態が主体を占める。杯部稜径が口径に比べてより小さく、杯部も深いものが多い。甕は山中型甕であり、端部の刺突文は必ず施される。しかし口縁部の屈曲は強くなり、端部は細い。35はミガキ調整を施す小型壺で、36は器台と考えられる。44は有段口縁鉢で、45はパレス壺の口縁部。

高杯及び台付甕の形態はSK50に比べて明らかに新しい様相を留めるものであり、おお

よそ山中式5段階の資料と理解してよいであろう。

その他として山中式5段階の資料と思われるものにはSD80出土資料の高杯65や、SB54の67・68の有段高杯及び66の椀型高杯が考えられる。しかし66に見られる椀型高杯の形態は、基本的には廻間I式期以降に盛行するものである。

SX03 (図版13)

廻間I式 0段階

台付甕は口縁端部に刺突文が見られない49・52・53の資料が共伴し、口縁部の長さが大きくなる傾向を示している。台部も高さが低く、ハケメを残す資料も散見できる。54はS字甕0類の口縁部と考えられる。59は口縁部が大きく外反する鉢であり、口縁部から体部にかけてはヨコハケ及び刺突文が残る。体部外面調整はハケメを施し、底部は明瞭な平坦部を留めない。61は口縁内面に平坦部をもつ広口壺であり、文様は一切施されない。外面調整はヨコ方向のハケメで、内面には斜めのハケメ及び板状工具によるナデが認められる。壺の底部は58・60・61と突出底に統一されている。63は脚部を有する中型の内彎口頸壺である。62は廻間I式期から登場する有稜高杯で、口縁端部には4条の沈線が施されている。杯部の内外面調整はミガキで、脚部には3方向に円形透孔が穿たれる。こうした形態・技法の特徴からおおむね廻間I式0段階に中心を置く資料と考えられる。

SB52 (図版14)

廻間I式 1段階

69・70は有段口縁台付甕の口縁部であり、口縁端部外面には刺突文が施される。70は口縁部を外反させて、その端部のみを屈曲させる形態であり、こうした形状の登場は廻間I式期からと考えておいてよいものである。71は大きく直線的な口縁部をもつ台付甕で、79・80は体部に刺突文をもつ山中型甕を踏襲する形態の台付甕である。内面にケズリ調整が認められ、体部はほぼ球形に近くなり廻間遺跡SB02資料と近似する。78はS字甕0類であり、口縁部には刺突文が施される。体部外面は単斜ハケメ調整の後に頸部からヨコハケを施している。器壁は極端に薄く作られる。82・83・84は有段高杯であり、杯部が深く稜径が小さい形態のもので、脚部には上位に円形透孔が穿たれる。75・76は器台。77は口縁部に刺突文を施す鉢。以上の形態からは、廻間I式1段階の特徴を備えた資料と考えられる。

このようにSK50からSB52へは山中式4段階から廻間I式1段階への変遷の過程を示しているものであり、特定遺跡での様式変化を窺いうる良好な資料群と考えられる。

A 2期（古墳時代前期）

概観

A 2期に所属するものはH区出土品に限定できるものであるが、厳密な共伴資料とはいいがたく、それはS K 160付近での遺構の複雑な重複関係に基づくものと思われる。おおよそ廻間Ⅱ式期と廻間Ⅲ式後半期～松河戸Ⅰ式前半期に大きく2分できる。

S K 160（図版15）

廻間Ⅱ式 4段階

第8図の出土状況から確実に土坑S K 160に伴うものと考えられるものは、以下の資料である。まず土坑最下部で見つかった87・89・92・93であり、その他その周辺部で出土した88・91・90・94・95が考えられる。溝S D 200との重複状況を考慮すると、土坑底部西側に存在する97は、他の破損点在資料とは異なる在り方を示しており、一応ここでは除外する。するとこれらの資料はおおよそ廻間Ⅱ式4段階を中心とするまとまりがある程度考えられるのであり、編年的にも大きな問題がないものと思われる。そこで今これらをあらためてS K 160資料として以下報告する。

87・88はパレス壺であり、特に87は全体の形状を留める資料であり、当該期の典型的な形態を示している。口縁内面にはすでに文様面を区分する段が消失し、端部での拡張面も小さく口縁部の延長として表現されているにすぎない。体部は著しい下脹れ状をなし、パレス文様は大きく拡張した赤彩波線文で、下段列点文は消失している。さらに外面調整はミガキを省略したハケメ調整が表面化する。89はやはり体部外面調整がハケメのみによって施された大型壺。91・92は二重口縁壺で、91は口縁端部と体部に波線文が見られるもので、さらに赤彩が認められる。体部中位には列点文が比較的長く施される。なお頸部には凸帯が存在する。92は大きな口頸部をもち、体部上位には横線文が認められる。93はS字甕で、体部最大径を上位に置き、頸部は鋭く屈曲しているが口縁端部には面をとどめる。こうした特徴はB類新段階の資料と考えられる。

S D 200（図版16）

廻間Ⅱ式 前半期～ 松河戸Ⅰ式 前半期

S D 200の下層としたものは96～100の資料である。96・97は大型広口壺で、97は口縁端部に羽状文が見られ、頸部には刺突文が施された凸帯が巡る。体部外面には横方向のミガキ調整が見られる。100はヒサゴ壺であり、口頸部が短頸で、横方向のミガキを行なうものである。体部は縦ミガキ調整で、最大径が大きく下降した特徴的な形状を留めている。こうした形態のヒサゴ壺は廻間Ⅱ式前半期に散見できるものである。

101～122はS D 200上層資料としたものであり、時期的にはやや幅をもつもののおおよそ廻間Ⅲ式後半期～松河戸Ⅰ式前半期を中心とする資料と考えられる。102～109はS字甕D類古段階のものであり、口縁端部は肥厚し、体部のヨコハケは欠損する。110は口縁部が長大化する山陰系口縁を有するS字甕である。なお121はS字甕の台部との接合部であるが、注目されることは焼成前に3つの穿孔が穿たれ、さらに1孔は貫通していない点である。極めて希少な資料であり、本来の機能を無視した祭祀的な様相をもったS字甕と考えられよう。111～115は器台であり、器壁が薄く外面にタテミガキ調整が認められるもので、脚部には3方向に透孔が認められるような全て同型式で占められる。101は杯部が浅

く大きく外反する脚部をもつ有稜高杯。117は柳ヶ坪型壺の口縁部で、口縁外面と内面には羽状の刺突文が大きく施される。有段状の口縁は上段幅が大きく拡張した形状をとどめる。118は木葉痕を残し柳ヶ坪型壺の底部と考えられる。120は無透孔屈折脚をもつ高杯であり、細い脚部に外面ミガキ調整を施し、柱状部内面はしぼり痕跡をとどめ未調整である。122は布留型甕の口縁部で、内面にはケズリが見られるが屈折部にまで至らない。外面にヨコ方向のヨコナデが認められる。

さてSD200関連資料をもう少し詳細に見ていくと、SD200最上層とした資料はSK154とSK161に分離できる。そのうち111に代表される器台や、底部穿孔S字甕、布留型甕、120の屈折脚高杯はSK161に所属するもので、松河戸I式前半期に限定して考えることが可能であろう。さらに特異なS字甕や器台の多用は非日常的な行為がそこに存在していたことを類推させる資料として興味深い。

(2) B期

出土遺物は、大別すると、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、土錘である。このうち器種の多い須恵器について器種、形式による分類をおこなう。須恵器についてはその大半が猿投窯の製品であるため、基本的に斎藤孝正氏の形態分類(斎藤1987)¹⁾をベースに、若干の付け加えをおこなった。なお瓦、土錘については後述する。

器種分類 須恵器の器種分類(第23図)

杯類

- 杯 A : 無高台のもので、基本的に底部から腰部にかけて回転ヘラ削り調整が施される。
- 杯 B : 高台を有するもので、基本的に底部から腰部にかけて回転ヘラ削り調整が施される。
- 杯蓋 A : 頂部につまみを有するもので、糸切り後、回転ヘラ削り調整が施される。
- A₁ : 頂部から口縁部にかけては浅い笠状を呈し、端部は下垂する。
- A₂ : 頂部から口縁部にかけては浅い笠状を呈し、口縁部付近で変曲し段ができる。端部は下垂する。
- 杯蓋 B : つまみを持たないもので、頂部に平坦面をもつ。頂部から口縁部の形状1~2については杯蓋Aに準ずる。

椀類

- 椀 A : 無高台のもので、底部は基本的に糸切り後の調整が無い。
- A₁ : 体部が直線的に外に開いて立ち上がる。
- A₂ : 体部は腰に丸みを持ち、緩やかに内彎して口縁部に至る。
- 椀 B : 高台を有するもの。体部形状1~2については椀Aに準ずる。

盤類

- 盤 A : 無高台のもので、底部は回転ヘラ削り調整が施される。
- A₁ : 体部が上方に立ち上がり、そのまま口縁部となるもの。
- A₂ : 口縁端部を「くの字」形に折り返すもの。
- A₃ : 体部が立ち上がらず、そのまま水平方向に口縁部を有するもの。
- 盤 B : 高台を有するもの。口縁形状1~3については盤Aに準ずる。
- 盤 C : 盤Bと比べて、高い高台を有するもの。口縁形状1~3については盤Aに準ずる。
- 盤 D : 高盤。口縁形状1~3については盤Aに準ずる。

その他の器種(例えば鉢、甕、壺など)については従来どおりの一般的な分類に準拠する。



杯A



杯B



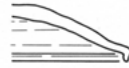
杯蓋A



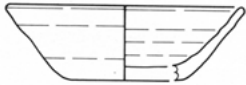
杯蓋B



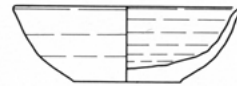
杯蓋口縁部形状1



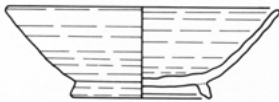
杯蓋口縁部形状2



碗A1



碗A2



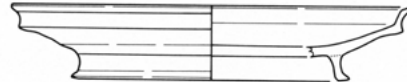
碗B1



碗B2



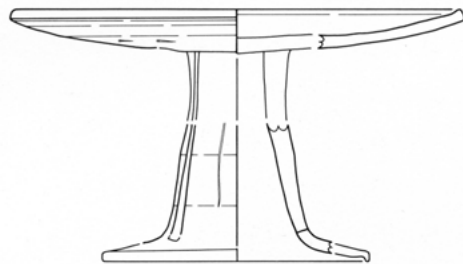
盤A



盤B



盤C



盤D



盤口縁部形状1



盤口縁部形状2



盤口縁部形状3

※ 碗B1、盤Cについては斎藤(1987)より転載。

B 1 期

SD01 (図版17)

遺物の出土量は多くない。123は杯蓋A₂で、口端部付近外面に重ね焼きの痕跡をとどめる。124の杯は焼成が不良で、にぶい橙色を呈する。125は盤B₂で口径13cm。126は短頸壺で、肩の張りが強く、沈線が一条巡る。所属時期は126が高蔵寺2号窯式期、その他は折戸10号窯式期に比定できる。²⁾

SD05 (図版17)

図示できる遺物は1点のみである。127は底部のみの残存であるが、椀A₂で、底部に糸切り痕を残す。

SD07 (図版17)

図示できる遺物は1点のみである。128は杯B。

SD26(図版17)

129はつまみ部分を欠損するが杯蓋A₁で、口径は25cm。130は杯A。131～136は土師器甕。いずれも口縁部資料で、体部外面を斜位に、口縁部内面を横位にハケメ調整する。口縁端部の形状は舌状もしくは丸く仕上げるものが多く、端部に面をもつものは131、1点のみである。所属時期は129が高蔵寺2号窯式期に比定できる。

SD45 (図版17)

137は杯A。138～141は杯Bで、口径12.4～13.4cm、器高9.2～10cm。142は椀A₁。焼成は不良で橙色を呈し、体部に底部糸切り時についたと思われる糸の痕跡が残る。143・144は椀A₂。145は椀B₂で、口縁部を竹管もしくはそれに類する工具によって外反させている。146・147は甕で、同一個体の可能性が高い。148は土師器甕で、口縁端部を丸く仕上げる。所属時期は140・142が鳴海32号窯式期、その他が折戸10号窯式期に比定できる。

遺物の所属 時期

B 1 期に所属する遺構出土の遺物は、高蔵寺2号窯式期～折戸10号窯式期に比定され、B 2 期のそれと時期的に重複する。このことは尾張国分寺造営に際して廃絶を余儀なくされた遺構と、寺域から外れたためにその後も継続して機能する遺構があったことに起因すると考えられる。

B 2 期

SD13 (図版18・19、第10図)

149～151は杯蓋で、151がA₁、149・150がA₂。152～157は杯A。158～163は杯Bだが、163はその他と比べて腰部の形状が異なり、腕Bとの中間的形態を呈する。164～169は腕Aで、164～167が腕A₁、168・169が腕A₂。166は底部にヘラ記号の線刻がある。また167には底部にヘラ切り痕が認められ、美濃須衛の製品であると考えられる。170～175は盤。171は盤A₂。172は盤B₁。173は盤B₂。174・175は盤Dで脚部に透かしがある。脚部の透かしは猿投窯において折戸10号窯式期前半で消失するため、174はそれ以前の時期のものであろう。175は盤D₃で、脚部に縦位の線刻があり、その胎土から美濃須衛の製品であると考えられる。176・177は鉢。178は壺。179は風字硯で硯部は使用により研磨された状態である。181～184は甕。185は横瓶。180は土師器甕の底部。所属時期は149・151が鳴海32号窯式期、風字硯(179)は井ヶ谷78号窯式期であり、その他の須恵器は概ね折戸10号窯式期である。175については美濃須衛の編年におけるⅣ期第2～第3小期に比定できる。³⁾

SD15 (図版20)

186は杯蓋A₂。187・188は灰釉陶器碗。187は内外面ともに施釉され、外側で接地する蛇の目高台を有する。形状から白磁碗写しが考えられる。188は内面のみ施釉され、角高台を有する。189・190は灰釉陶器皿。189はほぼ無釉であり、丸みをもった三日月高台を有する。190は内面全体に施釉され、角高台を有する。191は足付の段皿で、3足盤の可能性が高い。釉は内外面全体に施される。192・193は土師器甕で口縁端部を丸く仕上げている。所属時期は189が黒笹90号窯式期であり、杯蓋及びその他の灰釉陶器は黒笹14号窯式期である。

SD30 (図版20)

194は杯A。195は灰釉陶器の双耳碗で、内外面全体に釉を施しており、角高台を有する。196・197は灰釉陶器碗。196は底部外面に線刻がある(焼成前、「北」か)。灰釉は底部外面を除いて施され、特に内面は厚く釉がかかる。高台はやや丸みをもった角高台である。197は下層出土。釉は内面に施され、トチン痕がある。高台は角高台である。198～201は底部付近のみの資料だが灰釉陶器皿。高台はいわゆる三日月高台で、釉は体部内面のみを刷毛塗りされるもの(198)と、底部内面まで施されるもの(199～201)がある。202も灰釉陶器皿だが、底部外面に墨書(「万」か)がある。釉は内面全体に施され、トチン痕がある。高台は定形化した角高台である。203～206は土師器甕で、口縁端部を舌状もしくは丸く仕上げるもの(204～206)と、口縁端部に面をもつもの(203)がある。所属時期は角高台を有する灰釉陶器(195～197・202)が黒笹14号窯式期。三日月高台を有する灰釉陶器(198～201)は黒笹90号窯式期である。

SB02 (図版20)

207～209は杯B。209はSB02内のSK166出土である。210・211は土師器甕で、口縁端

部を舌状もしくは丸く仕上げる。須恵器の所属時期は折戸10号窯式期と考えられる。

S B04 (図版20)

212は杯蓋。213・214は土師器甕で、口縁端部を舌状もしくは丸く仕上げる。213は頸部の屈曲が弱く、口縁部がやや垂直ぎみに立ち上がる。

S B06 (図版20)

215は杯蓋。216は杯A。217は長頸壺の口縁部か。いずれも小破片のため正確な所属時期は不明である。

S B07 (図版21)

218は灰釉陶器碗。口縁部は強く外反し、角高台は外端で接地する。釉は内面全体に厚く施され、トチン痕を残す。219は灰釉陶器皿。高台は角高台であり外端で接地する。釉は内面全体に施され、トチン痕がある。灰釉陶器の所属時期は黒笹14号窯式期であり、223は古相。220～221は土師器甕で、口縁端部は、丸みを残しつつ面をもつ。

S B08 (図版21)

222は杯蓋A₂。223は高台部を欠損するが杯B。224は碗B₂で、高台部は凹部をもった底部にはめ込んで成形している。225は短頸壺で、肩は丸みをもつ。226は土師器甕で、口縁端部は丸く仕上げる。須恵器の所属時期は折戸10号窯式期から井ヶ谷78号窯式期である。

S B09 (図版21)

227～229は杯蓋。227は頂部を欠損するものの杯蓋A₂であり、他の2点も口縁端部付近で変曲するタイプである。230～233は杯Bであり、233は口径16.4cm、器高7.4cm（径高指数45）を測り、器高が高い。234は盤で、口縁端部を「くの字」形に折り返すタイプである。235は土師質の甗で、中央に円形、周囲に4つの半円形の穴を有する十字形の底部が破片から確認できる。所属時期は折戸10号窯式期から井ヶ谷78号窯式期である。

S E04 (図版21)

236・237はつまみ部分を欠損するものの杯蓋A₂。238は碗A₂。239は盤で、口縁端部を「くの字」に折り返す。240・241は（長頸）壺の底部と考えられる。242は甕の口縁部。所属時期は折戸10号窯式期を考えたい。

S K59 (図版21)

243～245は杯B。246は小型の壺の底部で、糸切り痕を残す。S K59はS E04の一部を破壊して掘削しているが、所属時期はS E04と同時期である。

遺物の所属時期

B2期に所属する遺構出土の遺物は、鳴海32号窯式期から黒笹90号窯式期に所属する。S D13からは折戸10号窯式期を中心とする良好な一括遺物が出土し、S D15、S D30からは黒笹90号窯式期までの遺物が出土する。さらに寺域内西南隅に建てられたS B02、S B04も折戸10号窯式期に所属することから、尾張国分寺が機能した時期を概ね把握できる。国分寺寺域外のS B06～09は、国分寺と継続時期を同じくした小集落と考えられる。

B 3 期

SB05 (図版22)

247は杯Aだが、底部から腰部にかけての回転ヘラ削り調整がみられず、底部はヘラ切りか、糸切り後にナデ調整を施している。248は灰釉陶器皿で、体部内外面に釉が施され、トチン痕が残る。高台は角高台である。所属時期は黒笹14号窯式期である。

SB10 (図版22)

249・250は灰釉陶器碗。いずれも体部から口縁部を欠損するが、三日月高台を有する。251～253は灰釉陶器皿で、釉は体部内面に刷毛塗りされ、三日月高台を有する。所属時期は黒笹90号窯式期である。

SB11・P15 (図版22)

254は杯蓋B₂で、SB11の床面に広がる焼土内から出土した。255は灰釉陶器碗で、底部外面以外に釉が施される。高台は角高台である。256は灰釉陶器段皿。257は灰釉陶器皿で釉は体部内面に施され、角高台を有する。258は小型の壺かミニアチュア製品の口縁部。259は手付瓶の把手。260はSB11の主柱穴P15から出土した灰釉陶器皿で内面全体に釉が施される。高台は角高台である。所属時期は黒笹14号窯式期である。

SB14 (図版22)

261は灰釉陶器碗。釉は内面全体及び体部外面に施され、角高台を有する。262は灰釉陶器皿。内面全体及び体部外面に釉が施され、トチン痕が残る。高台は角高台である。263は灰釉陶器段皿。釉は内面全体と体部外面に施され、角高台を有する。所属時期は黒笹14号窯式期である。

SB16 (図版22)

図示し得る遺物は264の灰釉陶器碗1点のみである。釉は体部内面および口縁部付近の外面に施され、三日月高台を有する。所属時期は黒笹90号窯式期である。

SE03 (図版22)

265は杯蓋で口縁部付近で変曲して段ができるタイプ。266は杯A。267～271は灰釉陶器碗。高台は三日月高台で、268が他と比べて小型である(口径10.8cm)。釉は268以外は体部内面に、268は底部外面を除く部分に施される。272は段皿で内外面ともに釉が施される。273は無高台の耳皿で底部に糸切り痕を残す。274・275は長頸壺。276は壺の底部。277は土師器甕で口縁端部に面をつくりだしている。所属時期は276が折戸10号窯式期。265・276が井ヶ谷78号窯式期。その他が黒笹90号窯式期に比定される。遺物の時期幅は、SE03がSD15上に掘削されたための混入に起因するものと思われ、遺構の掘削時期はSD15との重複関係からしても黒笹90号窯式期である。

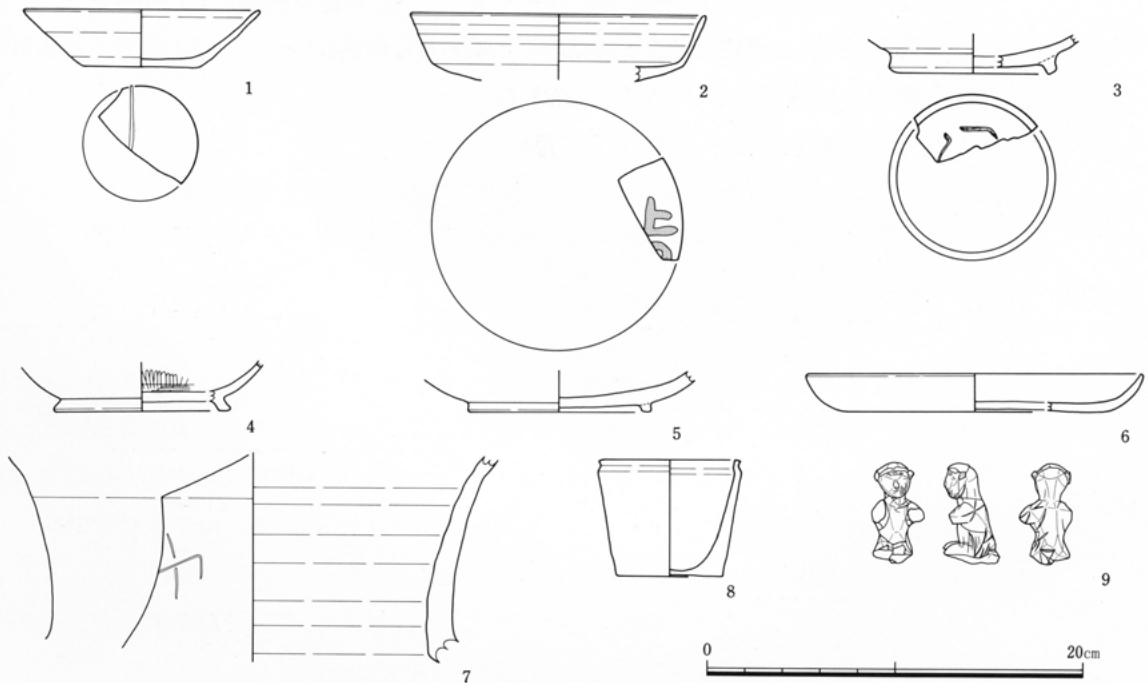
遺物の所属
時期

B 3 期に所属する遺構出土の遺物は黒笹14号窯式期から黒笹90号窯式期に主体をおく時期に所属し、国分寺廃絶期に、寺域の南に隣接して短期間営まれた集落が想定される。なお、後続する折戸53号窯式期以降12世紀前半までの遺構、遺物は皆無である。

その他の遺物（B期） （第24図）

ここではB期に所属する遺物で、さきに紹介した遺構出土以外の遺物、包含層出土の遺物、他時期の遺構の埋土から出土した遺物などの中から、主なものを紹介する。

1はE a区の包含層から出土した杯Aだが、底部から腰部にかけてのヘラケズリがみられず、底部から口縁部にかけて変化がなく、ハ字状に開く。底部外面にはヘラ記号の線刻が認められる。2はE a区、SD70出土の須恵器杯。高台の有無は不明だが、底部外面に墨書が認められる（識読不可）。3はH区の表土掘削時に出土した灰釉陶器碗。三日月高台を有し、底部外面に墨書が認められる（識読不可）。4・5は緑釉陶器。4はF c区のSD93（C 2期所属）、5はE c区のSD47（C 2期所属）から出土し、4は内面にミガキ調整痕が明瞭に認められる。6はSK16（B 2期所属）出土の土師器皿。本遺跡の出土遺物中土師器皿はこの1点のみであり、畿内産の可能性もある。7はSD91（C 2期所属）出土の須恵器甕の頸部。外面に線刻が施される。8はC区の包含層から出土した須恵器のツク型容器で、底部に糸切り痕を残す。9は須恵器の猿形製品。現状では高さ5.5cm、幅2.7cmを測る。両手が欠損しており、底部は本体から離脱した痕跡を残している。胎土は精緻で灰白色を呈し、焼成は良好で全体に自然釉がかかった状態である。正面にむかって右側のみ、刀子もしくは篲で非常に細かく獣毛を表現しており、顔の表情や体つきが丁寧に形成されている。この遺物はA 1期に所属するSB50の覆土最上部から出土したが、周囲の状況から、近接するB 2期のSK31に伴う遺物であった可能性が非常に高い。



第24図 B期その他の遺物実測図 1:4

図版番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	出土遺構	備考
第24図1	須恵器杯	12.2	6	3	A	E a区検出	
第24図2	須恵器杯	15.4	8			E a区SD70	墨書
第24図3	灰釉陶器碗		9.2			H区表土	墨書
第24図4	緑釉陶器		9.6			E c区SD47	
第24図5	緑釉陶器		14	2		C区SK16	
第24図6	土師器皿	17.6	14	2		F c区SD91	線刻
第24図7	須恵器甕	7.4	5.6	6.2		C区検出	
第24図8	須恵器ツク型容器			5.3		C区検出	
第24図9	須恵器猿形製品					C区検出	

第4表 その他の遺物（B期）観察表

(3) C期

出土遺物は灰釉系陶器、古瀬戸、青磁、土師質の鍋釜類、加工円盤、土錘などである。このうち圧倒的に多い灰釉系陶器の椀、皿については、記述の便宜上簡単な分類を行う。灰釉系陶器は常滑、瀬戸、猿投、藤岡、幸田、渥美、湖西などで生産される荒肌の南部系と、主に美濃地方で生産される均質薄手の北部系に大別でき、さらに形態によって細分が可能である。なお加工円盤、土錘については後述する。

器種分類 灰釉系陶器の器種分類 (第25図)

椀 A : いわゆる南部系の灰釉系陶器椀。

A₁ : 体部が丸みをもって内彎する。口縁部に至って外反する。口径15.5cm以上のものが多い。

A₂ : 体部の丸みが少なく、直線的に口縁部に至る。口径15.5cm以下のものが多い。

B : いわゆる北部系の灰釉系陶器椀。

B₁ : 器壁が薄く、器高が高い椀。

B₂ : B₁類に比べ器高が低く、体部が大きく外傾して口縁部に至る。皿形態に近い。

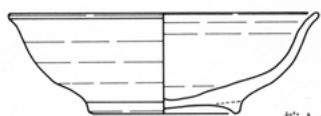
皿 A : いわゆる南部系の灰釉系陶器皿。

A₁ : 高台を有しないが、底部がやや突出する。体部が内彎するものが多い。

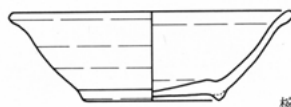
A₂ : 底部は平底。体部は直線的に外傾するものが多い。

B : いわゆる北部系の灰釉系陶器皿。

B₁ : B₂類に比べて器壁が若干厚い。



椀 A₁



椀 A₂



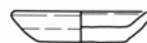
椀 B₁



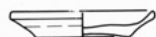
椀 B₂



皿 A₁



皿 A₂



皿 B₁



皿 B₂

第25図 灰釉系陶器椀・皿分類図 1:4

C 1 期

SK100 (図版23)

278～280は椀A。278・279はA₂。278は底部の糸切り痕をナデ消し、口縁端部は丸く仕上げる。279は糸切り痕を残し、口縁端部は丸く仕上げる。280は底部のみの資料だが、糸切り痕を残す。281は皿A₂。底部に糸切り痕を残し、口縁端部は丸く仕上げる。282は灰釉系陶器鉢で、内面全体に自然釉がかかる。腰部にはヘラ削りが施され、口縁端部は丸く仕上げる。遺物の所属時期は藤澤編年第6型式に比定できる⁴⁾

SK109 (図版23)

283～285はいずれも椀Aで、比較的丁寧に高台をつける。283は底部の糸切り痕をナデ消す。284・285は底部に糸切り痕を残し、底部内面に炭化物の痕跡が残る。遺物の所属時期は藤澤編年第6型式に比定できる。

SK110 (図版23)

286～288はいずれも椀A。286は内面に炭化物の痕跡が残る。また287・288は底部の糸切り痕をナデ消している。遺物の所属時期は藤澤編年第6型式に比定できる。

SK114 (図版23)

289は椀A。底部に糸切り痕を残し、胎土は精緻で高台が丁寧につけられる。底部内面には炭化物の痕跡が認められる。遺物の所属時期は藤澤編年第5型式に比定できる。

SK115 (図版23)

290は皿A₁。底部に糸切り痕が残る。遺物の所属時期は藤澤編年第5型式に比定できる。

SK116 (図版23)

291～293は椀A。291は内面に炭化物の痕跡が認められる。293は椀A₂と考えられ、口縁端部は面取りによって平坦面をもつ。遺物の所属時期は藤澤編年第6型式に比定できる。

SK117 (図版23)

294は椀A₂。内外面に炭化物の痕跡が認められる。底部は糸切り痕をナデ消している。遺物の所属時期は藤澤編年第6型式に比定できる。

SK122 (図版23)

295は椀A₁。口径16.2cm、底径7.4cmで、他と比してやや大型である。底部は糸切り痕をナデ消している。口唇部は舌状に外反し、端部外面をナデることによって3mmほどの平坦面をもつ。296は皿A₁。底部は糸切り痕が残る。297は皿A₂。遺物の所属時期は藤澤編年第5型式に比定できる。

SE02 (図版23、第19図)

298は椀A₁。口径15.7cm、底径7.6cmで、他と比してやや大型である。底部に糸切り痕を残し、口縁端部は丸く仕上げる。299は椀A。底部に糸切り痕を残し、高台が丁寧に付けられる。この2点は胎土が精緻である。遺物の所属時期は藤澤編年第5型式に比定できる。

SE06 (図版23、第19図)

300は青磁碗で内面に飛雲文が施される。301～305はいずれも碗A₂。301は底部の糸切り痕をナデ消しており、口縁端部を丸く仕上げる。また体部内外面に炭化物の痕跡が認められる。302は底部に糸切り痕を残し、口縁端部に平坦面を有する。高台は使用によってか、かなり擦り減っている。303・304は口縁端部に平坦面を持つ。306～308は皿A₂ですべて底部の糸切り痕をナデ消し、口縁端部を丸く仕上げる。306・308は底部外面に墨書が認められる(いずれも識読不明)。307は底部内面に炭化物の痕跡が認められる。なお井戸枠内出土の遺物は300・301・305・306・308。灰釉系陶器の所属時期は藤澤編年第6型式に比定できる。

遺物の所属
時期

C1期に所属する遺構出土の遺物は、概ね中世知多窯産あるいは猿投窯産であると考えられ、12世紀後半～13世紀前半に比定できる。

C2期

SD100 (図版24、第22図)

SD100については出土遺物にかなりの時期幅があるため、C1期に所属する遺物が多く含まれるが、便宜的にC2期として扱う。309～320は碗A₂だが、口径によって309～311(15.7～15.9cm)と312～320(14.3～15.2cm)に分けられる。口縁端部は、丸く仕上げるもの(309～312)、平坦面をもつもの(313～316)、肥厚化した丸みをもつもの(317～319)がある。底部は糸切り痕を残すもの(309・312・314・315・317～319)とナデ消すもの(310・311・320)がある。なお生産地は中世知多窯あるいは猿投窯(309～319)と瀬戸窯(320)が考えられる。321～323は碗B₁。口縁外面に丸みを持たせるが、323は端部を内側に引き上げる。底部は糸切り痕をのこし、321には墨書(「十」カ)がみられる。324・325は碗B₂。高台は省略され、底部は糸切り痕を残す。口縁端部は324が外側に引き出すのに対し、325は内側に引き上げている。326～332は皿A₂。326～331は口縁端部を丸く仕上げ、底部は糸切り痕をナデ消している。332は口縁部に平坦面を持ち、糸切り痕を残す。333は皿A₂であるが、口縁部を打ち揃った加工品。底部は糸切り痕をナデ消している。334・335は皿B₂で底部に糸切り痕を残す。336は古瀬戸の平碗で底部外面を除いて施釉される。337は古瀬戸の縁釉小皿で底部に糸切り痕を残す。338は灰釉系陶器のミニチュア製品だが、底部付近の状況から本体から剝離した可能性もあり、子持器台の一部かもしれない。339は古瀬戸の鉄釉摺鉢。340は伊勢型鍋。341は羽釜。342は清郷型甕。遺物の所属時期については309～311・326・327が藤澤編年第5型式。312～319・328～331が第6型式。320・332が第7型式。321・322・334・335が田口編年明和1号窯式期。323が大畑大洞4号窯式期。324・325が脇之島3号窯式期。336が藤澤編年古瀬戸中Ⅲ期。337が古瀬戸後Ⅲ期。339が古瀬戸後Ⅳ期。

SD27 (図版25)

343は青磁碗で、内面に画花文を施す。

SD32 (図版25)

344は仏供で口縁部内外面に鉄釉を施し、底部は糸切り痕を残す。345は袴腰型香炉で口縁部内面及び体部外面に灰釉を施す。藤澤編年古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期に所属する。

SD47 (図版25)

346～349は碗B₂。346・347は底部に糸切り痕を残し、高台は粗雑で屈曲部より内側につけられる。348・349は高台が省略され、底部に糸切り痕が残る。350は底部付近外面に楯目の痕跡が認められる(仏供か)。351は皿A₂で底部に糸切り痕を残す。352は皿B₁で底部に糸切り痕を残す。353は皿B₂。遺物の所属時期は346・347・352が田口編年大洞東1号窯式期。348・349・353が脇之島3号窯式期。351が藤澤編年第6型式。

SD75 (図版25)

354～357は碗B₂。354は高台を有し、底部は糸切り痕を残す。355～357は高台が省略され、底部は糸切り痕を残す。355は底部から体部にいたる屈曲部外面に、焼成時に器面に付着していた靱が炭化した痕跡が観察された。357はやや底部が突出する。358～360は皿B₂でいずれも底部に糸切り痕を残す。361～364は羽釜で、361は口縁部付近に焼成後の穿孔がある。遺物の所属時期は354～360が田口編年脇之島3号窯式期。

SD91 (図版25)

365～367は碗B₂。365・366は高台が省略され、底部に糸切り痕を残す。365は口縁端部を内側に引き上げている。368～374は皿B₂で、いずれも底部に糸切り痕を残す。375～377は羽釜で、375は口縁部付近に穿孔がある。遺物の所属時期は365・366が田口編年生田2号窯式期。367が脇之島3号窯式期。368～374が脇之島3号窯式期～生田2号窯式期。

SD110 (図版25)

378・379は碗B₁。378は口縁端部に平坦面をもち、内側に引き上げる。380は皿B₂で底部に糸切り痕を残す。遺物の所属時期は田口編年大畑大洞4号窯式期～脇之島3号窯式期。

SD117 (図版25)

381は碗B₁。382～385は皿B₂で底部に糸切り痕を残す。遺物の所属時期は田口編年大畑大洞4号窯式期～脇之島3号窯式期。

遺物の所属
時期

C2期に所属する遺構出土の遺物には、SD100を除いて、概ね14世紀中頃～15世紀後半の年代観が与えられよう。SD100は12世紀後半～15世紀中頃という年代幅を持ち、C1期～C2期にかけて継続している。

その他の遺物 (C期) (図版25)

386はE b区のSD74から出土した皿B₂。底部は糸切り痕を残し、底部内面に墨書が認められる(「供」か)。387はSD14出土の碗A。底部は糸切り痕を残し、底部内面に墨書が認められる(識読不可)。

註

- 1) 斎藤孝正 1987 「猿投窯Ⅳ期における須恵器生産の様相」『名古屋大学文学部研究論集・史学33』
- 2) B期の遺物（須恵器、灰釉陶器）の所属時期については、文化庁 斎藤孝正氏、愛知県立千種高等学校城ヶ谷和広氏に資料を実見していただき御教示を頂いた。（以下、本文中の編年観記述の註を省略する）
- 3) 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』1984各務原市教育委員会
『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981岐阜市教育委員会
- 4) 灰釉系陶器については、中野晴久（中野1983、1992）、赤羽一郎（赤羽1983）、奥川弘成（奥川1992）、藤澤良祐（藤澤1990）、田口昭二（田口1984）各氏の研究を参考にした。年代観については中野晴久、藤澤良祐両氏に資料を実見していただき御教示を頂いた。古瀬戸製品についても藤澤氏から御教示をいただいた。なお所属時期の記述は、南部系灰釉系陶器については藤澤氏、北部系灰釉系陶器については田口氏の編年に準拠した。（以下、本文中の編年観記述の註を省略する）

参考文献

- 檜崎彰一 1983 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査報告Ⅲ』
愛知県教育委員会
- 斎藤孝正 1987 「施釉陶器年代論」『論争・学説日本の考古学 6 歴史時代』雄山閣
1986 「灰釉陶器の研究 I」『名古屋大学文学部研究論集XCV』
1986 「灰釉陶器の研究 II」『名古屋大学文学部研究論集104』
- 赤羽一郎 1983 『常滑焼』ニューサイエンス社
- 奥川弘成 1992 『中田池古窯址群 その2』愛知県企業庁・武豊町教育委員会
- 中野晴久 1983 「知多古窯址群における山茶碗の研究」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅰ』
1992 「常滑窯」『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代、中世窯の諸問題』資料
- 藤澤良祐 1990 「瀬戸地区の北部山茶碗窯」『尾呂本文編』瀬戸市教育委員会
- 田口昭二 1984 『美濃焼』ニューサイエンス社

第2節 瓦

今回の調査では多量の瓦が出土したが、全体の形状を窺える資料はわずかであり、遺構に伴わない資料も多い。そこで丸瓦（KA）、平瓦（KB）、道具瓦（KE）は、その側面、端面のいずれかが残存するものすべてを対象にし、軒丸瓦（KC）、軒平瓦（KD）は瓦当文様から型式の判るすべての破片を対象にして観察、計測を行った。

丸瓦 丸瓦（KA）¹⁾ 第26～30図

出土量と出土状況

分析の対象になった丸瓦の総破片数は282点である。調査区別の出土量は第5表のとおりであり、遺跡の所在する微高地の中心に多い。形状は、大半が玉縁丸瓦だが、行基丸瓦も出土している。

<製作技法>

素地

概して精緻な胎土を用い、焼成も良好なものが多い。なかでも青灰色を呈する資料は須恵質の堅緻な焼成がなされ、胎土が縞状を呈するものが多く認められ興味深い。

粘土板 分析した資料はすべて粘土板から製作されており、粘土角材から糸状の道具で切り取った痕跡が多く見られた。また模骨に粘土板を巻いた際の合わせ目が確認できるものが10例あった（第28図-5）。粘土紐の巻つけによるものは確認できなかった。瓦の厚さは第7・8表のとおりであった。

模骨

丸瓦凹面の形状や表面観察から本来の模骨の形状を窺える。形成台は一木造りの截頭円筒形が推定され、玉縁付であれば、その部分の形状を有する。

凸面調整と玉縁部形成

側面平行縄タタキ 模骨に粘土板を巻きつけ、玉縁部と丸瓦葺足部を画する部分に粘土を付け足し、肩を作り出す。その後、縄タタキを行う。縄目は側面平行タタキで、完全にナデ消されるものと、ナデが不十分で縄目が残存するものがある。格子タタキなど縄目以外のタタキは皆無で、叩きしめの円弧も確認できなかった。玉縁凸面は型木や型板によって調整され、連結面の幅はほぼ一定にそろえられる。

凹面調整

布の処理 凹面の調整はほとんど行われず、形成台を覆う布目が明確に残る。布の密度（2cm×2cmあたり）は第9表のとおり。綴じ合わせ方法の不明な資料が多いが、MS r タイプのまつり縫いが確認できる資料もある（第28図-6）。その他、ダーツを作り、布をしぼることによって、玉縁部でたるむ布の処理をおこなっているもの（第29図-7）、不足部分に密度の違う布を継ぎあてているもの（第30図-11）、不足部分に布の継ぎあてをおこなわないもの（第30図-12）など、さまざまな例が見られた。

分割と側面形状

乾燥と分割 模骨からはずされた丸瓦は、半乾燥の後、2分割される。多くの場合凹面側から分割工具が入られるが、凸面から入れられるものが2例確認された(第30図-9・10)。また分割の目安として凸面側に浅い刻線を入れた資料が1例ある(第26図-2)。分割後の側面調整は、分割断面と破面の凹凸をそのまま残すa手法、浅いヘラケズリを破面に施し、破面の凸部を調整するが、破面の凹部と分割断面が残るb手法、側面全体に丁寧なヘラケズリを施し、分割断面及び破面の凹凸を全くとどめないc手法がある。この要素を丸瓦分類で活用する。側面の面取り形状については第10表のとおり。

端面形状

半乾燥の際、もしくは分割の際に付着したと思われるはなれ砂が、広端面4例、狭端面(玉縁端面)19例に認められた(凸面に2例)。端面形状については第11表のとおり。端面調整はヘラケズリを施す。

焼成と色調

焼成はほとんどが良好で、とくに須恵質で堅緻なものが30例あった。色調は第6表のとおりで、とくに青灰色を呈する資料に須恵質のものが多。なお主として凸面に二次的な火を受けた痕跡が認められる瓦もみられる。

<分類>

丸瓦を玉縁丸瓦か行基丸瓦かで大別する。ただし側、端部片から明確に分類することが難しい資料は主観的な判断によった。その後、分割痕、側面調整で細分する。

行基葺丸瓦 KA I 行基葺丸瓦(第26図)

今回分析した282点中、明らかにKA Iに分類できる資料は、SE03曲物外井戸枠内から出土した2点のみであった。側部の調整はc手法。2は堅緻に焼成され、凸面側部付近には分割の際、目安にしたとおもわれる浅い刻線が認められる。また粘土板の重複痕(矢印)が凹面にみられる。

玉縁付丸瓦 KA II a 側面調整c手法の玉縁付丸瓦。(第27図・第30図)

側面調整が観察できた179点中、KA II aは57点(約32%)であった。

KA II b 側面調整a、b手法の玉縁付丸瓦。(第28・29・30図)

側面調整が観察できた179点中、KA II bは122点(約68%)であった。うちb手法が2点、c手法が120点であったが、今回の分類では一括しておく。5は粘土板の合わせ目が狭端面及び凹面に明確に認められる(Zタイプ・矢印)。6は凹面に布のまつり縫いが確認でき(MS rタイプ・矢印)、狭端面にはなれ砂の痕跡が残る。7は玉縁凹面に布のしぼりが認められる(タイプ不明・矢印)。13は凹面に線刻がある(焼成前、識読不明「張」か)。

調査区	出土量
A	4
B	36
C	104
D	9
E	93
F	23
G	1
H	12
合計	282

第5表 丸瓦調査区別出土量

厚さ (cm)	出土数
1.2	2
1.3	5
1.4	7
1.5	19
1.6	35
1.7	38
1.8	37
1.9	26
2.0	18
2.1	13
2.2	6
2.3	5
2.4	5
2.5	7
2.6	1
2.7	1
2.8	1
2.9	0
3.0	2

第7表 丸瓦(葺足部)厚さ
(丸瓦葺足部の測定可能なもの)

厚さ (cm)	出土数
1.0	1
1.1	0
1.2	1
1.3	4
1.4	5
1.5	11
1.6	1
1.7	2
1.8	2
1.9	1













第8表 丸瓦(玉縁部)の厚さ

白色	28
黄色	58
黒色	79
灰色	94
青灰色	10
橙色	13




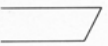
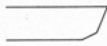
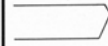
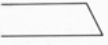
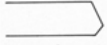
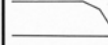
第6表 丸瓦色調

		横																		
		7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20					
縦	9						1	1												
	10		2		1	3	2	3												
	11				4	4	2	4	6	2		1								
	12		1	2	3	6	5	4	9	2	3	1		1						
	13			1	1	2	2	1	5	6	1		2							
	14	1		1		3		11	8	7										
	15			1		3	4	4	8	1	2	1	1							
	16				1	1	1	2	4	5	3	1	2							
	17			1	2	2		1			1	1	1							
	18					1							1	2	1					
	19					1						1		2						
	24												1							

第9表 丸瓦凹面布目数

	面取りなし	凹面側面取り	凸面側面取り	両面面取り
a手法	 119	 1	 0	 0
b手法	 0	 1	 0	 1
c手法	 37	 10	 2	 8

第10表 側面調整及び形状

	面取りなし			凹面側面取り			凸面側面取り	
	広端面	狭端面		広端面	狭端面		広端面	狭端面
	44	16		11	24		8	1
	0	0		0	0		5	0
	6	0		0	1		3	0

第11表 丸瓦端面形状

平瓦	<p>平瓦（KB）第31～35図</p> <p>出土量と出土状況</p> <p>分析の対象になった平瓦の破片数は624点である。調査区別の出土量は第12表のとおりであり、丸瓦同様、遺跡の所在する微高地上に多い。</p> <p><製作技法></p> <p>素地</p>
粘土板	<p>概して精緻な胎土を用いるが、小石の目立つ資料も115点あった。分析した資料はすべて粘土板から製作されており、粘土角材から糸状の道具で切り取った痕跡が多くみられた。また破面などの観察から薄い粘土板を2枚重ねて製作する資料があり、粘土板重ね技法（第31図-14、第33図-18、第34図-22）と呼称したい。平瓦の厚さは第13表のとおり。</p> <p>成形台</p>
一枚作り	<p>凸型台と凹型台の2種類が使用される。全体の形状を窺える資料は少ないが、長方形（第31図-14、第33図-19）、台形（第31図-15、第32図-16・17、第33図-18）2種類の瓦が存在することから、成形台の形状も想定できる。平瓦凹面に桶の痕跡を残す資料が1点ある（第33図-19）が、桶巻作りなのか、成形台が桶状なのかは判然としない。それ以外の平瓦は一枚作りの可能性が高い。</p> <p>凸面調整</p>
側面平行縄タタキ	<p>凸面には縄タタキが施される。縄目の密度（2×2cmあたり）は第15表のとおり。叩きしめの円弧はみられず、側面平行にタタキがなされている。凸面にはユビ圧痕が残存する例もある。はなれ砂は85点確認された。</p> <p>凹面調整</p>
無彫刻タタキ	<p>凸面調整の後、凹型台を使用した調整方法が存在する。無彫刻タタキは分析した資料中65例（約11%）に明確に認められた（第34図-20・21）。20はタタキ原体の横幅を知り得る例で、3.9cmを測る。その他、ユビナデも存在する。これら凹面調整は、時には凸面の縄目に潰れを生じさせ、第33図-18のように凹型台縁部の形状を平瓦凸面側縁部に留める。なお凹面に残存する布目の密度（2×2cmあたり）は第18表のとおり。布が成形台全体を覆わず、布端の形状が凹面側縁部、端縁部に残存する資料（第35図-23～25）、その逆に、端部にまで布目痕がおよぶ資料（第35図-26）もある。</p> <p>側面、端面調整</p> <p>ケズリ調整がほとんどであるが、ユビナデを施すものもある。ケズリの角度、面取りの有無、部位によって多様な側端面形状がみられる。形状については第16・17表のとおり²⁾</p> <p>焼成と色調</p> <p>焼成は良好なものが多いが、丸瓦同様、青灰色を呈する資料は堅緻な焼成がなされ、胎土が縞状を呈するものが多く興味深い（焼成が堅緻な82点中、青灰色の色調を有する資料は60点）。また主として凸面に二次的な火を受けた痕跡が認められる瓦もみられ、特に第34図-21は顕著である。色調は第14表のとおり。</p>

A	15
B	101
C	272
D	32
E	143
F	22
G	4
H	28
合計	617
表面採集	(7)

第12表 平瓦調査区別
出土量










厚さ (cm)	出土数
1.1	1
1.2	1
1.3	0
1.4	0
1.5	4
1.6	9
1.7	26
1.8	57
1.9	66
2.0	100
2.1	86
2.2	72
2.3	54
2.4	37
2.5	35
2.6	7

厚さ (cm)	出土数
2.7	9
2.8	3
2.9	2
3.0	1
3.1	2
3.2	1
3.3	1
3.4	1
3.5	1
3.6	0
3.7	1
3.8	1
5.5	1
7.6	1
8.2	1
8.7	1

第13表 平瓦厚さ

白	70
黄	162
黒	101
灰	214
青灰	60
橙	17

第14表 平瓦色調










	面取りなし	凹面側面取り	凸面側面取り
突出なし	 32	 31	 1
凹面側突出	 70	 229	 3
凸面側突出	 29	 19	 8

第16表 平瓦側面形状

横

	2	3	4	5	6	7	8
3	0	1	0	1	0	2	0
4	0	3	1	2	0	2	3
5	0	18	7	0	0	1	0
6	1	67	66	4	0	0	0
7	0	53	100	18	1	0	0
8	0	16	67	11	1	0	0
9	0	3	9	7	1	0	0
10	0	1	1	0	0	0	0
11	0	0	1	0	0	0	0

第15表 平瓦凸面縄目数
横

	面取りなし	凹面側面取り	凸面側面取り
突出なし	 102	 4	 1
凹面側突出	 14	 4	 1
凸面側突出	 147	 1	 0

第17表 平瓦端面形状

	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
6	1																			
7				1	1	1														
8	1				1	1	1	2												
9			1		4	5	4	12	1	1										
10					1	5	7	4		4	1									
11						5	12	24	13	12	6	1	2							
12					4	13	10	20	27	20	15	5	3		1		1			
13					1	7	7	12	21	24	10	16	2	1						
14						2		11	10	15	11	8	4	3						
15							1	3	5	11	5	3	4	2						
16					1	1		2	2	2	1	3		2	1	1				
17											2	3	1							1
18																				
19														1						
20											1						1			
21																				

第18表 平瓦凹面布目数

軒丸瓦 軒丸瓦（KC）第36図

今回出土した軒丸瓦中、その型式³⁾がある程度判断できる資料は11点のみである。27は素弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房の蓮子が型崩れするMⅢ-B型式で、瓦当裏面に布目が残存する1本作り軒丸瓦。28・29も素弁八葉蓮華文軒丸瓦と考えられるが、MⅢ型式かMV型式かの判別は不可能。この他、同様の小破片が2点ある。30～33はMV型式（線鋸歯文珠文縁単弁十二葉蓮華文軒丸瓦）であろう。34・35はMⅦ（素弁八葉蓮華文軒丸瓦）か。なお27（SD13出土）の凸面は二次的に火を受け、焼けている。

軒平瓦 軒平瓦（KD）第37・38図

今回出土した軒平瓦中、その型式⁴⁾がある程度判断できる資料は24点のみである。第37図-36～44はT字形の中心飾りを持つ均整唐草文軒平瓦（HⅠ型式）。36・37は唐草文が左右に3反転するHⅠ-A型式。36は剥離面に糸切り痕が残存する。38～42は唐草文が左右に2反転するHⅠ-B型式。43・44は、細分が不可能である。第37図-45～47は牛角形（菱実形）の中心飾りを持つ均整唐草文軒平瓦（HⅡ型式）。45は唐草文が左右に5反転し、珠文が密なHⅡ-A型式。この型式は奈良、大安寺の軒平瓦6712-C型式と同範である。大安寺北側、杉山古墳の前方部に築かれた杉山瓦窯出土の瓦と比較すると、範傷（3ヶ所確認）の進行状態に差がなく、製作技法も酷似している⁵⁾。46は珠文が45に比べて疎であることからHⅡ-B型式であろう。47は瓦当文様がさらに稚拙化したHⅡ-C型式（唐草文左右4反転）である。第37・38図-48～55は左右4反転の巴形唐草が中央でχ状に交差して中心飾りとなる均整唐草文軒平瓦（HⅢ型式）。48・50は支葉のあるHⅢ-A型式だが、それ以外の細分は不可能。なお51（SE03出土）の凹面は二次的に火を受け、焼けている。52の凸面頸部には縄タタキの痕跡が残る。第38図-56・57は三葉状の中心飾りを持ち、左右に唐草文が3反転する均整唐草文軒平瓦（HⅣ型式）。57（SE03出土）の凹面は二次的に火を受け、焼けている。第38図-58は中心に1+4の珠文を配し、唐草文が左右に3反転する均整唐草文軒平瓦（HⅤ型式）であろう。第38図-59は一種の宝相華文のような中心飾りの左右に、唐草文が3反転する均整唐草文軒平瓦（HⅥ型式）と考えられる。

畿内との同
範関係

型式	MⅠ	MⅡ	MⅢ	MⅣ	MⅤ	MⅥ	MⅦ	MⅧ	MⅧ	MⅧ	合計
塔跡	12	5	33	64	12	3	93	79	0	301	
金堂跡	1	0	3	0	6	0	1	0	2	13	
本遺跡	0	0	1	0	4	0	2	0	0	11	
			* 4								

*はMⅢ型式、MⅣ型式の判別が不可能な遺物数

第19表 軒丸瓦型式別出土数

型式	HⅠ				HⅡ				HⅢ				HⅣ	HⅤ	HⅥ	HⅦ	HⅧ	合計
	A	B	C	不明	A	B	C	不明	A	B	C	不明						
塔跡	13	51	17	5	2	11	0	2	49	58	0	0	27	52	70	1	8	364
金堂跡	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	5
本遺跡	2	5	0	2	1	1	1	0	2	0	6	6	2	0	1	0	1	24

第20表 軒平瓦型式別出土数

道具瓦 (KE) 第39図

今回の調査で出土した道具瓦は、平瓦を半截 (側面平行) もしくは四分割した熨斗瓦と、彎曲しない板状の瓦を半截 (側面平行) もしくは4分割した道具瓦である。今回は前者を熨斗瓦 I (KE I)、後者を熨斗瓦 II (KE II) として分類する。なお側部、端部のいずれかが残存する資料は、8点 (うちKE Iは1点) のみである。

KE I

60は平瓦を製作した後、半截、もしくは四分割している。分割断面はケズリ調整を施し、破面を残さない。

KE II

61はA面 (平瓦の場合の凸面) に縄タタキを側面平行、端面平行に施す。B面 (平瓦の場合の凹面) は糸切り痕を明瞭に残し、布を使用した痕跡がない。両面にはなれ砂が顕著にみられ、分割した側面調整は分割断面と破面の凹凸をそのまま残すa手法である。62はA面に縄タタキを側面平行に施す。B面は糸切り痕を明瞭に残し、布を使用した痕跡がない。両面にはなれ砂が顕著にみられ、分割した側面調整はa手法である。63はA面に糸切り痕を明瞭に残し、縄タタキなどの調整痕がない。B面は布目痕が認められ、無彫刻タタキが施される。はなれ砂はA面に顕著で、B面にはみられない。分割した側面調整はa手法である。なお61~63はすべて分割線がA面から入る。

註

- 1) 丸瓦の部位名、その他の用語については基本的に、大脇深1991「研究ノート 丸瓦の製作技法」『研究論集 K』奈良国立文化財研究所学報第49冊に従った。
- 2) 瓦の側面、端面形状については、破片の場合、観察する角度によって形状が異なるため主観的な判断の入り込む余地が大きい。
- 3) 4) 軒瓦の型式分類については浅野 清編1968『尾張国分寺の発掘調査』稲沢市教育委員会における稲垣晋也氏の型式分類に従った。
- 5) H II - A型式については中井 公氏、梶山 勝氏によって同型式であることが指摘されていたが (梶山1991、「尾張国分寺とその同型瓦の分布をめぐって」『名古屋博物館研究紀要第14巻』)、大安寺からの出土量が極めて少なく、加えて尾張国分寺からの出土も2例のみであったことから同関係の確認までには至らなかった。今回、杉山瓦窯の調査によって資料が増加し、奈良市教育委員会の御厚意によって資料の実見、比較を行い、同関係を確認した。なお、従来6712-D型式としていたこの瓦は、6712-C型式と同一の瓦であることが判明し、型式番号6712-Cに統一する旨、中井 公氏より御教示をうけた。

瓦 [KA]

図版番号	区	出土遺構	縦	横	厚さ	凹面布目数	側面形状	分割断面	焼成	色調	分類
第26図-1	C	SE03	20.2	16.5	1.8	17	13 C手法、凹面側面取り		良好	白	KA I
第26図-2	C	SE03	18.2	15.2	1.7	18	20 C手法、凹面側面取り		堅緻	青灰	KA I
第27図-3	C	SK47	14.2	9.5	1.8	15	14 C手法、凹面側面取り		良好	灰	KA II a
第27図-4	E b	検 II	13.0	15.8	2.2	14	12 C手法、凹面側面取り		良好	灰	KA II a
第28図-5	C	SE03	11.0	16.8	2.8	13	12 a手法、面取りなし	凹面側	良好	黒	KA II b
第28図-6	C	SD13	25.8	13.2	1.8	12	14 a手法、面取りなし	凹面側	良好	黒	KA II b
第29図-7	C	SB02	14.6	15.4	1.9	14	14 a手法、面取りなし	凹面側	良好	灰橙	KA II b
第29図-8	C	SB02	29.6	13.6	2.5	10	11 a手法、面取りなし	凹面側	良好	灰黄	KA II b
第30図-9	E c	SK121	12.8	6.8	2.0	16	15 a手法、面取りなし	凸面側	良好	灰	
第30図-10	C	SE03	7.5	6.8	2.1	11	11 a手法、面取りなし	凸面側	良好	白	
第30図-11	C	SK47	8.9	10.2	1.6	14	14 C手法、凹面側面取り		良好	灰黄	
第30図-12	C	SD30	12.2	10.3	1.7	14	12 C手法、凹面側面取り		良好	灰黄	
第30図-13	C	検 II	9.5	6.5	1.9	15	12 a手法、面取りなし	凹面側	良好	灰	

図版番号	備	考
第26図-1	凸面に二次的な焼痕。	
第26図-2	凸面側部に分割目安線。凸面に二次的な焼痕。凹面粘土板重複痕	
第27図-3	凹面に二次的な焼痕。	
第27図-4		
第28図-5	凹面粘土板重複痕。	
第28図-6	狭端面にはなれ砂。凹面布まつり縫い痕	
第29図-7	中央土坑出土。狭端面にはなれ砂	
第29図-8	中央土坑出土。	
第30図-9		
第30図-10		
第30図-11	凹面に二次的な焼痕。布継ぎ足し。	
第30図-12	凹面に二次的な焼痕。布の隙間あり。	
第30図-13	凹面に線刻 (焼成前、識読不明「張」カ)。	

第21表 瓦観察表 (1)

平瓦 (KB)

図版番号	区	出土遺構	縦	横	厚さ	凸面調整	縄目数	凹面調整	布目数	はなれ砂	側面形状
第31図-14	C	SE 0 3	37.7	28.0	2.0	縄 (側面平行)	7 4	無彫刻タタキ	15 13	なし	面取りなし7
第31図-15	C	SE 0 3	38.0	16.5	2.5	縄 (側面平行)	7 4	無彫刻タタキ	12 10	凸面	凹側面取り5
第32図-16	C	SE 0 3	36.7	26.2	2.0	縄 (側面平行)	7 5	無彫刻タタキ	16 16	なし	面取りなし7
第32図-17	C	SE 0 3	21.8	15.7	1.8	縄 (側面平行)	9 5	無彫刻タタキ	14 16	凸面	凹側面取り5
第33図-18	C	SK 4 1	27.1	14.5	2.5	縄 (平行)	6 3	—	10 10	凸面	面取りなし4
第33図-19	C	SB 0 2	28.5	17.0	2.2	縄 (側面平行)	7 4	—	14 15	なし	面取りなし1
第34図-20	C	SE 0 3	21.5	18.0	2.2	縄 (側面平行)	6 4	無彫刻タタキ	13 11	なし	凹側面取り5
第34図-21	C	SE 0 3	20.0	24.0	2.3	縄 (側面平行)	6 3	無彫刻タタキ	15 12	なし	凹側面取り8
第34図-22	C	SE 0 3	14.0	16.5	2.6	縄 (側面平行)	5 4	—	12 12	なし	凹側面取り8
第35図-23	B	SE 0 4	11.7	10.5	2.0	縄 (側面平行)	7 5	—	12 12	なし	凹側面取り5
第35図-24	C	SB 0 2	11.5	20.0	2.2	縄 (側面平行)	8 5	—	12 14	なし	面取りなし7
第35図-25	B	SE 0 4	12.2	10.0	2.0	縄 (側面平行)	4 4	—	13 14	なし	凹側面取り5
第35図-26	C	SD 1 3	12.3	8.8	2.4	縄 (側面平行)	9 4	—	13 14	なし	—

図版番号	端面形状	焼成	色調	備 考
第31図-14	面取りなし1	良好	灰	粘土板重ね技法
第31図-15	面取りなし7	良好	黒	台形、凹面に二次的な焼痕
第32図-16	面取りなし4	良好	灰	台形
第32図-17	面取りなし7	良好	灰黄	台形
第33図-18	面取りなし1	良好	灰黄	凹型台の痕跡、粘土板重ね技法
第33図-19	面取りなし1	良好	灰橙	中央土坑出土、凹面に桶状模骨痕あり、凸面指圧痕多い
第34図-20	面取りなし7	良好	灰	無彫刻タタキ横幅 3.9cm
第34図-21	面取りなし1	良好	黒	凹面に著しく二次的な焼痕
第34図-22	面取りなし7	良好	灰	粘土板重ね技法
第35図-23	面取りなし7	良好	黒	凹面に布端の痕跡
第35図-24	面取りなし7	良好	灰橙	凹面に布端の痕跡
第35図-25	面取りなし7	良好	黒	凹面に布隅の痕跡
第35図-26	面取りなし1	堅緻	青灰	端面に布目痕あり

軒丸瓦 (KC)

図版番号	区	出土遺構	分類	焼成	色調	備 考
第36図-27	C	SD 1 3	M III - B	良好	灰黄	瓦当裏面布目痕あり、一本作り、凸面に二次的な焼痕あり第10図
第36図-28	E b	SD 5 0	M III or N	良好	灰	
第36図-29	B	VD 15 h	M III or N	良好	灰黄	
第36図-30	B	SD 4 5	M V	良好	黒	
第36図-31	C	SD 1 3	M V	良好	灰	
第36図-32	C	VD 16 m	M V	良好	灰	SD 1 3 上層か
第36図-33	E c	VF 16 g h	M V	良好	灰	
第36図-34	E a	VE 15 n	M VII	良好	黒	
第36図-35	C	SE 0 3	M VII	良好	黒	

軒平瓦 (KD)

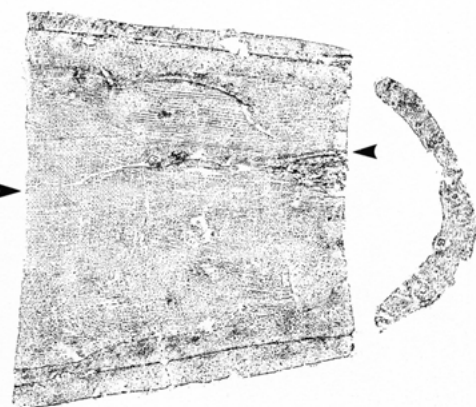
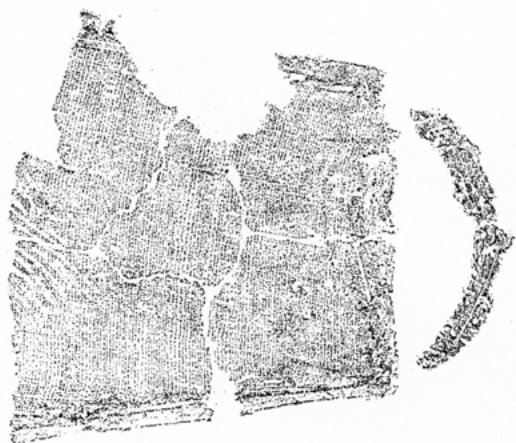
図版番号	区	出土遺構	分類	焼成	色調	備 考
第37図-36	C	SE 0 3	H I - A	良好	黒	剝離面に糸切り痕残存
第37図-37	E c	SK 1 1 6	H I - A	不明	良好	黒
第37図-38	C	SD 1 3	H I - B	段	堅緻	青灰 第10図
第37図-39	C	SD 1 3	H I - B	段	良好	灰 第10図
第37図-40	C	表土	H I - B	段	堅緻	青灰
第37図-41	E c	検出	H I - B	段	堅緻	青灰
第37図-42	C	SD 1 3	H I - B	段	堅緻	青灰 第10図
第37図-43	C	VD 15 q	H I	不明	堅緻	青灰
第37図-44	H	SD 1 0 0	H I	不明	堅緻	青灰
第37図-45	C	VD 15 b	H II - A	段	良好	灰 大安寺6712-C型と同範
第37図-46	B	VD 16 e	H II - B	段	良好	灰
第37図-47	C	SD 2 2	H II - C	段	良好	灰
第37図-48	F c	SK 1 5 0	H III - A	不明	良好	灰
第37図-49	C	表土	H III	段	堅緻	青灰
第38図-50	C	SE 0 3	H III - A	段	良好	黒
第38図-51	C	SE 0 3	H III	曲線	良好	黒 凹面に二次的な焼痕
第38図-52	E a	VE 16 q r	H III	不明	良好	黄灰 凸面頸部に縄目痕残存
第38図-53	F a	SD 8 0 上	H III	不明	良好	黄灰
第38図-54	B	SD 4 5	H III	不明	良好	黄灰
第38図-55	B	SD 4 5	H III	不明	良好	黄灰
第38図-56	C	SD 3 0	H V	不明	堅緻	青灰
第38図-57	C	SE 0 3	H V	段	堅緻	青灰
第38図-58	C	SE 0 3	H V	曲線	良好	黒
第38図-59	C	SE 0 3	H V	不明	堅緻	青灰

道具瓦 (KE)

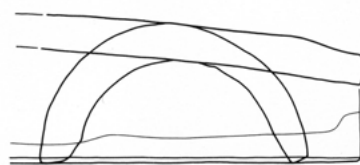
図版番号	区	出土遺構	縦	横	厚さ	凸(A)面調整	縄目数	凹(B)面調整	布目数	はなれ砂
第39図-60	C	検出1	20.0	14.0	2.2	縄 (側面平行)	4 3		13 14	なし
第39図-61	B	SK 6 0	20.0	14.0	2.2	縄 (側、端面平行)	6 4	未調整	なし	なし 両面
第39図-62	C	SK 4 7	10.5	14.5	1.9	縄 (側面平行)		未調整	なし	なし 両面
第39図-63	C	SK 4 7	12.7	14.5	2.2	未調整	なし	なし	無彫刻タタキ	なし 凸(A面)

図版番号	側面形状	分割截面	端面形状	焼成	色調	分類	備考
第39図-60	c手法、4と7		1	良好	灰	KE I	平瓦半裁
第39図-61	a手法、1	凸(A)面側	1	良好	灰	KE II	
第39図-62	a手法、1	凸(A)面側	7	良好	黒	KE II	
第39図-63	a手法、1	凸(A)面側	1	良好	灰	KE II	

第22表 瓦観察表(2)



1

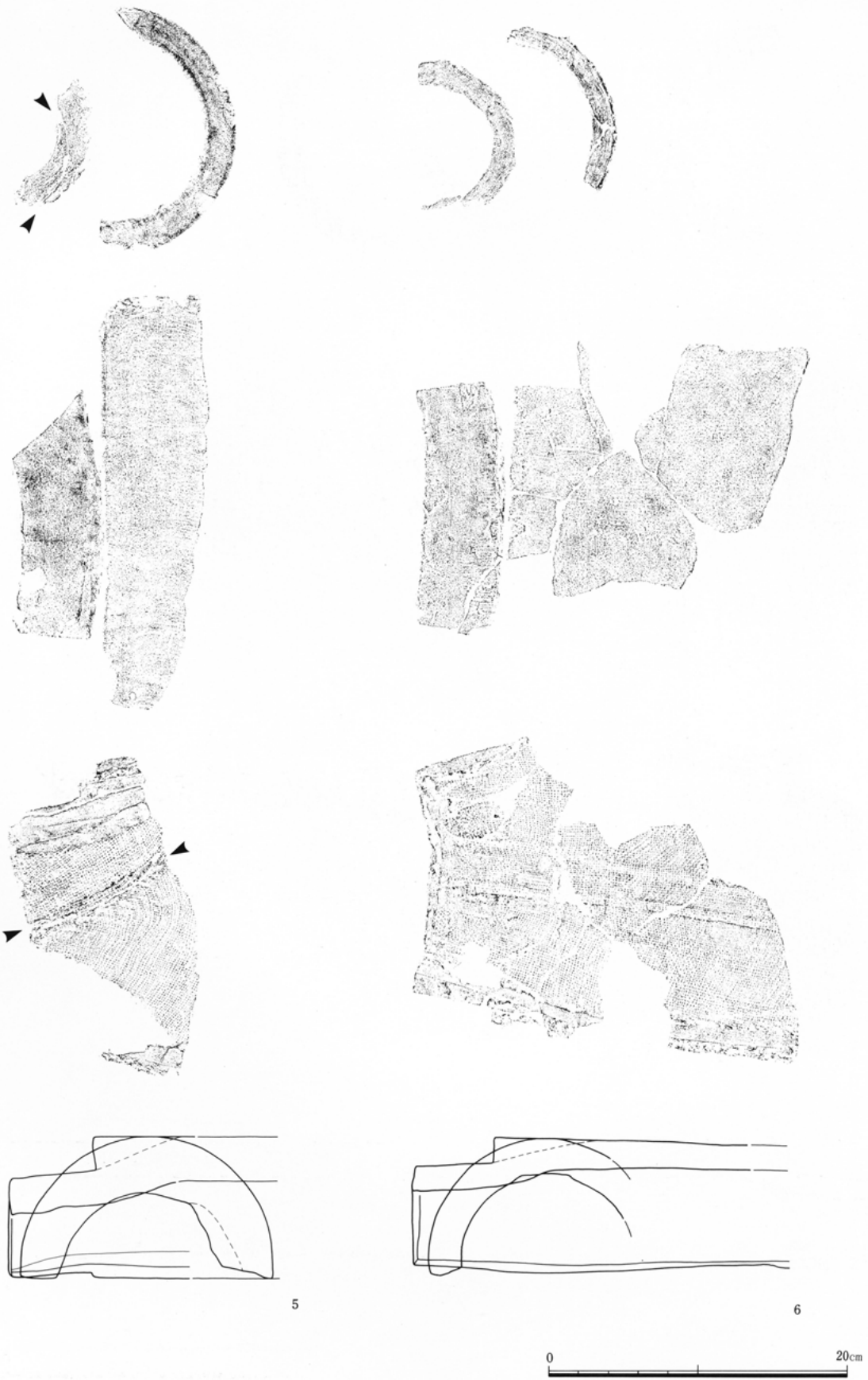


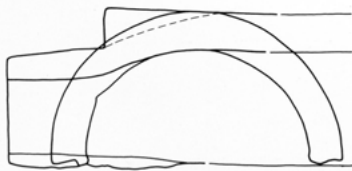
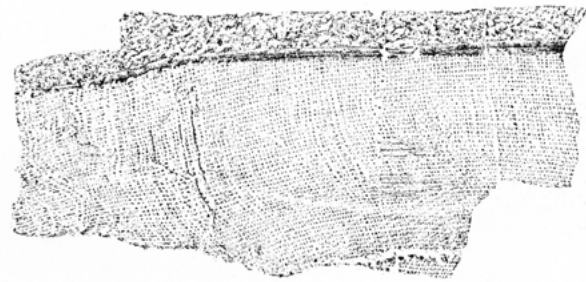
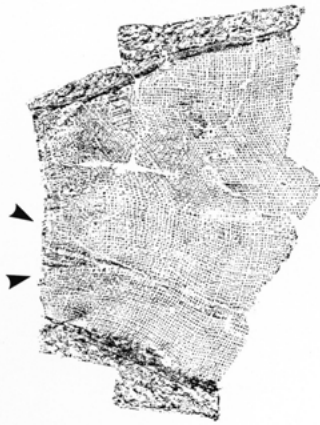
2



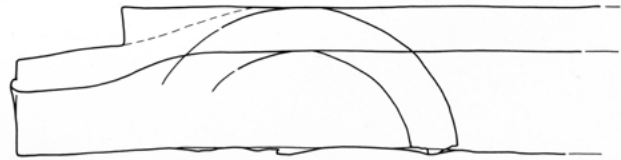


第27図 丸瓦 (KAIIa) 実測図 1:4



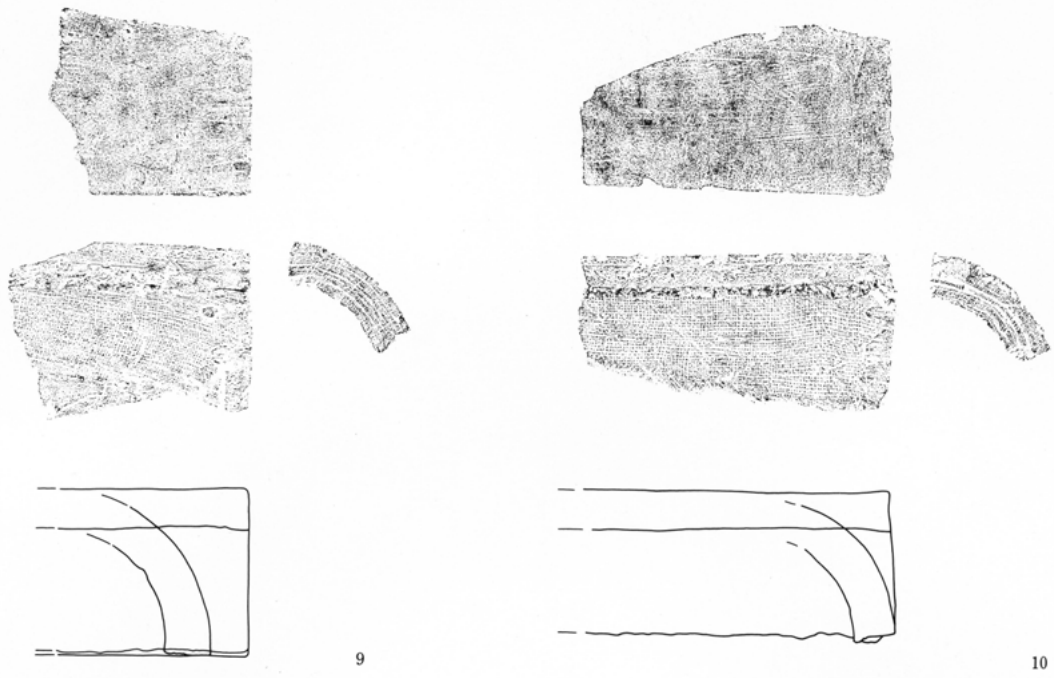


7



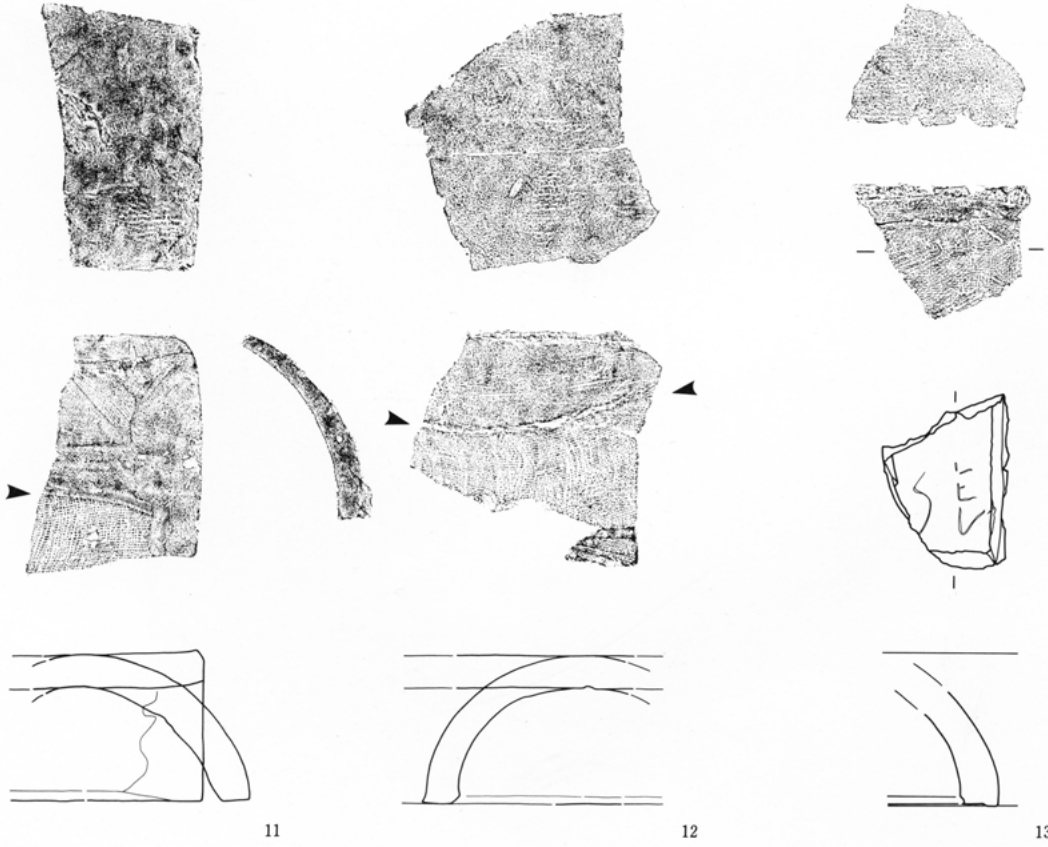
8





9

10

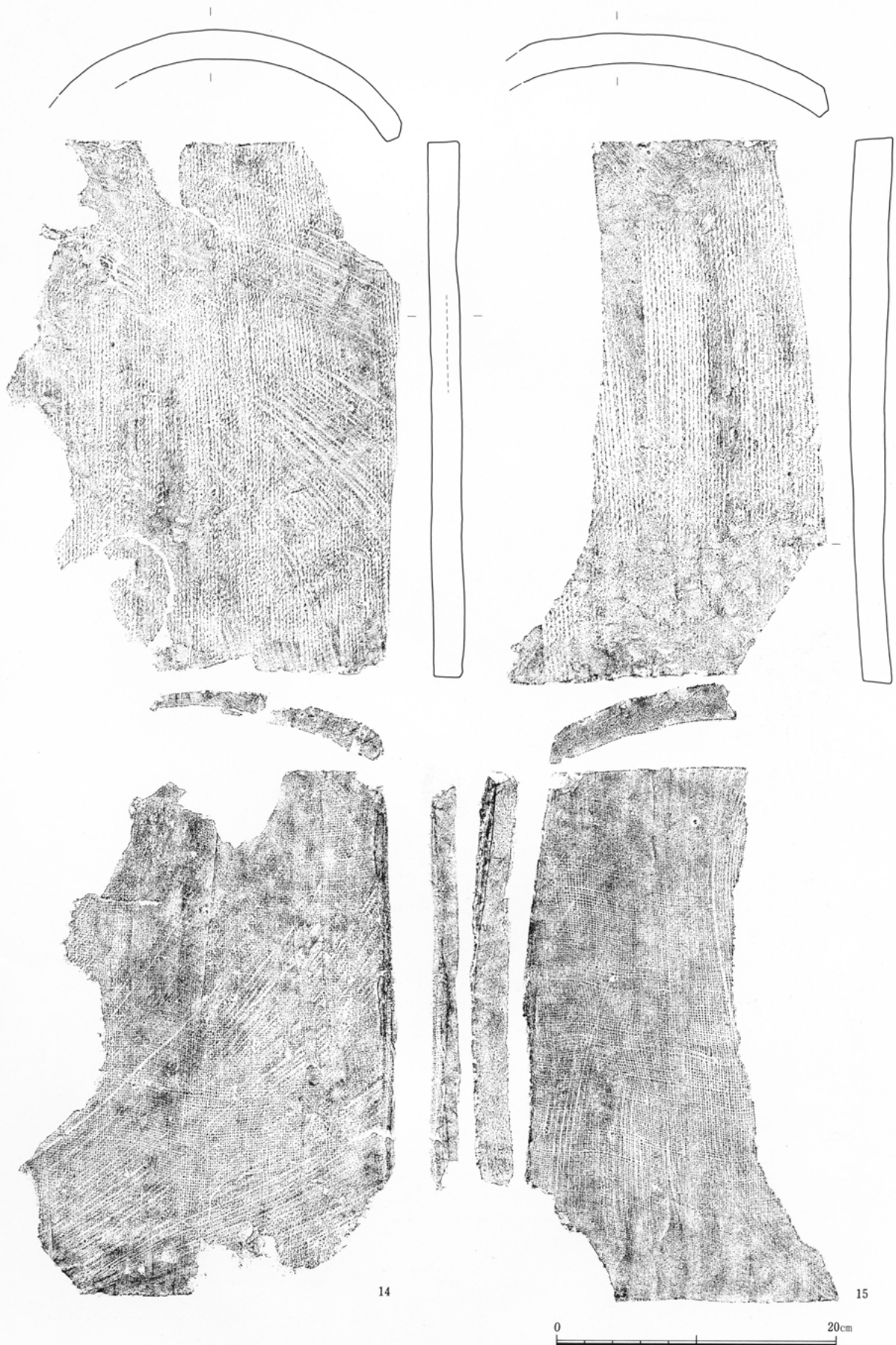


11

12

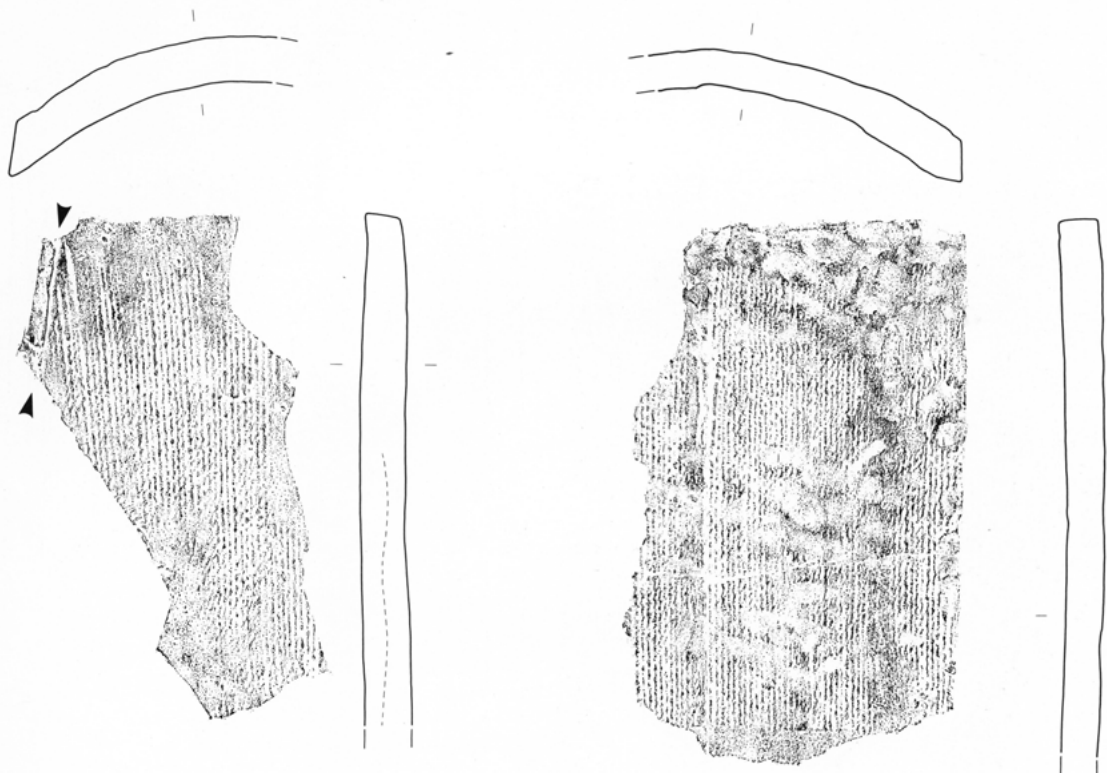
13





第31图 平瓦(KB)实测图(1) 1:4



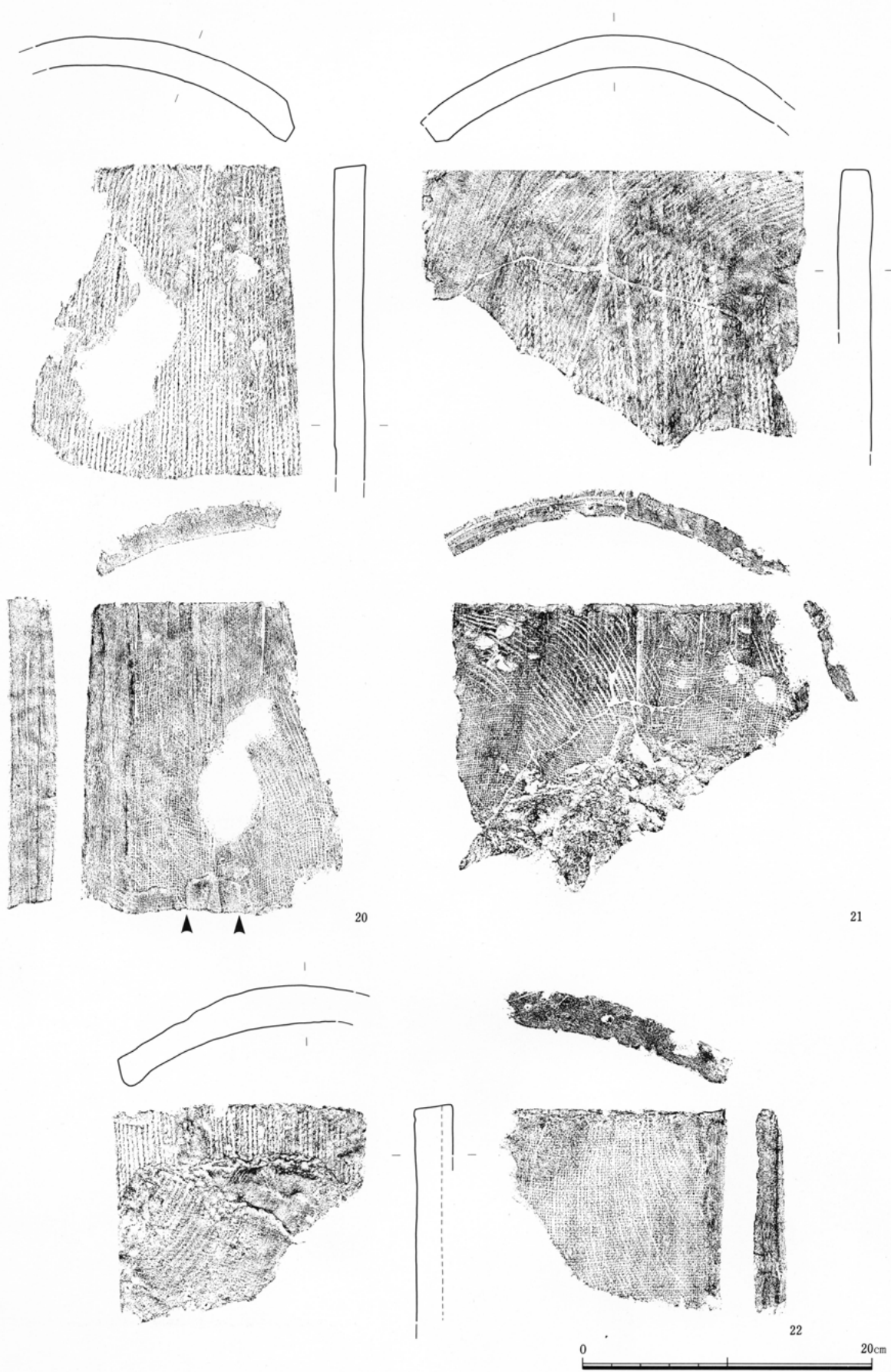


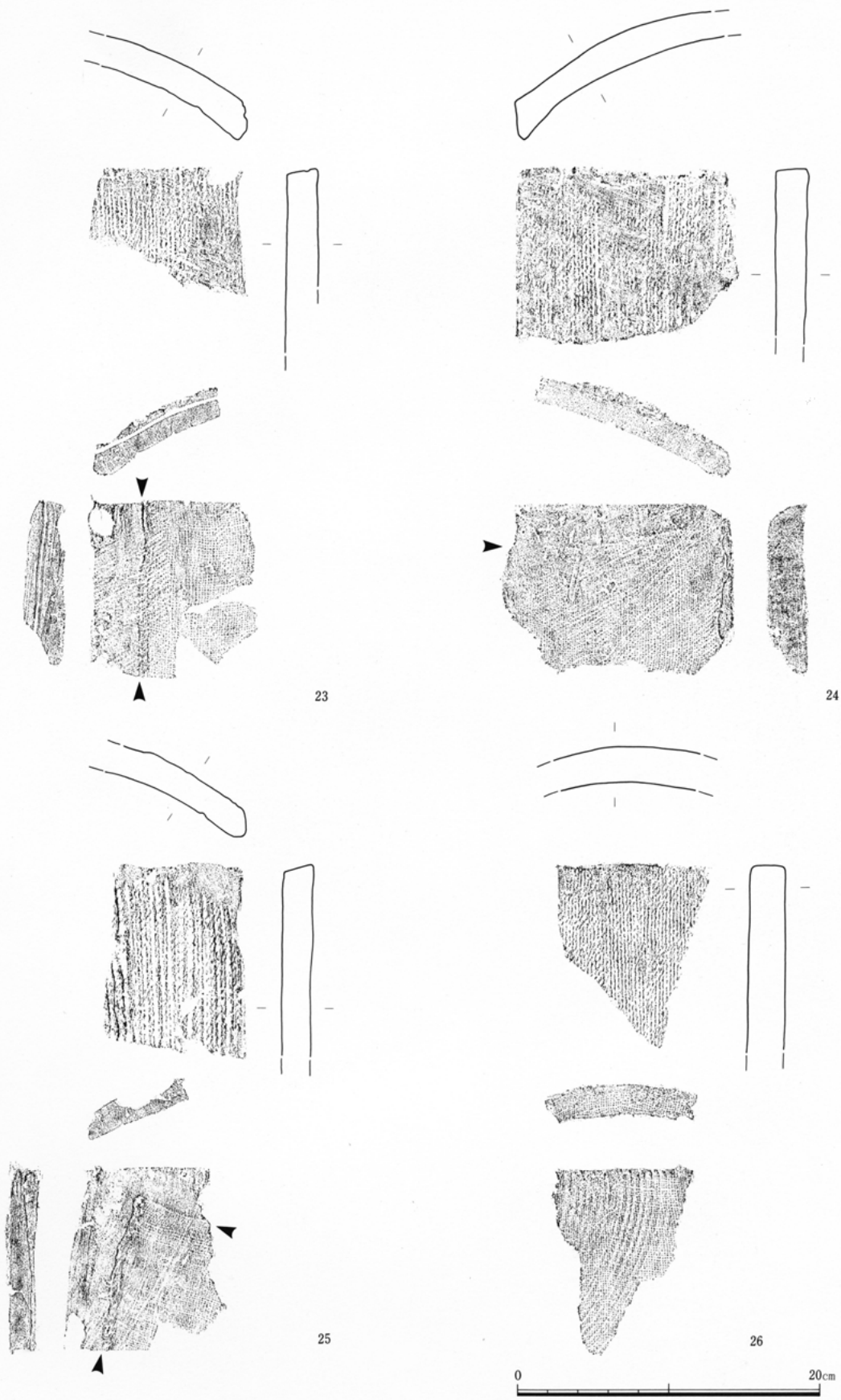
18

19

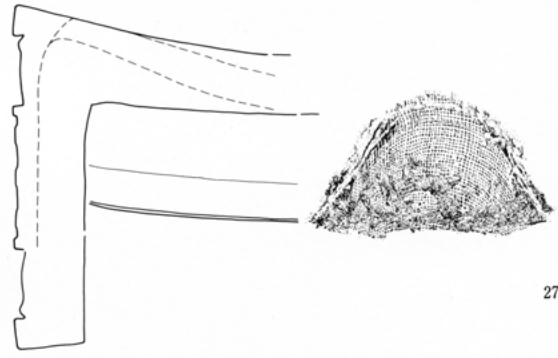
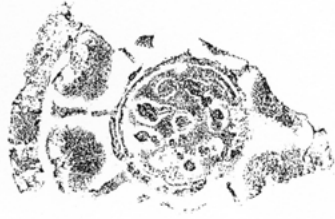


第33図 平瓦 (KB) 実測図(3) 1:4





第35図 平瓦(KB)実測図(5) 1:4



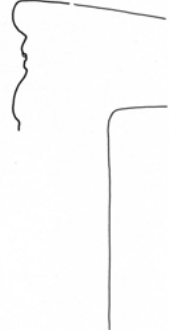
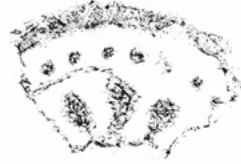
27



28



29



30



31



32



33

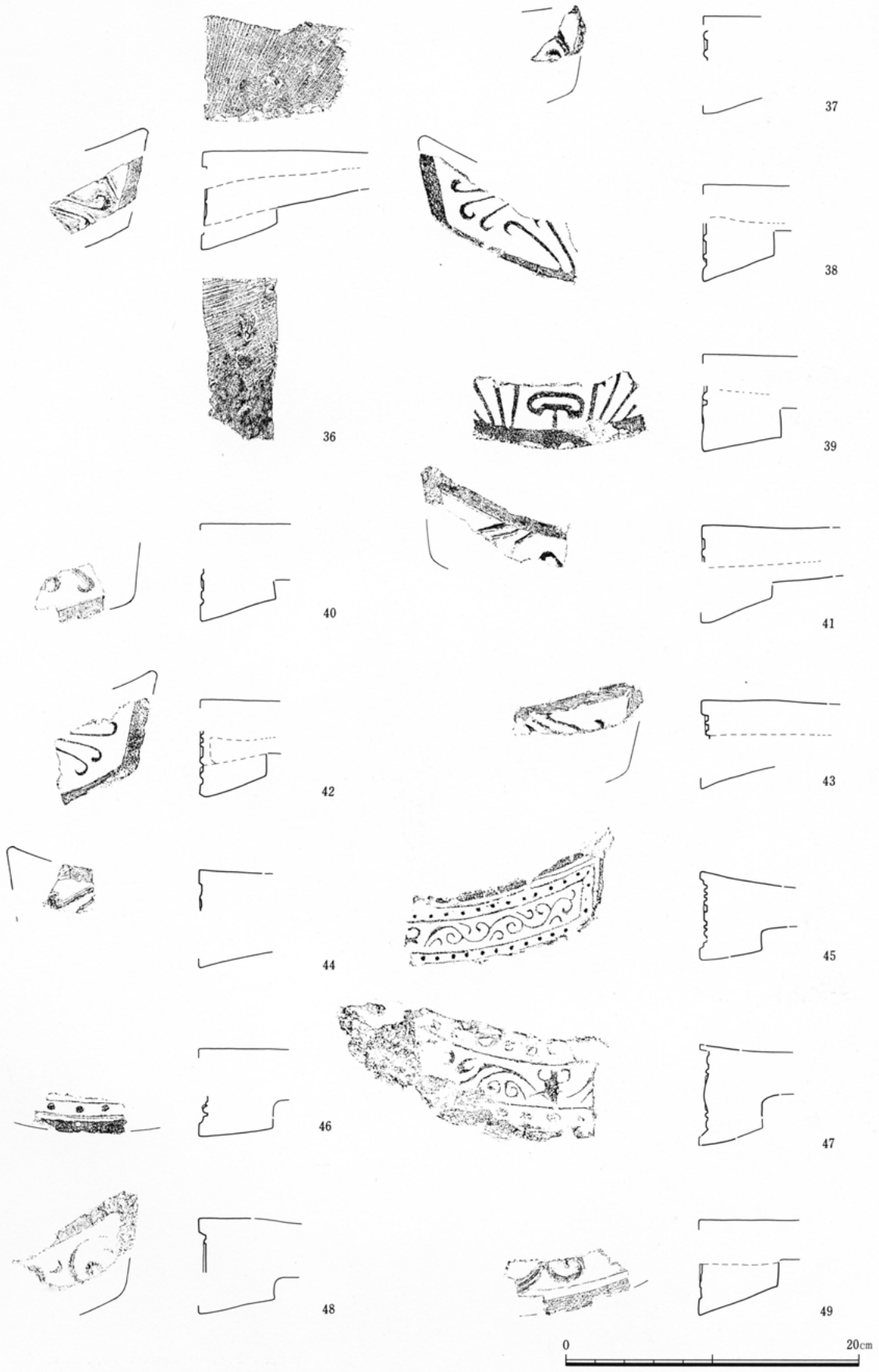


34



35

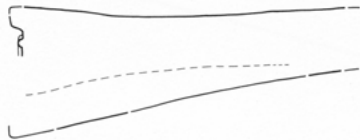




第37图 軒平瓦(KD)实测图(1) 1:4



50



51



52



53



54



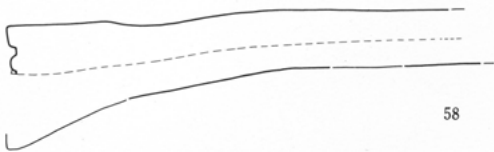
55



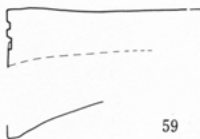
56



57

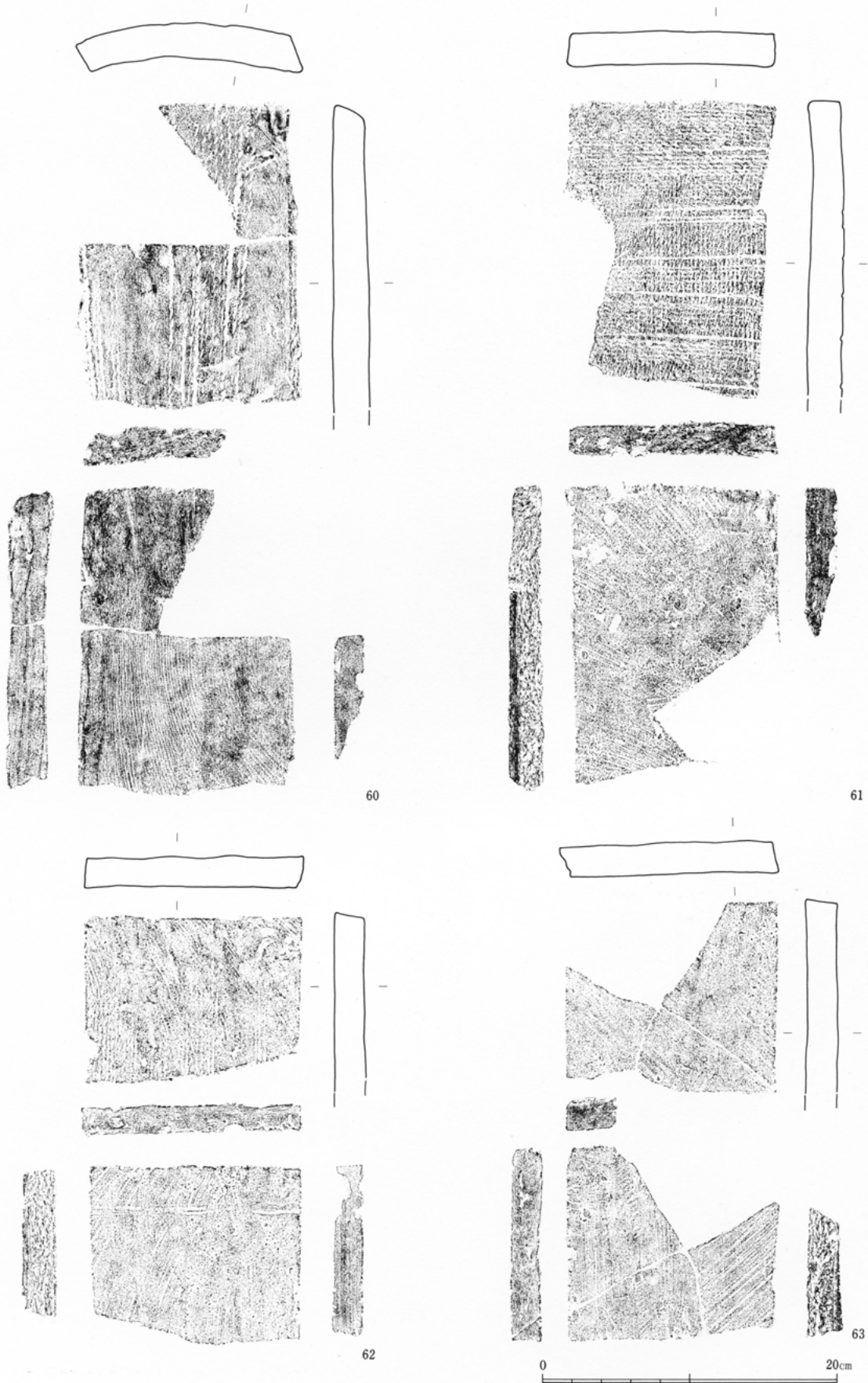


58



59





第39图 道具瓦 (KE) 实测图 1:4

第3節 土錘

出土量と出土状況

本遺跡出土の土錘は総数9点と非常にすくない。遺構からの出土は8点、その他検出段階での出土が1点である。

計測と観察（第40図、第23表）

土錘の長さ、最大径、端部径、孔径、重量について計測し、あわせて端面調整、外面調整、焼成、色調について観察した。計測値については第23表のとおりである。形態は4が他と比べてかなり小型である以外、際だった特色はなく、すべてやや細長い紡錘形である。端面の調整は、観察しえた6点すべてが、丁寧に端面調整をおこない、平坦面を作り出している。外面調整は、8以外はすべて丁寧にナデがおこなわれ、指圧痕などはみられない。8は外面の損傷のため詳しくは分からないが、調整が雑である。焼成はすべて良好で土師質である。

時期区分

遺構出土の8点を、その遺構の所属時期で分けると、B1期1点、B2期3点、B3期3点、C2期1点になる。

まとめ

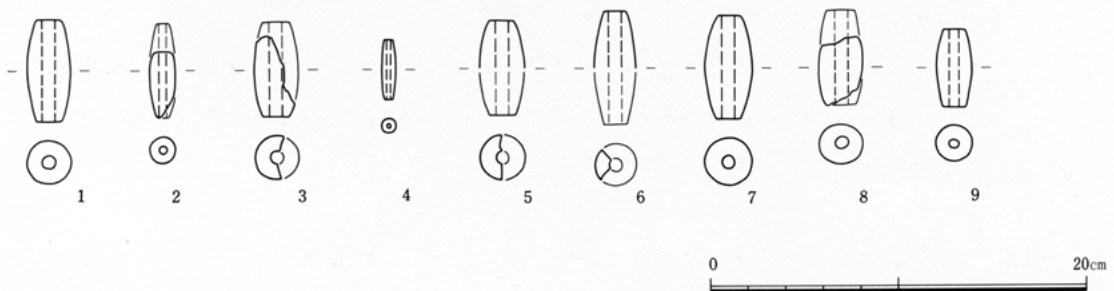
上記の時期区分によればB期（古代）に所属する土錘は端面および外面の調整が丁寧である。宮腰健司、古橋佳子氏らによる形態分類（宮腰、古橋1991）¹⁾によれば本遺跡の9例はすべて、河川で使用されたと推定される形態Cに属する。

土錘一覧表

番号	調査区	遺構	遺構時期	長さ(mm)	最大径(mm)	端部径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	端面調整	外面調整	焼成	色調	残存
1	Fa	SD78	B1	54	23	13	7	28.1	有	ナデ	土師質(良好)	にぶい黄褐色	完形
2	B	SB08	B2	50	14	(7)	4	(5.9)	*	ナデ	土師質(良好)	灰白色	2/3
3	C	SD15	B2	(50)	(23)	14	7	(14.9)	有	ナデ	土師質(良好)	にぶい黄褐色	1/2
4	C	SD30	B2	32	7	4	2	1.4	*	ナデ	土師質(良好)	にぶい褐色	ほぼ完形
5	Ea	SB05	B3	(50)	(24)	(13)	7	(7.5)	有	ナデ	土師質(良好)	灰白色	1/4
6	Ea	SB05	B3	(60)	(22)	(13)	7	(5.2)	有	ナデ	土師質(良好)	にぶい黄褐色	1/4
7	Ea	SB15	B3	55	25	12	7	31.1	有	ナデ	土師質(良好)	浅黄褐色	完形
8	Ea	SD79	C2	(50)	23	*	7	(15.0)	*	指圧痕?ナデ?	土師質(良好)	灰白色	2/3
9	H	検出*		43	19	11	5	13.7	有	ナデ	土師質(良好)	浅黄褐色	ほぼ完形

*は測定不能または不明
長さ、最大径、端部径の(値)は実測図からの復元値
重量の値は完形、ほぼ完形の資料以外(値)で記した

第23表 土錘一覧表



第40図 土錘実測図 1:4

註

1)宮腰健司・古橋佳子1991「大洲遺跡出土の土錘について」『大洲遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

第4節 加工円盤・陶丸

陶器片の破面を二次的に加工した小型の遺物（以下、加工円盤）を、材質、加工技法により分類する。分類方法は、赤塚美智代氏の分類（赤塚1987）をベースにする。¹⁾なお本調査で出土した加工円盤は陶丸2点を含めて総数93点である（第41・42図）。

- 分類
- A類：灰釉系陶器の椀、皿を素材としたもので、いずれも打製加工である。高台部を使用したA₁と、その他の部位を使用したA₂に分かれる。
- B類：椀、皿以外の灰釉系陶器を使用したもの。打製加工品。
- C類：施釉陶器を素材としたもので、打製加工のC₁、陶器破面を研磨するC₃に大別でき、その中間的な加工を施す（打ち欠いた後、若干研磨を施す）C₂の3種類がみられる。²⁾
- M類：加工円盤の範疇に含めるか否かについては問題が残るが、陶丸をM類とする。

出土量

各出土点数は、A₁類10点、A₂類6点、B類4点、C₁類32点、C₂類25点、C₃類13点、M類2点であり、C類の占める割合が高い。

計測

加工円盤の長軸（mm）、短軸（mm）、重量（g）を計測した（第25表）。

	長軸平均（mm）	短軸平均（mm）	重量平均（g）
A ₁ 類	27.1	24.1	9.0
A ₂ 類	27.6	25.2	6.1
B類	29.3	27.5	12.0
C ₁ 類	27.8	25.9	8.0
C ₂ 類	32.5	29.9	12.5
C ₃ 類	31.1	29.0	11.2
陶丸（M類）	22.0	21.5	10.6

第24表 加工円盤計測値平均一覧

出土状況

A、B、M類の出土はその大半が、包含層と後世に掘削された遺構の埋土からであり、明確に同時期の遺構に伴うものは非常に少ない。それに対し、C類の出土は同時期の遺構に伴う例がほとんどであり、特にSD14、41、SK11など明治期まで水田として利用された遺構からの出土例が合計21例で、C類の出土量の30%を占める。

時期区分

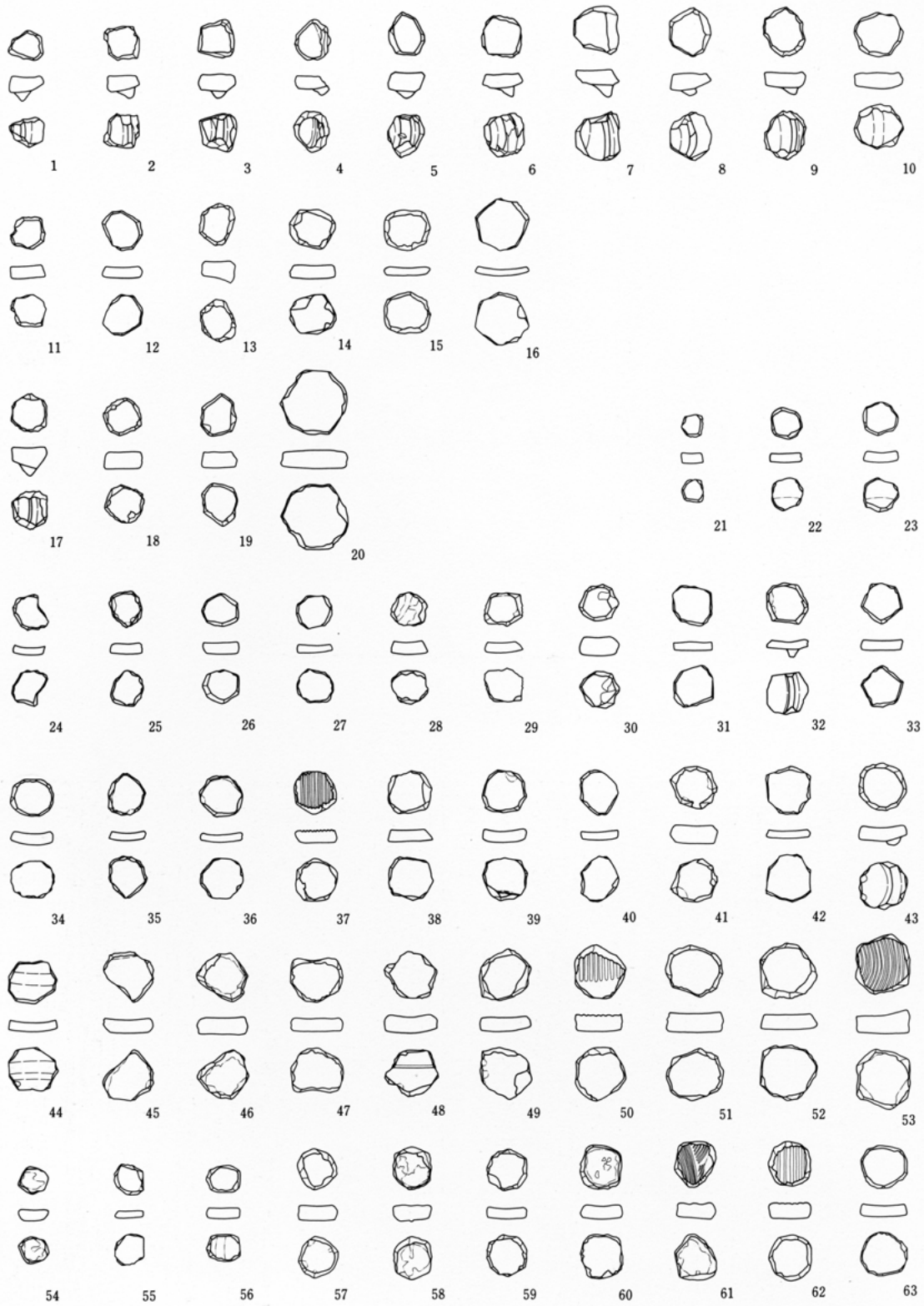
加工円盤の素材の所属時期は、A、B、M類が本遺跡の時期区分におけるC期であり、A、B類に所属する加工円盤のほとんどは南部系の灰釉系陶器でありC1期に所属するものと考えられる。C類はD期に所属する。

まとめ

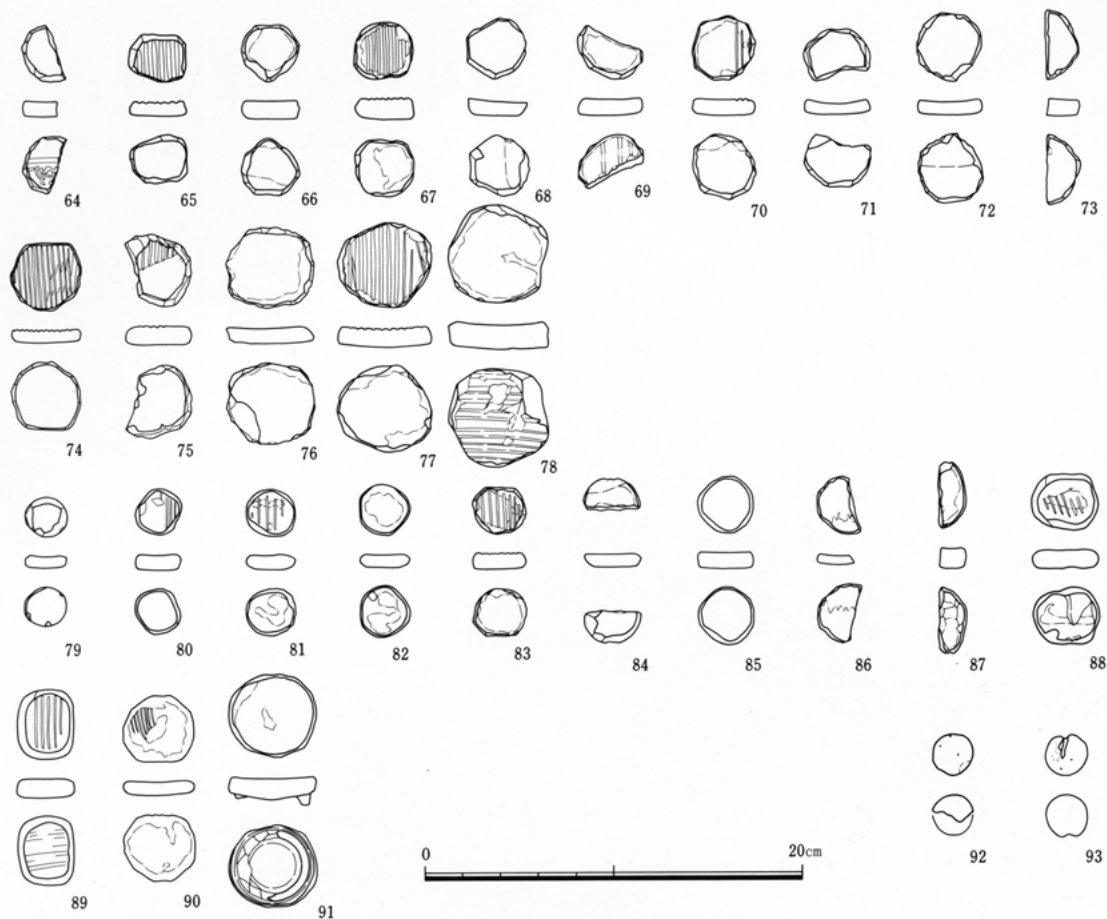
加工円盤の
変化 本遺跡の加工円盤は、C1期に出現し、C2期で一旦減少する。その後D期に再び増加するが、加工技法の変化（研磨製の出現）、大型化など以前とは異なる点が多い。

註

- 1) 赤塚美智代 1987 「加工円盤」『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集
- 2) 赤塚氏の分類ではC₂の設定はなく、打製加工品と研磨するものの2種類に分類している。



0 20cm



第42図 加工円盤実測図(2) 1:4

堀之内花ノ木遺跡 加工円盤分類表

No.	分類	長軸	短軸	重量	区	遺構	備考
1	A 1	22	19	5.0	E b	検1	南部系灰陶器 碗体部
2	A 1	22	21	7.3	E b	SD 7 4	南部系灰陶器 碗体部
3	A 1	24	23	7.5	G	SD 3 2	南部系灰陶器 碗体部
4	A 1	26	22	5.9	G	SK 2 1	南部系灰陶器 碗体部
5	A 1	27	23	9.9	C	SD 3 0 上	南部系灰陶器 碗体部
6	A 1	27	25	10.2	E a	検1	南部系灰陶器 碗体部
7	A 1	30	27	11.7	E c	SK 1 1 5	南部系灰陶器 碗体部
8	A 1	31	26	10.2	E a	SK 6 3	南部系灰陶器 碗体部
9	A 1	31	27	11.5	E b	SD 7 5	南部系灰陶器 碗体部
10	A 1	31	28	10.8	B	SD 4 1	南部系灰陶器 碗体部
11	A 2	22	20	4.7	E a	検1	南部系灰陶器 碗体部
12	A 2	25	25	5.4	C	検1	自然系灰陶器 碗体部
13	A 2	27	22	8.0	E b	検1	南部系灰陶器 碗体部
14	A 2	29	25	8.2	E b	検1	南部系灰陶器 碗体部
15	A 2	29	26	4.7	E a	SD 5 6	南部系灰陶器 碗体部
16	A 2	34	33	5.6	E a	検1	北部系灰陶器 碗体部
17	B	24	22	9.9	F a	SE 0 5	南部系灰陶器 碗体部
18	B	24	24	7.7	F a	検1	南部系灰陶器 碗体部
19	B	27	23	7.9	D a	SD 1 4	中世知多古窯 碗体部
20	B	42	41	22.5	C	SD 1 4	中世知多古窯 碗体部
21	C 1	14	14	1.9	E a	検1	鉄軸碗?
22	C 1	20	19	3.0	E b	検1	近世灰陶器?
23	C 1	22	21	4.1	E c	検1	近世灰陶器?
24	C 1	22	22	3.1	H	SD 11 4 上	一部欠損、近世灰陶器?
25	C 1	23	20	3.8	E a	検1	鉄軸碗?
26	C 1	23	21	4.3	E b	SD 7 3	近世陶器火入れ?
27	C 1	23	21	3.4	E a	検1	近世灰陶器?
28	C 1	23	21	5.4	C	SD 1 4	近世灰陶器?
29	C 1	24	21	4.5	E a	検1	近世灰陶器?
30	C 1	24	23	7.7	E b	検1	古瀬戸鉢?
31	C 1	26	25	5.2	C	SK 4 1	鉄軸碗?
32	C 1	26	26	6.3	E a	SK 6 5	近世灰陶器?
33	C 1	26	26	5.3	D a	SD 1 4	近世灰陶器?
34	C 1	27	23	6.4	H	SD 1 1 4	近世灰陶器?
35	C 1	27	24	4.2	D a	SD 1 4	近世灰陶器?
36	C 1	27	26	4.5	C	SD 3 7	鉄軸・摺鉢?
37	C 1	27	27	7.1	E c	検1	鉄軸・摺鉢?
38	C 1	28	27	7.8	C	D 1 4	近世灰陶器?
39	C 1	28	27	8.0	C	D 7 3	近世灰陶器?
40	C 1	29	24	5.2	E b	SD 1 4	鉄軸碗?
41	C 1	30	27	12.1	C	SK 1 1	鉄軸碗?
42	C 1	30	28	6.2	E b	SD 1 4	近世灰陶器?
43	C 1	30	30	11.8	C	SD 1 4	高台部、鉄軸碗?
44	C 1	31	27	7.5	C	検1	鉄軸碗?
45	C 1	32	31	11.5	E a	検1	鉄軸碗?
46	C 1	32	31	9.7	E a	検1	一部欠損、鉄軸碗?
47	C 1	33	28	10.2	E b	検1	一部欠損、鉄軸碗?
48	C 1	33	30	11.6	C	SD 1 4	鉄軸鉢?
49	C 1	33	32	10.7	C	SK 4 1	鉄軸鉢?
50	C 1	34	32	13.3	E c	検1	鉄軸摺鉢?
51	C 1	36	33	19.6	E c	検1	鉄軸摺鉢?
52	C 1	36	35	17.3	D a	SD 1 4	鉄軸汁火鉢?
53	C 1	38	34	22.3	E c	SD 1 4 西のり面	鉄軸鉢?
54	C 2	19	17	2.6	B	SD 4 1	鉄軸鉢?
55	C 2	21	19	1.9	E a	検1	一部欠損、鉄軸碗?
56	C 2	21	17	3.6	B	SD 4 1	鉄軸鉢?
57	C 2	26	25	7.3	E b	SD 7 3	鉄軸半肩裏?
58	C 2	27	24	7.3	E c	検1	鉄軸鉢?
59	C 2	28	26	6.1	E c	検1	鉄軸鉢?
60	C 2	28	27	8.3	C	SD 1 4	鉄軸鉢?
61	C 2	29	26	8.8	E b	検1	鉄軸摺鉢?
62	C 2	29	27	10.0	E a	SD 6 5	鉄軸鉢?
63	C 2	29	27	8.4	E c	検1	近世灰陶器お鉢?
64	C 2	30	6.0	A	SK 0 1	半分欠損、近世緑釉・鉄軸陶	
65	C 2	30	25	7.9	E b	SD 5 9	鉄軸鉢?
66	C 2	31	30	11.3	E a	検1	鉄軸鉢?
67	C 2	31	30	13.1	E b	検1	鉄軸摺鉢?
68	C 2	32	31	10.3	E b	SD 7 3	鉄軸火入れ?
69	C 2	34	8.5	B	ベルコン	半分欠損、鉄軸碗?	
70	C 2	34	33	12.8	E b	SD 7 3	鉄軸摺鉢?
71	C 2	35	9.2	A	表土	一部欠損、近世灰陶・鉄軸陶	
72	C 2	36	34	11.8	E c	SD 4 7 上	近世灰陶お鉢?
73	C 2	37	7.7	D a	SD 1 4	半分欠損、鉄軸碗?	
74	C 2	37	36	13.4	E a	検1	鉄軸摺鉢?
75	C 2	39	35	15.2	G	表土	一部欠損、鉄軸摺鉢
76	C 2	46	43	21.1	D a	SD 1 4	鉄軸鉢?
77	C 2	50	45	28.7	E b	SD 7 3	鉄軸摺鉢?
78	C 2	53	52	44.7	H	検1	鉄軸鉢?
79	C 3	22	21	3.3	E b	SD 7 4	近世灰陶器?
80	C 3	24	24	6.4	C	SD 1 4	鉄軸摺鉢?
81	C 3	26	25	6.2	B	SD 4 1	鉄軸摺鉢?
82	C 3	27	27	5.8	E a	検1	鉄軸摺鉢?
83	C 3	28	25	7.4	B	SD 4 1	鉄軸摺鉢?
84	C 3	30	4.2	E a	SD 7 3	鉄軸鉢?	
85	C 3	30	29	10.6	E b	SD 7 3	鉄軸火入れ、鉄軸鉢?
86	C 3	31	3.9	E a	検1	半分欠損、鉄軸碗?	
87	C 3	35	6.7	C	SD 1 4	半分白欠損、近世灰陶器?	
88	C 3	37	30	14.1	G	SK 2 1	鉄軸摺鉢?
89	C 3	37	30	15.1	G	SK 0 1	鉄軸摺鉢?
90	C 3	37	35	10.7	A	SK 0 1	鉄軸摺鉢?
91	C 3	46	32.0	C	SD 1 4	高台部、近世灰陶器?	
92	M	22	21	5.4	E b	検1	5分欠損陶丸
93	M	22	22	10.6	E c	検1	陶丸

長軸 (mm)、短軸 (mm)、重量 (g) の単位で計測した
 欠損した資料も重量はそのまま計測した
 備考には遠藤才文氏に御教示をうけて素材器種を可能な限り推定した

第25表 加工円盤観察表

第4章 自然科学的分析

第1節 重鉍物胎土分析

1. はじめに

堀之内花ノ木遺跡より出土した受け口甕・く字甕・S字甕などの弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての試料、尾張国分寺関連の瓦、および土師器甕の奈良時代～平安時代にかけての試料の重鉍物胎土分析を榎パリノサーヴェイに委託し実施した。本報告はこの報告書をもとに筆者が一部改変したものである。

2. 分析の目的

本分析に用いた試料のうち弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのものは、尾張地域北部に位置する山中遺跡および堀之内花ノ木遺跡と尾張地域中北部に位置する岩倉城遺跡、尾張地域中部に位置する廻間遺跡の各遺跡から出土した土器である。これらの試料は、考古学上特に注目されているS字状口縁台付甕と同時期に存在した他の形態の口縁を持つ土器であり、口縁の形態分類と胎土との比較を中心に分析・考察を行う。

また、奈良時代～平安時代にかけての尾張国分寺関連の瓦および土師器甕に関する試料は、堀之内花ノ木遺跡より出土した瓦と、本遺跡および清洲城下町・名古屋城三の丸の各遺跡から出土した9世紀の土師器甕の試料である。瓦分析では、瓦の時期差と胎土との関係や軒瓦と他の瓦との胎土の違いを、また土師器試料では、尾張地域産を示すと考えられる輝石型の胎土の有無を検証し、さらに出土遺跡による胎土の差を調べた。この分析は愛知県における古代土器類の製作・流通状況を考察する際の基礎試料になり得るものと考えられる。

2. 試料

分析試料 本分析では、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての試料としては以下のものを用いた。一宮市山中遺跡の試料（受け口甕4点：試料番号1～4）、岩倉市岩倉城遺跡（受け口系甕2点：試料番号5・6、および鉢・く字甕・受け口甕の各1点：試料番号7・8・9）、堀之内花ノ木遺跡の試料（受け口甕2点：試料番号10・20、く字甕9点：試料番号11・12・15・16・21・22・23・25・26・29、S字甕1点：試料番号24、受け口系？甕1点：試料番号30、受け口系甕1点：試料番号33、さらに分類されていない鉢4点：試料番号13・14・27・28、甕3点：試料番号17～19）、清洲町廻間遺跡の試料（く字鉢1点：試料番号

34、く字甕 2 点：試料番号43～45・47・48、S字A古類甕 3 点：試料番号50～52) の合計5 2点である。

瓦試料は、堀之内花ノ木遺跡より出土した瓦42点（試料番号1～42）と、比較試料とした佐織町淵高庵寺出土瓦 2 点（試料番号62・63）および甚目寺町法性寺遺跡出土瓦 2 点（試料番号64・65）の合計46点であり、瓦の器種には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の各種がある。堀之内花ノ木遺跡から出土した瓦試料のうち、出土地点S D13の所属時期は 8 世紀後半とされ、S E03は 9 世紀末とされている。

土師器試料はすべて甕であり、9 世紀のものとされている。内訳は、堀之内花ノ木遺跡出土 8 点（試料番号43～50）、清洲城下町遺跡出土 5 点（試料番号51～55）、名古屋城三の丸遺跡出土 6 点（試料番号56～61）で、合計20点である。

3. 分析方法

これまで本センターの胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の指標としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

分析方法 土器片約10～15gを鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物および軽鉱物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落斜光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉱物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに主な産出鉱物を呈示するとどめた。

4. 分析結果

(1) 弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての試料

a) 山中遺跡

試料番号 1 は、斜方輝石が多く少量の単斜輝石、角閃石、ジルコン、不透明鉱物を伴う。これに対し、試料番号 3 と 4 は、不透明鉱物が多い組成を示す。ただし、不透明鉱物の次に多い鉱物は、試料番号 3 では斜方輝石であるが、試料番号 4 では単斜輝石である。試料番号 2 のみ同定粒数100個以上を数えることができなかった。

b) 岩倉城遺跡

試料番号 5 は、斜方輝石が多く、少量の単斜輝石と不透明鉱物を伴う。これに対し、試

料番号6と7は、「その他」が非常に多く、それを除くと不透明鉱物の多い組成を示す。どちらも微量～少量の斜方輝石、角閃石、ジルコンを含む。試料番号8と9の2点は、定粒数100個以上を数えることができなかった。

c) 堀之内花ノ木遺跡

同定粒数100個以上を数えることができた試料は、24点中9点しかなかった。その9点のうち、試料番号12、18、30、32の4点は、いずれも「その他」が非常に多く、「その他」を除くと斜方輝石と不透明鉱物が比較的多く、さらに単斜輝石と角閃石を微量伴うことで共通する。試料番号17は、斜方輝石と単斜輝石それに不透明鉱物を主体とする組成である。試料番号26は、不透明鉱物が最も多く、これに少量の斜方輝石と角閃石を伴う。試料番号31は、斜方輝石を主体とする組成で、少量の不透明鉱物と単斜輝石を伴う。これらの試料に対して、試料番号10は、角閃石を主体とする組成を示し、試料番号24は角閃石とザクロ石を主体とする組成を示す。また、同定粒数が100個未満の試料中のほとんどに斜方輝石が含まれる。

d) 廻間遺跡

試料番号34～42までと試料番号43以下の組成とは明らかに区別することができる。前者は、どれも斜方輝石と単斜輝石、ジルコン、不透明鉱物を含むことで共通する。その中で試料番号34、35、37、38では「その他」が非常に多く、上記の4鉱物はいずれも少量である。また、試料番号40と42では斜方輝石が多く、他の3鉱物を少量含むという組成である。試料番号36、39、41の3点は同定粒数が100個未満であった。このうち試料番号39と41には斜方輝石が含まれる。試料番号43～52のうち同定粒数100個以上を数えたものは、試料番号43、44、47、48、50、51の6点であった。これらはどれも角閃石とザクロ石を主体とする組成である。これらのうち、試料番号43と44はザクロ石が非常に多く、試料番号47はザクロ石の方がやや多い。また、試料番号48と51は角閃石とザクロ石の量比がほぼ同程度を示す。試料番号50は、角閃石とザクロ石に加えて少量の褐色の黒雲母を含むことが特徴である。同定粒数100個未満の試料のうち、試料番号45と52にはザクロ石が特に多く含まれるが、試料番号46と49ではザクロ石は認められず、斜方輝石試料が多く含まれる傾向がうかがえる。

以上の各遺跡の各試料の分析結果は第26表、第43図に示す。

(2) 瓦試料

a) 軒瓦

同定粒数100個以上を数えた試料は、試料番号6の1点のみである。その組成は「その他」が最も多いが、それを除けば斜方輝石と単斜輝石が多く少量のジルコンが含まれるというものである。同定粒数100個未満の他の試料も、重鉱物の全く得られなかった試料番

号9と10を除けば、全てが斜方輝石を主な鉱物として含む。また、試料番号11と12にはジルコンも認められる。さらに、試料番号1では、カンラン石が、試料番号16では角閃石が主な鉱物として示される。

b) 丸瓦・平瓦

1) S E 03 出土平瓦

後述する他の試料に比べて「その他」が多い。これを除けば、全体的に斜方輝石が多いが、角閃石の比較的多い試料（試料番号20）やジルコンおよび不透明鉱物の比較的多い試料（試料番号23）もある。

2) S E 03出土丸瓦

試料番号24のみ同定粒数100個未満であった。この試料の主な鉱物は、斜方輝石とジルコンである。他の4点の試料のうち試料番号25を除く3点は、斜方輝石を主体とする組成を示し、少量の単斜輝石と角閃石を伴う。試料番号25は「その他」が多く、それを除けば斜方輝石・角閃石・ジルコンを少量含むという組成である。

3) S D 13出土平瓦

全体的に斜方輝石を主体とし、少量の角閃石または酸化角閃石を伴う組成を示す。ただし、試料番号29および33は角閃石を比較的多く含む。特に試料番号33は、斜方輝石とほぼ同量程度の角閃石を比較的多く含むことで、今回の瓦試料全体の中でも注目される。

4) S D 13出土丸瓦

5点の試料とも斜方輝石を主体とし、少量の単斜輝石と角閃石を伴うという組成を示す。

5) S B 02出土平瓦

4点の試料とも斜方輝石を主体とし、少量の単斜輝石と角閃石を伴うという組成を示す。

c) 淵高廃寺

試料番号62は同定粒数100個未満である。含まれる主な鉱物は斜方輝石である。試料番号63は斜方輝石を主体とし、少量の単斜輝石と角閃石を含む。

d) 法性寺遺跡

2点の試料とも「その他」が非常に多いことは共通するが、それを除いた鉱物組成は若干の違いを示す。試料番号64では角閃石とジルコンであり、試料番号65では斜方輝石と角閃石が多く、少量の単斜輝石と微量のジルコンを含む。

(3) 土師器試料

a) 堀之内花ノ木遺跡

8点の試料のうち同定粒数100個以上を数えることができたのは、試料番号47、48、50の

3点のみである。これらの3点はそれぞれ異なる組成を示す。試料番号47は斜方輝石・角閃石・不透明鉱物の3鉱物を主体とし、微量の単斜輝石・ジルコン・ザクロ石を伴う。試料番号48は、角閃石を主体とし、少量の斜方輝石・ジルコン・不透明鉱物を伴う。試料番号50は、斜方輝石を主体とし、少量の単斜輝石を伴う組成である。同定粒数100個未満の試料では、試料番号43、46、49が角閃石を主な鉱物とするが、試料番号44は斜方輝石とジルコン、試料番号45は斜方輝石と角閃石である。

b) 清洲城下町遺跡

5点のうち同定粒数100個以上を数えることができたのは試料番号52の1点だけである。斜方輝石が最も多いが、不透明鉱物とザクロ石も比較的多く含み、他に少量の単斜輝石・角閃石・緑レン石を含む。同定粒数100個未満の試料では、試料番号51は斜方輝石を主な鉱物とするが、他の試料では試料番号53が酸化角閃石と緑レン石、試料番号54、55は角閃石である。

c) 名古屋城三の丸遺跡

6点の試料のうち同定粒数100個以上を数えることができたのは、試料番号59の1点だけである。斜方輝石が最も多く、少量の単斜輝石と角閃石を含む。同定粒数100個未満の試料では試料番号56は緑レン石を主な鉱物とし、試料番号58では角閃石、試料番号60では斜方輝石と角閃石、試料番号61では斜方輝石をそれぞれ主な鉱物とする。

以上の分析結果および各試料の出土地点・部位を第27表、第44～46図に示す。

5. 考察

(1) 弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての試料について

上記の結果の記載に口縁の形態を重ねると、非常に明瞭な対応関係を認めることができる。特に、S字状口縁台付甕の胎土については、いずれも『山中遺跡』で報告したS字状口縁台付甕の特徴を示している。その中で堀之内花ノ木遺跡の試料番号24と廻間遺跡の試料番号48、58は、ザクロ石が中量含まれる2番目の種類に相当し、試料番号43、44および47はザクロ石の多い組成に相当する。試料番号50の黒雲母は、『山中遺跡』で述べたような角閃石との区別が困難なものではなく、これは、黒雲母として間違いのないものである。したがって、試料番号50の胎土は、これまでの分析例の中ではやや珍しいものといえる。しかし、大略的にみれば、本分析の結果も『山中遺跡』で述べたことをさらに補強するものと考えられる。なお、S字状口縁台付甕のO類とA類の違いは、胎土では余りに明瞭ではない。上記の試料番号50はA類であるが、これがA類特有のものであることを判断するためには点数的な検証が必要である。

「両輝石型」 一方、S字状口縁台付甕以外の土器の胎土については、『山中遺跡』報告において「両輝石型」あるいは両輝石と角閃石および不透明鉱物の混在する組成であることを述べた。この傾向は、本分析においても変わらない。ただし、本分析の受け口甕の試料番号10の組成は、これまでの受け口やく字の土器の胎土に見ることのなかったものである。この試料の存在から、S字状口縁台付甕以外の土器の中にも例外的といえる胎土の違うものがあることがわかる。なお、受け口甕および受け口系甕と、く字甕の中で胎土の分類を見いだすことはできない。つまり、同じ形態の口縁の中でも胎土にはばらつきがあり、同時に異なった口縁の間でも類似した胎土が認められるのである。

これまでの愛知県下の胎土分析から、「両輝石型」の胎土の土器は、尾張地域特有のものであることが指摘され、それは、尾張地域で製作された可能性を表すとも考えた。したがって、尾張地域の遺跡から出土したS字状口縁台付甕以外の土器の多くが「両輝石型」あるいはそれに近い胎土のものばかりであることは、これらの土器の製作地は尾張地域である可能性が高い。本分析により、その可能性がさらに高くなったと考えられる。その中で、試料番号10のような例外の存在は、今後の展開を考える上で注目すべきであろう。すなわち、S字状口縁台付甕の土器胎土の中にも受け口甕やく字甕の土器と同じ胎土の「両輝石型」が存在すること、受け口甕やく字甕の土器の中にはS字状口縁台付甕の土器胎土に多くみられる角閃石とザクロ石を主体とする組成が全くないこと、そして受け口甕の土器胎土の中にも「両輝石型」とは異質の角閃石を主体とする胎土が存在することなど、口縁と胎土との関係はそれぞれの土器に特有の製作、流通事情があったことを示唆していると考えられるからである。さらにそれは、当時の文化や社会的背景の一端を反映している可能性を持つ。今後もS字状口縁台付甕とその他の口縁の土器に絞った分析を進めることと、胎土とは別の面からの研究も同時に進めることが必要であろう。

(2) 瓦試料について

斜方輝石
「輝石型」

今回の堀之内花ノ木遺跡の平瓦および丸瓦試料の全ては、斜方輝石を主体とするいわゆる「輝石型」の胎土であることから尾張地域産である可能性が高い。また、軒瓦にしても重鉱物の得られなかった試料を除く全ての試料が斜方輝石を主な鉱物とする。すなわち、ある特定の種類の瓦が三河地域をはじめとする他の地域から搬入されたというような大きな動きは感じられない。しかし、より詳細にみれば分析結果の項で記載したように、出土地点および種類ごとに次のような胎土の傾向を示すことができる。

- a) SE03平瓦：「輝石型」であるが「その他」が多い。
- b) SE03丸瓦：「輝石型」の胎土に「その他」の多い胎土が混在する。
- c) SE13平瓦：「輝石型」の胎土であるが、角閃石が他の試料に比べて目立つ。
- d) SE13丸瓦：典型的な「輝石型」である。
- e) SE02平瓦：典型的な「輝石型」である。

以上のことから、同じ尾張国分寺に使用された瓦の中でも、時期や種類によって胎土には若干の違いがあったといえる。ただしその変化は、尾張地域を越えて他地域まで関わるようなものではなかったと考えられる。

また、淵高廃寺の瓦も2点ともが「輝石型」の胎土であると考えられることから、これも尾張地域内で作られた可能性が高い。ただし、尾張国分寺の瓦と直接に関係があったかどうかは現段階では判断できない。一方、法性寺の瓦では試料番号65が尾張国分寺の瓦の「その他」の多い胎土に類似するが、試料番号64は「その他」が多いものの「輝石型」に近いとはいえない。法性寺の瓦の中には、尾張地域以外から搬入されたものも混在する可能性がある。

(3) 土師器試料について

分析結果で述べたように堀之内花ノ木・清洲城下町・名古屋城三の丸の各遺跡において胎土が一樣であるということはない。また、尾張地域産の指標となっている斜方輝石に注目すれば各遺跡とも斜方輝石を多く含むか、あるいは主な鉱物としている試料がほぼ半数尾張地域産ぐらい混在するといえる。後述する試料番号47と52を除いた試料は、尾張地域産である可能性が強い。

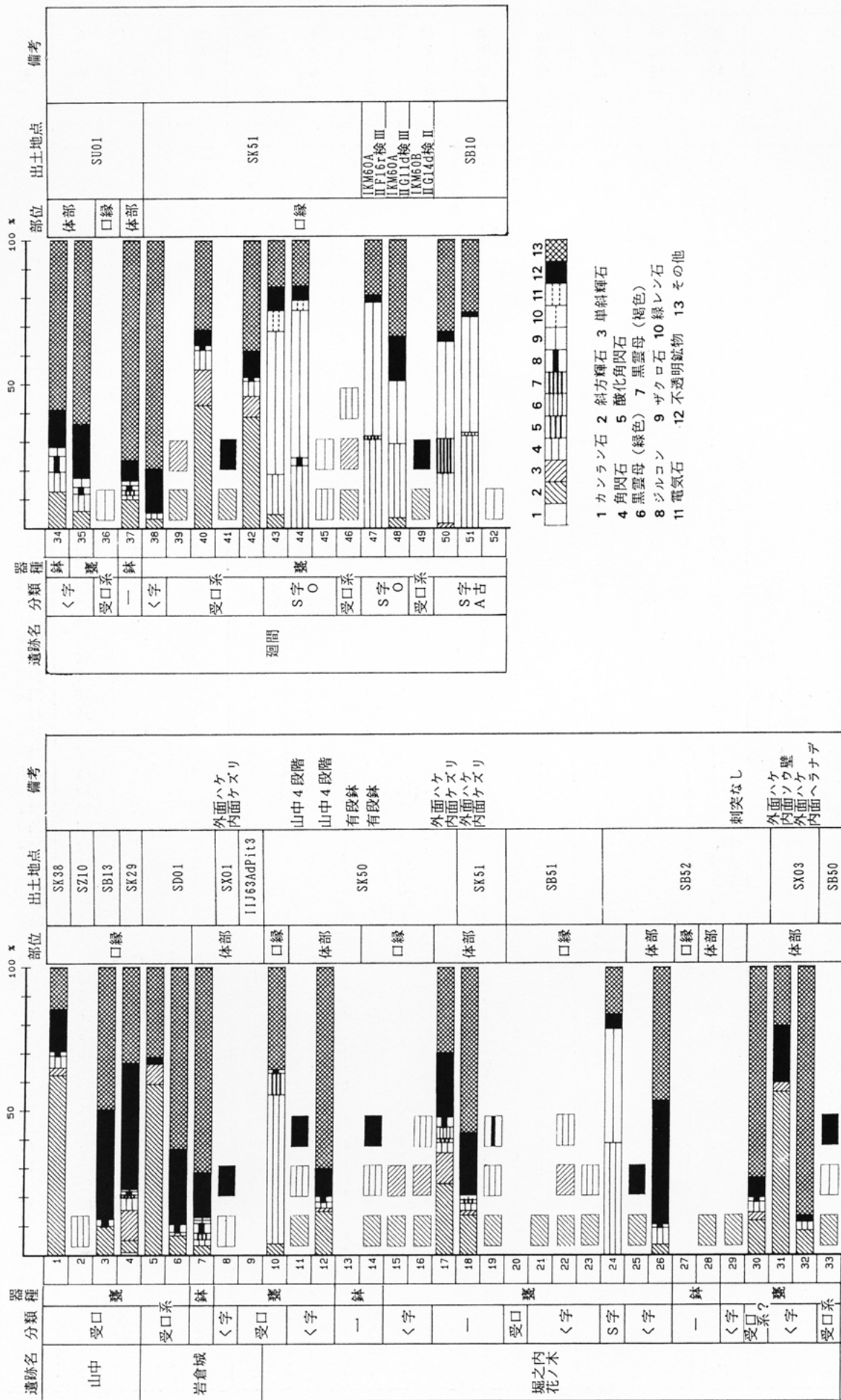
試料番号47と52については、これまで尾張地域産としてきた「輝石型」とはやや異質な要素を認めることができる。特に、試料番号47は角閃石が多く、またジルコン、ザクロ石を含む。これまでの分析から角閃石を主体とし少量のジルコン、ザクロ石を含む組成は、西三河型 西三河地域に多く認められることから「西三河型」という胎土を設定した。試料番号47の胎土は、いわば「輝石型」と「西三河型」の混合型ともいえる組成である。これまでの分析ではこのような胎土は認められていない。(それだからこそ両型を設定できた。)今後同様な例の出現を待って検討したい。

一方、試料番号52は、ザクロ石と緑レン石が注目される。両者とも少量ではあるが「輝石型」にはほとんど入ってこなかった鉱物である。これまでの分析例では、矢作川下流の志貴野遺跡から出土した奈良時代の土師器甕にザクロ石が多く含まれる傾向があり、さらに豊橋市の森岡遺跡から出土した6～7世紀の土師器に緑レン石が量は多くないが含まれる傾向が認められている。

斜方輝石の少ないあるいは斜方輝石を主な鉱物としない約半数の試料については、尾張以外の地域で作られた可能性があり、試料のほとんどが尾張地域産と考えられた本分析の瓦とは状況の違うことが注目される。

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑色黒雲母	褐色黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	同定粒数
1	0	73	3	5	0	0	0	2	0	0	0	0	17	17	117
2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3
3	0	12	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	45	58	119
4	1	4	10	4	0	0	1	1	1	0	0	0	42	32	96
5	0	148	18	1	0	0	0	0	1	0	0	0	6	76	250
6	0	17	1	3	0	0	0	7	2	0	0	0	65	155	250
7	0	6	0	4	4	0	0	6	2	2	0	0	28	130	182
8	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	4
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
10	0	10	2	129	19	0	0	3	0	0	0	0	1	86	250
11	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	12
12	0	38	3	4	1	0	0	5	2	0	0	0	24	173	250
13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
14	0	6	0	4	0	0	0	0	1	0	0	0	28	12	51
15	0	7	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	20
16	0	5	2	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4	17
17	2	62	27	9	3	9	1	9	0	0	0	0	56	72	250
18	0	35	4	6	3	0	1	1	0	4	0	0	54	142	250
19	0	11	2	9	4	0	0	9	3	0	0	1	3	46	88
20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21	0	8	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	26	36
22	0	2	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	13
23	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	8
24	0	1	1	77	0	0	0	0	78	0	0	0	10	30	197
25	0	13	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6	4	26
26	0	6	0	8	1	0	0	2	0	0	0	0	67	73	157
27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
28	0	9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	17	30
29	0	22	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6	30	61
30	0	30	7	9	0	0	0	4	1	0	0	0	17	182	250
31	0	141	9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	49	50	250
32	0	21	2	7	1	0	0	0	0	0	0	0	5	214	250
33	0	8	3	3	0	0	0	0	6	0	0	0	6	30	56
34	0	32	1	17	0	0	0	14	8	0	0	0	32	146	250
35	0	15	0	15	0	0	0	6	8	0	0	0	47	159	250
36	0	3	0	0	0	1	0	1	31	0	0	0	1	18	55
37	0	24	1	4	4	0	0	4	4	0	0	0	17	183	241
38	0	5	0	3	0	0	0	1	1	0	0	0	22	113	145
39	0	14	5	3	1	0	0	1	0	0	0	0	4	54	82
40	0	107	31	16	1	0	0	4	0	0	0	0	13	78	250
41	0	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	32	41
42	0	94	17	13	0	0	0	3	0	0	0	0	22	93	242
43	1	6	0	17	0	0	0	1	61	0	9	0	10	18	123
44	1	1	0	23	0	0	0	3	54	0	4	0	5	15	106
45	0	4	0	7	0	0	0	2	21	0	0	0	6	8	48
46	0	9	6	7	0	0	0	0	0	0	0	0	2	15	39
47	1	0	0	77	0	0	3	1	116	0	1	0	6	45	250
48	1	9	0	63	1	0	0	0	55	0	0	0	38	83	250
49	0	20	0	3	0	0	0	2	0	0	0	0	26	26	77
50	0	0	2	20	0	0	14	1	39	0	0	0	4	36	116
51	0	1	1	80	0	2	1	0	100	0	0	0	4	61	250
52	0	1	2	1	0	2	0	0	41	0	0	0	7	20	74

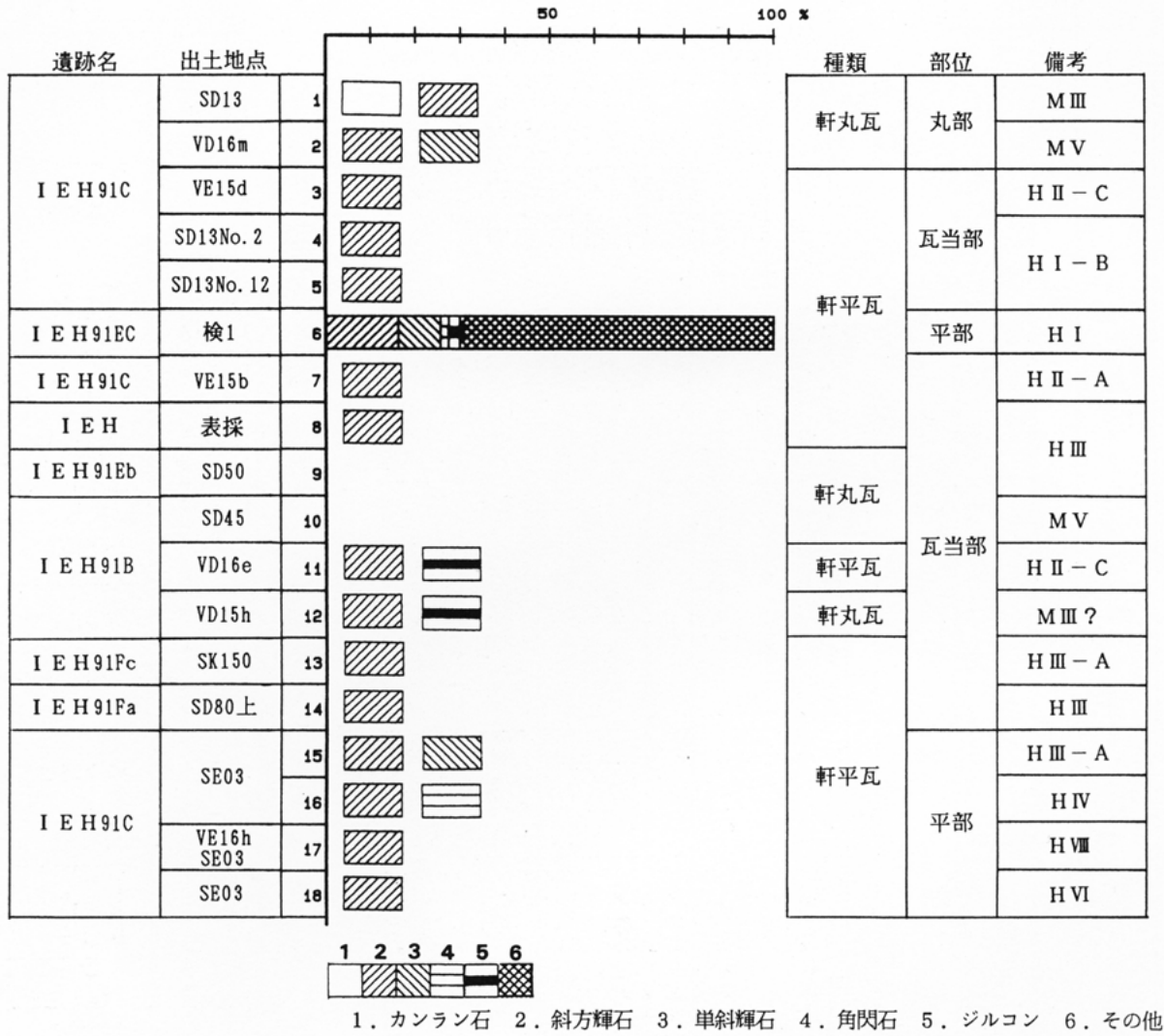
第26表 弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての試料分析結果



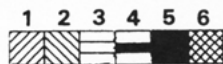
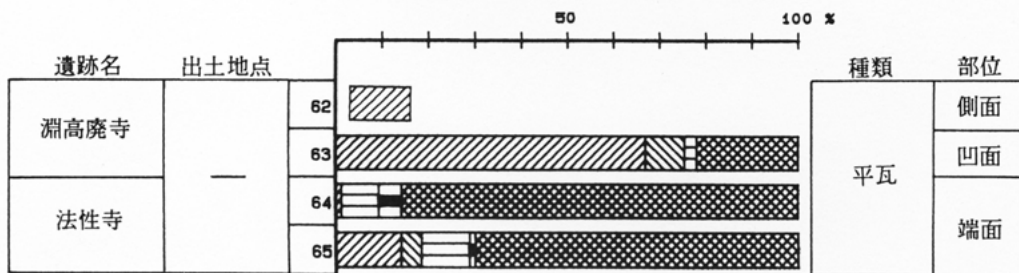
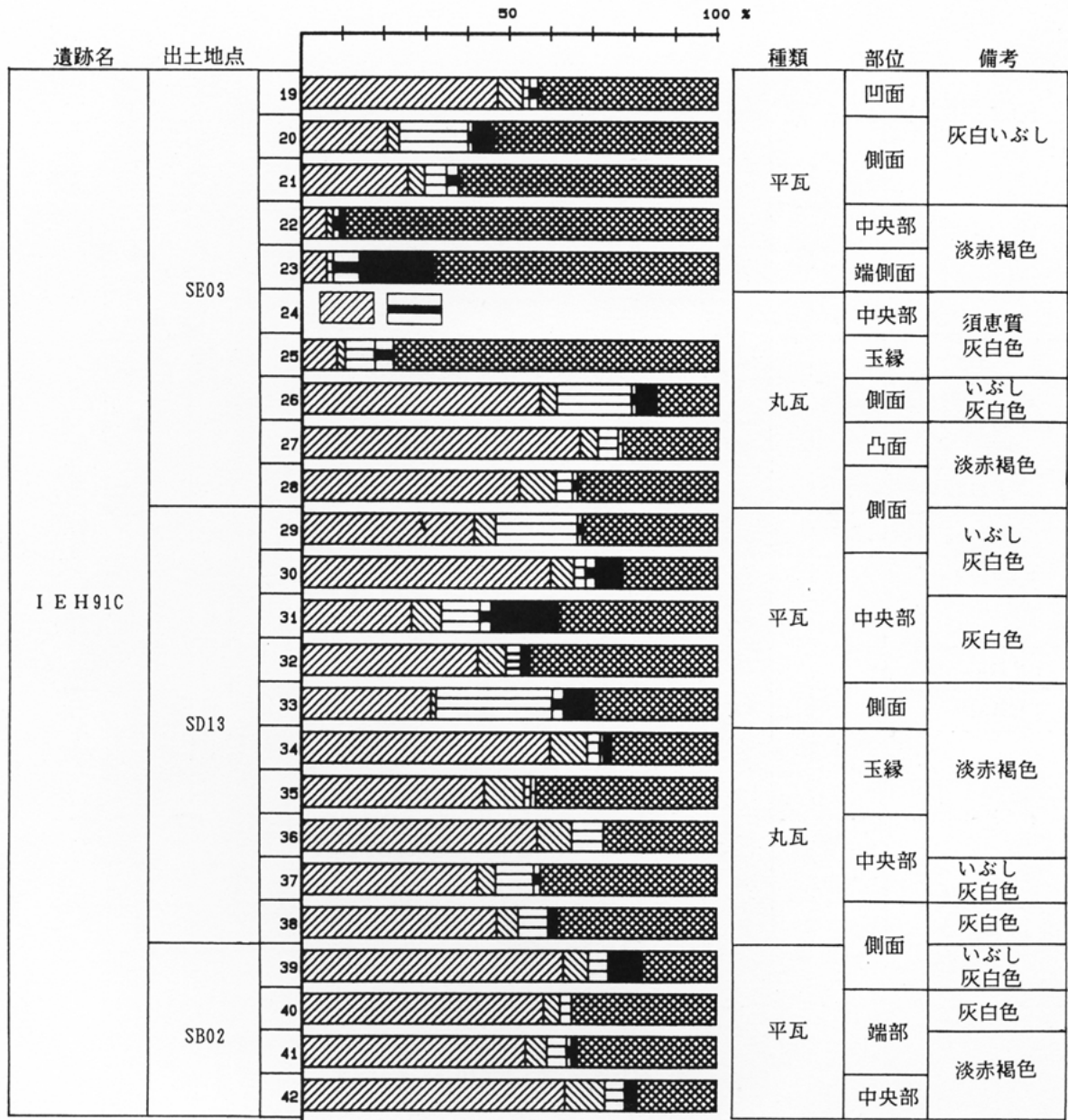
第43図 弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての試料の重鉱物組成ダイアグラム

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑色黒雲母	褐色黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	同定鉱物粒数
1	25	17	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	9	53
2	0	4	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	9
3	0	10	4	2	0	0	0	0	0	0	0	4	0	20
4	0	15	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	18
5	1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
6	0	19	11	2	0	0	0	3	0	0	0	0	82	117
7	0	4	1	2	0	0	0	0	0	0	0	10	0	17
8	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	0	64	4	0	0	0	0	3	0	0	0	2	15	88
12	1	4	0	0	0	0	0	6	0	0	0	5	50	66
13	0	15	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
14	0	7	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
15	0	8	3	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	15
16	0	4	1	4	1	0	0	0	0	0	0	0	8	18
17	0	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	13
18	0	77	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	99
19	0	118	15	4	0	0	0	5	0	0	0	2	106	250
20	0	52	7	41	0	0	0	3	0	0	0	10	137	250
21	1	64	10	13	0	0	0	7	0	0	0	1	154	250
22	0	15	4	2	0	0	0	4	2	1	2	3	217	250
23	0	15	2	4	0	0	0	16	2	1	0	43	167	250
24	0	2	1	1	0	0	0	4	0	0	0	0	22	30
25	1	21	5	18	0	0	0	11	0	0	0	0	194	250
26	2	143	10	44	1	0	0	3	0	2	1	12	32	250
27	1	167	11	12	0	0	0	1	0	3	1	1	53	250
28	0	131	22	10	0	0	0	3	1	0	0	0	83	250
29	0	104	13	49	0	0	0	3	0	0	0	2	79	250
30	0	150	14	7	0	0	0	6	0	0	0	16	57	250
31	0	66	18	23	0	0	0	7	0	0	0	40	96	250
32	0	106	17	2	7	0	0	1	0	0	1	5	111	250
33	0	78	3	70	0	0	0	7	0	0	0	18	74	250
34	1	115	17	6	0	0	0	2	0	0	0	3	48	192
35	1	110	24	4	0	0	1	0	0	3	0	2	105	250
36	0	142	21	19	0	0	0	0	0	0	0	1	67	250
37	0	106	11	23	0	0	0	4	0	0	0	2	104	250
38	0	118	13	18	0	0	0	1	0	0	0	5	95	250
39	0	158	15	12	0	0	0	0	0	0	0	20	45	250
40	0	146	10	7	0	0	0	2	0	0	0	1	84	250
41	0	135	13	12	0	0	0	3	0	2	0	3	82	250
42	0	159	24	12	0	0	0	1	0	0	0	7	47	250
43	0	0	0	11	2	0	0	2	0	0	0	0	15	30
44	0	4	2	1	0	0	0	4	0	0	0	3	73	87
45	0	4	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3	35	45
46	0	2	0	13	0	0	2	1	0	0	0	3	68	89
47	0	49	7	42	0	1	0	4	10	0	3	66	68	250
48	0	9	5	51	0	3	6	17	0	5	3	11	140	250
49	0	0	0	5	0	0	1	0	1	0	1	0	23	31
50	0	134	26	4	1	0	0	1	0	0	0	1	83	250
51	0	13	1	0	0	0	0	3	0	0	0	3	12	32
52	0	32	5	9	0	0	0	0	13	5	0	18	27	109
53	0	1	0	2	5	0	1	0	1	0	6	2	56	74
54	0	2	0	3	1	0	0	0	2	2	0	2	28	40
55	0	5	0	10	0	0	0	0	1	3	0	4	30	53
56	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	2	6	43	54
57	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
58	0	0	0	10	1	1	0	1	0	0	3	4	28	48
59	0	180	32	8	0	0	0	0	0	0	0	3	27	250
60	0	3	0	2	1	0	0	0	1	1	0	0	8	16
61	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	16	20
62	0	36	5	1	0	0	0	1	0	0	0	1	15	59
63	1	79	10	3	0	0	0	1	0	0	0	0	24	118
64	0	3	0	20	0	0	0	12	0	0	0	0	215	250
65	0	35	11	26	0	0	0	3	0	0	1	2	172	250

第27表 奈良時代～平安時代にかけての試料分析結果

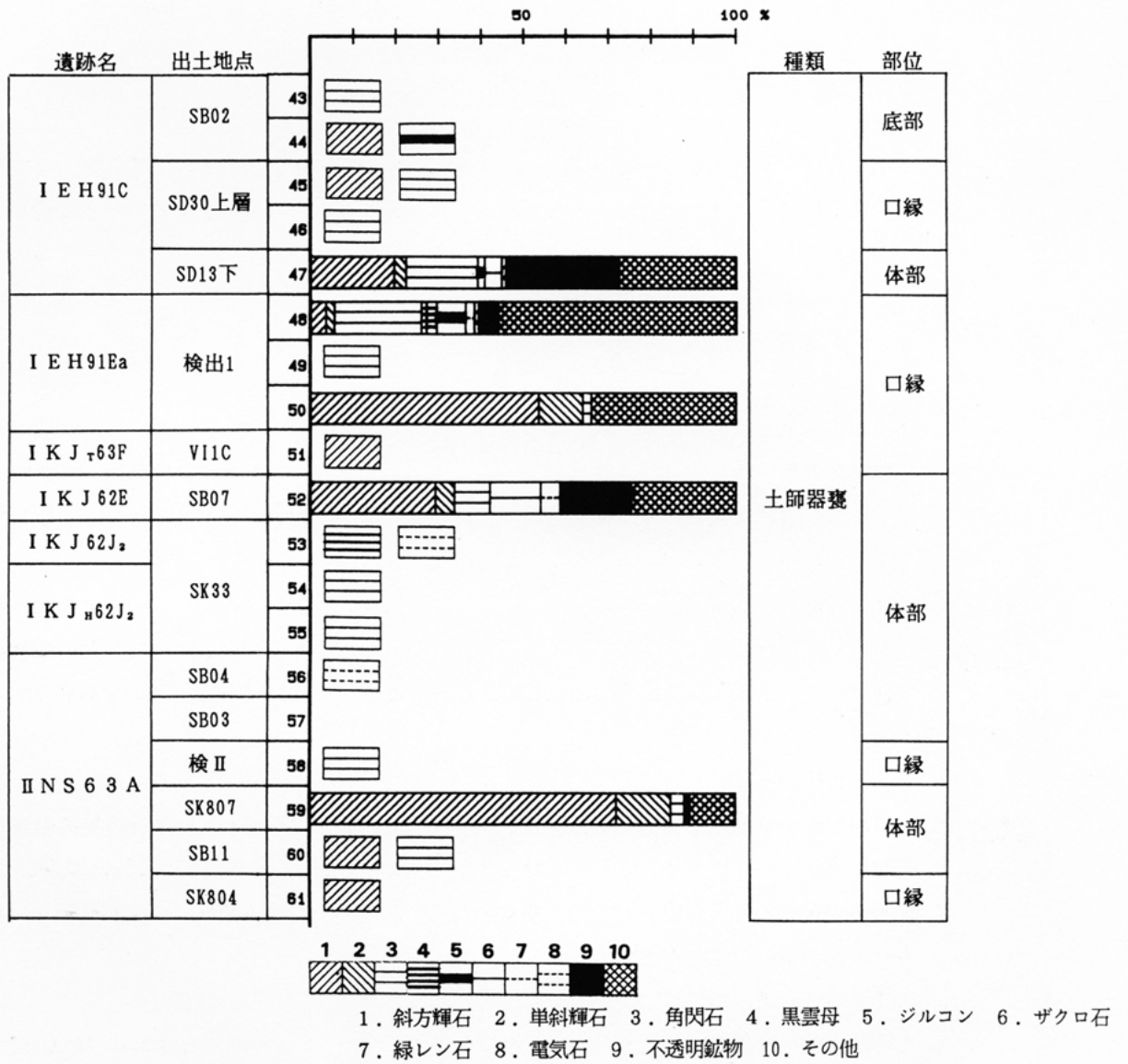


第44図 軒丸瓦、軒平瓦の重鉱物組成ダイヤグラム



1. 斜方輝石 2. 単斜輝石 3. 角閃石 4. ジルコン 5. 不透明鉱物 6. その他

第45図 丸瓦、平瓦の重鉱物組成ダイヤグラム



第46図 土師器甕の重鉱物組成ダイヤグラム

第2節 鉄滓類の分析

1. はじめに

堀之内花ノ木遺跡出土の鉄滓等について、化学成分分析を含む自然科学的な観点での分析を嵯峨川鉄テクノリサーチに委託し実施した。本報告はこの報告書をもとに一部改変したものである。

2. 調査項目及び方法

(1) 化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行った。分析方法及び分析結果は第28・29表に示す。ここでは化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行った。

(2) 顕微鏡組織観察

加工状況
材質の判断

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨材等で研磨（鏡面仕上）し、顕微鏡で観察した。熔融状況や鉱物の混合状態等から加工状況や鉄滓の材質を判断するものである。

(3) X線回折測定

未知の化合物の同定

試料を粉碎して板状に形成し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有の反射（回折）されたX線が観察される。これを利用して、試料中の未知の化合物を同定した。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

(4) 重量計測と磁着力調査

電子天秤を使用して計重した。また磁着力調査については、直径30mm.1300ガウス（0.13テスラ）のリング状フェライト磁石を使用し、官能試験により「強・やや強・中・弱・なし」の5ランクで表示した。

3. 調査結果概要

鉄滓

分析結果は第28・29表に示した。観察の過程で、試料No. 7と試料No.10破面が完全に一致し、元は一つの鉄滓であったことが判明した。また、鉄滓ではなく炉壁ではないかと判断される試料もあった。

なお、鉄滓の発生を鉄の生産工程からおおまかに分類すると：①砂鉄や鉄鉱石を還元して、鉄を取り出す時に発生する「精錬滓」、②、①で出来た鉄塊から、さらに不純物を取り出して、加工しやすい状態の鉄にする時に発生する「精錬鍛冶滓」（大鍛冶滓）、③鉄を加

熱・加工して製品を作っていく過程で発生する「鍛冶滓」(小鍛冶滓)、④鉄を溶かし、鋳型に流し込んで鋳物を作るときに発生する「鍛物滓」、等があるが、試料別所見(第28・29表)の際に記述しておく。

4. まとめ

今回の調査結果について、総合すると次のように分類される。

- 腕型鍛冶滓 (1) 鍛冶場の炉中で発生してほぼ完全な形で残っている腕型鍛冶滓
 (2) 何らかの原因で、上記鉄滓を再利用するためか、別の目的のために割り欠いたよう
 鉄滓小片 に比較的サイズのそろっている鉄滓の小片
 (3) 長期間、水分の多い所にあつたために、特異な状態になっているもの
 (4) その他 炉材

ここで使用されていた鉄は、断定は出来ないものの砂鉄を精錬して作られた鉄ではないかと推定される。

鉄は当初より再加工(いわゆるリサイクル)の可能な素材として利用されてきたと考えられるので、鍛冶場には各所で生産された鉄が持ち込まれたと考えるのが妥当である。素材である鉄や鉄塊がどこで生産されたものかとか、製鉄技術の進歩の状況等の問題点については、特定製鉄遺跡に付随する鍛冶工房や、製品としての鉄器類での追跡調査研究を進めていく過程で更に解明されることを期待する。

試料番号	形状	出土地点	時期	磁着力	分析結果概要
1	腕型滓	91Ea SK81 上	古代?	弱	砂鉄を原料として一時精錬された粗鉄塊を鍛錬して鉄を取り出したり、その鉄を使用して鉄製品を作った際に発生した鍛冶滓。
2	鉄滓	91C VD15 p (SB027)	古代	一部中	試料1とはほぼ同様の鍛冶滓。
3	"	91EA VE15q (SB157)	"	"	植物繊維痕がある。木炭痕なのか藁なのか分かれれば鉄滓側あるいは炉壁側の試料かの判断が可能。
4	"	91Ea VE15r (SB147)	"	"	試料1とはほぼ同様の鍛冶滓。
5	炉壁?	91C SD30下層	古代(寺城区画溝)	弱	一部に酸化鉄の付着した焼梢状態の炉壁か床材。X線回折からも粘土鉱物が同定されている。
6	鉄滓	91C SD13	"	一部中	水分との接触の多かった鍛冶滓。
7	"	91C SD14	不明	強	水分との接触の多かった鍛冶滓。No.10と接合可能。
8	"	91C SD14下層	"	弱	試料不足のため同定不可能。黒色発泡部あり。

第28表 鉄滓分析結果概要(1)

9	鉄 滓	91C SD14上層	不 明	一部中	二酸化チタンの量から考えて、砂鉄を原料として作られた鉄を使用して大鍛冶と小鍛冶の両方の作業をしていた所で発生した鍛冶滓。
10	"	91C SD14	"	一部強	水分との接触の多かった鍛冶滓。
11	"	91Ea VE16q	古代？	弱	片面に黒色発泡部があり、焼結状態の炉材や付着土が確認できる。受熱部は溶融してガラス状になっている。
12	"	91Ea VE16r (SD65 上)	不 明	一部強	人為的に割られた鍛冶滓。
13	"	91Ea VE16r (SD65 上)	"	弱	鍛冶滓。
14	"	91Ec VF15q (SD65 上)	"	中	付着土が凹部にたまっている。
15	"	91Ec SD91	中 世	"	底面と思われる部分に焼結状態となった粘土か火床材らしいものが付着している。
16	"	91B SD43	"	やや強	マグネタイトが存在している。
17	"	91Ea SD65	不 明	一部中	かなりの高温で溶融した鉄滓。
18	鉄滓？	91Ec SE06	中 世	一部強	出土した刀剣などで見られる瘤状の酸化鉄と付着土の生成物によく似ている。
19	鉄 滓	91Ea SD51	不 明	"	黒色発泡部分多い。
20	"	91Ea SD60	"	弱	一部に表面の滑らかな部分があり加熱により溶けた様子が観察される。
21	"	91Fc SX152	中 世	一部中	全体的に緻密、部分的に割られている。
22	"	91G VF16r.s	不 明	"	一部に炉材が焼結状態で付着、内部に黒色発泡部がある。
23	"	91G SD33	中 世	"	割れた感じの鉄滓。
24	"	91Ea SD50	不 明	全体中	発泡痕があり、裏面に火床材が焼結状態で付着している。
25	鑄 塊	91Eb SD50	"	中	刀の折れ片の様にも見えるが詳細は不明。
26	鉄 滓	91Eb SD50	"	強	鍛冶滓。
27	"	91Ec VF15g.h	"	弱	植物繊維痕、焼結炉材が確認できる。
28	"	91Fc検出	"	中	鍛冶滓を割ったような滓。
29	"	91Eb VF15.16d	"	一部強	空洞・黒色発泡部あり。
30	"	91Eb VF16d	"	一部中	空洞・黒色発泡部あり。

第29表 鉄滓分析結果概要(2)

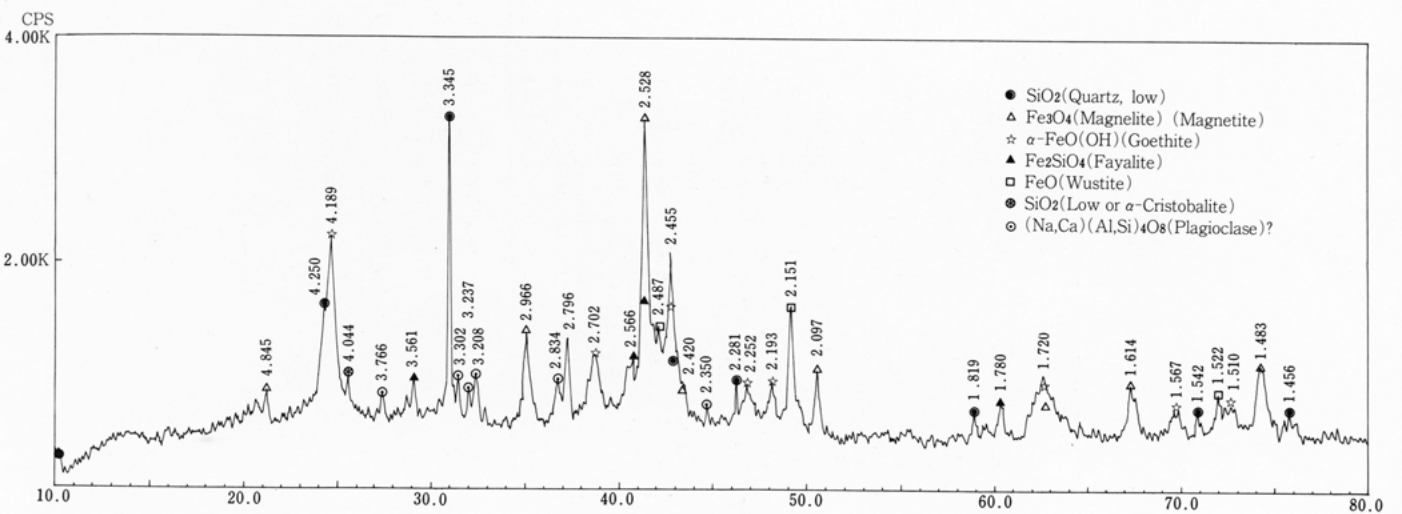
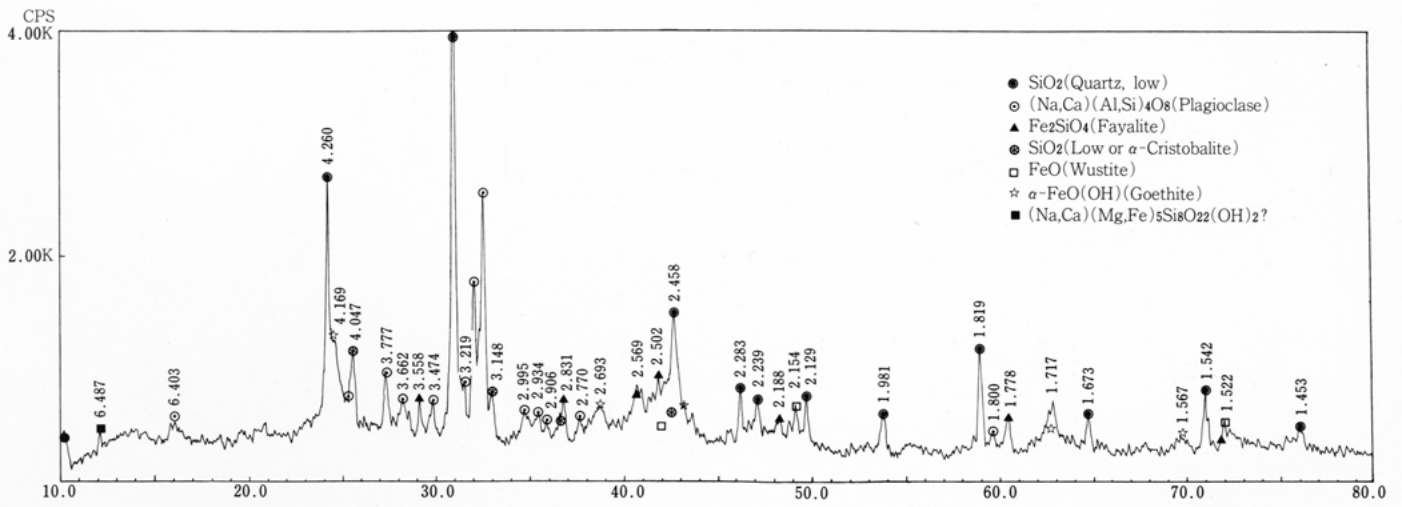
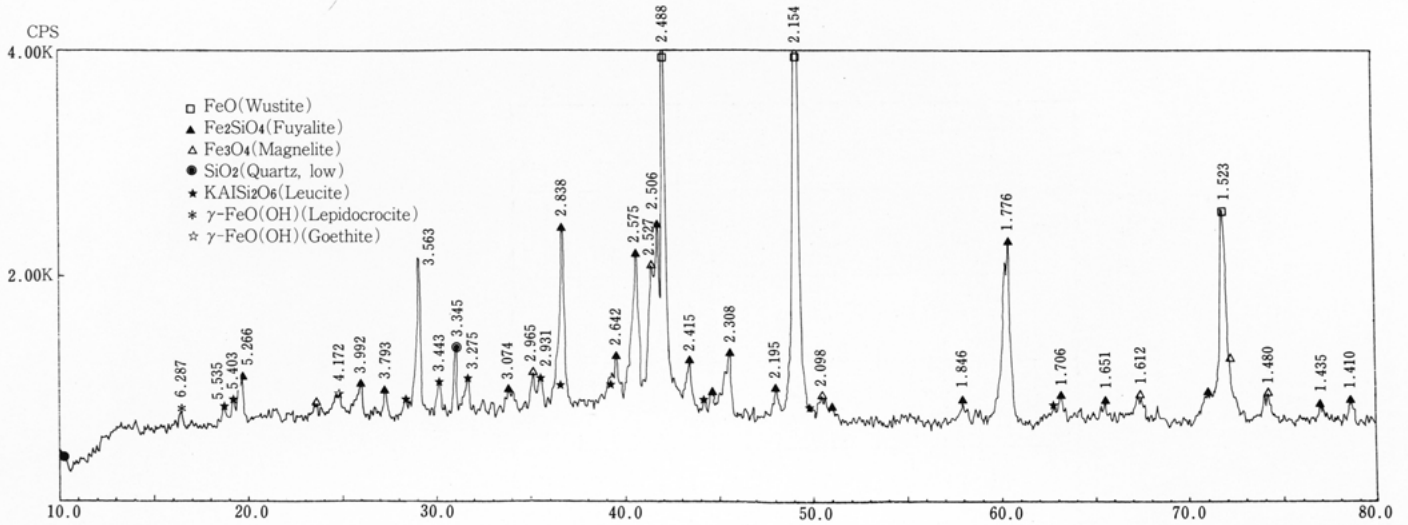
分 析 結 果

単 位 % (m/n)

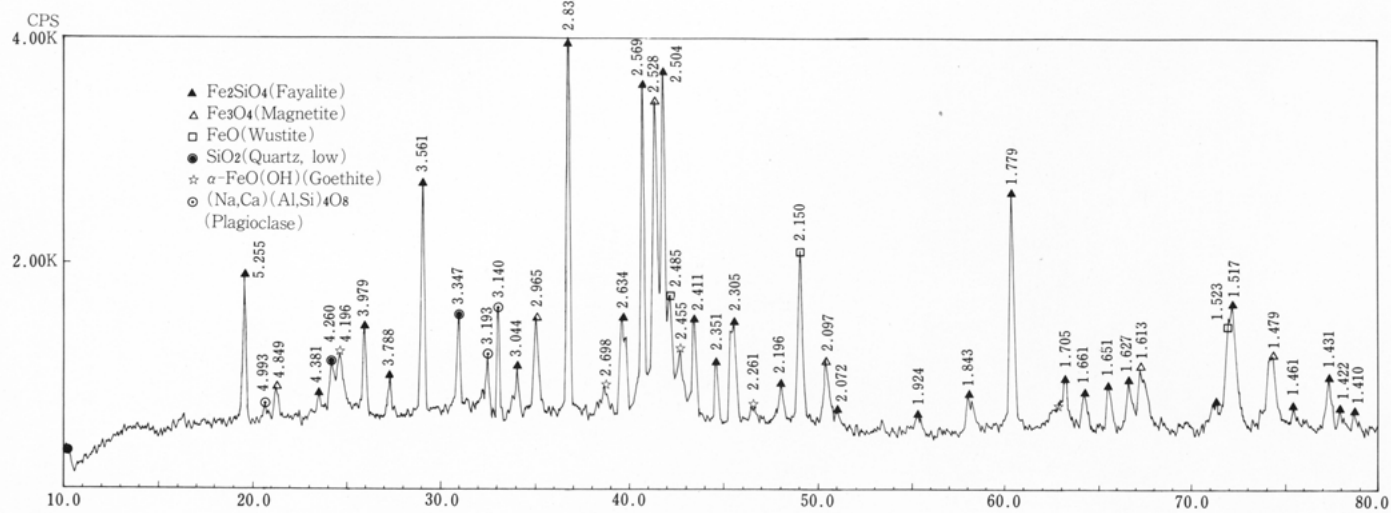
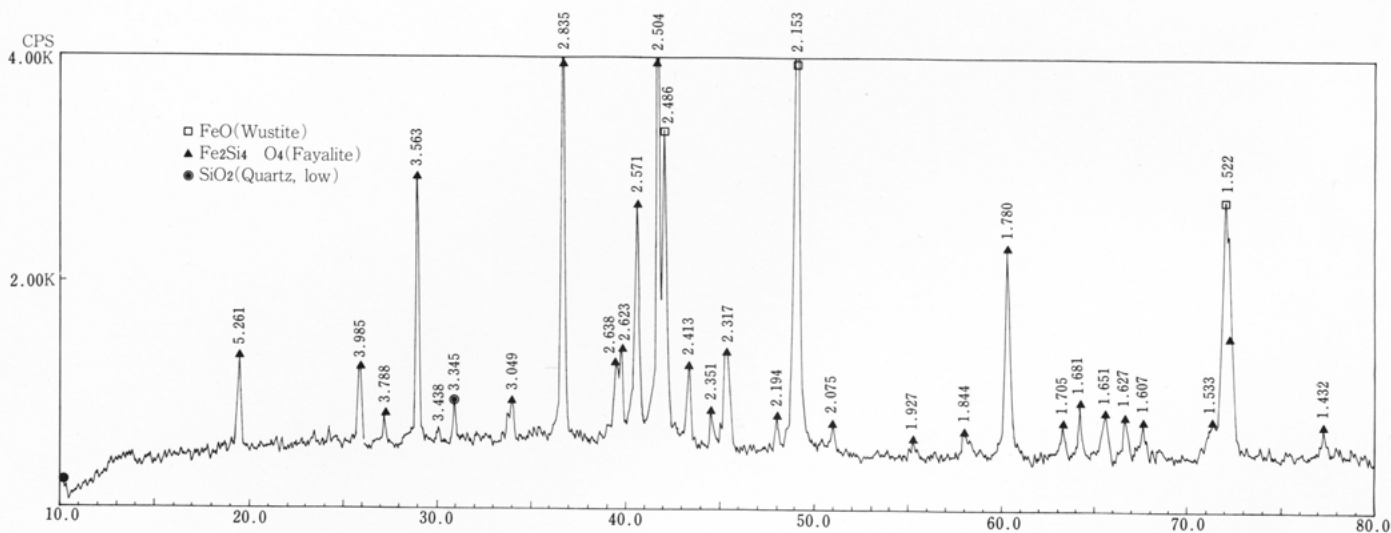
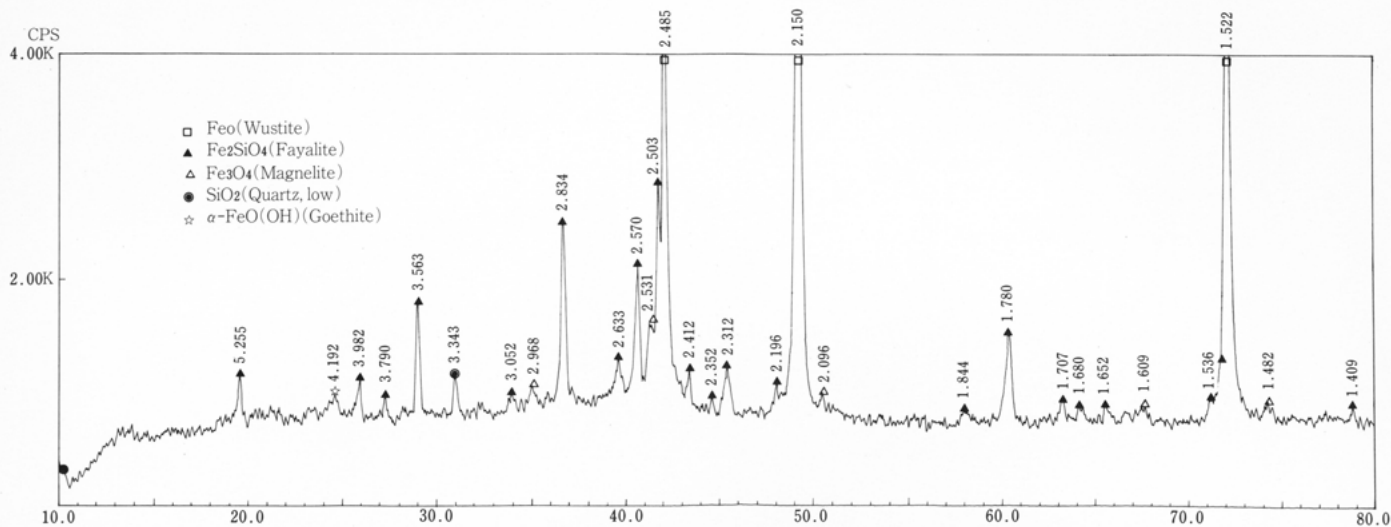
成分 試料No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Re ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	C	V	Cu	C·W
Na 1	55.2	0.50	54.1	18.1	17.6	3.52	2.24	0.24	0.22	0.04	0.29	<0.01	0.50	1.34	0.070	0.02	0.01	0.94
Na 2	56.2	0.20	53.5	20.6	16.7	4.02	0.84	0.07	0.21	0.02	0.19	<0.01	0.56	0.98	0.13	0.01	0.01	1.30
Na 4	52.3	0.53	50.3	18.1	22.6	4.38	0.97	0.17	0.23	0.05	0.31	<0.01	0.57	1.12	0.12	0.02	0.01	0.71
Na 5	29.6	0.11	6.47	35.0	41.6	7.97	0.87	0.17	0.28	0.07	0.27	<0.01	1.51	1.78	0.27	0.01	<0.01	3.36
Na 6	47.3	0.11	14.0	51.9	19.6	3.88	0.65	<0.01	0.18	0.03	0.20	<0.01	0.58	0.76	1.24	0.01	0.01	4.66
Na 9	55.4	0.13	53.9	19.1	17.0	3.04	1.16	0.04	1.05	0.14	0.20	<0.01	0.36	1.05	0.13	0.08	<0.01	1.19
Na 10	55.8	0.29	37.5	37.7	14.1	3.18	1.10	0.04	0.20	0.02	0.18	<0.01	0.39	0.56	0.34	0.02	<0.01	2.41
Na 12	63.5	0.07	67.1	16.1	9.60	1.83	0.68	<0.01	0.28	0.03	0.19	<0.01	0.22	0.56	0.11	0.02	0.01	0.68
Na 13	55.1	0.06	62.0	9.80	19.2	3.25	1.78	0.17	0.30	0.11	0.22	<0.01	0.36	1.45	0.065	0.04	0.01	0.46
Na 15	53.5	0.11	46.7	24.4	18.5	3.77	0.70	0.14	0.17	0.04	0.47	<0.01	0.56	0.85	0.24	0.01	<0.01	1.89
Na 17	61.9	0.06	65.6	15.5	11.0	2.53	0.82	0.04	0.24	0.02	0.14	<0.01	0.35	0.51	0.16	0.02	<0.01	0.74
Na 18	42.8	0.31	24.3	33.7	23.4	4.84	0.81	0.04	0.20	0.05	0.85	<0.01	0.71	1.00	1.75	0.01	0.02	2.56
Na 20	52.3	0.11	59.8	8.16	22.3	4.00	2.03	0.34	0.16	0.07	0.39	<0.01	0.45	1.50	0.054	0.01	<0.01	0.50
Na 21	56.9	0.46	56.8	17.6	14.0	3.34	2.28	0.27	0.25	0.02	0.38	<0.01	0.40	0.86	0.11	0.03	0.01	1.06
Na 24	50.0	0.22	37.3	29.7	22.1	4.82	1.08	0.07	0.21	0.06	0.20	<0.01	0.42	1.00	0.27	0.01	0.03	2.10

[分析方法] 鉄滓等の分析方法はJ I S法に準拠し、以下の方法とした。

- T.Fe : 三塩化チタン還元ニクロム酸カリウム滴定 C : 燃焼-赤外線吸収法
M.Fe : 臭素メタノール分解-EDTA滴定法 K₂O, V, Cu : 原子吸光法
FeO : ニクロム酸カリウム滴定法 SiO₂, Al₂O₃, CaO
Fe₂O₃ : 計 算 MgO, TiO₂, MnO : ガラスビード蛍光X線分析法
C·W : カールフイッシャー法 P₂O₅, Cr₂O₃, Na₂O



第47図 X線回折測定結果(1)



第48図 X線回折測定結果(2)

第3節 堀之内花ノ木遺跡にみられた地震痕

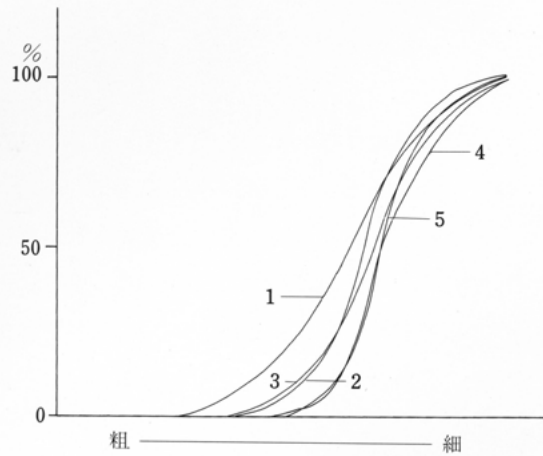
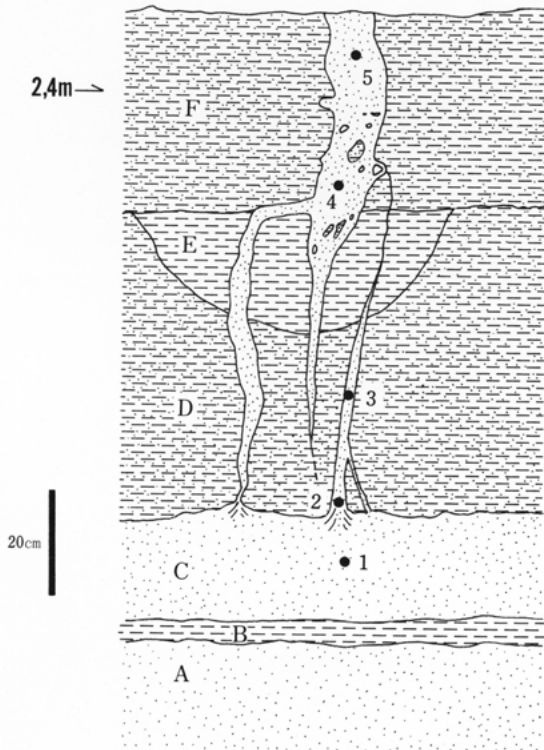
1. はじめに

今回、濃尾平野のほぼ中央部に位置する堀之内花ノ木遺跡の発掘調査において、地盤に影響を与えた歴史時代の地震の痕跡が発見されたのでここに報告する。

2. 地震痕の記載

砂脈 地震痕が発見されたのは、調査区91F b区、91H区である。両調査区で発見された地震痕は、遺構検出面で地割れ状に観察され、下層から液状化したと思われる砂層が噴出して地割れ部分を充たしていた（以下、これを砂脈と称する）。これらの砂脈は弥生時代～江戸時代に至る全ての包含層を引き裂いていた。また上端部は、確実に1900年以降に耕された植木畑の耕作土により削剝されていた。この年代に濃尾平野に大きな被害をもたらした地震は1891年に発生した濃尾地震を以て他にない。

濃尾地震



第50図 Fb区砂脈粒度積算曲線

第49図 Fb区砂脈垂直断面図

- A：灰褐色細粒砂層 B：黄灰色シルト層
- C：灰褐色中粒砂層 D：黄褐色砂質シルト層
- E：暗褐色シルト層 F：暗褐色砂質シルト層
- 1～5は試料採取地点

1) 91F b区

粒度積算
曲線

91F b区において観察された砂脈の典型的な垂直断面を第49図に示した。砂脈の供給源となっているのは、標高1.4~1.6mにかけて堆積している灰褐色の中粒砂層である。この層から噴出した砂は、遺跡基盤層となる黄褐色砂質シルト層、弥生時代の遺物包含層、中世の遺物包含層を引き裂き、少なくとも95cmは上昇し標高2.55mの位置まで達していることが確認できた。上端部は1900年以降に耕された植木畑の耕作土により削剥されていた。この観察断面で、液状化した砂の粒度分析を行った。結果は第50図の粒度積算曲線に示したが、上方・内部ほど細粒化の傾向にあることが読み取れる。砂脈の平面的な配列には91H区と同様な方向性がみられた。

2) 91H区

砂脈の
方向性

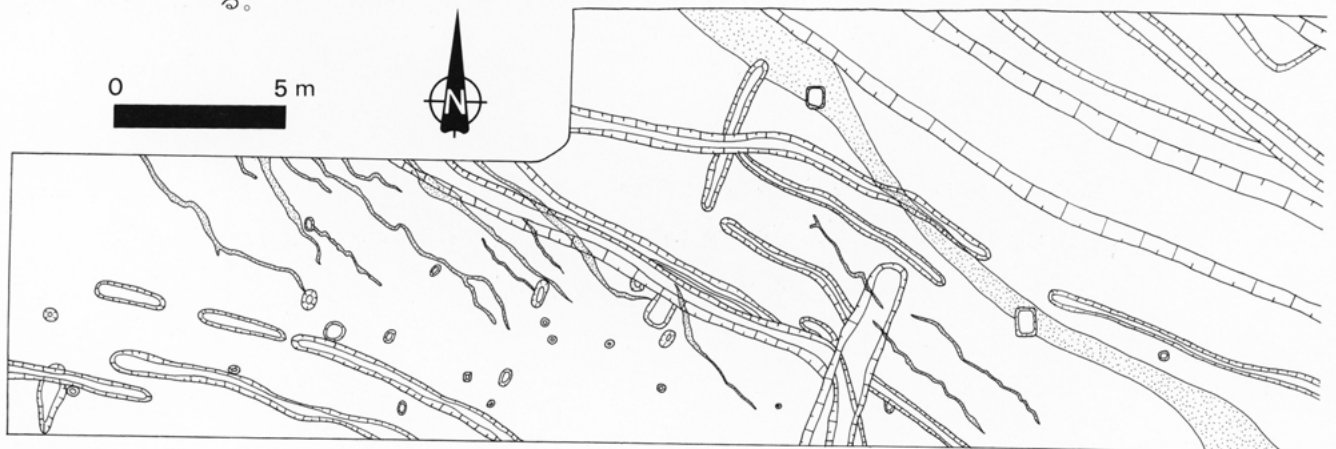
N40~50°W

91H区においても91F b区同様に濃尾地震による砂脈が観察された(第51図)。本調査区では、その平面的な配列に濃尾地震による砂脈の特徴的な方向性がみられた。砂脈の最大幅は約1m、細いもので5~10cmで、延長は15m以上と推定される。砂脈の供給源は、遺構検出面下30cmの中~粗粒砂層である。これらの砂脈はN40~50°Wの方向で「杉型」の雁行配列を示した。この配列については、服部(1993)が報告したように、濃尾地震発生の際の断層運動による影響が強く現れているものと考えられる。

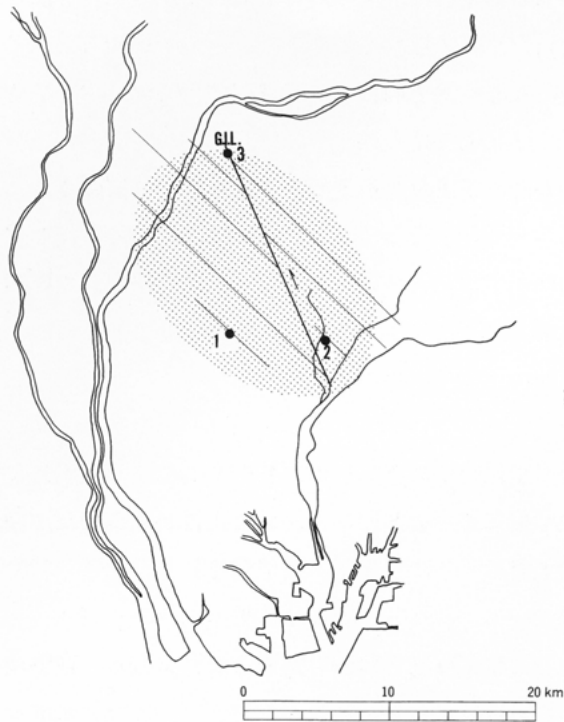
3. まとめ

「杉型」の
雁行配列

今回発見された堀之内花ノ木遺跡の地震痕は、1891年10月28日に発生した濃尾地震の地震痕である。この砂脈はN40~50°Wの方向で「杉型」の雁行配列を示し、服部(1993)の指摘する濃尾地震の際に震源とされた根尾谷断層と同時に活動した「岐阜—宮線」の左横ずれ運動を証明する(第52図)。また、91H区においてはその方向性が溝の延長方向と同じであることが注目される。このことは地震活動の周期が数1000年程度とされる濃尾地震の古期の活動により発生した地割れ・砂脈の方向性に支配されていた可能性も考えられる。



第51図 91H区砂脈平面分布図(西半部)



第52図 濃尾地震における砂脈の規則性

- 1：堀之内花ノ木遺跡
- 2：清洲城下町遺跡
- 3：田所遺跡

網点の範囲内では、砂脈の配列に方向性が見られ、N40~50°Wの方向で「杉型」に雁行配列をしている。

東海地震と
南海地震

さらに、本遺跡と関わりの深い尾張国分寺の焼失年代についても、歴史地震の活動とともに考えてみる必要がある。それは、東海地震の発生である。太平洋上の南海トラフに震源をもつ巨大地震「東海地震」と「南海地震」は、歴史時代を通じてほぼ100あるいは150年周期で規則正しく同時性を持って発生している（寒川、1992ほか）。尾張国分寺の焼失年代と推定される884年は、南海地震の発生している887年に非常に近い年代である。東海地震は歴史的にも南海地震と同時か、あるいは2~3年先行して発生している。地震史料こそ存在しないが、この時代にも東海地震が発生していた可能性が非常に高い。巨大地震による火災の発生は一般的であり尾張国分寺の焼失にも地震が直接関係していたのではないであろうか。今後の同地域の発掘調査でこの時代の地震の痕跡が発見されることを期待する。

文献

寒川 旭（1992）：地震考古学。中公新書，251p.

服部俊之（1993）：濃尾平野における歴史時代の地震痕。（財）愛知県埋蔵文化財センター年報平成4年度，126-136.

第5章 考察

第1節 堀之内花ノ木遺跡の遺構変遷

堀之内花ノ木遺跡の発掘調査成果を、主に遺構の変遷に焦点をあてて概観する。

A期

今回の発掘調査で検出された遺構、出土遺物はすべて弥生時代後期以降のものであり、A期は弥生時代後期と古墳時代前期に小区分される。

A1期 弥生時代後期、三宅川の形成した自然堤防左岸の微高地上の最も高い安定した部分（C区東半からE a区付近）に小集落が形成される。この集落の継続時期は山中式後期から廻間I式1段階のごく短期間である。

A2期 その後古墳時代前期に微高地東端の地形に沿った形で溝が掘削され、さらに溝内に特殊な土坑（祭祀土坑の可能性もある）がつくられるが、周辺に同時期の遺構はまったく認められない。東方低地部に広がると思われる耕地に関連する遺構であるのかもしれない。

第1の画期

A期の遺構が廃絶した後、当遺跡では奈良時代前後（B1期）までに所属する遺構がまったく認められない。

B期

文献史料との比較検討 奈良時代頃から当遺跡の遺構は急激に増加する。本報告書では遺構の重複関係や主軸の方位などから尾張国分寺の造営とその継続期を中心に小区分した。

B1期 まず当地に尾張国分寺が造営される以前、微高地西端から中央部にかけて、北から大きく東西に主軸の傾く地割りが成立してくる。この地割りは微高地中央部に軸線の異なる国分寺の寺域が設定された段階で廃絶を余儀なくされたと思われるが、微高地西端は辛うじて寺域からはずれることになる。A区で検出されたB1期の遺構群からは、国分寺が当地に造営された後の時期に所属する遺物が多く出土することから、その後しばらくの間、旧地割りの機能が継続していた可能性が指摘される。

尾張国分寺の成立 B2期 尾張国分寺の成立時期は不明の点が多いが、『統日本紀』に天平勝寶元年（749）

5月に山田郡の生江臣安久多が知識物を、神護景雲元年(767)5月に海部郡の主政、刑部岡足が米一千斛を国分寺に献上して、ともに外従五位下を授けられている。さらに神護景雲3年(769)9月に、鶺沼川(木曾川)の氾濫記事と下流にある国府、国分二寺も危険である旨の奏上記事が載っている。果して記事の通り、寶龜6年(775)8月には伊勢・尾張・美濃を異常風雨が襲い、国分寺はじめ諸寺院の堂塔19が被害を受ける。これらの史料を検討すると、749年と767年の段階では尾張国分寺は造営途中ではあっても完成していたか否かは不明であるため、769年をもって成立下限の目安としたい。こう考えると当遺跡において検出された国分寺関連遺構から出土する遺物の所属時期の上限、鳴海32号窯式期の年代とはほぼ一致する。さらに想像を逞しくし、775年の異常風雨が当地にも被害を及ぼしたとすれば、SD13から出土した一括遺物は、その時、使用が不可能になった物が投棄された姿であり、溝はこの時点で廃絶していたことになる。SD13と平行して走るSD19は所属時期を決定するだけの遺物にめぐまなかったが、SD13の埋没に際して代用された溝の可能性もある。前述したA区の遺構群はこの時期に至って廃絶したと考えられる。なお国分寺成立にともない寺域西外には小集落が成立し、折戸10号窯式期から黒笹14号窯式期まで継続している。

尾張国分寺 の廃絶

B3期 さて、次に国分寺の廃絶時期(B3期)についてであるが、『日本紀略』は、元慶8年(884)に、国分寺が焼失したため、その機能を愛智郡の定額願興寺に移す旨の勅令記事を載せている。今回の調査結果を照らし合わせてみると、国分寺の寺域を区画する溝SD15、30は黒笹90号窯式期のなかで埋没が完了しており、その後掘削されたSE03は焼けた国分寺の瓦を裏込めとして使用し、やはり黒笹90号窯式期のなかで埋没が完了している。また微高地中央部からやや東寄りにまとまって検出された堅穴住居群は、位置的に国分寺の南に隣接する位置にありながら、主軸の方位を国分寺と合わせることがなく、さらにその継続期間が黒笹14号窯式期から90号窯式期までであることなどを総合すると、尾張国分寺はこの時期までに廃絶したと考えられる。したがって黒笹90号窯式の実年代と『日本紀略』の記事年代はほぼ整合し、火をうけた瓦の存在から火災が国分寺廃絶の一因であることも傍証できる。なお国分寺機能の願興寺移行が、当地に国分寺を再建するための一時的措置であったか否か、という問題については、折戸53号窯式期以降12世紀後半までの遺物・遺構がまったく認められないことから、再建や機能の再開はなかったものと考えられる。

以上がB期の遺構変遷であるが、今回の調査結果から考えると、尾張国分寺がこの地に機能した時期は、8世紀後半から9世紀後半までの約1世紀となる。また寺域規模は昭和36年の塔、金堂調査時に方二町と推定されたが、SD13、15、30の検出状況から、東西に短く、南北に長い寺域規模を想定せざるをえない(東西幅約168m)。

第2の画期

前述の通りB期の遺構が廃絶した後、当遺跡では12世紀後半までの遺構がまったく認められない。

C期

中世の当遺跡は12世紀後半から13世紀前半までと、14世紀後半から15世紀後半までの2時期に小区分される。古代の遺構が微高地西半に多かったのに対し、中世の遺構は微高地東半に多いことが特色として挙げられる。

C1期 12世紀後半から13世紀前半にかけて、微高地東半のごく限られた地区に土壙墓群が成立する。墓域の東西には井戸（SE02・06）があり、G区には墓域の入口とも考えられる遺構がある（SD29・SK26・28・30）。この墓域を有する集落の中心は自然地形などを考慮すると調査区の南に展開していたと考えられる。なお微高地東端には自然地形に沿うように大溝（SD100）が掘削され、墓域を取り込むように走る。

C2期 14世紀後半頃、微高地東半部を中心に、土壙墓群を破壊して方形の区画溝が成立する。これらの遺構群は15世紀中頃まで継続し、前述の大溝はこの時期まで機能を保っている。この方形区画の成立は、遺跡の南に位置する集落の発展にともなう生活域の拡大としてとらえることができよう。遺跡の南に中心をもつ現在の稲沢市堀之内町の集落は文献上、嘉慶2年(1388)を初現とし、その後応永3年(1396)以降長享元年(1487)まで妙興寺領坪付注文に、大永・享禄年間(1521～1532)には万徳寺領年貢帳にその名が散見される¹⁾。C2期の遺構群は堀之内集落と大きく関わる可能性がある。そのように考えることが許されるならば、現在の堀之内・矢合・梅須賀の3町の境界ラインと同じ方位を有する大溝は集落境を走る溝として位置づけることも可能となろう。

D期

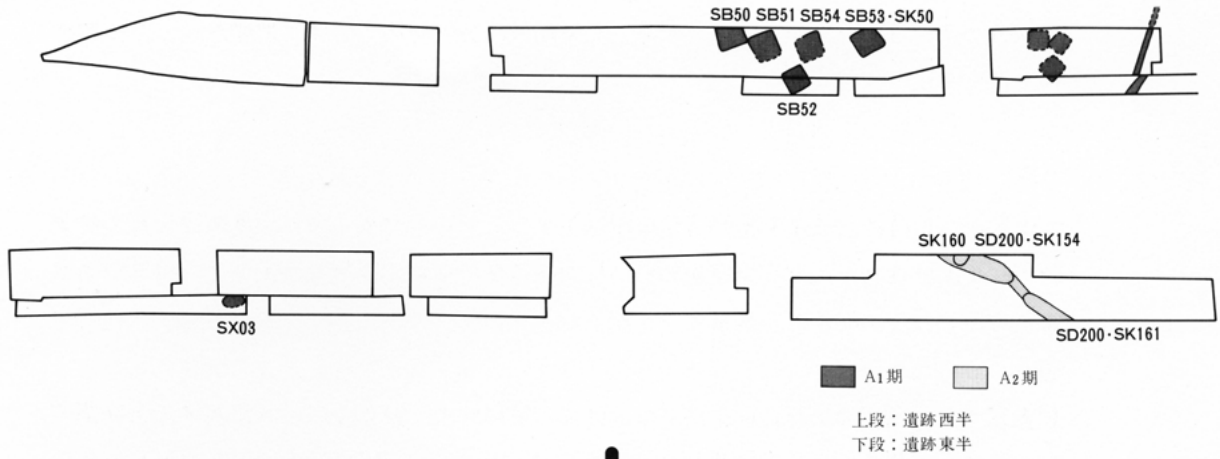
戦国から江戸期にかけての遺構は、調査区全域に散在するが、まともにはみられない。

微高地西端近くでは幕末期の遺物を出土する遺構が、明治17年作成の地籍図に記された水田のプランどおりに検出されている。この水田はL字状の平面プランを有し、下層で中世の溝が確認されている。この遺構が国分寺の寺域を区画する溝とほぼ同じ方位を有することは、今後の周辺調査の際に注意すべき点であろう。

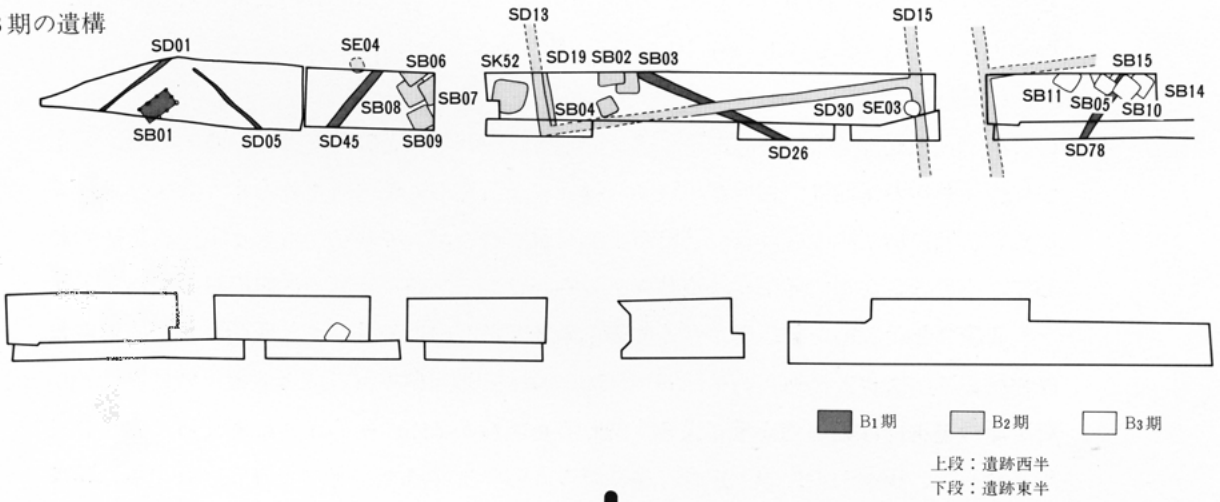
註

- 1) 『角川日本地名大辞典23愛知県』角川書店

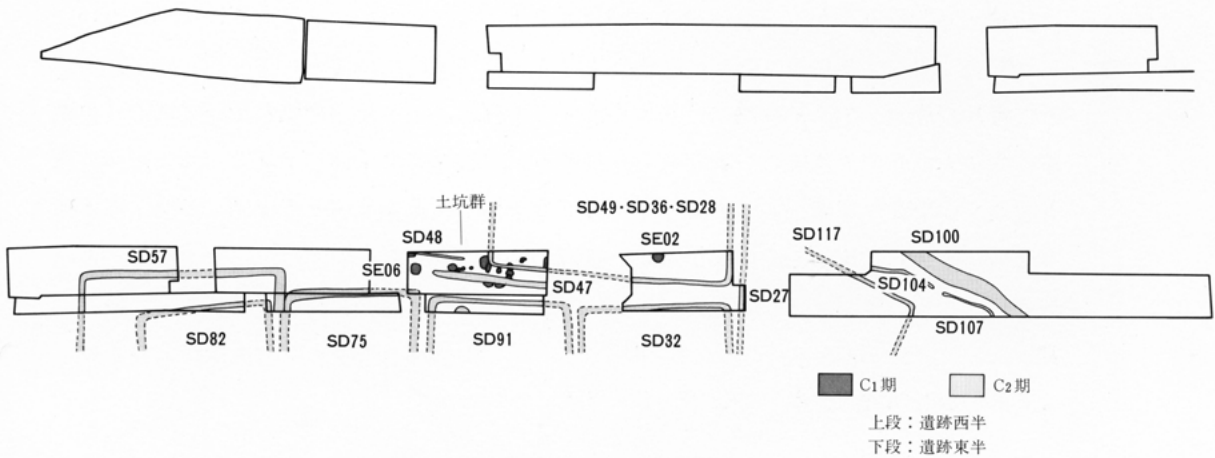
A 期の遺構



B 期の遺構



C 期の遺構



第2節 尾張国分寺系瓦について

1. はじめに

尾張地方の古代寺院は約40ヶ寺が確認されている。しかしながら発掘調査がおこなわれた寺院は少なく、瓦の散布地が寺院跡であるのか、官衙跡であるのか、あるいは瓦窯であるのかさえも明らかでない場合が多い。また瓦の研究もこのような状況下では軒瓦中心の採集資料にたよるところが大きく、瓦当文様に主眼が注がれてきた。今回、堀之内花ノ木遺跡の調査で尾張国分寺の瓦が多量に出土したことを契機に、寺院の瓦の大部分を占める平瓦、丸瓦についておおまかな分類をおこなった(第3章第2節)。その結果をもとに尾張国内を概観することで、軒瓦以外の視点を模索してみたい。

小論では、まず尾張国分寺関連の瓦研究について概観し、軒瓦、平瓦、丸瓦の順に検討をすすめる。

2. 研究抄史

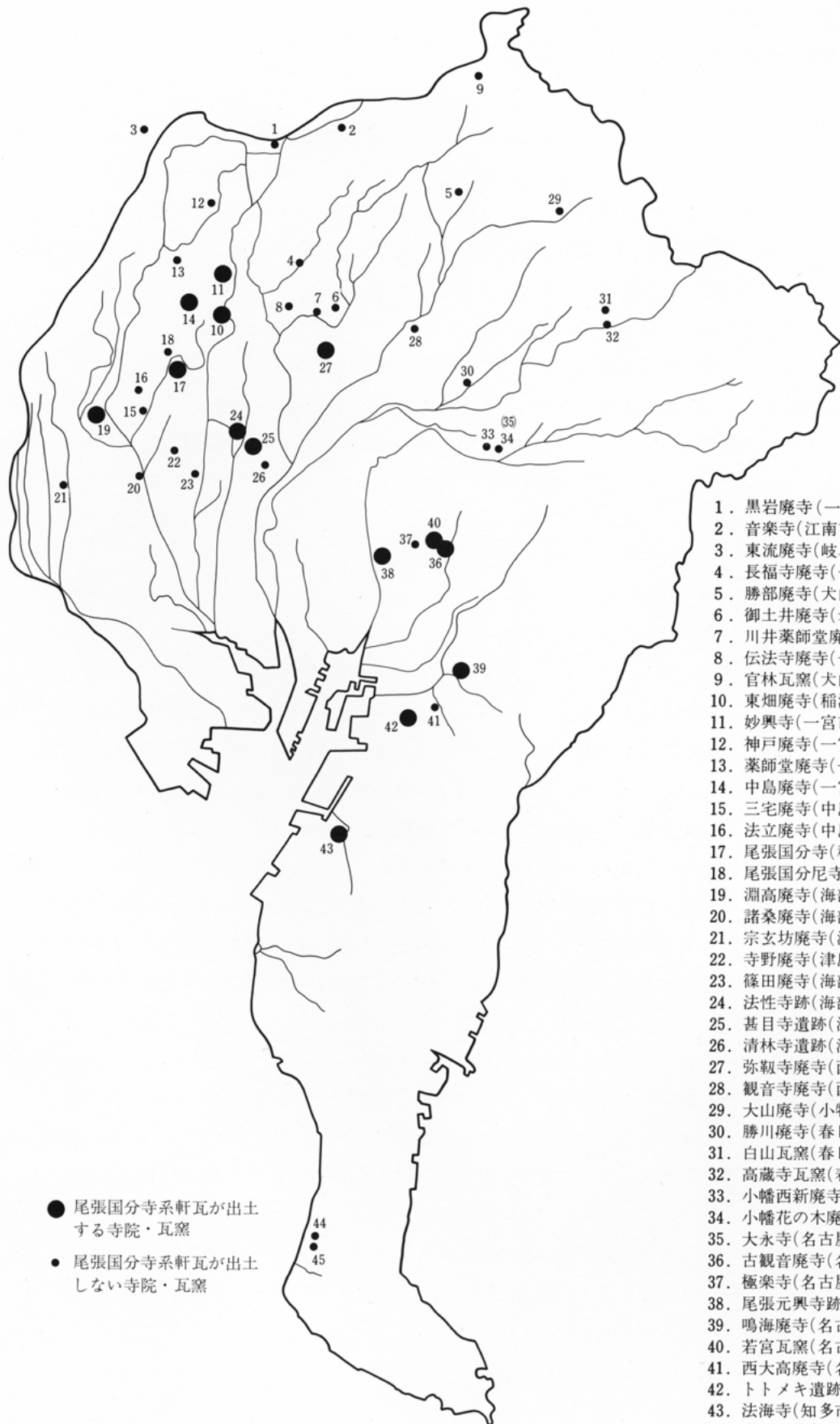
創建瓦の
設定

同型瓦の
分布

尾張国分寺の軒瓦は、昭和36年の発掘調査成果に基づく稲垣晋也氏の型式分類以来、新たな型式の追加は認められない(稲垣1968)¹⁾。稲垣氏は奈良時代の軒瓦の組合わせを昭和55年、奈良国立博物館特別展『国分寺』で軒丸瓦MⅢ・軒平瓦HⅠ-B、軒丸瓦MM-A・軒平瓦HⅢ-Aの2組に修正し、前者を創建瓦とした²⁾。また梶山 勝氏は名古屋市博物館館門展『尾張の古代寺院と瓦』(昭和60年開催)における新知見をもとに、稲垣氏の論を踏まえつつ、尾張国分寺の軒瓦と同型瓦をもつ寺院の分布について論考している(梶山1991)³⁾。そのなかで梶山氏は尾張南部の寺院に同型瓦が多く分布することから、その地方の豪族が国分寺造営に大きく貢献した可能性を指摘した。さらに大安寺式軒瓦の組合せを創建瓦の1つに加え、平城宮式や大安寺式など新来の製作技術が当地方の軒瓦に大きな変革を与え、このことは尾張国内の地方豪族の造寺活動と密接な関係をもつとも指摘している。

国分寺建立
の背景

その後、平成4年に第9回東海埋蔵文化財研究会「古代仏教東へー寺と窯ー」が開催され、愛知、岐阜、三重、静岡の研究成果が報告された。そのなかで梶山氏は尾張国の白鳳期の寺院を軒瓦の型式から、素弁蓮華文軒丸瓦が特徴の尾張北東部、美濃と関係が深い復弁蓮華文が特徴の北西部、素弁蓮華文で重圈縁をもつ軒丸瓦が特徴の伊勢湾を巡る南部の3勢力に区分し、政治的配慮によって、勢力の接触地点である中島郡に国府、国分二寺が設置された可能性があることを指摘した⁴⁾。これと同様の見解は服部信博氏によって後期古墳、式内社、寺院の分布密度から、在地勢力の弱い中島郡への中央勢力進出が論じられている(服部1993)⁵⁾。



1. 黒岩廃寺(一宮市)
2. 音楽寺(江南市)
3. 東流廃寺(岐阜県羽島郡笠松町)
4. 長福寺廃寺(一宮市)
5. 勝部廃寺(犬山市)
6. 御土井廃寺(岩倉市)
7. 川井薬師堂廃寺(岩倉市)
8. 伝法寺廃寺(一宮市)
9. 官林瓦窯(犬山市)
10. 東畑廃寺(稲沢市)
11. 妙興寺(一宮市)
12. 神戸廃寺(一宮市)
13. 薬師堂廃寺(一宮市)
14. 中島廃寺(一宮市)
15. 三宅廃寺(中島郡平和町)
16. 法立廃寺(中島郡平和町)
17. 尾張国分寺(稲沢市)
18. 尾張国分尼寺(稲沢市)
19. 淵高廃寺(海部郡佐織町)
20. 諸桑廃寺(海部郡佐織町)
21. 宗玄坊廃寺(海部郡立田村)
22. 寺野廃寺(津島市)
23. 篠田廃寺(海部郡美和町)
24. 法性寺跡(海部郡甚目寺町)
25. 甚目寺遺跡(海部郡甚目寺町)
26. 清林寺遺跡(海部郡甚目寺町)
27. 弥勒寺廃寺(西春日井郡西春町)
28. 観音寺廃寺(西春日井郡豊山町)
29. 大山廃寺(小牧市)
30. 勝川廃寺(春日井市)
31. 白山瓦窯(春日井市)
32. 高蔵寺瓦窯(春日井市)
33. 小幡西新廃寺(名古屋市守山区)
34. 小幡花の木廃寺(名古屋市守山区)
35. 大永寺(名古屋市守山区)推定地
36. 古観音廃寺(名古屋市昭和区)
37. 極楽寺(名古屋市昭和区)
38. 尾張元興寺跡(名古屋市中区)
39. 鳴海廃寺(名古屋市長区)
40. 若宮瓦窯(名古屋市昭和区)
41. 西大高廃寺(名古屋市長区)
42. トトメキ遺跡、名和廃寺(東海市)
43. 法海寺(知多市)
44. 奥田廃寺(知多郡美浜町)
45. 奥田瓦窯(知多郡美浜町)

● 尾張国分寺系軒瓦が出土する寺院・瓦窯
 ○ 尾張国分寺系軒瓦が出土しない寺院・瓦窯

第54図 尾張の古代寺院分布図

3. 尾張国分寺系軒瓦

近年増加した尾張国内の古代寺院調査成果を受けて尾張国分寺使用の軒瓦について整理しておきたい。すでに尾張国分寺使用の軒瓦の中でその幾つかが同範資料を持つことが指摘されている。他の寺院におけるこうした尾張国分寺使用の軒瓦との組み合わせを考慮しつつ、ここでは今回の発掘調査成果を踏まえてその変遷をまとめてみることにしたい。

(1) 4つのグループ

尾張国分寺使用の軒瓦は、すでに尾張国分寺第1次の調査により稲垣氏によって軒丸瓦が9型式に、軒平瓦が8型式に分類されている。⁶⁾ 今回の調査によってもこの枠を外れる資料の追加は認められない。これらの資料を同範資料が出土した各寺院での組み合わせや梶山氏の研究⁷⁾に基づき4つのグループにあらためてまとめることができる。それらは概ね組み合わせとデザインの共通性によって分類されるもので、A・B・C・Dグループとする。

各グループ の特徴

Aグループは軒丸瓦MⅠ・Ⅱ型式を含め、現状では軒平瓦は不明瞭である。稲沢市東畑廃寺にMⅠ型式が存在する。尾張国分寺使用軒瓦では資料的にCグループとともに少数派に属する。

Bグループは尾張国分寺使用の軒瓦の中核をなすもので、さらに3つに細分する。B₁は軒丸瓦MⅢ型式、軒平瓦HⅠ-A・B型式の組み合わせが考えられる。B₂は軒丸瓦ではMN型式、軒平瓦ではHⅠ-C・HⅢ・HN型式を含めて考える。最も同範関係が多いもので、尾張国内ではその使用が高い一群の軒瓦といえよう。B₃は軒丸瓦MⅦ・Ⅷ型式、軒平瓦ではHV・HM・HⅦ・HⅧ型式を含める。

Cグループは軒丸瓦MV・MV型式、軒平瓦HⅡ型式の組み合わせが相当する。前述したようにHⅡ-A型式は平城宮6712-C型式と同範であり、梶山論文では奈良大安寺系として指摘されたものである。現在の調査段階の資料に基づけば、量的には少数派に属する。

Dグループとしたものは軒丸瓦MK型式である。その他、系統的な問題から特徴的なハート型子葉素弁四葉文系統のデザイン(以下四葉文系)を全て含めて考える。さらに軒平瓦として尾張国分寺HN型式からの変化を想定できる、法性寺に代表される軒平瓦(以下法性寺系)も含めることになる。尾張南部に多く分布する特異な一群の資料と考えられる。

以上の4つのグループを広義の尾張国分寺系軒瓦とし、その中核となるBグループを狭義の尾張国分寺系軒瓦と呼ぶことにする。ここでは特に断わらないかぎり「尾張国分寺系軒瓦」とは前者を意味する。

(2) 段階

以上の4つのグループがいかなる系統的な変遷を示すものかを考えて行きたい。それには量的にも最も多くを占め、主体的な軒瓦という位置づけが可能なBグループでの変化を見通すことから始める必要があるだろう。つまり狭義の尾張国分寺系軒瓦の動向が、尾張国分寺系の瓦製作を物語っていると考えられるからである。

さてB₁グループとしたMⅢ型式とHⅠ型式の組み合わせが、尾張国分寺創建瓦という位置づけは、その系統的な変遷を考慮しても最も妥当な見解と考えられる。現状では尾張国分寺以外に同范資料を確認できず、尾張国分寺創建に際し新たに創出されたデザインと考えられる。今回の発掘調査では、興味深いことにSD13資料の中ではB₁グループとした資料以外の軒瓦を確認できず、この組み合わせが最も遡る資料であることをあらためて確認させる良好な事例と考えたい。つまりそこにはB₂・B₃グループが存在しておらず、この時点ではあるいはB₂・B₃グループが製作されていない可能性すら考えられるのであ

1段階・2段階
る。今ここでSD13への廃棄段階を1つの契機として、前後の2時期に細分する。前者を尾張国分寺系軒瓦1段階とし、後者を2段階とする。

尾張国分寺系軒瓦2段階の資料はB₂・B₃グループを総括するが、ここで注目したいのは、文献資料による国分寺焼失記事(884年)に関連するSE03出土資料である。SE03からは第22表のような軒瓦が出土している。つまりMⅦ型式、HⅥ・Ⅷ型式といったB₃グループが主体的な在り方を示す傾向が窺える。するとB₂グループとB₃グループとは若干時期的な隔たり(2段階古相・新相)を想定できないこともない。今後の資料の増加をまって細分が可能である点を指摘しておきたい。

さて最後にDグループの所属の問題である。海部郡甚目寺町法性寺での組み合わせを前提に考えると、軒平瓦HⅣ型式と法性寺系軒平瓦とはその変遷に系統的な前後関係のあることが容易に推察できよう。また尾張国分寺軒丸瓦MⅩ型式が極めて少量である点を踏まえると、Dグループの製作が尾張国分寺系軒瓦2段階新相を大きく遡ることは考えられない。そこで特徴的な四葉文系軒丸瓦の製作を第3段階と考えておきたい。

3段階

以上から尾張国分寺系軒瓦の製作環境を1～3段階に区分できたことになる。

(3) 製作年代

1段階の年代
尾張国分寺系軒瓦第1段階を創建～SD13廃棄段階と考えると、その年代幅はSD13共伴資料を基にすると鳴海32号窯式～折戸10号窯式期に比定でき、8世紀後半期の内にあると考えることができよう。さらに限定し749年の生江臣安久多の記事を考慮すると、この

2段階の年代
段階における創建瓦(B₁グループ)の製作を十分に想定できよう。次に2段階であるが、最も注目すべき資料はやはりSE03出土資料である。共伴した灰釉陶器は黒笹90号窯式期であり、尾張国分寺焼失記事(884年)がこの段階を包含する時期であると考え、2段階はそれ以前ということになり、井ヶ谷78号窯式・黒笹14号窯式期がその中心的な時期と考えることが可能となる。さらに関連記事を参照すれば、前述したようなSD13廃棄が

3段階の年代

775年の異常風雨記事に深く関係する出来事であると考え、この時点以降に第2段階を想定できることになる。ここではおおむね8世紀末葉～9世紀前葉を中心として考えておきたい。すると第3段階を9世紀中葉～後葉にかけての時期に想定できるようであり、尾張国分寺軒丸瓦MK型式が国分寺が焼失したとされる884年段階ですでに使用されていた点を踏まえると、四葉文系の成立を9世紀末葉段階にまで下げて考える必要はないものと思われる。以上の系統的な変遷を図化したものが第55図である。

(4) 軒瓦の系譜

ところでAグループ及びCグループについては、今回の調査においても具体的な手掛かりを得ていない。ただMV型式がSD13資料の中に見出しえる点は留意したい。またデザイン的な視点を優先させるとやはり創建段階である第1段階に遡らせる必要がある。すると第1段階ではB₁グループを中核としてその周縁にA及びCグループの参画があったことになる。Cグループが奈良大安寺系である点を強調し、この時点における新技術導入の背景とする見解は傾聴に値するものである。⁸⁾ここではこうした視点を踏まえて以下のよう

小結

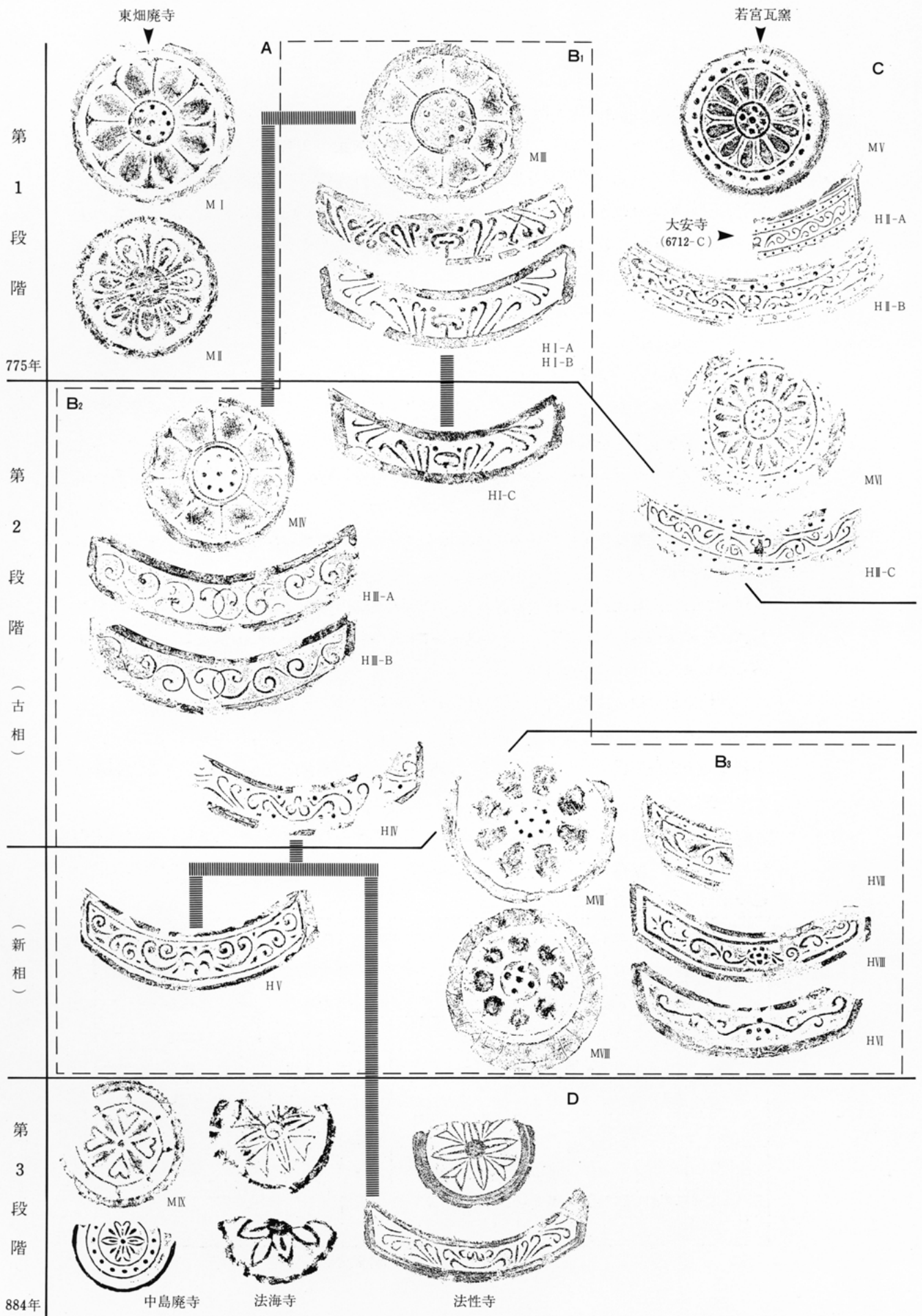
尾張国分寺系軒瓦第1段階では創建を含めて、複数の外的なデザイン・技術の導入が計られ、その中核としてB₁グループが選定された。同時に後述する平瓦一枚作りの製作があらたに導入されることになる。

8世紀末葉の第2段階になると、尾張国分寺の造改築とともにB₂・B₃グループがB₁グループのデザインを踏襲しつつ創作される。その時点での画期は尾張南部に尾張国分寺系軒瓦同範資料が拡散する点である。この時点で始めて尾張国分寺を中心とする瓦製作の普及が想定できる。

最後に9世紀中葉以降の第3段階である。これに係わる四葉文系軒丸瓦は中島郡を中心に分布し、その分布の背景が今後問題となろう。ここでは尾張国分寺系軒瓦の新たな独自色の創出として評価したい。

グループ	軒丸瓦		軒平瓦		
A	M I	東畑庵寺			
	M II				
B	1	A	H I	A	
		B		B	
		C			
	2	M V	A 淵高庵寺・大永寺	H I	C 鳴海庵寺
		B	妙興寺・鳴海庵寺	H III	A 淵高庵寺・大永寺 B 名和庵寺
	3	M VII	甚目寺	H IV	東畑庵寺・淵高庵寺
				H V	東畑庵寺
		M VIII		H VI	東畑庵寺
C	M V	元興寺・古観音庵寺 若宮瓦窯	H VII	鳴海庵寺	
	M VI		H VIII	名和庵寺	
				A 奈良大安寺	
D	四葉文	国分寺(MK)・法性寺 法海寺・中島庵寺 弥勒寺庵寺			

第31表 尾張国分寺系軒瓦分布一覽



第55図 尾張国分寺系軒瓦変遷図

4. 平瓦一枚作り製作について

尾張国分寺の調査による平瓦分析においては、資料のすべてが基本的には一枚作りのものであった。そこでこうした平瓦一枚作り製作が、どのような経緯で尾張国分寺に採用されていったのかが、次に問題となる点であろう。尾張地域の古代寺院を概観すると、むしろその多くの寺院が一枚作り平瓦を主体として採用しておらず、こうした寺院との関係が問題となり、いかなる時点から尾張地域において平瓦一枚作りが行なわれていったのかを考えてみる必要がある。そのためにはまずは尾張における平瓦製作の分類から始めなければならない。

(1) 平瓦分類

ここでは以下のような基本的な製作技法を基にした分類を行なうに留めたい。それは尾張地域の古代寺院をとりあえず概観するにはこの程度でも有効と考えるからである。分類の基本は製作技法にあり、まず基本的な点で桶巻き作りと一枚作りに大きく大別できる点は周知のことである。さらにその製作時に使用する粘土の状況によって、粘土板と粘土紐に2分できる。製作手順に添えばその後凸面の調整、さらに分割、凹面の調整、端側面の調整等と連続するのであるが、ここではその内の凸面調整法と凹面調整法に限定して考えることにした。なお端側面の調整は補足的に使用する。こうした製作手順の組み合わせによって複数の群が認められ、それを以下のように整理する。まず大きく使用粘土形態と製作台の組み合わせによりⅠ～Ⅳ類の4つに大別する。

分類 Ⅰ類は粘土板桶巻き作りを基本とするもの。

Ⅱ類は粘土紐桶巻き作りのもの。

Ⅲ類は粘土板凹型桶台作りのもの。

Ⅳ類は粘土板一枚作りのものである。

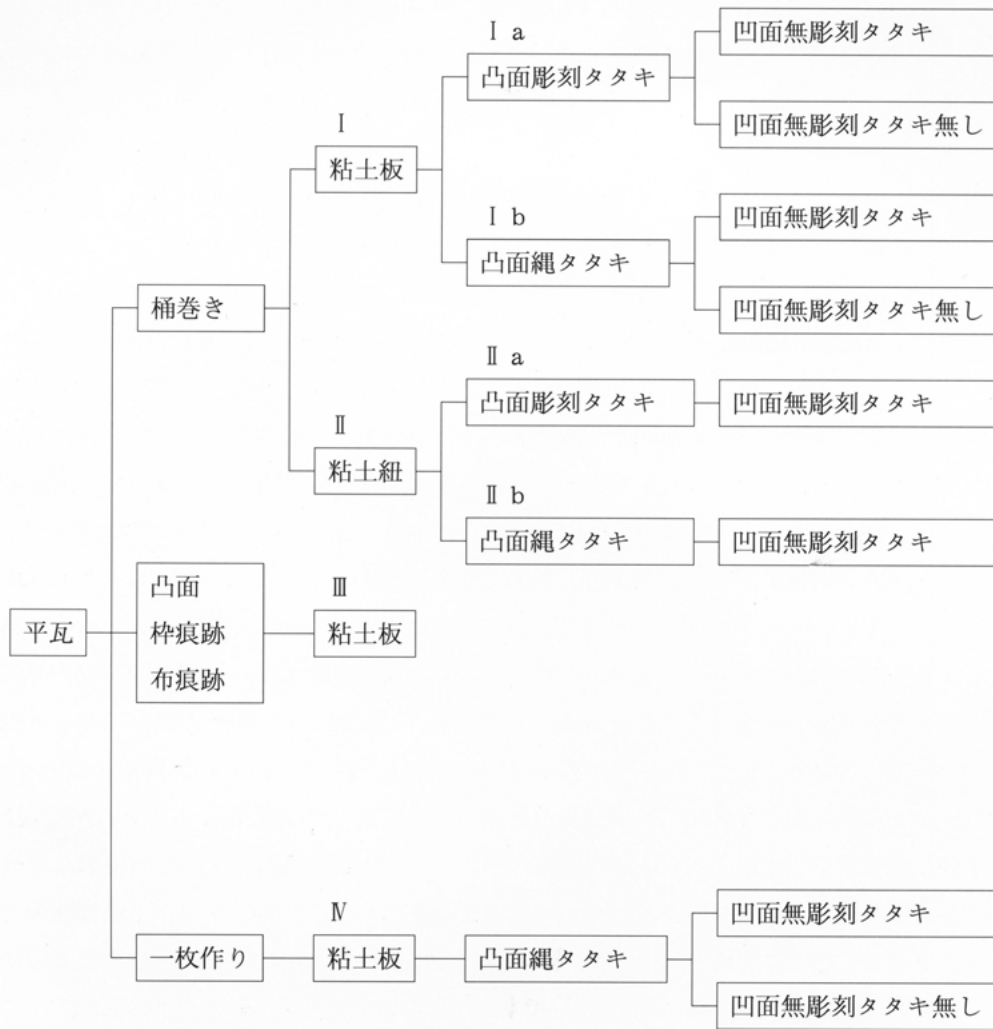
細分 こうした大分類をさらに製作技法・道具によって細分する。Ⅰ類は凸面調整の道具によって彫刻タタキ(Ⅰa)と縄タタキ(Ⅰb)に2分できる。さらにⅠ類は凹面調整における無彫刻タタキの有無や、凸面タタキのナデ調整等の有無によって、製作手順の微妙な差異が認められ、その組み合わせと順序によって系統的な変遷が類推できる。Ⅱ類はやはり凸面調整の道具によって彫刻タタキ(Ⅱa)と縄タタキ(Ⅱb)に2分できる。さらにその他の手順を概観すると、特に凹面調整における無彫刻タタキはかなり普遍的に認められ、その有無という視点よりもⅡ類の基本技法として凹面無彫刻タタキが位置づけられる。Ⅱaとした凸面彫刻タタキを使用するものは極限られ、粘土紐を使用する特徴的な製作法であるⅡ類はⅡb類凹面彫刻タタキという単一技法で総括できる。Ⅲ類はいわゆる「凸面に杵圧痕・布目」を留める一群の平瓦製作技法である。濃尾平野では従来から岐阜
法海寺の凸
面布目瓦
県関市の弥勒寺出土平瓦が著名であったが、今回あらたに知多市法海寺にその使用を確認することができた⁹⁾。その系譜も大変興味深いものがある。Ⅳ類は尾張国分寺に採用された

平瓦一枚作りであり、粘土板・凸面平行縄タタキ・凹面無彫刻タタキという一連の製作手順による技法によって総括でき、ここでは細分は行なわない。しかし離れ砂・端側面の調整・大きさ・形態・厚さ等により、形状の細分類は可能ではある。

(2) 尾張国内の状況

尾張国内での平瓦の採用を概観してみると、第32表のようにまとめることができる。一寺院には複数の平瓦類が使用されることがむしろ普遍的に認められるのではあるが、その使用比率には一般に大きな偏りが存在することは多くの事例によって明らかにされている。しかし一方で2ないし3つに均衡する比率を示すものもまた存在する。例えば後者の事例としては春日井市に存在する勝川廃寺はその典型的なもので、本分類におけるⅠb類とⅡb類が、それぞれの軒瓦類を伴ない勝川廃寺使用瓦類を構成する!¹⁰⁾ こうした具体的な事例を踏まえて、あらためて尾張地域の古代寺院を概観すると、平瓦分類の分布に興味深い小地域的なまとまりが存在することが確認できる。今これらを大きく6地区に区分して考えてみたい。まず葉栗郡周辺であるが、音楽寺・黒岩廃寺・花井薬師堂廃寺等には粘土板桶巻き彫刻タタキのⅠa類が存在し、尾張国内でも最も古い瓦製作の可能性を残す一群のまとまりが存在する。これらには美濃地域の平瓦製作と同調する部分も多いように思われる。次に丹羽郡西部地区で、長福寺廃寺・御土井廃寺・伝法寺等には粘土板桶巻き縄タタキのⅠb類が主体を占める。その東側である春部郡では勝川廃寺・川井薬師堂廃寺・大山廃寺といったように粘土紐桶巻き凸面縄タタキ凹面無彫刻タタキの特徴的なⅡb類が分布する。その一方で海岸部では、まず海部郡を中心にⅠb類とした粘土板桶巻き凸面縄タタキが主体的に分布し、その東方の愛智郡ではⅠa類とした粘土板桶巻き凸面彫刻タタキが多く分布する。なおⅢ類が存在する法海寺はこの地区に所在するが、法海寺の主体的な平瓦はⅠa類である。こうした分布の中で、海岸部と犬山扇状地に分布するⅠ類平瓦分布域に挟まれた空白域である中島郡には、尾張国分寺を代表としてⅣ類である粘土板一枚作り凸面縄タタキ凹面無彫刻タタキの一群の平瓦が多く分布することになる。

以上のおおまかな分布を概観すると、春部郡・中島郡以外の地区は基本的にはⅠ類とした粘土板桶巻き技法を用いる瓦が広く分布する地区ということになる。その中では凸面タタキの道具としては彫刻と縄の違いが表面化することになるのであるが、なお日光川・五条川水系には縄タタキが主体的に分布するという見方もできよう。すると彫刻タタキの分布はアユチ瀉周辺部と葉栗郡という異なる2つの小地区での分布といった図式も認められる。後者は美濃地域との関係が、前者は伊勢地域との関係も考慮しなければならないのかもしれない。いずれにしろこうした基本的な分布を系統的なものとして置き換えると、まずはその内部での平瓦分類の細分とその変遷を考えねばならない。そしてその後初めて他の地区との比較検討を行ない尾張全体の平瓦製作の変遷表が出来上がるものとする。こうした基本的手順を踏まない分類時期区分は、混乱を導きだすだけであり避けるべきであろう。



分類	寺	院
I	a	花井薬師堂廃寺. 清林寺. 元興寺. 法海寺. 名和廃寺 (トメキ遺跡). 西大高廃寺. (音楽寺)
	b	黒岩廃寺. 長福寺. 妙興寺. 伝法寺. 諸桑廃寺. 篠田廃寺. 勝川廃寺. 甚目寺. 寺野廃寺. 小幡西新廃寺. (東畑廃寺)
II	a	勝川廃寺. 大山廃寺. 川井薬師堂廃寺.
	b	(黒岩廃寺)
III	法海寺	
IV	尾張国分寺. 中島廃寺. 淵高廃寺. 東畑廃寺. 小幡花ノ木廃寺. 法性寺. 法海寺. 鳴海廃寺. (諸桑廃寺). (大山廃寺).	

第32表 平瓦分類表

(3) 製作時期

ここでは一枚作りの製作時期について特に検討を加えておきたい。一枚作りの分布は第32表のようになるが、その内中島郡での一枚作りをまず観察して行くと、その分布する寺院は尾張国分寺系軒瓦の分布と基本的には一致する傾向が窺える。尾張国分寺系軒瓦が存在する寺院では必ず平瓦Ⅳ類が主体的に採用され、その逆は基本的には存在しない。また前述した尾張国分寺系軒瓦の変遷を考慮すると、明らかに尾張国分寺における一枚作り製作を著しく遡るような資料が、尾張地域では確認できないのが現状と考えられる。つまり中島郡に分布が偏る平瓦Ⅳ類は、尾張国分寺の造営を1つの契機として導入され、普及して行ったと帰結するのが、最も妥当な見解と思われる。

中島郡のⅣ類

元興寺

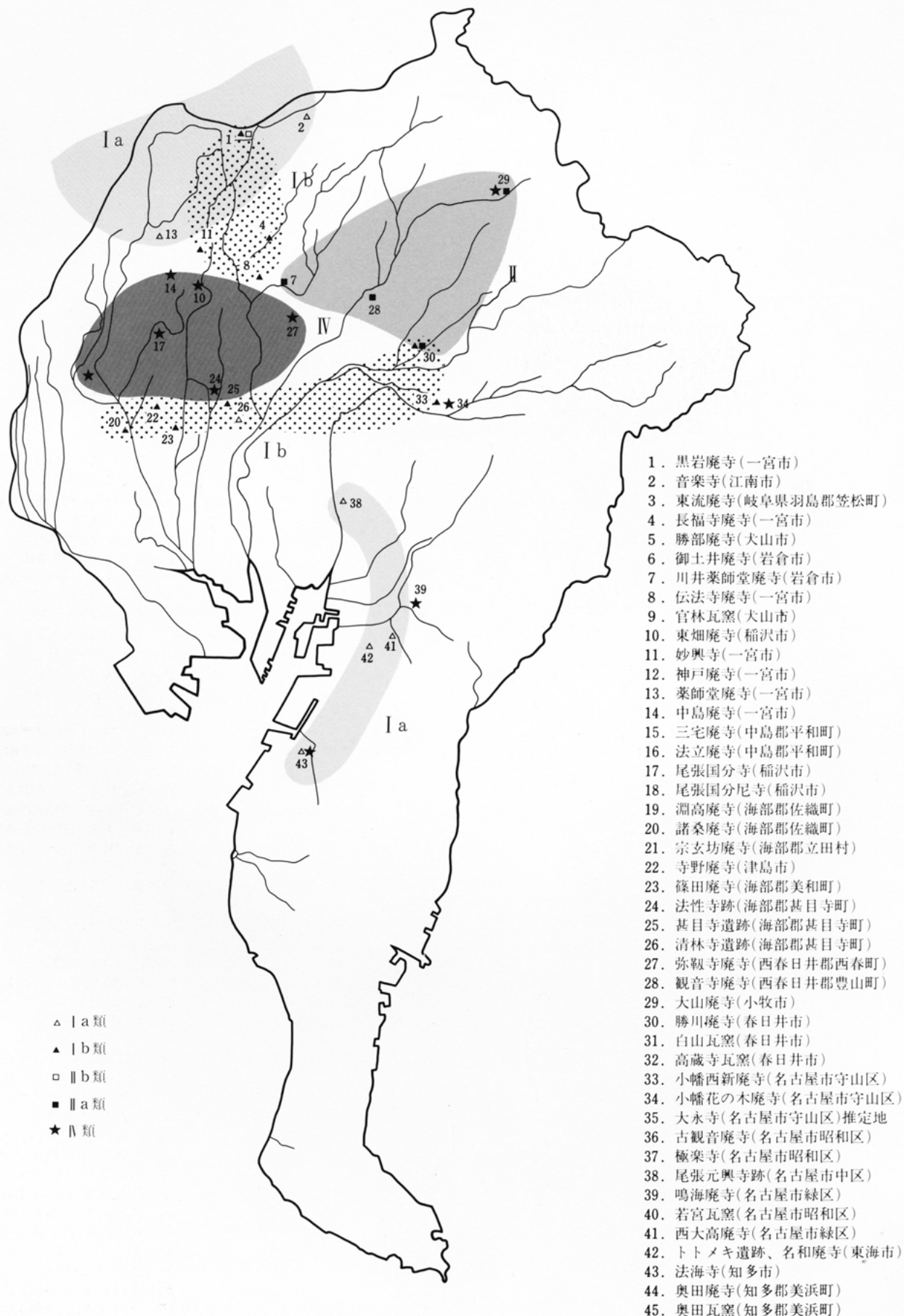
大山廃寺

甚目寺

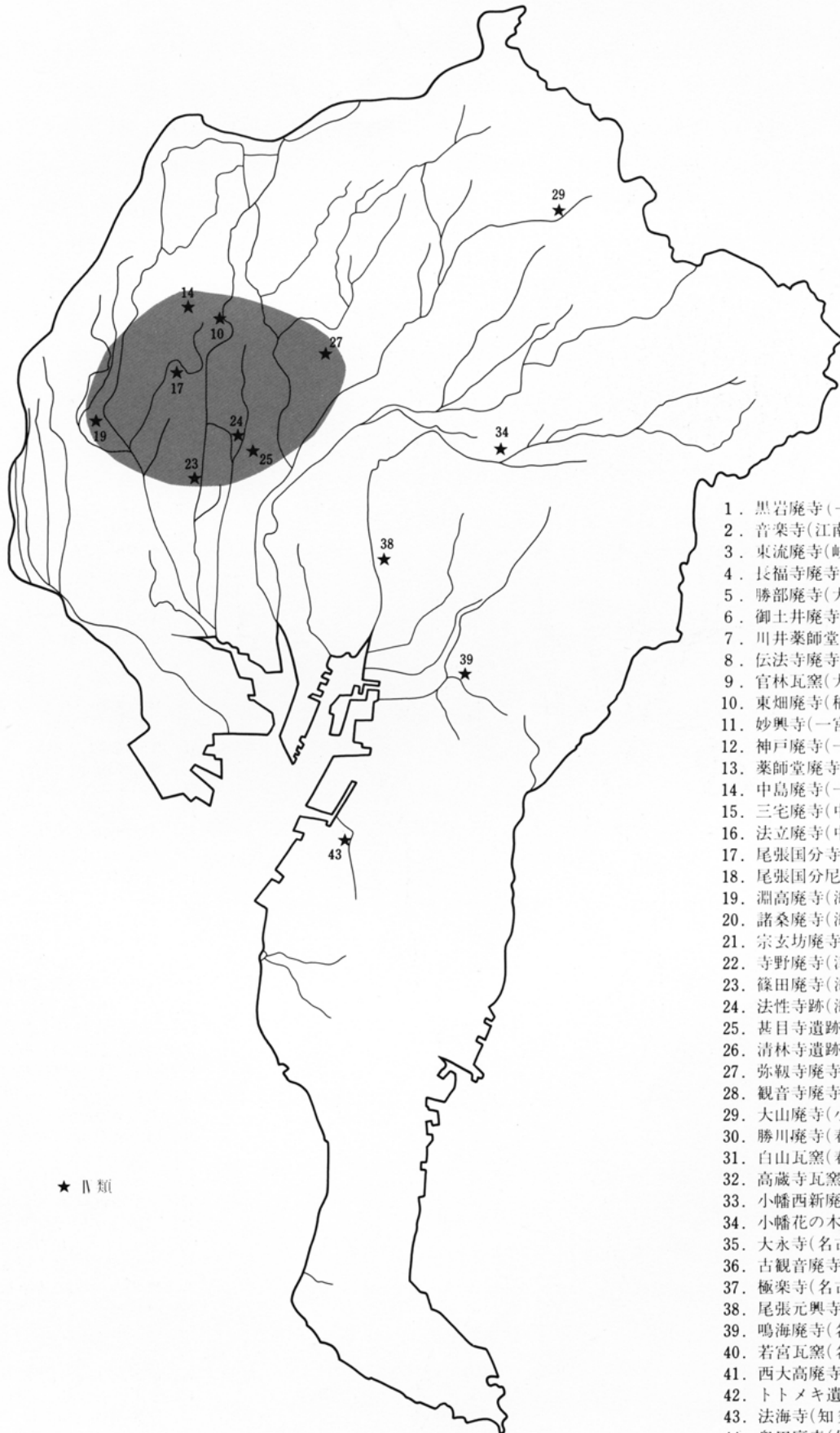
ところで尾張国分寺に採用された平瓦一枚作りとは、やや趣を異にするⅣ類も尾張国内では確認できる。まず尾張元興寺に存在する一群の一枚作り平瓦である(尾張元興寺分類Ⅴ類)。ここでの資料は特に凹面無彫刻タタキが行なわれない資料が目立ち、中島郡に広く展開する一枚作りには必ず明瞭に凹面無彫刻タタキを行なう点と異なる。次に大山廃寺出土の資料がある。凹面無彫刻タタキはむしろ顕著に施されるのであるが、凸面の縄タタキにおける縄目の粗さが目立ち、さらに離れ砂が確認されない。最後に甚目寺の資料である(甚目寺分類Ⅲ類)。甚目寺の一枚作りは、その側面調整に特徴が存在する。つまり平瓦Ⅳ類の側面調整は、一律に凹型整形台に沿った調整のために著しい斜面を形成するのであるが、甚目寺資料は桶巻き技法分割と同じく垂直になることが多い。また凹面調整に無彫刻タタキやナデといった多様な形態をもつようである。以上の内で、大山廃寺のみは尾張国分寺系軒瓦が確認されていない唯一例外的なⅣ類使用寺院である。他の2者からは尾張国分寺系軒瓦が出土しており、特に尾張元興寺は尾張国分寺の廃絶(884年)に伴ないその機能を移管すると記録された寺院でもある。これらの寺院での一枚作りは大山廃寺以外はその使用も極めて客体的であり、著しくⅣ類の使用を遡らせるような積極的な資料は存在しないようである。こうした諸点を総合すると、尾張国分寺に使用された一群の平瓦粘土板一枚作りが最も安定した製作環境と想定でき、さらにその分布も中島郡に集中する。したがって尾張国分寺使用平瓦をⅣ類の中心的な存在、かつ中心的な分布域と考える点は許されるであろう。するとその周辺部における資料として大山廃寺・甚目寺・尾張元興寺が位置づけられることになる。こうした周縁資料の中に尾張国分寺Ⅳ類に先行する資料を見出す要因は現状では存在しない。したがって尾張国分寺の成立が溝SD13の資料から鳴海32号窯式内に存在すると考えると、尾張国における一枚作りの本格的な導入はこの時点まで待たねばならないことになる。それはおおむね奈良時代の8世紀中葉と考えておくことができよう。

生産地の状況

次に生産地における状況を見ておくと、すでに指摘しておいたように篠岡窯において大きな変化を窺い知れる。¹¹⁾つまり奥山久米寺軒丸瓦との同范が指摘された資料が共伴した篠岡2号窯と篠岡78号窯の使用は、凸面スリケン調整が施された粘土板桶巻き技法のⅠ類であるが、篠岡66号窯資料は明らかに一枚作りのものでⅣ類に所属する。ただしその形態



第56図 平瓦分類分布図



1. 黒岩魔寺(一宮市)
2. 音楽寺(江南市)
3. 東流魔寺(岐阜県羽島郡笠松町)
4. 長福寺魔寺(一宮市)
5. 勝部魔寺(犬山市)
6. 御土井魔寺(岩倉市)
7. 川井薬師堂魔寺(岩倉市)
8. 伝法寺魔寺(一宮市)
9. 官林瓦窯(犬山市)
10. 東畑魔寺(稲沢市)
11. 妙興寺(一宮市)
12. 神戸魔寺(一宮市)
13. 薬師堂魔寺(一宮市)
14. 中島魔寺(一宮市)
15. 三宅魔寺(中島郡平和町)
16. 法立魔寺(中島郡平和町)
17. 尾張国分寺(稲沢市)
18. 尾張国分尼寺(稲沢市)
19. 淵高魔寺(海部郡佐織町)
20. 諸桑魔寺(海部郡佐織町)
21. 宗玄坊魔寺(海部郡立田村)
22. 寺野魔寺(津島市)
23. 篠田魔寺(海部郡美和町)
24. 法性寺跡(海部郡甚目寺町)
25. 甚目寺遺跡(海部郡甚目寺町)
26. 清林寺遺跡(海部郡甚目寺町)
27. 弥勒寺魔寺(西春日井郡西春町)
28. 観音寺魔寺(西春日井郡豊山町)
29. 大山魔寺(小牧市)
30. 勝川魔寺(春日井市)
31. 白山瓦窯(春日井市)
32. 高蔵寺瓦窯(春日井市)
33. 小幡西新魔寺(名古屋市守山区)
34. 小幡花の木魔寺(名古屋市守山区)
35. 大永寺(名古屋市守山区)推定地
36. 古観音魔寺(名古屋市昭和区)
37. 極楽寺(名古屋市昭和区)
38. 尾張元興寺跡(名古屋市中区)
39. 鳴海魔寺(名古屋市緑区)
40. 若宮瓦窯(名古屋市昭和区)
41. 西大高魔寺(名古屋市緑区)
42. トトメキ遺跡、名和魔寺(東海市)
43. 法海寺(知多市)
44. 奥田魔寺(知多郡美浜町)
45. 奥田瓦窯(知多郡美浜町)

★Ⅳ類

第57図 平瓦Ⅳ類(一枚作り)分布図

・製作は尾張国分寺系統とは異なる。篠岡2号窯はその出土した須恵器から岩崎17号窯式に併行することが指摘されている。同様に篠岡78号窯は岩崎41号窯式併行の標識資料である。篠岡66号窯はやや幅をもつものの須恵器杯蓋の特徴は鳴海32号窯式を著しく遡る資料ではない。すると尾北窯の編年では高蔵寺2号窯式の段階までの中で確実に平瓦一枚作りを行なった形跡は認め難いのである。以上のようにおおまかなところ消費地と生産地（篠岡古窯では瓦焼成は極めて限定される）において、尾張国内では7世紀前葉以前に一枚作り製作が遡る可能性は極めて少ないことになろう。このような点を総合すると、尾張国分寺の造営に伴ない平瓦一枚作りが新たに尾張国内に導入されたとした上記の見解を裏

IV類の年代観

付けることになろう。さらに加えれば尾張国分寺系統のIV類平瓦そのものの製作年代は、灰釉陶器生産の段階まで下降する積極的な資料も認め難い。つまり尾張国分寺系統のIV類平瓦の生産を鳴海32号窯式・折戸10号窯式を中心とする8世紀中葉～後葉に位置づけることができるようであり、全体的には桶巻き作りから一枚作りへの変換点をこの時点に求めて考えておきたい。以上の見通しは尾張国内ではIV類をもって时期的な指標と考える手掛かりを得たことにもなる。

5. 丸瓦製作について

今回の調査で出土した丸瓦は、行基丸瓦（KA I）、側面調整c手法の玉縁丸瓦（KA II a）、側面調整a. b手法の玉縁丸瓦（KA II b）の3つに分類した（第3章第2節）。このうちKA Iは、出土量から考えても丸瓦の主体にはなり得ず、尾張国分寺では玉縁丸瓦が採用されたことが明らかであり、さらに7：3の比率で側面調整a. b手法の玉縁丸瓦（KA II b）が優勢である。ここでは尾張国分寺における丸瓦の様相が、尾張地域の古代寺院建立のなかで、いかなる位置に属するのかを考えてみたい。

（1）丸瓦分類

尾張地域の古代寺院について丸瓦にスポットをあてて考える際、製作技法から基本的な分類を行う必要がある。丸瓦は行基丸瓦と玉縁丸瓦に大別でき、さらに使用する粘土の形状によって、粘土板と粘土紐に2分できる。この組合せによりI～IV類に大きく分類する。

分類

I類は行基丸瓦で粘土板から製作されるもの。

II類は行基丸瓦で粘土紐から製作されるもの。

III類は玉縁丸瓦で粘土板から製作されるもの。

IV類は玉縁丸瓦で粘土紐から製作されるもの。

細分

この分類を凸面調整（タタキ）、分割後の側面処理を要素として細分する。I類は凸面調整の道具によって彫刻タタキ（IA）、縄タタキ（IB）、ハケ目（IC）、さらに側面の処理手法（a～c手法）に細分する。II類は尾張地域において、現在までのところ出土例を知らない。III類は凸面調整の道具によって彫刻タタキ（III A）、縄タタキ（III B）、さらに側

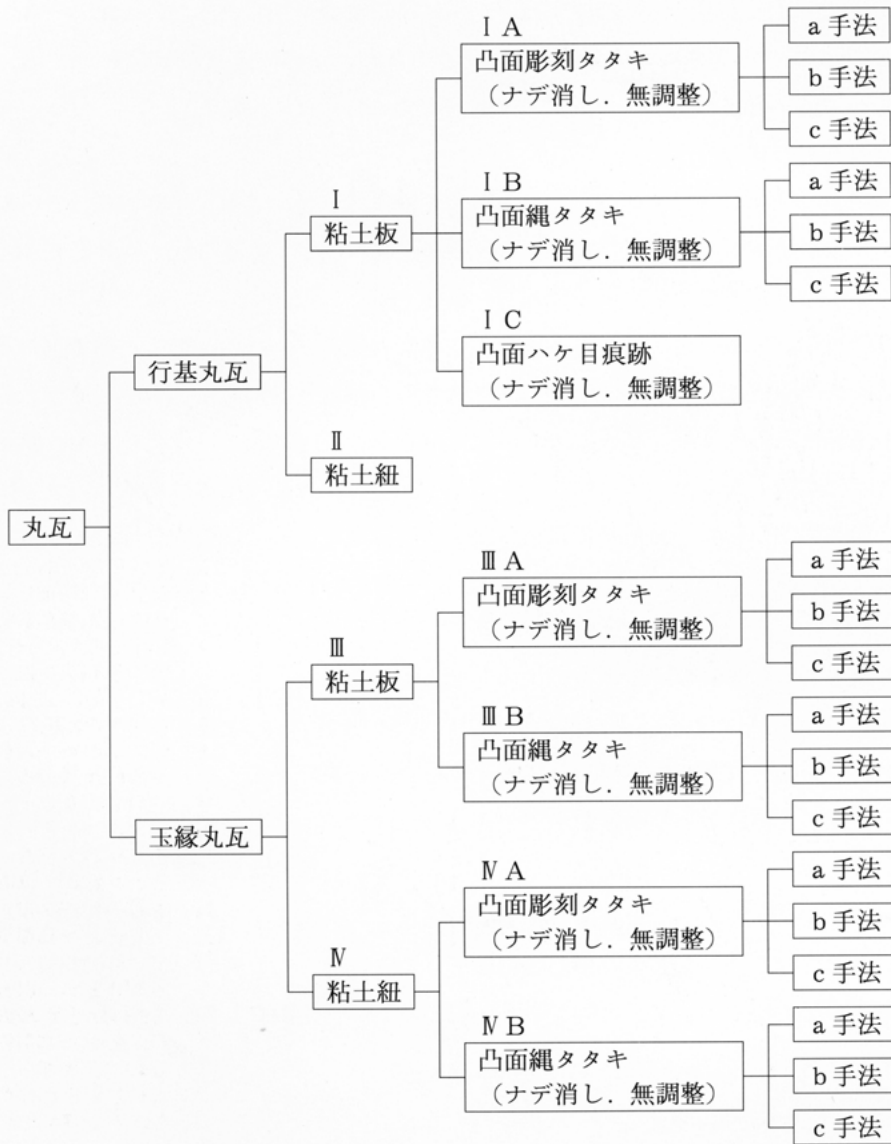
面の処理手法（a～c手法）に細分する。Ⅳ類は勝川廃寺が知られるのみである（ⅣB類・c手法）。なお凸面調整についてはタタキを施した後、丁寧に道具の痕跡をナデ消すものがあるが、破片資料の観察に適さず、今回は細分に含めない。

（2）尾張国内の状況

尾張国内での丸瓦の採用は第33表のようにまとめることができる。平瓦同様、一寺院に複数の丸瓦類が葺かれること、主体となる瓦類が1つに限定できる寺院と複数存在する寺院があることなどを考慮に入れて尾張国内を概観すると、丸瓦の分布には2つの小地域的なまとまりが存在することがわかる。その1つはⅠA類・c手法の1群で、愛智郡から知多郡のアユチ瀉周辺に分布する。彫刻タタキはこの地域以外では葉栗郡の黒岩廃寺、春部郡の勝川廃寺にみられるが、ⅢA類・c手法であるため同一系統とは考えにくく、勝川廃寺にいたっては縄タタキが主体をなし、ⅢA類・c手法の丸瓦は少数である。いま1つは中島郡、海部郡を中心に分布するⅢB類・a手法の1群である。尾張国分寺でもこの丸瓦（堀之内花ノ木遺跡KAⅡb）が主体となり、淵高廃寺では前述の尾張国分寺系軒瓦B₂グループが、中島廃寺、法性寺ではDグループが採用されている。さらに地域的なまとまりからは外れるもののⅢB類・a手法が主体となる愛智郡の鳴海廃寺でも尾張国分寺系軒瓦B₂グループが出土しており、山田郡の小幡花の木廃寺については軒瓦の出土はなかったが小幡地内の大永寺（所在地不明）からBグループの軒平瓦が出土した記録が残る^{1,2)}またこの類の瓦が客体的なありかたを示す愛智郡の元興寺、中島郡の東畑廃寺、海部郡の甚目寺、諸桑廃寺の4ヵ寺のうち諸桑廃寺を除く3ヵ寺からはやはり尾張国分寺系軒瓦が出土している。これらの点からⅢB類・a手法の丸瓦は尾張国分寺系軒瓦と密接な関連をもつことが想定される。以上2つの小地域的なまとまりについて概観した。これ以外にも幾つかの地域的なグルーピングが可能であると思われるが、未調査の寺院跡も多いため資料の増加を待って検討したい。

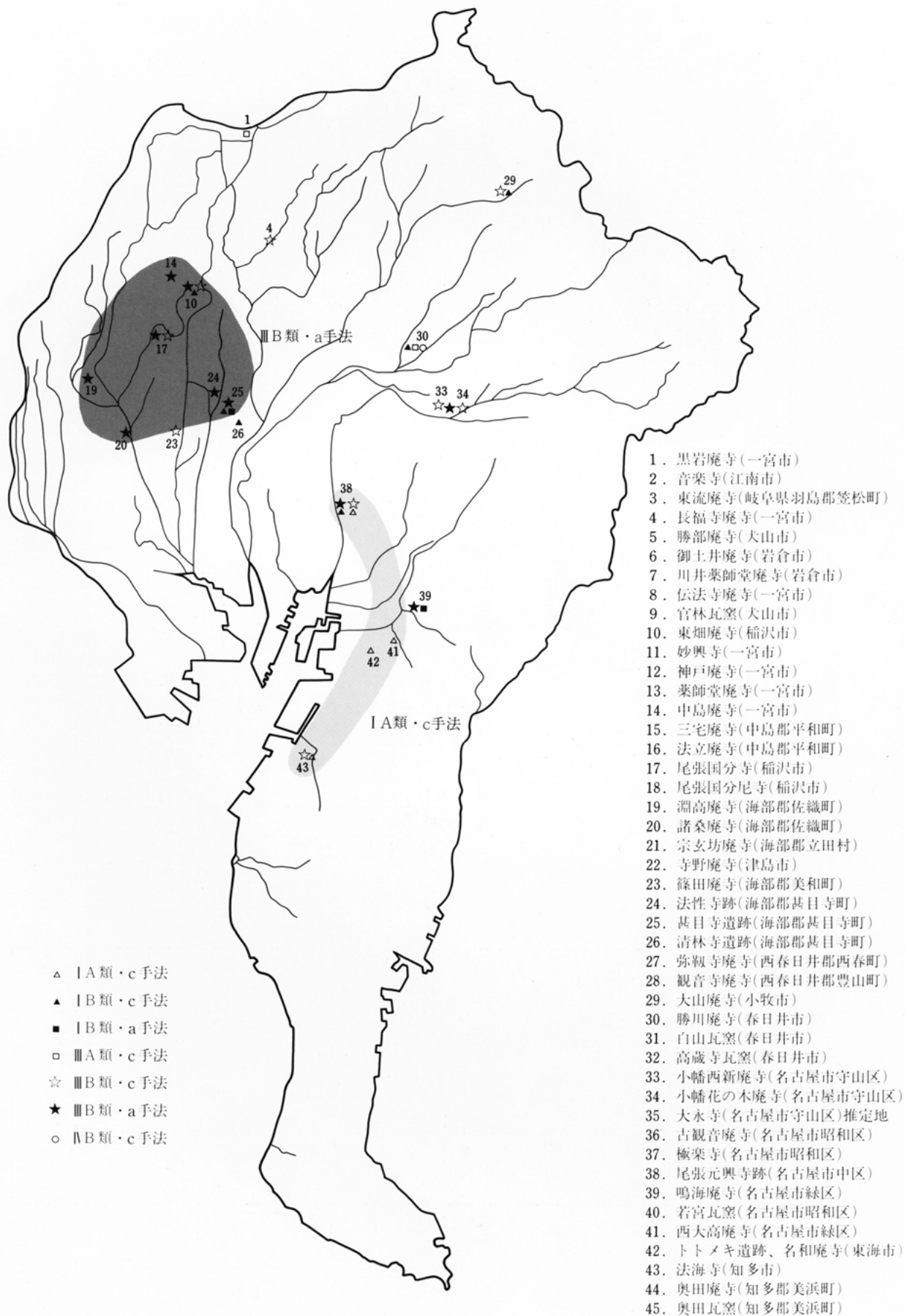
（3）製作時期

ここでは玉縁丸瓦で粘土板から製作されるⅢB類・a手法の丸瓦について特に検討を加える。尾張国分寺は今回の調査によって、ⅢB類・c手法とⅢB類・a手法がおよそ3：7の比率で出土し、この比率はSD13の一括資料でも大きく変わらない。このことは前述の尾張国分寺系軒瓦第1段階（鳴海32号窯式～折戸10号窯式期）における丸瓦の様相を示す。ⅢB類・c手法からⅢB類・a手法という丸瓦製作技法の変遷を仮定すれば、この時期がc手法からa手法への変遷期であるといえる。この観点にたてば、c手法主体の元興寺、東畑廃寺、甚目寺、諸桑廃寺は尾張国分寺に先行する様相が強く、補修や造改築に際して、尾張国分寺系軒瓦とともにⅢB類・a手法の丸瓦が使用されたと考え、c手法をほとんどもたない寺院（中島廃寺、法性寺など）は後出的と考えるのが最も妥当であると思われる。



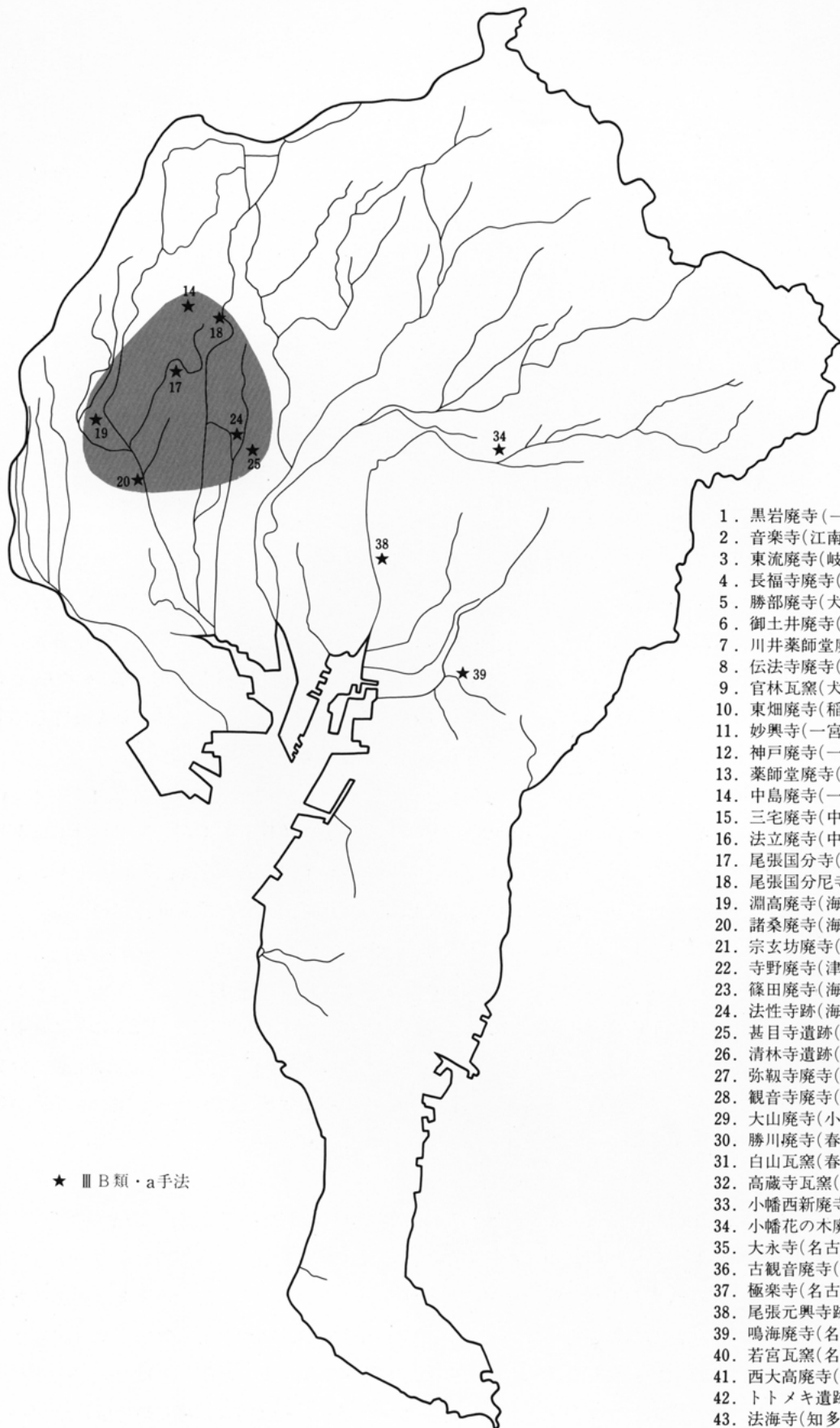
分類	c 手法	b 手法	a 手法
I	A 名和庵寺 (トノメキ遺跡). 西大高庵寺. (元興寺). (法海寺).		
	B 大山庵寺. 甚目寺. 清林寺. 勝川庵寺. (元興寺). (東畑庵寺).		(甚目寺). (鳴海庵寺)
	C (甚目寺)		
II			
III	A 黒岩庵寺. (勝川庵寺)		
	B 長福寺. 大山庵寺. 小幡西新庵寺. 篠田庵寺. 東畑庵寺 (国分寺). (元興寺). (法海寺). (小幡花ノ木庵寺)	(東畑庵寺)	国分寺. 淵高庵寺. 法性寺. 中島庵寺. 小幡花ノ木庵 寺. (元興寺). (東畑庵寺). (甚目寺). (諸桑庵寺)
IV	A		
	B (勝川庵寺)		

第33表 丸瓦分類表



1. 黒岩廃寺(一宮市)
2. 音楽寺(江南市)
3. 東流廃寺(岐阜県羽島郡笠松町)
4. 長福寺廃寺(一宮市)
5. 勝部廃寺(犬山市)
6. 御土井廃寺(岩倉市)
7. 川井薬師堂廃寺(岩倉市)
8. 伝法寺廃寺(一宮市)
9. 官林瓦窯(犬山市)
10. 東畑廃寺(稲沢市)
11. 妙興寺(一宮市)
12. 神戸廃寺(一宮市)
13. 薬師堂廃寺(一宮市)
14. 中島廃寺(一宮市)
15. 三宅廃寺(中島郡平和町)
16. 法立廃寺(中島郡平和町)
17. 尾張国分寺(稲沢市)
18. 尾張国分尼寺(稲沢市)
19. 淵高廃寺(海部郡佐織町)
20. 諸桑廃寺(海部郡佐織町)
21. 宗玄坊廃寺(海部郡立田村)
22. 寺野廃寺(津島市)
23. 篠田廃寺(海部郡美和町)
24. 法性寺跡(海部郡甚目寺町)
25. 甚目寺遺跡(海部郡甚目寺町)
26. 清林寺遺跡(海部郡甚目寺町)
27. 弥勒寺廃寺(西春日井郡西春町)
28. 観音寺廃寺(西春日井郡豊山町)
29. 大山廃寺(小牧市)
30. 勝川廃寺(春日井市)
31. 白山瓦窯(春日井市)
32. 高藏寺瓦窯(春日井市)
33. 小幡西新廃寺(名古屋守山区)
34. 小幡花の木廃寺(名古屋守山区)
35. 大永寺(名古屋守山区)推定地
36. 古観音廃寺(名古屋昭和区)
37. 極楽寺(名古屋昭和区)
38. 尾張元興寺跡(名古屋中区)
39. 鳴海廃寺(名古屋緑区)
40. 若宮瓦窯(名古屋昭和区)
41. 西大高廃寺(名古屋緑区)
42. トトメキ遺跡、名和廃寺(東海市)
43. 法海寺(知多市)
44. 奥田廃寺(知多郡美浜町)
45. 奥田瓦窯(知多郡美浜町)

第58図 丸瓦分類分布図



★ III B類・a手法

1. 黒岩廃寺(一宮市)
2. 音楽寺(江南市)
3. 東流廃寺(岐阜県羽島郡笠松町)
4. 長福寺廃寺(一宮市)
5. 勝部廃寺(犬山市)
6. 御土井廃寺(岩倉市)
7. 川井薬師堂廃寺(岩倉市)
8. 伝法寺廃寺(一宮市)
9. 官林瓦窯(犬山市)
10. 東畑廃寺(稲沢市)
11. 妙興寺(一宮市)
12. 神戸廃寺(一宮市)
13. 薬師堂廃寺(一宮市)
14. 中島廃寺(一宮市)
15. 三宅廃寺(中島郡平和町)
16. 法立廃寺(中島郡平和町)
17. 尾張国分寺(稲沢市)
18. 尾張国分尼寺(稲沢市)
19. 淵高廃寺(海部郡佐織町)
20. 諸桑廃寺(海部郡佐織町)
21. 宗玄坊廃寺(海部郡立田村)
22. 寺野廃寺(津島市)
23. 篠田廃寺(海部郡美和町)
24. 法性寺跡(海部郡甚目寺町)
25. 甚目寺遺跡(海部郡甚目寺町)
26. 清林寺遺跡(海部郡甚目寺町)
27. 弥靱寺廃寺(西春日井郡西春町)
28. 観音寺廃寺(西春日井郡豊山町)
29. 大山廃寺(小牧市)
30. 勝川廃寺(春日井市)
31. 白山瓦窯(春日井市)
32. 高蔵寺瓦窯(春日井市)
33. 小幡西新廃寺(名古屋市守山区)
34. 小幡花の木廃寺(名古屋市守山区)
35. 大永寺(名古屋市守山区)推定地
36. 古観音廃寺(名古屋市昭和区)
37. 極楽寺(名古屋市昭和区)
38. 尾張元興寺跡(名古屋市中区)
39. 鳴海廃寺(名古屋市緑区)
40. 若宮瓦窯(名古屋市昭和区)
41. 西大高廃寺(名古屋市緑区)
42. トトメキ遺跡、名和廃寺(東海市)
43. 法海寺(知多市)
44. 奥田廃寺(知多郡美浜町)
45. 奥田瓦窯(知多郡美浜町)

生産地の状況 次に生産地における状況を見ておくと、篠岡2号窯の丸瓦がⅠ類・c手法に属し、高蔵寺瓦窯の丸瓦がⅢ類・c手法に属する。奥山久米寺、東畑廃寺と同範の瓦を焼成する篠岡2号窯は岩崎17号窯式期に所属し、藤原宮6233A cと同範の軒丸瓦を焼成する高蔵寺瓦窯は、その瓦を供給した勝川廃寺の状況からも7世紀後半に比定され、a手法の開始を7世紀末に遡らせる資料は現在のところ存在しない。SD13の状況から8世紀中葉から後葉にa手法の開始時期はa手法が主体をなすことが確認されたため、a手法の開始時期をおおまかに8世紀前葉から中葉とすることに問題はないように思われる。

6. まとめ

今回の検討結果をまとめると次の4点になる。

- ・尾張国分寺の軒瓦は軒平瓦と軒丸瓦の組合せによりA～Dの4グループに分類することができ、主体となるBグループはさらにB₁～B₃に細分できる。
- ・SD13（鳴海32号窯式～折戸10号窯式期）出土の軒瓦はB₁のみであり、この1群を尾張国分寺第1段階（8世紀後半）、B₂および尾張国分寺廃絶時のSE03（黒笹90号窯式期）出土の主体を占めるB₃を尾張国分寺第2段階（8世紀末葉）、Dグループを尾張国分寺第3段階（9世紀中葉）と設定する。なおA、Cグループは第1段階でB₂を中核として、その周縁に参画した瓦として位置づける。その点でCグループに奈良大安寺と同範の軒丸瓦（平城宮6712-C形式）が存在することは興味深い。
- ・尾張における平瓦製作は、その技法からⅠ～Ⅳ類に大別でき、さらに凹凸面のタタキによって細分できる。尾張国分寺の主体をなす粘土板一枚作りの平瓦（Ⅳ類）は中島郡に集中して分布し、尾張国分寺系軒瓦が存在する寺院では、必ず主体的なあり方を示す。このⅣ類の生産は8世紀中葉から後葉に始まったと考えられ、尾張国分寺造営に際して尾張国内に導入された技法であるとも考えられる。
- ・尾張における丸瓦の製作は、その技法からⅠ～Ⅳ類に大別でき、さらに凸面のタタキ、側面の処理手法によって細分できる。尾張国分寺の主体をなす粘土板玉縁丸瓦（Ⅲ類）で側面調整をしない（a手法）丸瓦は、中島・海部郡を中心に分布し、また尾張国分寺系軒瓦が存在する寺院に多く取り入れられる。この尾張地方におけるⅢ類・a手法の生産は8世紀前葉から中葉にかけて始まったと考えられる。

以上の点を総括すると、8世紀後半の尾張国分寺の創建（第一段階）にあたって、B₁グループの軒瓦が主体的に採用され、少量ながらAグループや大安寺系のCグループも使用された。この時点で平瓦の製作技法に一枚作りが導入されることになる。丸瓦は玉縁丸瓦で、分割後の側面調整を行わないものが主体を占めるが、なお側面調整を行う丸瓦も多く存在し、技法上の変換期にあたる。その後、8世紀末葉（第2段階）にはB₂・B₃グループの軒瓦が尾張国分寺に採用される。このグループの軒瓦は尾張南部の他寺院にも使用さ

れ、それに伴って第1段階で主体となった平瓦、丸瓦の製作技法も拡散する。9世紀中葉以降の尾張国分寺廃絶期（第3段階）にいたって、Dグループの軒瓦が少量使用される。このグループの四葉文系軒丸瓦は各寺院で独自の変化をみせて中島郡を中心に分布することになる。

付記

小論の執筆は1、2、5を蟹江吉弘が、3、4を赤塚次郎が担当し、6は合議の上で蟹江がまとめたものである。なお小論中に使用した分布図は梶山氏の論文をベースに一部を改変し再トレースした。¹³⁾

文末ではあるがこの小論をまとめるにあたり、資料の実見をはじめとする御配意、御教示を多く賜わった。岩野見司、内田伸也、梶山 勝、鎌倉崇志、立松 彰、土本典生、中井 公、中嶋 隆、七原恵史、服部哲也、日野幸治、北條猷示、一宮市博物館、稲沢市教育委員会、小牧市教育委員会、佐織町公民館、甚目寺町教育委員会、知多市民俗資料館、東海市教育委員会、名古屋市見晴台考古資料館、奈良市教育委員会、美和町歴史民俗資料館の諸氏、諸機関に心から謝意を表する次第である。

註

- 1) 稲垣晋也 「尾張国分寺の発掘調査—遺物（瓦類）」『稲沢市史』所収1968
- 2) 図録『特別展 国分寺』奈良国立博物館1980
- 3) 梶山 勝 「尾張国分寺軒瓦とその同型瓦の分布をめぐって」『名古屋市博物館研究紀要 第14巻』1991
- 4) 梶山 勝 「尾張の古代寺院と瓦」『古代仏教東へ—寺と窯— 1. 寺院編』第9回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会1992
- 5) 服部信博 「古代尾張をめぐる若干の問題」『（財）愛知県埋蔵文化財センター年報』1993
- 6) 註(1) 文献参照
- 7) 註(3) 文献参照
- 8) 註(3) 文献参照
- 9) 資料実見。現状では2点確認している。
- 10) 赤塚次郎 「瓦」『勝川』（財）愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書 第1集1984 におけるA・Bグループ
- 11) 赤塚次郎 「勝川遺跡」『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』愛知県教育サービスセンター1985
- 12) 瓦礫舎『古瓦譜』に尾張国山之庄大永寺と記載されて、MM・HⅢ-B型式の拓本が収録されている。
小論では『瓦礫舎』名古屋市博物館調査研究報告Ⅱ1992及び、註(3)文献を参考にした。
- 13) 註(4)図版を使用した。

参考文献

- 大参義一 「尾張出土古瓦の編年的考察」『名古屋大学文学部研究論集史学14』1966
- 森 郁夫 「古代尾張における寺院造営」
- 斎藤孝正 「尾張における飛鳥時代須恵器生産の様相 篠岡2号窯出土資料を中心として」『名古屋大学文学部研究論集史学36』1990
- 梶山 勝 「春日井市高蔵寺瓦窯の再検討」『名古屋市博物館研究紀要第6巻』1983
- 浅野 清編『尾張国分寺の発掘調査』稲沢市教育委員会1968
- 大参義一・岩野見司『新編一宮市史資料編4』1974
- 岩野見司 「考古学からみた古代」『新編一宮市史本文編上』1977
- 岩野見司 「考古学上からみた平和町」『平和町史』1982
- 岩野見司 「第6編 考古」『佐織町史資料編2』1987
- 岩野見司 「第2編 考古」『佐織町史通史編』1988
- 赤塚次郎他「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム2』1991
- 蟹江吉弘他「堀之内花ノ木遺跡」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報』1992
- 浅野清春 「第3編 古代」『岩倉市史』1985
- 名古屋市博物館『尾張の古代寺院と瓦』図録 名古屋市博物館1985
- 知多市教育委員会『法海寺遺跡』知多市文化財調査報告第15集1979
- 東海市教育委員会『トムメキ遺跡』1988
- 小牧市教育委員会『大山廃寺発掘調査報告書』1979
- 愛知県建築部・小牧市教育委員会『桃花台ニュータウン遺跡調査報告 小牧市篠岡古窯址群』1976
- 一宮市教育委員会『長福寺廃寺発掘調査報告』一宮市文化財調査報告1 1974
- 岩倉市教育委員会『岩倉市稲荷町・大山町 岩倉南部土地区画整理事業地内所在埋蔵文化財発掘調査報告 御土井廃寺・西出古墳』1983
- 愛知県教育委員会・(財)愛知県埋蔵文化財センター『愛知県埋蔵文化財情報1』1986
- 愛知県教育委員会・(財)愛知県埋蔵文化財センター『愛知県埋蔵文化財情報5』1990
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書』1980
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』1990
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』1991
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅳ)』1992
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅴ)』1993
- 稲沢市教育委員会『尾張国分寺跡緊急発掘調査報告書』1983
- 東海古文化研究所『小幡廃寺調査概報』1984
- 東海古文化研究所『小幡廃寺第二次調査報告』1985
- 東海考古学研究会『小幡廃寺第三次調査報告』1987
- 名古屋市教育委員会『鳴海廃寺発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅰ次発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅱ次発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅳ次発掘調査概要報告書』1986
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅴ次発掘調査概要報告書』1992

別 表

1. 遺構計測値一覧

2. 遺物計測値一覧

3. 挿図掲載遺物登録番号一覧

1. 遺構計測値一覧

溝 (SD)

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期	備考
SD01	-	140	38	A	B1	N-51'-E
SD02	-	108	32	A	C2	
SD03	-	250	26	A	C2	数条にわかれる
SD04	-	510	-	A	C2	
SD05	-	78	15	A	B1	N-49'-E
SD06	-	65	15	A	B1	
SD07	-	54	7	A	B1	
SD08	-	50	8	A	-	
SD09	-	56	8	A	-	
SD10	-	42	10	A	-	
SD11	-	42	11	A	-	
SD12	184	28	16	A	-	
SD13	-	230	80	C	B2	N-7'-W
SD14	-	367	69	C	D	
SD15	-	210	36	C	B2	N-7'-W
SD16a	-	60	20	C	B	
SD16b	-	60	16	C	B	
SD17	-	40	13	C	-	
SD18	-	30	10	C	-	
SD19	-	102	26	C	B?	
SD20	-	170	21	C	D	
SD21	-	278	13	C	B	
SD22	-	70	20	C	-	
SD23	-	130	21	C	C	
SD24	-	57	5	C	B	
SD25	-	80	13	C	-	
SD26	-	177	31	C	B1	N-64'-W
SD27	-	40	9	G	C2	
SD28	-	130	40	G	C2	
SD29	-	60	18	G	C	
SD30	-	200	47	C	B2	N-82'-E
SD31	-	50	10	G	-	
SD32	-	62	11	G	C2	
SD33	-	55	10	G	C2	
SD34	-	39	9	G	C	
SD35	-	85	38	G	-	消滅
SD36	-	58	7	G	C2	
SD37	-	49	16	C	D	
SD38	-	40	18	C	-	
SD39	152	97	9	C	-	
SD40	270	30	13	C	C2	
SD41				B	D	
SD42	-	80	28	C	D	
SD43	-	98	59	B	C	
SD44	-	200	31	B	-	
SD45	-	165	57	B	B1	N-38'-E
SD46	-	258	27	B	C2	
SD47	-	175	27	E c	C2	N-85'-W
SD48	-	40	7	E c	C2	N-85'-W
SD49	-	60	20	E c	C2	N-86'-W
SD50	-	462	24	E a	D	
SD51	-	85	29	E a	D	
SD52	-	56	7	E a	D	
SD53	-	75	11	E a	D	
SD54	-	220	12	E a	D	SD60上層
SD55	-	-	-	E a	D	消滅
SD56	-	227	33	E a	C2	
SD57	-	220	40	E a	C2	N-90'-W
SD58	-	170	16	E b	D	消滅
SD59	-	69	19	E b	D	消滅

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期	備考
SD60	-	73	65	E a	D	
SD61	-	87	9	E a	-	消滅
SD62	-	128	45	E a	C2	
SD63	-	100	45	E a	C2	
SD64	-	57	34	E a	C2	
SD65	-	136	29	E a	D	SD60上層
SD66	-	89	27	E a	B2	
SD67	-	40	14	E a	B	
SD68	-	100	12	E a	B2	SD66
SD69	-	122	28	E a	-	
SD70	-	136	34	E a	-	
SD71	-	50	9	E a	-	
SD72	-	96	24	E a	B	SD69
SD73	-	306	44	E b	D	
SD74	-	780	40	E b	D	
SD75	-	250	40	E b	C2	N-91'-W
SD76	-	52	25	E c	C2	
SD77	-	211	?	E b	D	消滅
SD78	-	140	38	E a	B1	N-28'-E
SD79	-	120	52	E a	C2	
SD80	-	150	35	E a	A1	
SD81	-	72	31	F a	B	
SD82	-	77	28	F a	C2	
SD83	-	87	60	F a	C2	
SD84	-	86	25	F a	-	消滅
SD85	-	62	32	F a	C2	
SD86	-	80	38	F a	C1	
SD87	-	95	45	F a	-	
SD88	-	81	17	F b	-	消滅
SD89	-	72	16	F b	-	消滅
SD90	-	149	30	F b	B	
SD91	-	140	30	F c	C2	N-85'-W
SD92	-	-	-	F c	C2	
SD93	-	-	-	F c	C2	
SD94	-	125	15	F c	B	
SD95	-	49	22	F c	C	
SD96	-	63	19	F c	C	
SD97	-	40	17	F c	-	消滅
SD98	-	55	17	F c	-	消滅
SD99	-	136	17	H	C2	
SD100	-	320	51	H	C1.2	N-63'-W
SD101	-	59	25	H	C	
SD102	-	62	5	H	C	
SD103	-	95	45	H	C2	
SD104	-	70	20	H	C	
SD105	-	53	16	H	C	
SD106	-	37	7	H	C	
SD107	-	52	6	H	C	
SD108	-	89	26	H	C	
SD109	-	70	11	H	-	消滅
SD110	-	139	18	H	C2	
SD111	-	40	7	H	C	
SD112	-	40	7	H	C	
SD113	-	51	10	H	C	
SD114	-	39	6	H	C	
SD115	-	40	8	H	C	
SD116	-	46	18	H	C	
SD117	-	120	40	H	C2	N-66'-W
SD118	-	68	14	H	C2	
SD200	-	350	20	H	A2	

土坑 (SK)

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期	備考
SK01	144	30	25	A	-	
SK02	150	40	4	A	D	
SK03	135	80	8	A	-	
SK04	-	-	15	A	D	
SK05	140	76	26	A	-	
SK06	80	-	7	A	B	
SK07	140	43	3	A	B	
SK08	230	180	17	C	B	
SK09	150	-	16	C	B	
SK10	277	104	12	C	B	
SK11	880	-	60	C	D	
SK12	125	-	26	C	-	
SK13	-	-	-	C	-	SD26
SK14	-	100	19	C	-	
SK15	195	130	11	C	B	
SK16	85	60	12	C	B	
SK17	190	81	28	A	B	
SK18	240	70	13	C	-	
SK19	234	146	10	C	B	
SK20	130	-	15	C	-	消滅
SK21	-	-	8	G	D	消滅
SK22	272	148	4	C	C	
SK23	110	55	4	C	B	
SK24	-	119	20	C	C	
SK25	148	62	17	G	C	
SK26	89	69	59	G	C	
SK27	40	30	10	C	B	
SK28	-	102	52	G	C	
SK29	80	66	11	G	C	
SK30	-	136	14	G	C	
SK31	-	180	14	C	B	
SK32	134	68	20	C	-	
SK33	163	89	20	C	-	
SK34	153	69	19	C	B	
SK35	150	110	16	C	-	消滅
SK36	53	43	10	C	-	
SK37	165	125	12	C	B	
SK38	250	-	13	C	-	
SK39	317	210	8	C	-	
SK40	88	78	10	C	-	
SK41	203	149	14	C	-	
SK42	350	72	11	C	-	
SK43	70	42	6	C	B	
SK44	85	47	8	C	B	
SK45	180	140	16	C	D	
SK46	100	80	20	C	-	
SK47	123	99	9	C	B	
SK48	-	230	16	C	-	消滅
SK49	80	80	14	C	-	
SK50	220	130	35	C	A1	
SK51	100	80	5	C	A	炭化物
SK52	690	390	25	C	B	SB?
SK53	-	92	8	B	C	
SK54	-	55	12	B	C	
SK55	230	126	11	B	C	
SK56	-	88	11	B	C	
SK57	480	450	25	E _c	D	消滅
SK58	53	121	12	B	D	
SK59	185	85	22	B	B	
SK60	-	-	-	B	-	SE04に変更

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期	備考
SK61	252	134	10	E _a	D	
SK62	620	420	14	E _a	C2	
SK63	110	98	11	E _a	C1	
SK64	225	94	16	E _a	C	
SK65	127	91	15	E _a	-	
SK66	123	86	18	E _a	C1	
SK67	84	76	22	E _a	C2	
SK68	90	63	25	E _a	-	
SK69	119	113	27	E _a	C1	
SK70	120	81	16	E _a	B	炭化物
SK71	128	73	14	E _a	B	
SK72	185	44	11	E _a	-	
SK73	67	66	15	E _a	C	
SK74	240	101	21	E _a	B	
SK75	149	-	8	E _a	-	
SK76	175	117	33	E _a	B	
SK77	158	127	17	E _a	C	
SK78	198	105	18	E _a	C	
SK79	76	-	13	E _a	-	
SK80	192	138	14	E _a	C	
SK81	110	91	8	E _a	C	深い部分49cm
SK82	99	84	6	E _a	A	
SK83	83	-	5	E _a	A	
SK84	230	99	23	E _a	B	
SK85	101	-	4	E _a	A	
SK86	114	59	17	E _a	B	
SK87	140	63	17	E _a	B	
SK88	63	38	20	E _a	B	
SK89	-	-	-	E _a	B1	SD78
SK90	200	140	15	E _a	B3	
SK91						欠番
SK92	186	160	60	E _c	C1	
SK93	97	70	12	E _c	C1	
SK94	130	80	17	E _c	C1	
SK95	70	70	23	E _c	C1	
SK96	65	55	7	E _c	C1	
SK97	67	60	19	E _c	C1	
SK98	149	97	48	E _c	C1	
SK99	100	65	26	E _c	C1	
SK100	184	85	60	E _c	C1	a b cの円形土坑
SK101	97	60	11	E _c	C1	
SK102	160	70	12	E _c	C1	
SK103	130	105	17	E _c	C1	
SK104	75	55	11	E _c	C1	
SK105	149	115	9	E _c	C1	
SK106	62	55	18	E _c	C1	
SK107	52	47	14	E _c	C1	
SK108	62	50	19	E _c	C1	
SK109	257	158	95	E _c	C1	
SK110	150	89	65	E _c	C1	
SK111	270	81	31	E _c	C2	SD75
SK112	86	65	23	E _c	C1	
SK113	145	-	6	E _c	C1	
SK114	220	-	31	E _c	C1	
SK115	83	80	45	E _c	C1	
SK116	132	100	45	E _c	C1	
SK117	246	170	80	E _c	C1	
SK118	184	112	25	E _c	C1	
SK119	350	205	51	E _c	C1	
SK120	225	150	29	E _c	C1	

ピット (P)

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期	備考
SK121	-	-	-	E c		SE06に変更
SK122	165	125	18	E c	C1	
SK123	100	85	22	E c	C1	
SK124	85	77	37	E a	C	
SK125	204	-	13	D a	-	
SK126	122	-	20	D a	-	
SK127	102	-	19	D a	-	
SK128	142	-	13	D b	-	
SK129	101	92	13	D b	-	
SK130	71	61	17	D b	A	
SK131	-	139	18	F a	A	
SK132	240	122	13	F a	A	
SK133	-	-	-	F a		SE05に変更
SK134	290	190	42	F a	B?	井戸?
SK135	-	124	57	F a	-	
SK136	146	87	44	F a	-	
SK137	-	115	14	F b	C	
SK138	-	110	22	F b	C	
SK139	90	-	48	F b	B	
SK140	325	110	20	F b	C2	
SK141	101	83	9	F b	A	
SK142	84	65	12	F b	C	
SK143	92	-	41	F b	B	
SK144	94	-	33	F b	B	
SK145	113	100	72	F b	B	
SK146	120	103	26	F b	A	
SK147	136	120	25	F b	B	
SK148	-	-	13	F b	A	
SK149	330	-	108	F c	C2	井戸
SK150	121	-	18	F c	B	
SK151	108	-	23	F c	C1	SK122
SK152	360	-	108	F c	C	
SK153	-	-	21	H	C	
SK154	-	330	26	H	A2	SD200上
SK155	-	-	10	H	C	
SK156	86	64	14	H		消滅
SK157	61	40	6	H	C	
SK158	72	36	25	H	C	
SK159	188	93	19	H	C	
SK160	300	250	50	H	A2	
SK161	-	320	13	H	A2	SD200上
SK162	63	52	6	H		消滅
SK163	-	-	12	F b	C	旧名SB17
SK164	288	168	12	F b	A	
SK165	200	193	6	F b	A	旧名SB58
SK166	-	195	10	C	B2	SB02中央土坑

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期	備考
P01	37	32	3	C	B	柱穴φ=12, d=3
P02	57	46	4	C	B	柱穴φ=18, d=5
P03	44	41	10	C	B	
P04	85	63	4	C	B	柱穴φ=18, d=17
P05	-	55	7	C	B	柱穴φ=13, d=7
P06	53	39	16	C	B	
P07	51	40	3	C	B	柱穴φ=23
P08	40	36	4	C	B	柱穴φ=17
P09	45	41	10	C	B	
P10	47	44	3	B	B	
P11	37	35	7	B	B	
P12	57	45	6	E a	C	柱穴φ=14, d=11
P13	73	52	7	E a	C	柱穴φ=16, d=16
P14	46	43	10	E a	C	
P15	54	-	8	E a	B3	柱穴φ=22, d=6
P16	40	39	9	E a	-	柱穴φ=22, d=11
P17	39	-	4	B	B	柱穴φ=22, d=29
P18	38	30	11	B	B	
P19	35	-	46	D b	C1	
P20	39	-	35	F b	B	
P21	44	-	17	F b	B	
P22	36	-	17	F b	-	柱穴φ=21, d=15
P23	65	-	7	F b	-	鉄
P24	39	-	8	F b	-	柱穴φ=28, d=12
P25	62	-	29	F b	B	
P26	32	-	4	F b	-	
P27	63	-	13	F b	-	
P28	60	54	29	F c	B	
P29	51	-	9	F c	C	
P30	22	-	11	H	C	
P31	56	30	20	H	C	柱穴φ=30, d=6
P32	24	-	12	H	C	柱穴φ=14, d=16
P33	21	-	10	H	C	
P34	18	-	16	H	C	
P35	81	31	26	H	C	
P36	49	32	12	H	C	
P37	40	25	13	H	C	柱穴φ=23, d=12
P38	38	34	4	H	C	柱穴φ=23, d=6
P39	31	-	8	H	C	柱穴φ=18, d=3
P40	30	22	3	H	C	
P41	6	-	14	H	C	
P42	26	-	6	H	C	

住居 (SB)

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	方位	時期	備考
SB01	720	370	6	A	N-51°-E	B1	2×3掘立柱建物
SB02	525	—	8	C	N-3°-W	B2	
SB03	—	442	7	C	N-7°-W	B2	
SB04	—	340	9	C	N-25°-W	B2	
SB05	342	313	12	Ea	N-58°-W	B3	
SB06	—	—	6	B	N-37°-W	B2	
SB07	468	—	9	B	N-29°-W	B2	
SB08	514	500	10	B	N-29°-W	B2	
SB09	440	435	10	B	N-27°-W	B2	
SB10	436	430	14	Ea	N-48°-W	B3	
SB11	440	428	9	Ea	N-57°-W	B3	焼土
SB12	—	—	5	Ea	N-15°-W	B3	
SB13	—	—	—	Ea			SB59に変更
SB14	—	—	7	Ea	N-57°-W	B3	
SB15	220	—	11	Ea	N-48°-W	B3	
SB16	390	—	20	Eb	N-54°-W	B3	
SB17	—	—	—	Fb			SB163に変更
SB50	560	—	8	C	N-21°-W	A1	
SB51	490	450	8	C	N-21°-W	A1	
SB52	460	420	10	C	N-32°-W	A1	
SB53	530	500	8	C	N-32°-W	A1	
SB54	340	150	7	C	N-23°-W	A1	
SB55	293	193	—	Ea	N-0°-W	A1	
SB56	202	196	6	Ea	N-45°-W	A1	
SB57	385	—	5	Ea	N-57°-W	A1	
SB58	—	—	—	Fb			SK165に変更
SB59	240	—	7	Ea	N-68°-W	A1	旧名SB13

井戸 (SE)

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期	備考
SE01	185	—	73	A	C1	
SE02	194	—	100	G	C1	
SE03	299	—	104	C	B3	
SE04	150	70	14	B	B2	旧名SK60
SE05	100	90	49	Fa	C1	旧名SK133
SE06	200	190	120	Ec	C1	旧名SK121

不明および土器集積 (SX)

遺構番号	長cm	短cm	深cm	区	時期
SX01	—	—	—	A	D
SX02	—	—	—	A	—
SX03	—	—	—	Fb	A1

図版	No.	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	出土遺構	時期	備考	登録番号
11	1	く字口縁 台付甕				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 1
11	2	く字口縁 台付甕	21	8.4		山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 2
11	3	く字口縁 台付甕	17.6			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 3
11	4	有段口縁 甕	18.2			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 4
11	5	有段口縁 鉢	17.8			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 5
11	6	甕				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 6
11	7	有段 高杯	23			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 7
11	8	有段 高杯	21.4			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 8
11	9	有段 高杯				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 9
11	10	有段 高杯	23.5			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 10
11	11	有段 高杯				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 11
11	12	広口 甕	20.5			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 12
11	13	パレス 甕	21			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 13
11	14	パレス 甕	16			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 14
11	15	パレス 甕				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 15
11	16	パレス 甕				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 16
11	17	甕		4.8		山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 17
11	18	小型 甕	5.9	2.1	8.4	山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 18
11	19	小型 甕	6.8		8.5	山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 19
11	20	小型 甕	8.5			山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 20
11	21	有段 高杯				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 21
11	22	有段 高杯				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 22
11	23	台付甕				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 23
11	24	台付甕				山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 24
11	25	台付甕		8		山中後	SK 5 0	A 1 期		E- 25
12	26	有段 高杯	27.6			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 26
12	27	有段 高杯	28.4			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 27
12	28	有段 高杯	22			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 28
12	29	有段 高杯	22.8			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 29
12	30	有段 高杯	24.4			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 30
12	31	有段 高杯				山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 31
12	32	有段 高杯		15		山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 32
12	33	有段 高杯				山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 33
12	34	有段 高杯				山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 34
12	35	小型 甕				山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 35
12	36	器台				山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 36
12	37	く字口縁 台付甕	22			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 37
12	38	く字口縁 台付甕	17.4			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 38
12	39	く字口縁 台付甕	22.6			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 39
12	40	く字口縁 台付甕	16			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 40
12	41	く字口縁 台付甕	18			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 41
12	42	く字口縁 台付甕		9.2		山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 42
12	43	く字口縁 台付甕		8		山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 43
12	44	有段口縁 甕	16.4			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 44
12	45	パレス 甕	25.2			山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 45
12	46	甕				山中後	SB 5 1	A 1 期		E- 46
12	47	鉢	16		9	山中後	SB 5 5	A 1 期		E- 47
12	48	く字口縁 台付甕	16.1			山中後	SB 5 5	A 1 期		E- 48
13	49	く字口縁 台付甕	22.4			廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 49
13	50	く字口縁 台付甕	23.6			廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 50
13	51	く字口縁 台付甕	17.2			廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 51
13	52	く字口縁 台付甕	16.8			廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 52
13	53	く字口縁 台付甕	16.6			廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 53
13	54	S字 甕 (O類)	14			廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 54
13	55	く字口縁 台付甕		8.1		廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 55
13	56	く字口縁 台付甕		7.6		廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 56
13	57	く字口縁 台付甕		6.2		廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 57
13	58	甕		4		廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 58
13	59	鉢	20.6		11.7	廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 59
13	60	甕		4.6		廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 60
13	61	広口 甕	17.6	5.5	25.8	廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 61
13	62	有段 高杯	14.2	10.4	11.6	廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 62
13	63	脚付 甕				廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 63
13	64	脚付 甕		25		廻間I前	SX 0 3	A 1 期		E- 64
13	65	有段 高杯		21.6		山中後	SD 8 0	A 1 期		E- 65
13	66	碗形 高杯	12.9	10	10.4	廻間I前	SB 5 4	A 1 期		E- 66
13	67	有段 高杯	23.2			廻間I前	SB 5 4	A 1 期		E- 67
13	68	有段 高杯	19.6			廻間I前	SB 5 4	A 1 期		E- 68
14	69	有段口縁 甕	19.6			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 69
14	70	有段口縁 甕	16			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 70
14	71	く字口縁 台付甕	24.4			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 71
14	72	広口 甕	18.4			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 72
14	73	パレス 甕				廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 73
14	74	パレス 甕				廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 74
14	75	器台				廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 75
14	76	器台	12			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 76
14	77	鉢	22			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 77
14	78	S字 甕 (O類)	18.8			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 78
14	79	く字口縁 台付甕	20			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 79
14	80	く字口縁 台付甕	18.2			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 80
14	81	く字口縁 台付甕		9.2		廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 81
14	82	有段 高杯	26.4			廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 82
14	83	有段 高杯				廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 83
14	84	有段 高杯				廻間I前	SB 5 2	A 1 期		E- 84
14	85	有段 高杯	23.2			廻間I前	SB 5 4 上	A 1 期		E- 85
14	86	く字口縁 台付甕	18.6			廻間I前	SK 1 3 2	A 1 期		E- 86
15	87	パレス 甕	17.2	6.8	25.2	廻間II後	SK 1 6 0	A 2 期		E- 87
15	88	パレス 甕	18.8	6.8	26.8	廻間II後	SK 1 6 0	A 2 期		E- 88
15	89	短頸 甕	13.2	6.8	27.8	廻間II後	SK 1 6 0	A 2 期		E- 89

図版	No.	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	出土遺構	時期	備考	登録番号
15	90	壺				廻間Ⅱ後	SK160	A2期		E-90
15	91	二重口縁壺	13.4	5.2	20	廻間Ⅱ後	SK160	A2期		E-91
15	92	二重口縁壺	19.2	5.6	25.2	廻間Ⅱ後	SK160	A2期		E-92
15	93	S字甕 (B類新)	10.8	7.6	17.6	廻間Ⅱ後	SK160	A2期		E-93
15	94	S字甕 (B類新)				廻間Ⅱ後	SK160	A2期		E-94
15	95	S字甕 (B類新)		8.8		廻間Ⅱ後	SK160	A2期		E-95
16	96	広口壺		6		廻間Ⅱ前	SK160(SD200下)	A2期		E-96
16	97	広口壺	17.2			廻間Ⅱ前	SK160(SD200下)	A2期		E-97
16	98	直口壺	8.4			廻間Ⅱ前	SK160(SD200下)	A2期		E-98
16	99	直口壺		4.2		廻間Ⅱ前	SK160(SD200下)	A2期		E-99
16	100	ヒッコ	7.2	4.4	18.4	廻間Ⅱ前	SK160(SD200下)	A2期		E-100
16	101	有椀高杯	15.6			廻間Ⅱ後	SD200(SK160)	A2期		E-101
16	102	S字甕 (D類)	14.2			松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-102
16	103	S字甕 (D類)	16			松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-103
16	104	S字甕 (C類)	13.8			松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-104
16	105	S字甕 (D類)	11.6			松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-105
16	106	S字甕 (D類)	14.8			松河戸1前	SD200(SK154)	A2期		E-106
16	107	S字甕 (D類)	12.2			松河戸1前	SD200(SK154)	A2期		E-107
16	108	S字甕 (D類)	11			松河戸1前	SD200(SK154)	A2期		E-108
16	109	S字甕 (D類)	8			松河戸1前	SD200(SK154)	A2期		E-109
16	110	S字甕	23.6			松河戸1前	SD200(SK154)	A2期		E-110
16	111	小型器台	9.6	12		松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-111
16	112	小型器台	9.2			松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-112
16	113	小型器台		12.4		松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-113
16	114	小型器台		11.6		松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-114
16	115	小型器台		12.4		松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-115
16	116	S字甕		15		松河戸1前	SD200(SK154)	A2期		E-116
16	117	柳ヶ坪型壺	17.8			松河戸1前	SD200(SK160)	A2期		E-117
16	118	柳ヶ坪型壺		5.6		松河戸1前	SD200(SK160)	A2期		E-118
16	119	柳ヶ坪型壺		7.2		松河戸1前	SD200(SK160)	A2期		E-119
16	120	屈折脚高杯		8.4		松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-120
16	121	S字甕				松河戸1前	SD200(SK161)	A2期	穿孔3ヶ所	E-121
16	122	布留型甕	13.6			松河戸1前	SD200(SK161)	A2期		E-122
17	123	須恵器杯蓋	19.8			A2	SD01	B1期		E-123
17	124	須恵器杯	13	7.3	2.1		SD01	B1期		E-124
17	125	須恵器盤	15.7			B2	SD01	B1期		E-125
17	126	須恵器短頸壺	8.4				SD01最上層	B1期		E-126
17	127	須恵器碗		6.6		A2	SD05	B1期		E-127
17	128	須恵器杯		10.7		B	SD07	B1期		E-128
17	129	須恵器杯蓋	25			A1	SD26最上層	B1期		E-129
17	130	須恵器杯	10	4.8	3.8	A	SD26	B1期		E-130
17	131	土師器甕	19.2				SD26最上層	B1期		E-131
17	132	土師器甕	22				SD26最上層	B1期		E-132
17	133	土師器甕	17.8				SD26最上層	B1期		E-133
17	134	土師器甕	18				SD26最上層	B1期		E-134
17	135	土師器甕	16				SD26	B1期		E-135
17	136	土師器甕	20.8				SD26最上層	B1期		E-136
17	137	須恵器杯	10.3	7	2.3	A	SD45	B1期		E-137
17	138	須恵器杯	13.4	9.8	3.9	B	SD45	B1期		E-138
17	139	須恵器杯	13.2	10	3.9	B	SD45	B1期		E-139
17	140	須恵器杯	12.4	9.2	3.5	B	SD45	B1期		E-140
17	141	須恵器杯	12.8	9.6	3.8	B	SD45	B1期		E-141
17	142	須恵器碗	10.9	6.2	3.8	A1	SD45	B1期		E-142
17	143	須恵器碗		6		A2	SD45	B1期		E-143
17	144	須恵器碗	15	8.6	3.8	A2	SD45	B1期		E-144
17	145	須恵器碗		10.4		B2	SD45	B1期		E-145
17	146	須恵器甕					SD45	B1期		E-146
17	147	須恵器甕	26.8				SD45	B1期		E-147
17	148	土師器甕	20.6				SD45	B1期		E-148
18	149	須恵器杯蓋	14.8			A2	SD13	B2期		E-149
18	150	須恵器杯蓋	13.6	2.5	3	A2	SD13	B2期		E-150
18	151	須恵器杯蓋	17.5	2.7	4.4	A1	SD13	B2期		E-151
18	152	須恵器杯	10.6	5.8	3.3	A	SD13	B2期		E-152
18	153	須恵器杯	11.2	6.4	3.7	A	SD13	B2期		E-153
18	154	須恵器杯	11.7	9.5	3.7	A	SD13	B2期		E-154
18	155	須恵器杯	11.8	10	3.4	A	SD13最上層	B2期		E-155
18	156	須恵器杯	13	7.8	4.1	A	SD13	B2期		E-156
18	157	須恵器杯	17.8			A	SD13	B2期		E-157
18	158	須恵器杯		11.5		B	SD13	B2期		E-158
18	159	須恵器杯	14.8	12.2	4	B	SD13	B2期		E-159
18	160	須恵器杯		11.8		B	SD13	B2期		E-160
18	161	須恵器杯	16.3	10.9	5.6	B	SD13	B2期		E-161
18	162	須恵器杯	16.8	10.8	5.9	B	SD13最上層	B2期		E-162
18	163	須恵器杯	19.8	13.6	5.5	B	SD13	B2期		E-163
18	164	須恵器碗	12.2	6	3.9	A1	SD13	B2期		E-164
18	165	須恵器碗	11.8	5.8	3.7	A1	SD13	B2期		E-165
18	166	須恵器碗	11.4	6	3.9	A1	SD13	B2期	底部線刻	E-166
18	167	須恵器碗	11.6	6.4	3.9	A1	SD13	B2期		E-167
18	168	須恵器碗	11.7	5.6	4	A2	SD13	B2期		E-168
18	169	須恵器碗	11.8	6	4.1	A2	SD13	B2期		E-169
18	170	須恵器盤	21.8				SD13	B2期		E-170
18	171	須恵器盤	19.2			A2	SD13	B2期		E-171
18	172	須恵器盤	17.4	10	3	B1	SD13	B2期		E-172
18	173	須恵器盤	21	14.6	3.9	B2	SD13	B2期		E-173
18	174	須恵器盤				D	SD13	B2期		E-174
18	175	須恵器盤	23.5			D	SD13	B2期		E-175
19	176	須恵器鉢	14.2				SD13	B2期		E-176
19	177	須恵器鉢		9.2			SD13	B2期		E-177
19	178	須恵器壺					SD13	B2期		E-178

图版	No.	器	種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分	類	出土遺構	時期	備	考	登錄番号
19	179	須惠器	風字硯	幅11.1		3.6			SD 1 3	B 2期			E-1 7 9
19	180	土師器	甕		6				SD 1 3	B 2期			E-1 8 0
19	181	須惠器	甕	34.2					SD 1 3	B 2期			E-1 8 1
19	182	須惠器	甕	26					SD 1 3	B 2期			E-1 8 2
19	183	須惠器	甕	26.2					SD 1 3	B 2期			E-1 8 3
19	184	須惠器	甕	44					SD 1 3	B 2期			E-1 8 4
19	185	須惠器	横瓶						SD 1 3	B 2期			E-1 8 5
20	186	須惠器	杯蓋	15	2.7	3.7	A 2		SD 1 5最上層	B 2期			E-1 8 6
20	187	灰釉陶器	碗	13.2	6.4	3.6			SD 1 5最上層	B 2期			E-1 8 7
20	188	灰釉陶器	碗	17.6	9.3	4.4			SD 1 5	B 2期			E-1 8 8
20	189	灰釉陶器	皿	14.5	6.2	3.1			SD 1 5	B 2期			E-1 8 9
20	190	灰釉陶器	皿	15	8.4	2.5			SD 1 5	B 2期			E-1 9 0
20	191	灰釉陶器	三足盤?	16.8	12.6	2.5			SD 1 5最上層	B 2期			E-1 9 1
20	192	土師器	甕	15.2					SD 1 5	B 2期			E-1 9 2
20	193	土師器	甕	19.2					SD 1 5	B 2期			E-1 9 3
20	194	須惠器	杯	12.2	7	3.7	A		SD 3 0	B 2期			E-1 9 4
20	195	灰釉陶器	双耳碗		6.4				SD 3 0最上層	B 2期			E-1 9 5
20	196	灰釉陶器	碗		6				SD 3 0	B 2期	底部線刻		E-1 9 6
20	197	灰釉陶器	碗		8				SD 3 0	B 2期			E-1 9 7
20	198	灰釉陶器	皿		6				SD 3 0	B 2期			E-1 9 8
20	199	灰釉陶器	皿		7.2				SD 3 0	B 2期			E-1 9 9
20	200	灰釉陶器	皿		6.9				SD 3 0	B 2期			E-2 0 0
20	201	灰釉陶器	皿		7.6				SD 3 0	B 2期			E-2 0 1
20	202	灰釉陶器	皿		7.8				SD 3 0	B 2期	底部墨書		E-2 0 2
20	203	土師器	甕	19.6					SD 3 0	B 2期			E-2 0 3
20	204	土師器	甕	16					SD 3 0	B 2期			E-2 0 4
20	205	土師器	甕	19					SD 3 0	B 2期			E-2 0 5
20	206	土師器	甕	20					SD 3 0	B 2期			E-2 0 6
20	207	須惠器	杯	13.8			B		SB 0 2最上層	B 2期			E-2 0 7
20	208	須惠器	杯	19.2	16.6	4.2	B		SB 0 2最上層	B 2期			E-2 0 8
20	209	須惠器	杯	13	9	3.8	B		SB 0 2	B 2期			E-2 0 9
20	210	土師器	甕	20					SB 0 2最上層	B 2期			E-2 1 0
20	211	土師器	甕	23.8					SB 0 2最上層	B 2期			E-2 1 1
20	212	須惠器	杯蓋	13.6					SB 0 4	B 2期			E-2 1 2
20	213	土師器	甕	16					SB 0 4	B 2期			E-2 1 3
20	214	土師器	甕	19.4					SB 0 4最上層	B 2期			E-2 1 4
20	215	須惠器	杯蓋	13.4					SB 0 6	B 2期			E-2 1 5
20	216	須惠器	杯		6.3		A		SB 0 6	B 2期			E-2 1 6
20	217	須惠器	長頸壺	9					SB 0 6	B 2期			E-2 1 7
21	218	灰釉陶器	碗	18	8.4	5			SB 0 7最上層	B 2期			E-2 1 8
21	219	灰釉陶器	皿	14	6.8	2.6			SB 0 7最上層	B 2期			E-2 1 9
21	220	土師器	甕	19					SB 0 7最上層	B 2期			E-2 2 0
21	221	土師器	甕	24.4					SB 0 7最上層	B 2期			E-2 2 1
21	222	須惠器	杯蓋	13.2		3.4	A 2		SB 0 8	B 2期			E-2 2 2
21	223	須惠器	杯	14.8			B		SB 0 8	B 2期			E-2 2 3
21	224	須惠器	碗	16.5	10	6.3	B 2		SB 0 8	B 2期			E-2 2 4
21	225	須惠器	短頸壺	9					SB 0 8	B 2期			E-2 2 5
21	226	土師器	甕	14.4					SB 0 8	B 2期			E-2 2 6
21	227	須惠器	杯蓋	13.6			A 2		SB 0 9最上層	B 2期			E-2 2 7
21	228	須惠器	杯蓋	13.9				2	SB 0 9最上層	B 2期			E-2 2 8
21	229	須惠器	杯蓋	18.6				2	SB 0 9最上層	B 2期			E-2 2 9
21	230	須惠器	杯	14.9					SB 0 9最上層	B 2期			E-2 3 0
21	231	須惠器	杯	17.8	14.6	4.2	B		SB 0 9最上層	B 2期			E-2 3 1
21	232	須惠器	杯	18.3	12.9	4.1	B		SB 0 9最上層	B 2期			E-2 3 2
21	233	須惠器	杯	16.4	12	7.4	B		SB 0 9最上層	B 2期			E-2 3 3
21	234	須惠器	盤	16.6			B		SB 0 9最上層	B 2期			E-2 3 4
21	235	土師器	甕	29.6				2	SB 0 9最上層	B 2期			E-2 3 5
21	236	須惠器	杯蓋	11.7			A 2		SE 0 4	B 2期			E-2 3 6
21	237	須惠器	杯蓋	14.5			A 2		SE 0 4	B 2期			E-2 3 7
21	238	須惠器	碗	12	6	3.5	A 2		SE 0 4	B 2期			E-2 3 8
21	239	須惠器	盤	16.8				2	SE 0 4	B 2期			E-2 3 9
21	240	須惠器	壺		8				SE 0 4	B 2期			E-2 4 0
21	241	須惠器	壺		15.4				SE 0 4	B 2期			E-2 4 1
21	242	須惠器	甕	26					SE 0 4	B 2期			E-2 4 2
21	243	須惠器	杯	13.8			B		SK 5 9	B 2期			E-2 4 3
21	244	須惠器	杯	13.4	9.7	3.3	B		SK 5 9	B 2期			E-2 4 4
21	245	須惠器	杯	13.1	9.7	3.7	B		SK 5 9	B 2期			E-2 4 5
21	246	須惠器	壺		7				SK 5 9	B 2期			E-2 4 6
22	247	須惠器	杯	12.6	7.7	3	A		SB 0 5	B 3期			E-2 4 7
22	248	灰釉陶器	皿	14.4	7.6	2.9			SB 0 5	B 3期			E-2 4 8
22	249	灰釉陶器	碗		6				SB 1 0	B 3期			E-2 4 9
22	250	灰釉陶器	碗		6.9				SB 1 0	B 3期			E-2 5 0
22	251	灰釉陶器	皿		6.2				SB 1 0	B 3期			E-2 5 1
22	252	灰釉陶器	皿	14.8	6.8	2.5			SB 1 0最上層	B 3期			E-2 5 2
22	253	灰釉陶器	皿	14.1	6.2	2.7			SB 1 0	B 3期			E-2 5 3
22	254	須惠器	杯蓋	15.5	6.1	2.6	B 2		SB 1 1	B 3期			E-2 5 4
22	255	灰釉陶器	碗	13.5	6.8	4			SB 1 1最上層	B 3期			E-2 5 5
22	256	灰釉陶器	段皿						SB 1 1最上層	B 3期			E-2 5 6
22	257	灰釉陶器	皿		8				SB 1 1	B 3期			E-2 5 7
22	258	灰釉陶器	壺	4.2					SB 1 1最上層	B 3期			E-2 5 8
22	259	灰釉陶器	手付瓶						SB 1 1	B 3期	把手		E-2 5 9
22	260	灰釉陶器	皿	14.2	6.8	2			SB 1 1最上層	B 3期			E-2 6 0
22	261	灰釉陶器	碗	16.4	7.9	4.7			SB 1 4最上層	B 3期			E-2 6 1
22	262	灰釉陶器	皿	15.1	8.4	2.6			SB 1 4	B 3期			E-2 6 2
22	263	灰釉陶器	皿		8.4				SB 1 4最上層	B 3期			E-2 6 3
22	264	灰釉陶器	碗	13.7	6.1	4.6			SB 1 6	B 3期			E-2 6 4
22	265	須惠器	杯蓋	15					SE 0 3	B 3期			E-2 6 5
22	266	須惠器	杯	13.3	6.6	3.5	A		SE 0 3	B 3期			E-2 6 6
22	267	灰釉陶器	碗	15.3	9.4	4.5			SE 0 3	B 3期			E-2 6 7

図版	No	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	出土遺構	時期	備考	登録番号
22	268	灰釉陶器 碗	10.8	4.6	3.7		SE03	B3期		E-268
22	269	灰釉陶器 碗	13.1	7	4.2		SE03	B3期		E-269
22	270	灰釉陶器 碗		7.3			SE03	B3期		E-270
22	271	灰釉陶器 碗		7.8			SE03	B3期		E-271
22	272	灰釉陶器 段皿	15.4				SE03	B3期		E-272
22	273	灰釉陶器 耳皿		4.8			SE03	B3期		E-273
22	274	灰釉陶器 長頸壺					SE03	B3期		E-274
22	275	灰釉陶器 長頸壺	9				SE03	B3期		E-275
22	276	灰釉陶器 壺		10			SE03	B3期		E-276
22	277	土師器 甕	20				SE03	B3期		E-277
23	278	灰釉系陶器 碗	15.1	6.6	5.3	A	SK100	C1期		E-278
23	279	灰釉系陶器 碗	14.8	6.8	5.3	A	SK100	C1期		E-279
23	280	灰釉系陶器 碗		8.2		A	SK100	C1期		E-280
23	281	灰釉系陶器 皿	7	4.6	1.6	A2	SK100	C1期		E-281
23	282	灰釉系陶器 鉢	27.4	13.4	9.8		SK100	C1期		E-282
23	283	灰釉系陶器 碗		6		A	SK109	C1期		E-283
23	284	灰釉系陶器 碗		8.4		A	SK109	C1期		E-284
23	285	灰釉系陶器 碗		7.4		A	SK109	C1期		E-285
23	286	灰釉系陶器 碗		7.2		A	SK110	C1期		E-286
23	287	灰釉系陶器 碗		7.2		A	SK110	C1期		E-287
23	288	灰釉系陶器 碗		7.6		A	SK110	C1期		E-288
23	289	灰釉系陶器 碗		7.2		A	SK114	C1期		E-289
23	290	灰釉系陶器 皿	8.5	5	2.7	A1	SK115	C1期		E-290
23	291	灰釉系陶器 碗		7		A	SK116	C1期		E-291
23	292	灰釉系陶器 碗		7.2		A	SK116	C1期		E-292
23	293	灰釉系陶器 碗	13.6			A2	SK116	C1期		E-293
23	294	灰釉系陶器 碗		7.6		A2	SK117	C1期		E-294
23	295	灰釉系陶器 碗	16.2	7.4	5.3	A1	SK122	C1期		E-295
23	296	灰釉系陶器 皿	7.9	4.2	1.9	A1	SK122	C1期		E-296
23	297	灰釉系陶器 皿	8.4	5.4	1.9	A2	SK122	C1期		E-297
23	298	灰釉系陶器 碗	15.7	7.6	4.9	A1	SE02	C1期		E-298
23	299	灰釉系陶器 碗		7.7		A	SE02	C1期		E-299
23	300	青磁 碗	17				SE06	C1期		E-300
23	301	灰釉系陶器 碗	14.8	6.8	5.7	A2	SE06	C1期		E-301
23	302	灰釉系陶器 碗	14.6	6.3	5.6	A2	SE06	C1期		E-302
23	303	灰釉系陶器 碗	13.7			A2	SE06	C1期		E-303
23	304	灰釉系陶器 碗	13.8			A2	SE06	C1期		E-304
23	305	灰釉系陶器 碗		7.4		A2	SE06	C1期		E-305
23	306	灰釉系陶器 皿	8.2	4.6	2.1	A2	SE06	C1期		E-306
23	307	灰釉系陶器 皿	7.8	5	1.8	A2	SE06	C1期		E-307
23	308	灰釉系陶器 皿	7.5	5	1.9	A2	SE06	C1期		E-308
24	309	灰釉系陶器 碗	15.8	7.1	4.8	A2	SD100	C2期		E-309
24	310	灰釉系陶器 碗	15.7	6.4	4.7	A2	SD100	C2期		E-310
24	311	灰釉系陶器 碗	15.9	7.5	4.8	A2	SD100	C2期		E-311
24	312	灰釉系陶器 碗	14.6	7	4.7	A2	SD100	C2期		E-312
24	313	灰釉系陶器 碗	14.3	6.2	4.7	A2	SD100	C2期		E-313
24	314	灰釉系陶器 碗	14.5	7	5.1	A2	SD100	C2期		E-314
24	315	灰釉系陶器 碗	15.2	6.8	5.6	A2	SD100	C2期		E-315
24	316	灰釉系陶器 碗	14.3	6	4.5	A2	SD100	C2期		E-316
24	317	灰釉系陶器 碗	15	6.9	5.3	A2	SD100	C2期		E-317
24	318	灰釉系陶器 碗	15.2	7	5	A2	SD100	C2期		E-318
24	319	灰釉系陶器 碗	14.4	7.1	5.3	A2	SD100	C2期		E-319
24	320	灰釉系陶器 碗		4.8		A2	SD100	C2期		E-320
24	321	灰釉系陶器 碗	13.2	5.4	5.7	B1	SD100	C2期		E-321
24	322	灰釉系陶器 碗	13.8	5.3	5.5	B1	SD100	C2期		E-322
24	323	灰釉系陶器 碗	13.8	4.8	4.7	B1	SD100	C2期		E-323
24	324	灰釉系陶器 碗	11.8	4	3.6	B2	SD100	C2期		E-324
24	325	灰釉系陶器 碗	11.4	4.6	3	B2	SD100	C2期		E-325
24	326	灰釉系陶器 皿	7.5	4.2	2.4	A2	SD100	C2期		E-326
24	327	灰釉系陶器 皿	8	4	2.1	A2	SD100	C2期		E-327
24	328	灰釉系陶器 皿	7.8	4.9	2.1	A2	SD100	C2期		E-328
24	329	灰釉系陶器 皿	7.6	4.6	1.6	A2	SD100	C2期		E-329
24	330	灰釉系陶器 皿	8.1	5.2	1.9	A2	SD100	C2期		E-330
24	331	灰釉系陶器 皿	7.4	4.8	2	A2	SD100	C2期		E-331
24	332	灰釉系陶器 皿	7.6	4.8	2	A2	SD100	C2期		E-332
24	333	灰釉系陶器 皿		4.2		A2	SD100	C2期		E-333
24	334	灰釉系陶器 皿	7.8	4.8	1.4	B2	SD100	C2期		E-334
24	335	灰釉系陶器 皿	7.5	4.6	1.1	B2	SD100	C2期		E-335
24	336	古瀬戸 平碗	14.7	4.6	5.3		SD100	C2期		E-336
24	337	古瀬戸 絞釉小皿	10.8	2.8	2		SD100	C2期		E-337
24	338	灰釉系陶器 子持器台?	2.5	2.1	2.1		SD100	C2期		E-338
24	339	古瀬戸 鉄釉摺鉢	28.4				SD100	C2期		E-339
24	340		27.6				SD100	C2期		E-340
24	341		24				SD100	C2期		E-341
24	342		28				SD100	C2期		E-342
25	343	青磁 碗	12.2	3.8	5.3		SD27	C2期		E-343
25	344	古瀬戸 袴腰型香炉	9.6	4.6	3.6		SD32	C2期		E-344
25	345	古瀬戸 仏供	10.6				SD32	C2期		E-345
25	346	灰釉系陶器 碗	12.5	4.3	3.9	B2	SD47	C2期		E-346
25	347	灰釉系陶器 碗	11.8	3.4	3.2	B2	SD47	C2期		E-347
25	348	灰釉系陶器 碗	11.6	5	3	B2	SD47	C2期		E-348
25	349	灰釉系陶器 碗	12.1	5	2.8	B2	SD47	C2期		E-349
25	350	灰釉系陶器 皿	8.8			A2	SD47	C2期		E-350
25	351	灰釉系陶器 皿	8.1	4.4	2.3	A2	SD47	C2期		E-351
25	352	灰釉系陶器 皿	7.5	5	1.4	B1	SD47	C2期		E-352
25	353	灰釉系陶器 皿	8.8	5.7	1.1	B2	SD47	C2期		E-353
25	354	灰釉系陶器 碗	13.3	4.2	4.1	B2	SD75最上層	C2期		E-354
25	355	灰釉系陶器 碗	11.5	4.4	3.4	B2	SD75最上層	C2期		E-355
25	356	灰釉系陶器 碗	11.7	4.4	2.8	B2	SD75最上層	C2期		E-356

図版	No	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	出土遺構	時期	備考	登録番号
25	357	灰釉系陶器碗	11.5	4.4	2.9	B 2	SD 7 5	C 2期		E-357
25	358	灰釉系陶器皿	7.6	4.2	1.4	B 2	SD 7 5	C 2期		E-358
25	359	灰釉系陶器皿	7.3	5.6	1.1	B 2	SD 7 5最上層	C 2期		E-359
25	360	灰釉系陶器皿	7.6	4.4	1	B 2	SD 7 5	C 2期		E-360
25	361	羽釜	19.6				SD 7 5最上層	C 2期		E-361
25	362	羽釜	20.6				SD 7 5最上層	C 2期		E-362
25	363	羽釜	21				SD 7 5	C 2期		E-363
25	364	羽釜	24				SD 7 5	C 2期		E-364
25	365	灰釉系陶器碗	11.4	4.3	2.5	B 2	SD 9 1	C 2期		E-365
25	366	灰釉系陶器碗	12	4.2	3	B 2	SD 9 1	C 2期		E-366
25	367	灰釉系陶器碗	12.4			B 2	SD 9 1最上層	C 2期		E-367
25	368	灰釉系陶器皿	7.3	4.4	1.2	B 2	SD 9 1	C 2期		E-368
25	369	灰釉系陶器皿	8.2	4.6	1.4	B 2	SD 9 1最上層	C 2期		E-369
25	370	灰釉系陶器皿	8.2	4	1.5	B 2	SD 9 1	C 2期		E-370
25	371	灰釉系陶器皿	8.4	4.4	1.3	B 2	SD 9 1	C 2期		E-371
25	372	灰釉系陶器皿	7.6	5.6	0.9	B 2	SD 9 1最上層	C 2期		E-372
25	373	灰釉系陶器皿	7.9	5.1	0.9	B 2	SD 9 1	C 2期		E-373
25	374	灰釉系陶器皿	7.7	4.6	0.9	B 2	SD 9 1最上層	C 2期		E-374
25	375	羽釜	20				SD 9 1	C 2期		E-375
25	376	羽釜	20.6				SD 9 1最上層	C 2期		E-376
25	377	羽釜	19.5				SD 9 1最上層	C 2期		E-377
25	378	灰釉系陶器碗	12.8			B 1	SD 1 1 0	C 2期		E-378
25	379	灰釉系陶器碗	12.8			B 1	SD 1 1 0	C 2期		E-379
25	380	灰釉系陶器皿	8.8	6.2	1	B 2	SD 1 1 0	C 2期		E-380
25	381	灰釉系陶器碗	14.1			B 1	SD 1 1 7	C 2期		E-381
25	382	灰釉系陶器皿	8.2	5.8	1.2	B 2	SD 1 1 7	C 2期		E-382
25	383	灰釉系陶器皿	8.2	5	1.4	B 2	SD 1 1 7	C 2期		E-383
25	384	灰釉系陶器皿	8.2			B 2	SD 1 1 7	C 2期		E-384
25	385	灰釉系陶器皿	8.1	5.6	0.9	B 2	SD 1 1 7	C 2期		E-385
25	386	灰釉系陶器皿	7.7	5	0.9	B 2	SD 7 4	C 2期		E-386
25	387	灰釉系陶器碗		7.2		A	SD 1 4	C 期		E-387

3. 挿図掲載遺物登録番号一覧

その他の遺物
(B期)登録番号

瓦登録番号

加工円盤登録番号

挿図番号	登録番号
第24図 1	E-401
第24図 2	E-402
第24図 3	E-403
第24図 4	E-404
第24図 5	E-405
第24図 6	E-406
第24図 7	E-407
第24図 8	E-408
第24図 9	E-409

挿図番号	登録番号
第26図 1	E-501
第26図 2	E-502
第27図 3	E-503
第27図 4	E-504
第28図 5	E-505
第28図 6	E-506
第29図 7	E-507
第29図 8	E-508
第30図 9	E-509
第30図 10	E-510
第30図 11	E-511
第30図 12	E-512
第30図 13	E-513
第31図 14	E-514
第31図 15	E-515
第32図 16	E-516
第32図 17	E-517
第33図 18	E-518
第33図 19	E-519
第34図 20	E-520
第34図 21	E-521
第34図 22	E-522
第35図 23	E-523
第35図 24	E-524
第35図 25	E-525
第35図 26	E-526
第36図 27	E-527
第36図 28	E-528
第36図 29	E-529
第36図 30	E-530
第36図 31	E-531
第36図 32	E-532

挿図番号	登録番号
第36図 33	E-533
第36図 34	E-534
第36図 35	E-535
第37図 36	E-536
第37図 37	E-537
第37図 38	E-538
第37図 39	E-539
第37図 40	E-540
第37図 41	E-541
第37図 42	E-542
第37図 43	E-543
第37図 44	E-544
第37図 45	E-545
第37図 46	E-546
第37図 47	E-547
第37図 48	E-548
第37図 49	E-549
第38図 50	E-550
第38図 51	E-551
第38図 52	E-552
第38図 53	E-553
第38図 54	E-554
第38図 55	E-555
第38図 56	E-556
第38図 57	E-557
第38図 58	E-558
第38図 59	E-559
第39図 60	E-560
第39図 61	E-561
第39図 62	E-562
第39図 63	E-563

挿図番号	登録番号
第41図 1	E-701
第41図 2	E-702
第41図 3	E-703
第41図 4	E-704
第41図 5	E-705
第41図 6	E-706
第41図 7	E-707
第41図 8	E-708
第41図 9	E-709
第41図 10	E-710
第41図 11	E-711
第41図 12	E-712
第41図 13	E-713
第41図 14	E-714
第41図 15	E-715
第41図 16	E-716
第41図 17	E-717
第41図 18	E-718
第41図 19	E-719
第41図 20	E-720
第41図 21	E-721
第41図 22	E-722
第41図 23	E-723
第41図 24	E-724
第41図 25	E-725
第41図 26	E-726
第41図 27	E-727
第41図 28	E-728
第41図 29	E-729
第41図 30	E-730
第41図 31	E-731
第41図 32	E-732
第41図 33	E-733
第41図 34	E-734
第41図 35	E-735
第41図 36	E-736
第41図 37	E-737
第41図 38	E-738
第41図 39	E-739
第41図 40	E-740
第41図 41	E-741
第41図 42	E-742
第41図 43	E-743
第41図 44	E-744
第41図 45	E-745
第41図 46	E-746
第41図 47	E-747

挿図番号	登録番号
第41図 48	E-748
第41図 49	E-749
第41図 50	E-750
第41図 51	E-751
第41図 52	E-752
第41図 53	E-753
第41図 54	E-754
第41図 55	E-755
第41図 56	E-756
第41図 57	E-757
第41図 58	E-758
第41図 59	E-759
第41図 60	E-760
第41図 61	E-761
第41図 62	E-762
第41図 63	E-763
第42図 64	E-764
第42図 65	E-765
第42図 66	E-766
第42図 67	E-767
第42図 68	E-768
第42図 69	E-769
第42図 70	E-770
第42図 71	E-771
第42図 72	E-772
第42図 73	E-773
第42図 74	E-774
第42図 75	E-775
第42図 76	E-776
第42図 77	E-777
第42図 78	E-778
第42図 79	E-779
第42図 80	E-780
第42図 81	E-781
第42図 82	E-782
第42図 83	E-783
第42図 84	E-784
第42図 85	E-785
第42図 86	E-786
第42図 87	E-787
第42図 88	E-788
第42図 89	E-789
第42図 90	E-790
第42図 91	E-791
第42図 92	E-792
第42図 93	E-793

土錘登録番号

挿図番号	登録番号
第40図 1	E-601
第40図 2	E-602
第40図 3	E-603
第40図 4	E-604
第40図 5	E-605
第40図 6	E-606
第40図 7	E-607
第40図 8	E-608
第40図 9	E-609

図 版

凡例

1. 遺構図版中の遺構番号は下記の記号で表記する。

SB：建物 SK：土坑 SD：溝

SE：井戸 P：ピット SX：その他

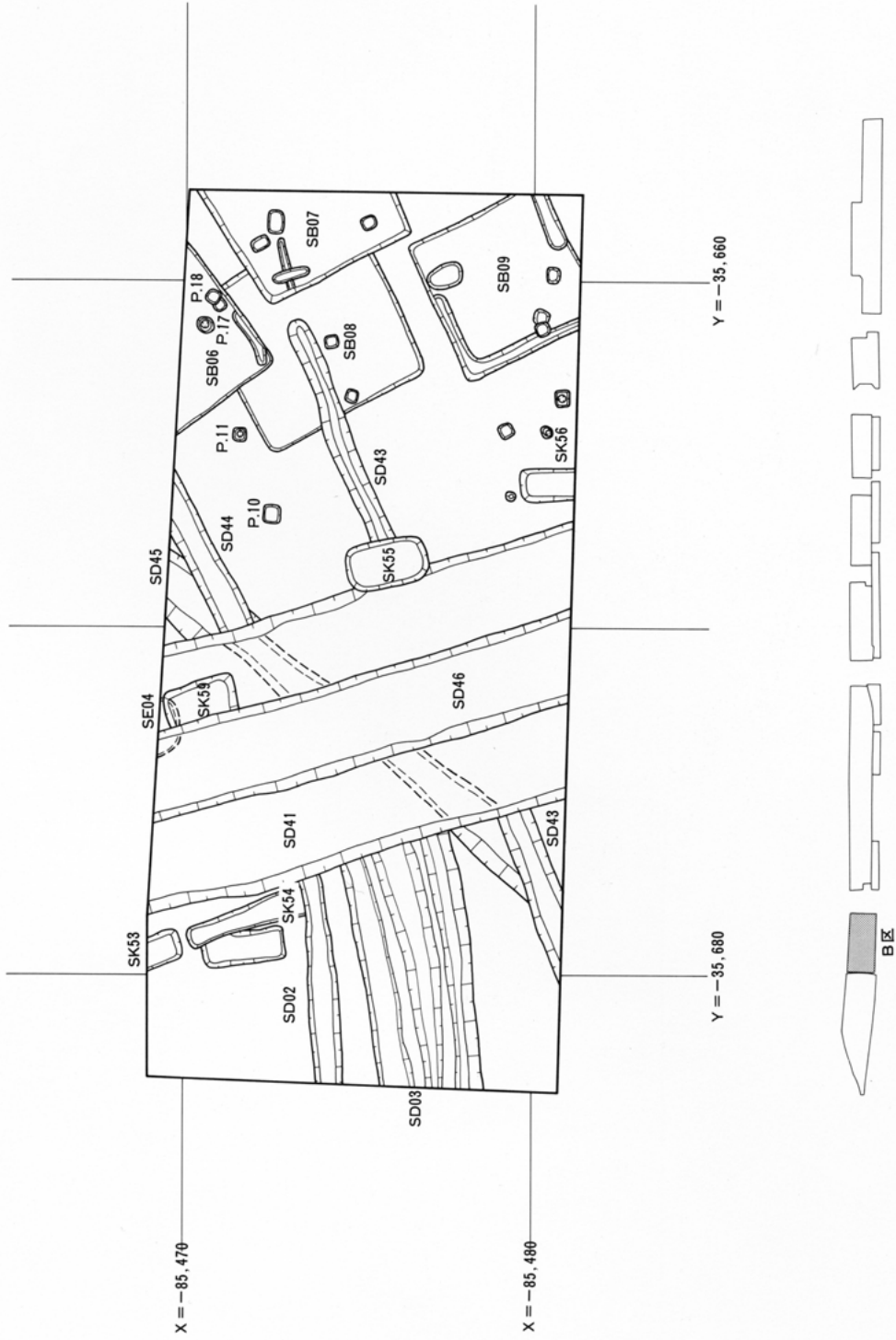
2. 図版の縮率は下記のとおり。

遺構図版 1：100

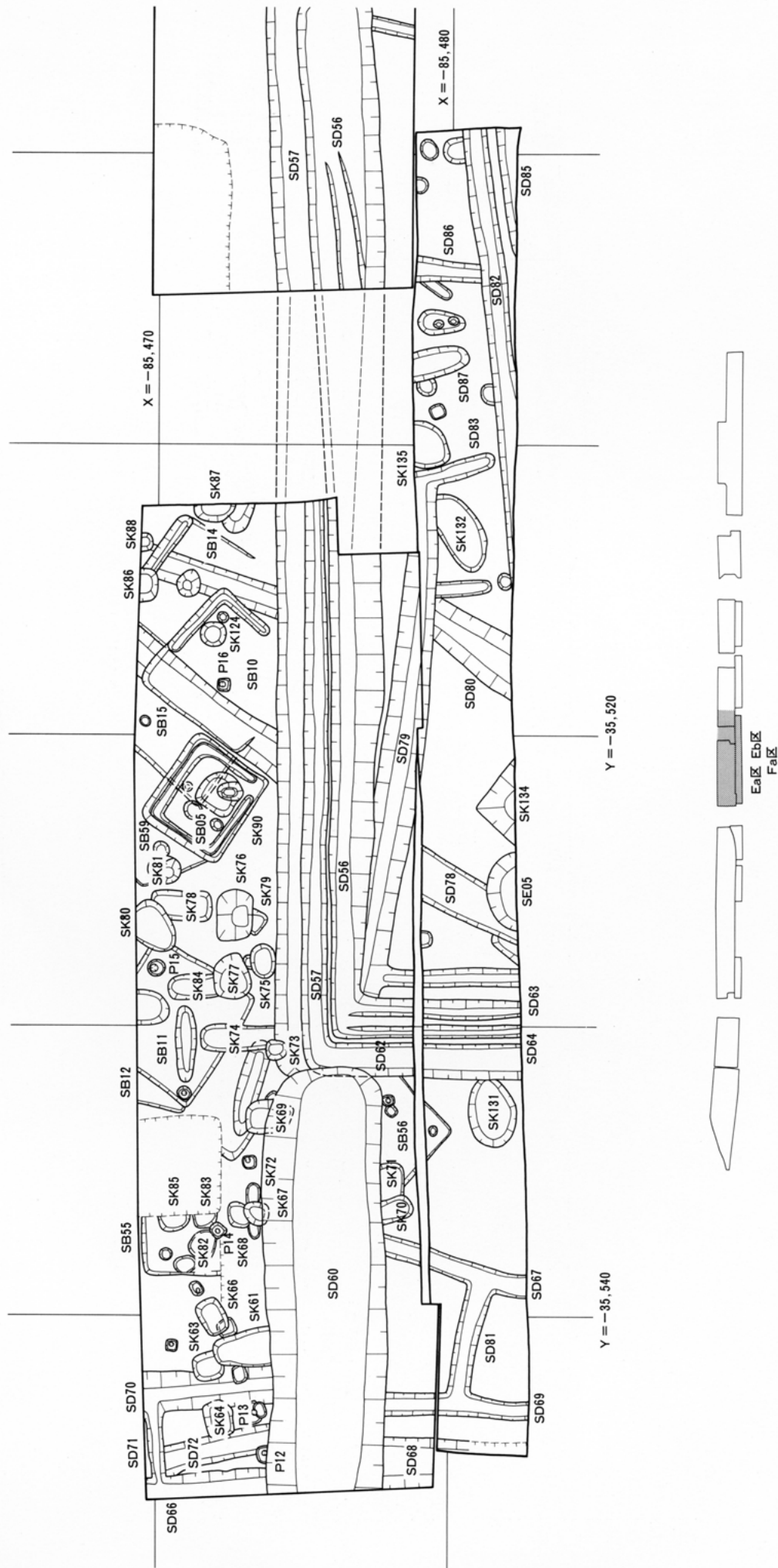
遺物実測図 1：4（一部 1：8）

写真図版 各図版に表記。（但しあくまでも目安）

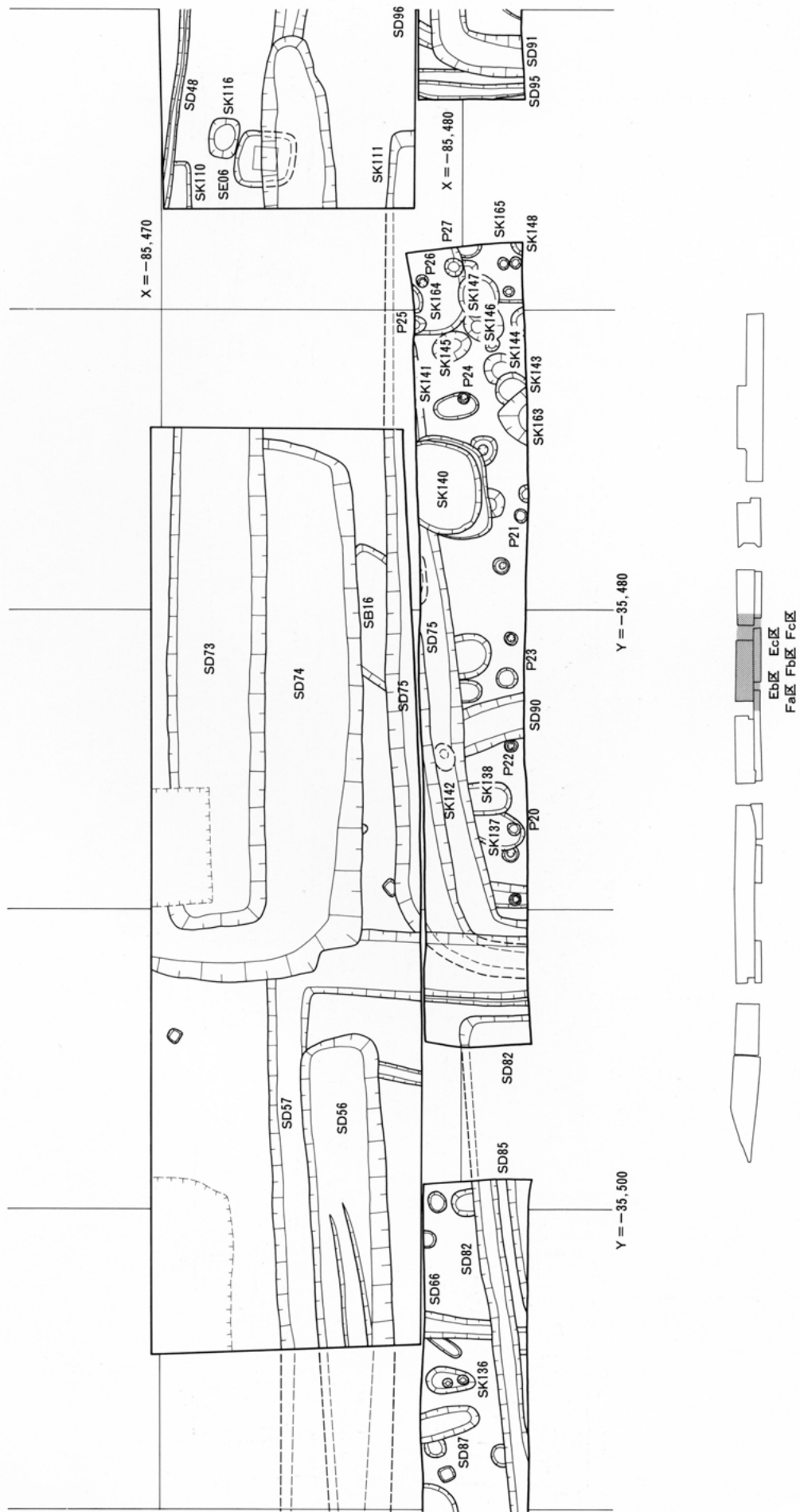
3. 遺構基準線は国土座標第Ⅶ系による。



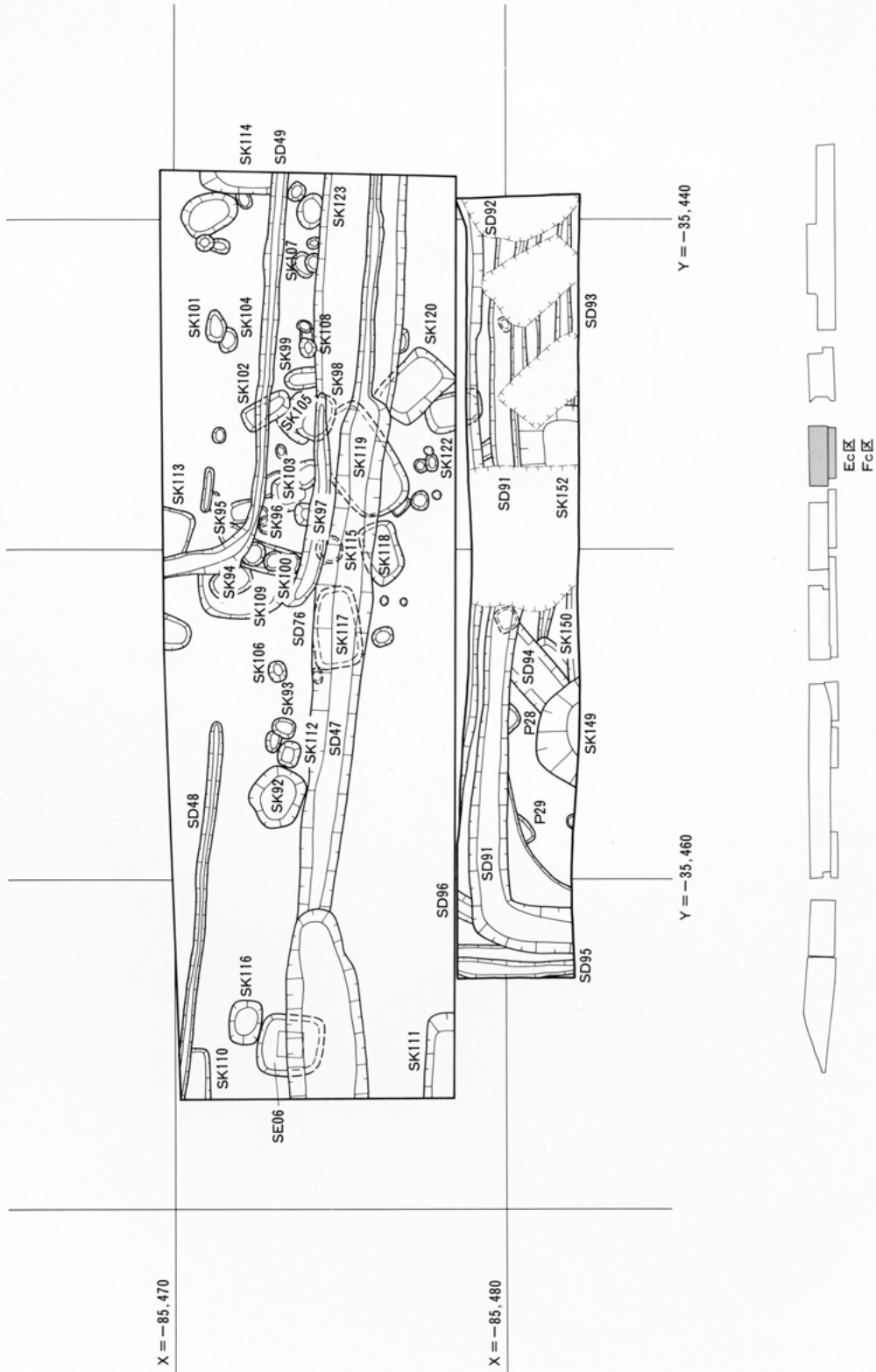
图版2 B区遺構実測図 1:100



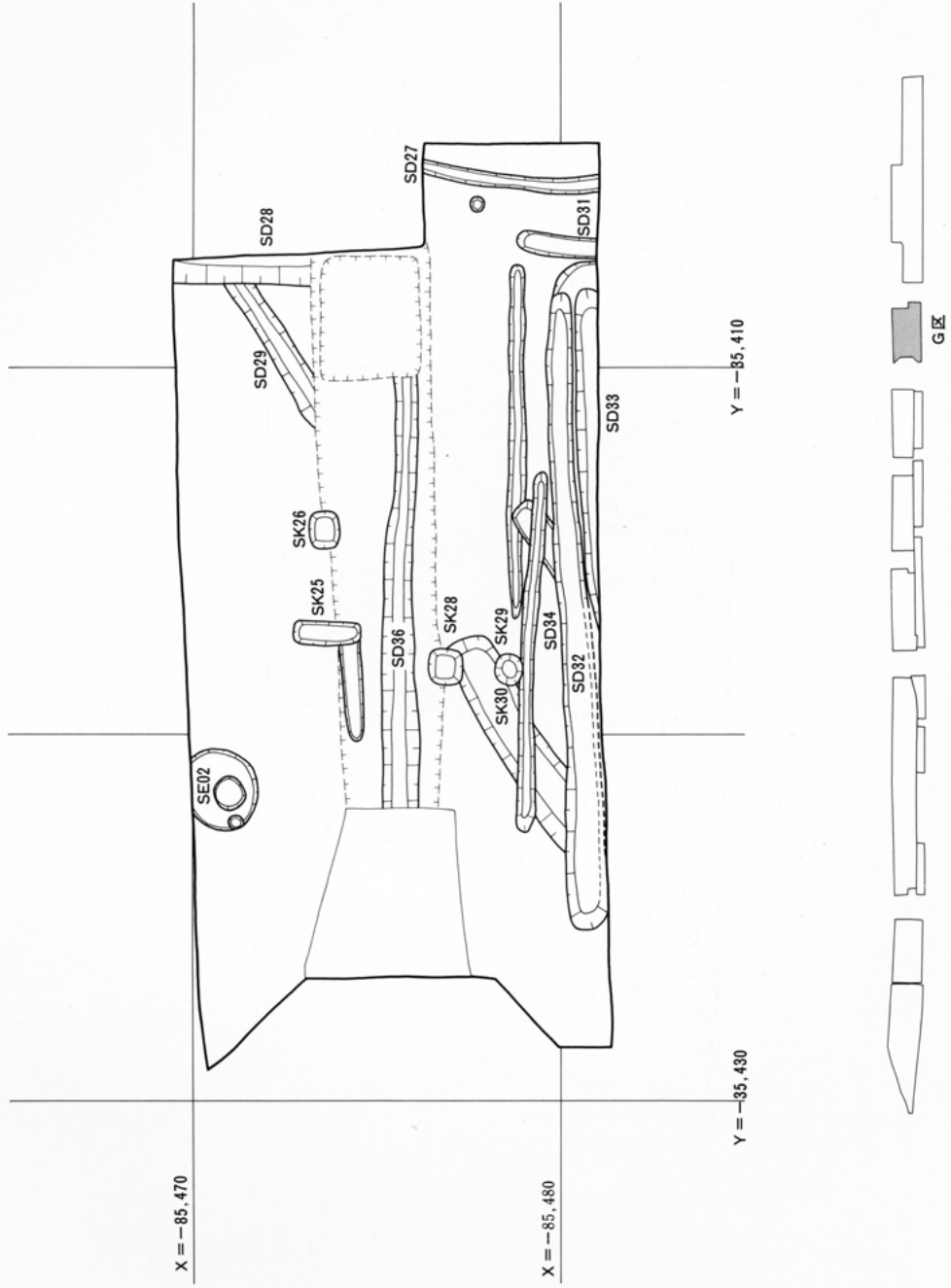
图版 5 Ea区·Eb区·Fa区 遺構実測図 1:100



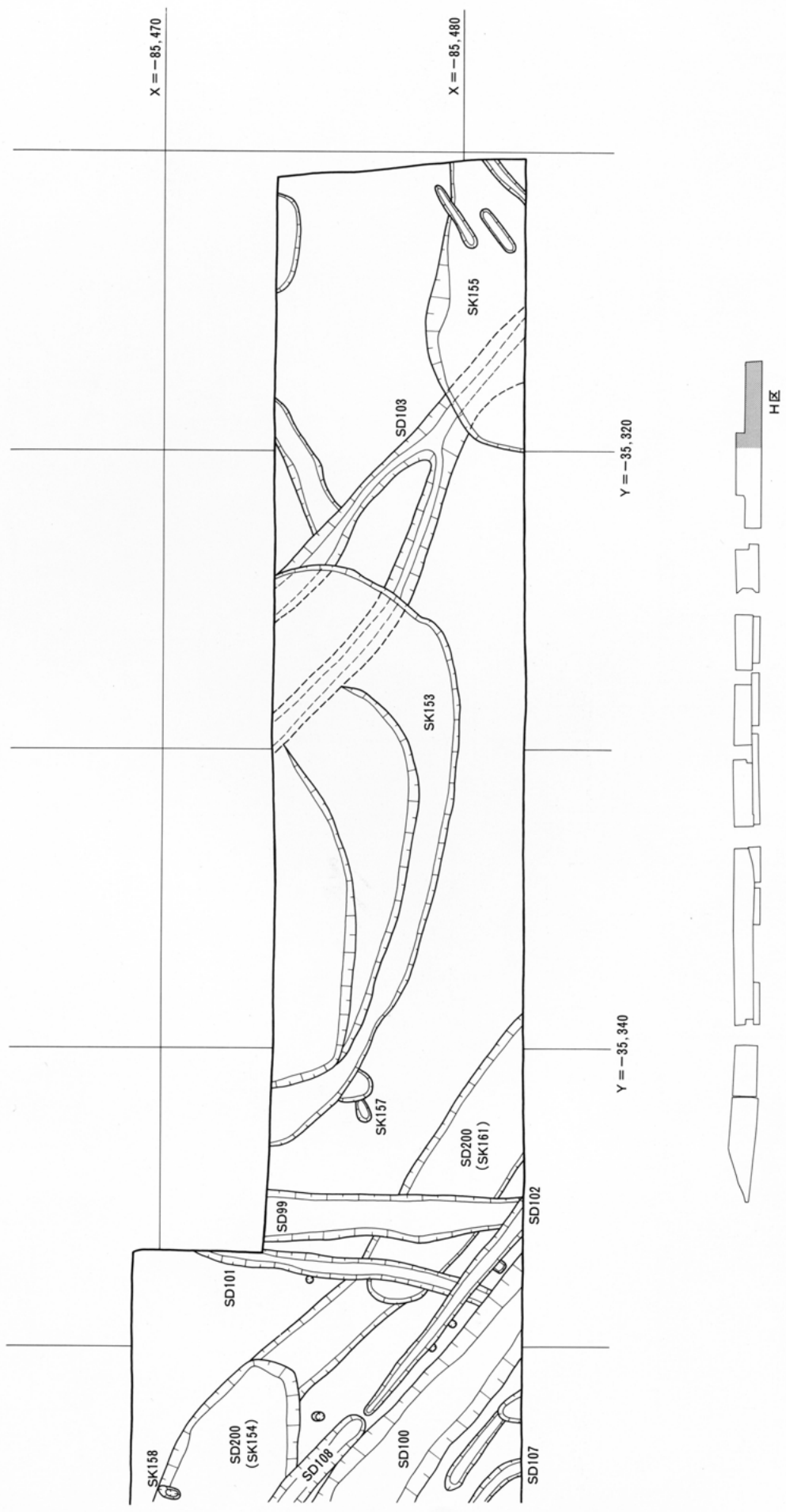
图版 6 Eb区·Ec区·Fa区·Fb区·Fc区遺構実測図 1 : 100



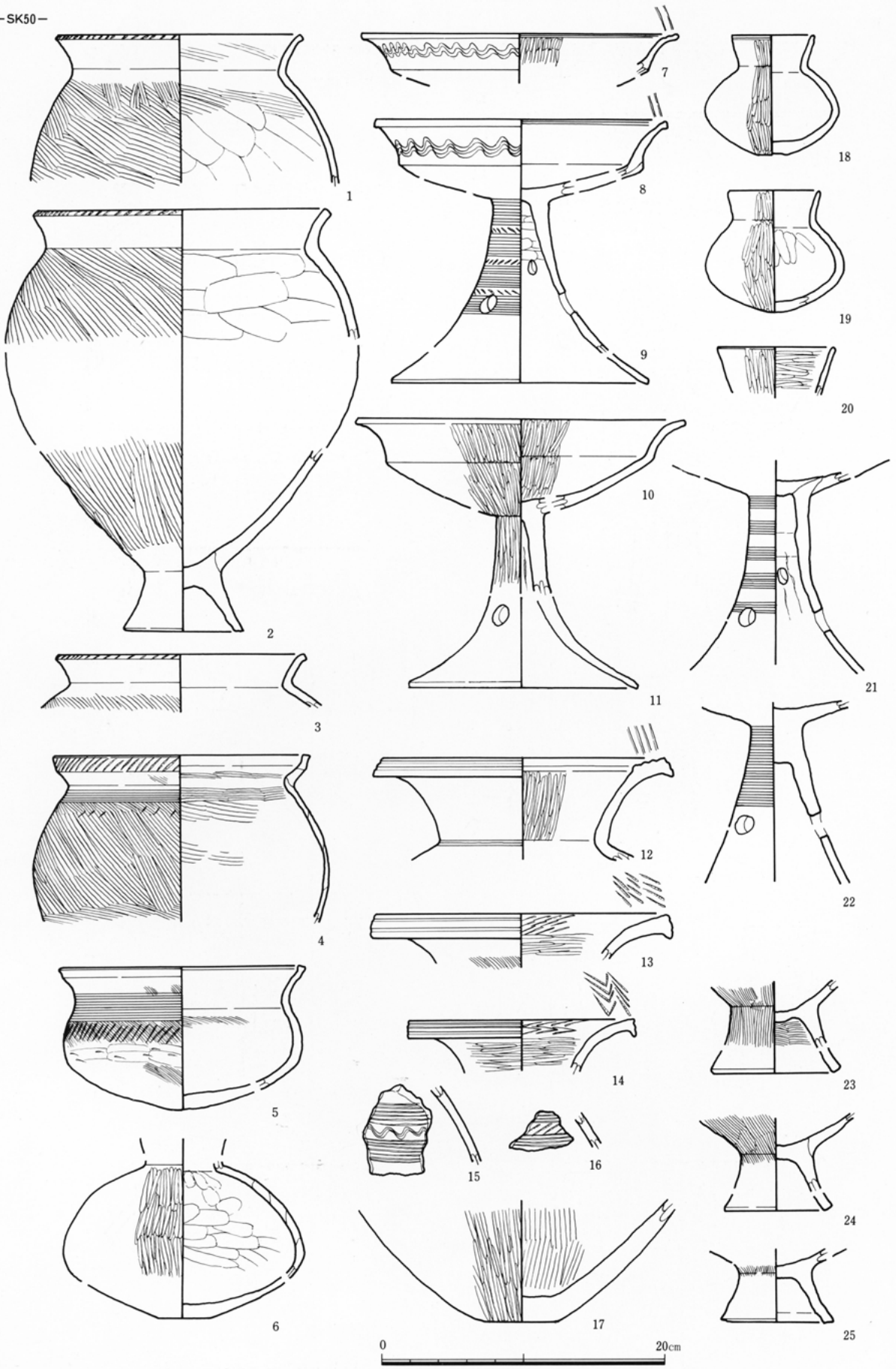
图版7 Ec区・Fc区遺構実測図 1:100



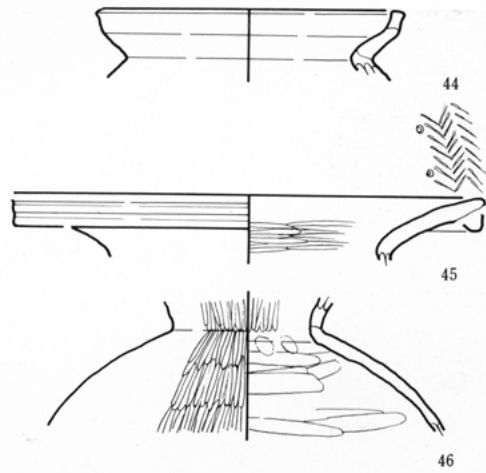
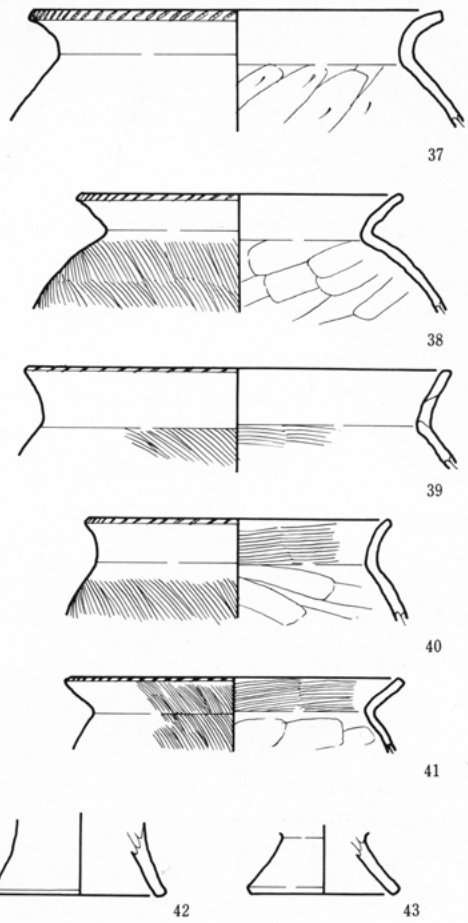
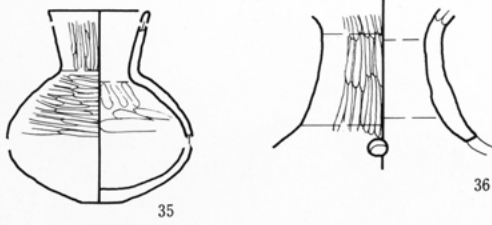
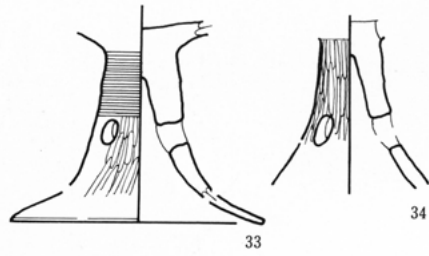
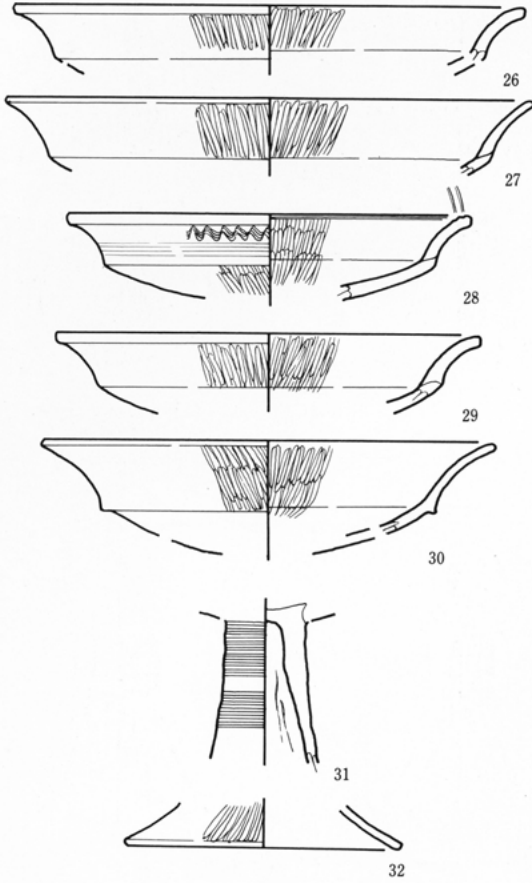
图版 8 G区遺構実測図 1:100



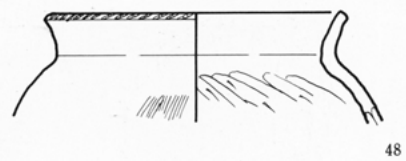
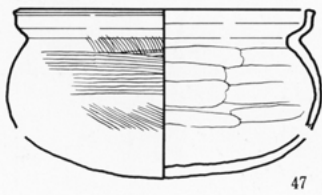
图版10 H区遺構実測図 1:100



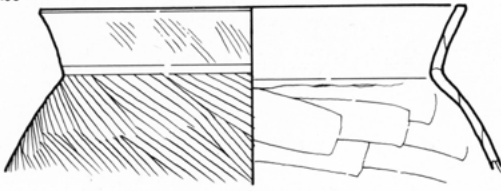
-SB51-



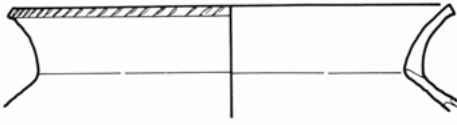
-SB55-



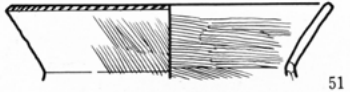
-SX03-



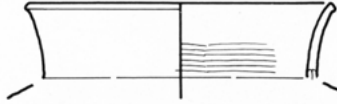
49



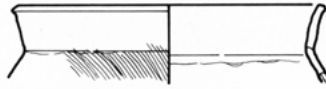
50



51



52



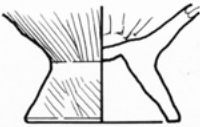
53



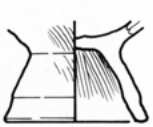
54



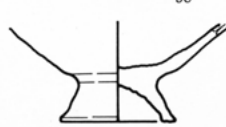
58



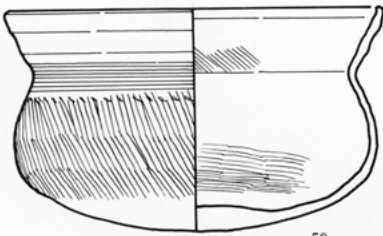
55



56



57

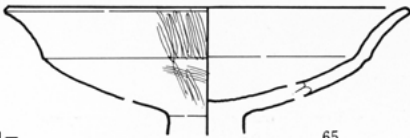


59



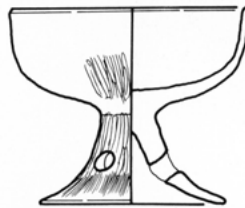
60

-SD80-

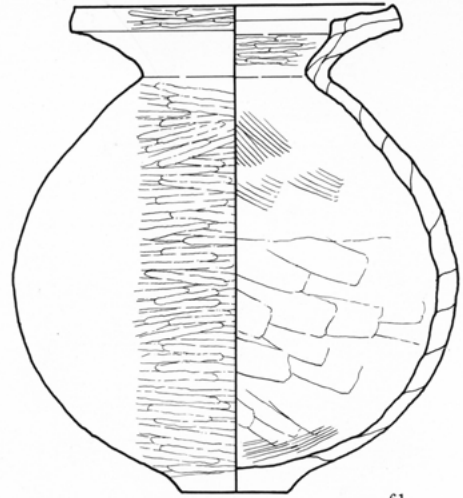


65

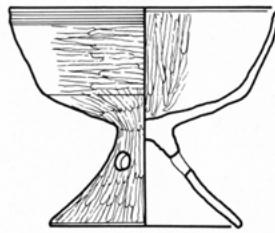
-SB54-



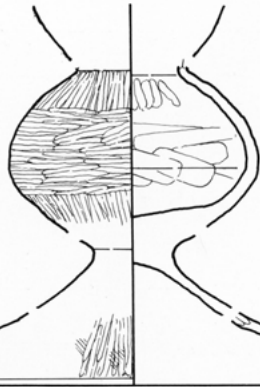
66



61



62

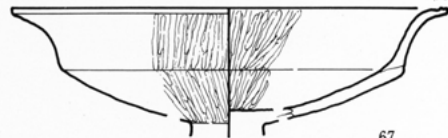


63

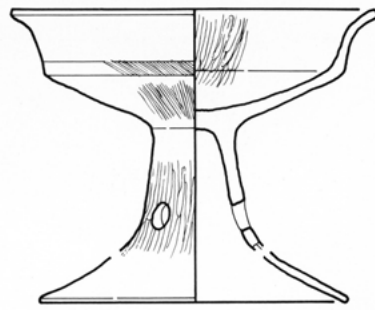


64

-SB54-



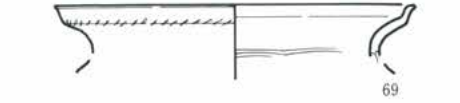
67



68



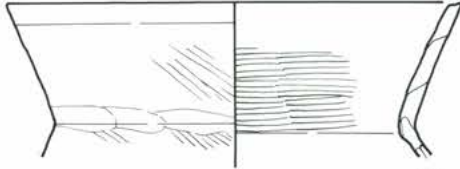
-SB52-



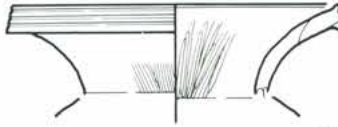
69



70



71



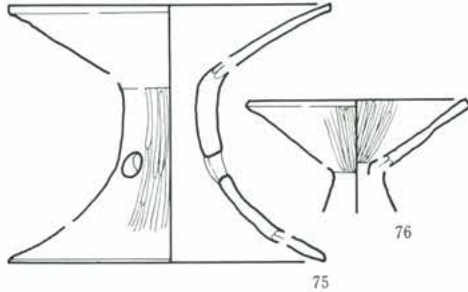
72



73



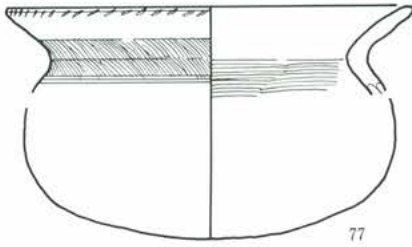
74



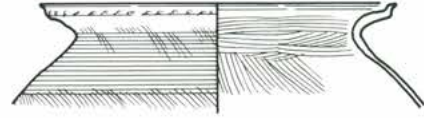
75



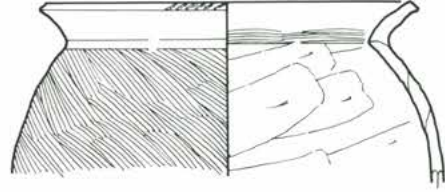
76



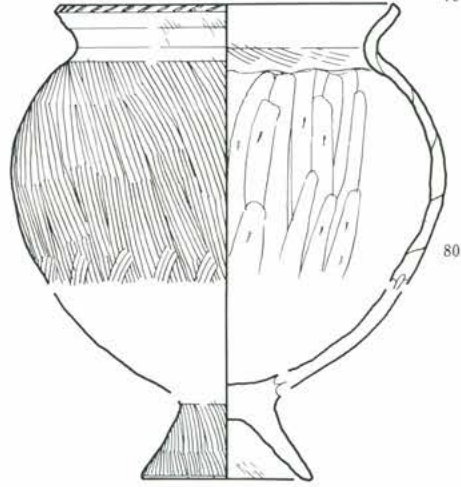
77



78

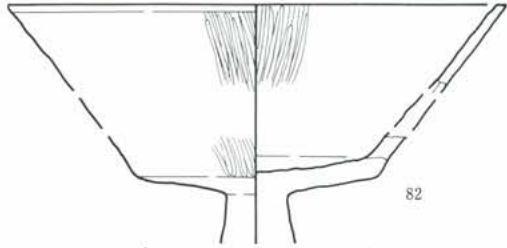


79

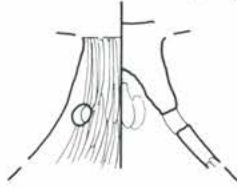


80

81



82

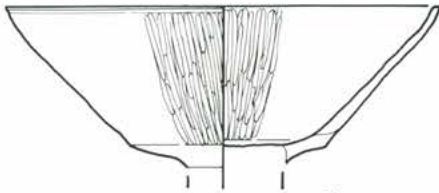


83



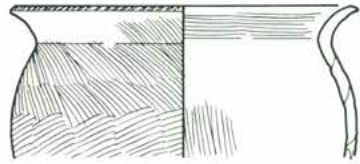
84

-SB54上-



85

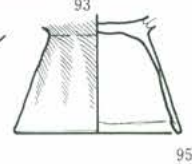
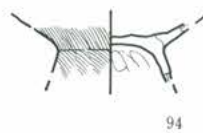
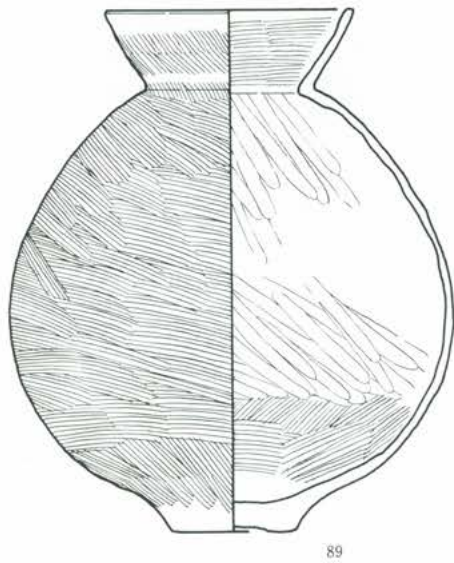
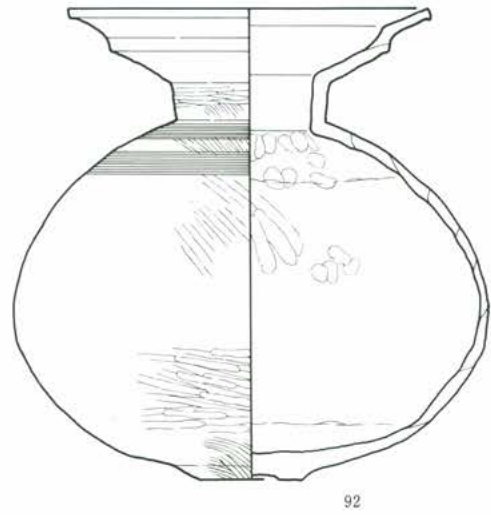
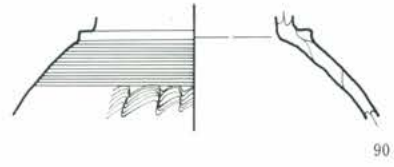
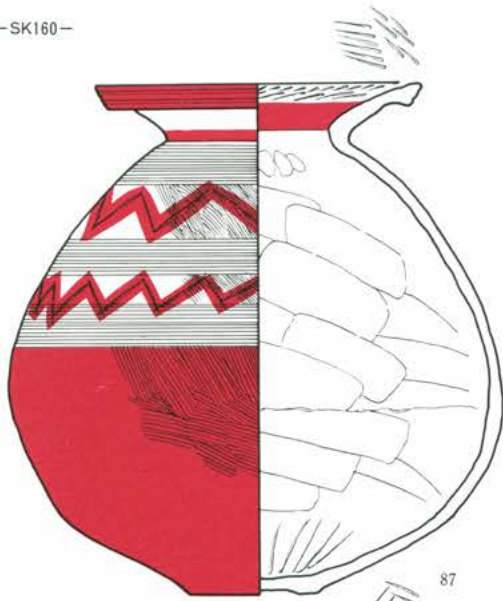
-SK132-



86

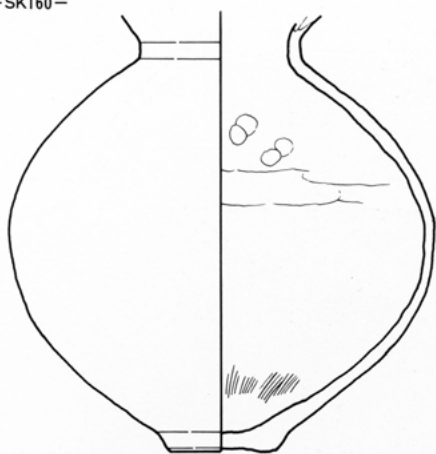


-SK160-

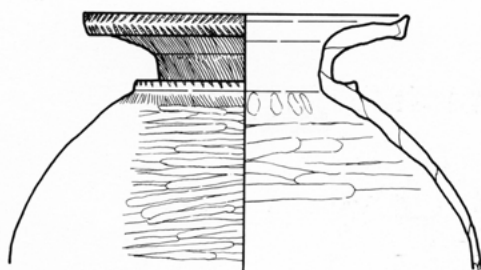


図版16

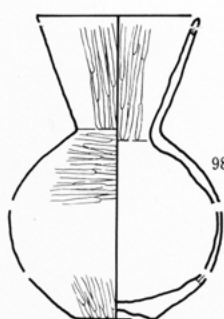
-SK160-



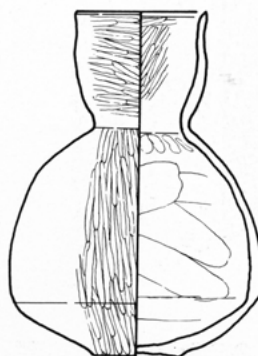
96



97



98

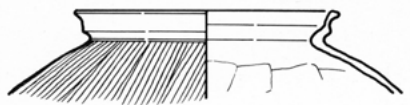


100

-SD200-



122



102



103



104



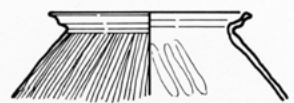
105



106



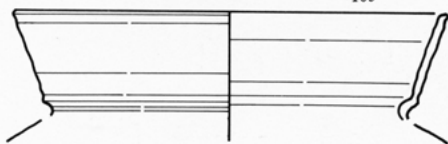
107



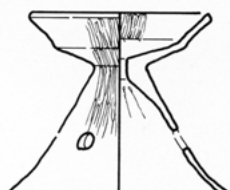
108



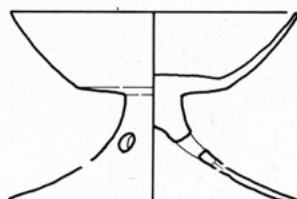
109



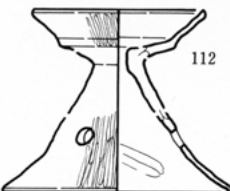
110



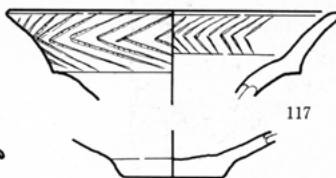
111



101



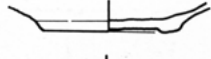
112



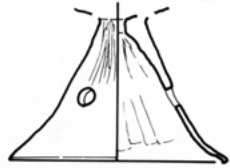
117



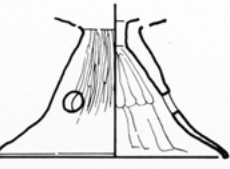
118



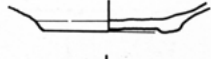
119



113



114



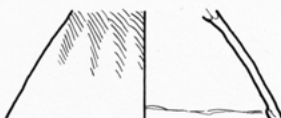
115



120



121



116



122



図版17

-SD01-



123



125



126



124

-SD05-



127

-SD07-



128

-SD26-



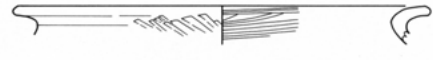
129



130



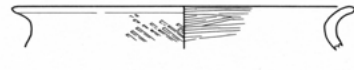
131



132



133



134

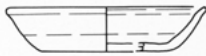


135

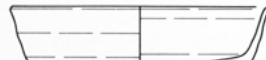


136

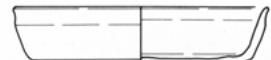
-SD45-



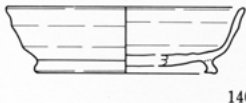
137



138



139



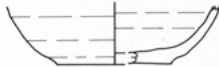
140



141



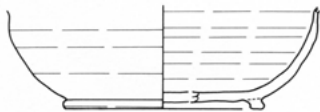
142



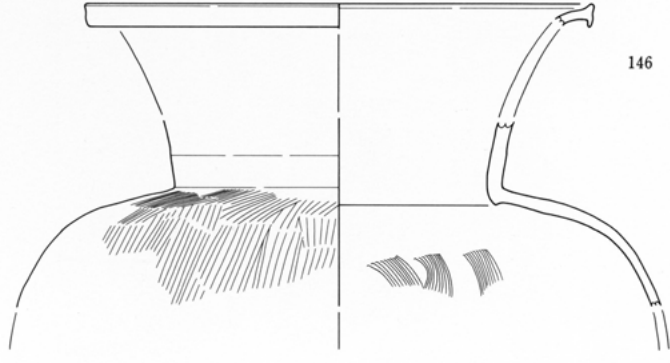
143



144



145



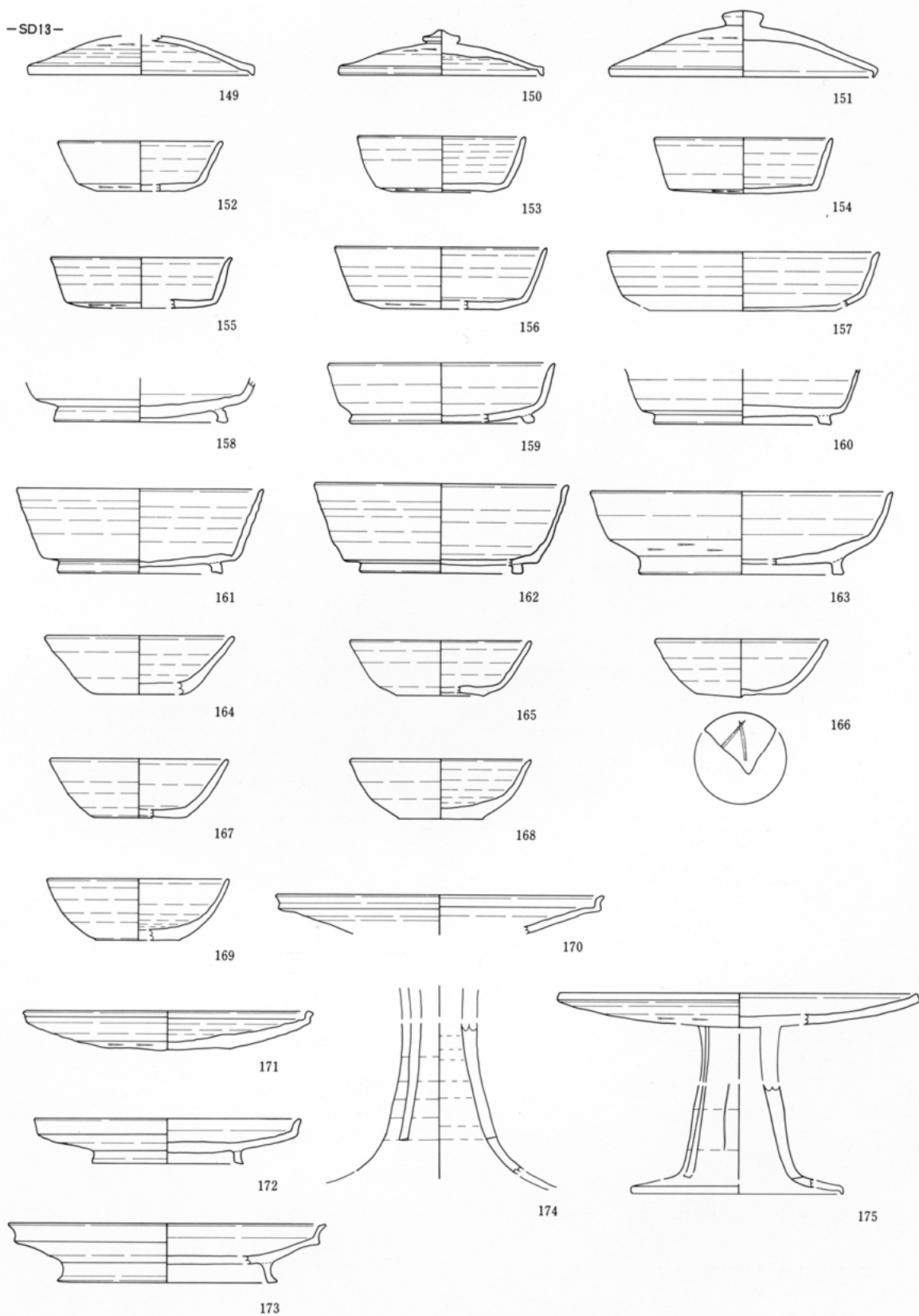
146



148

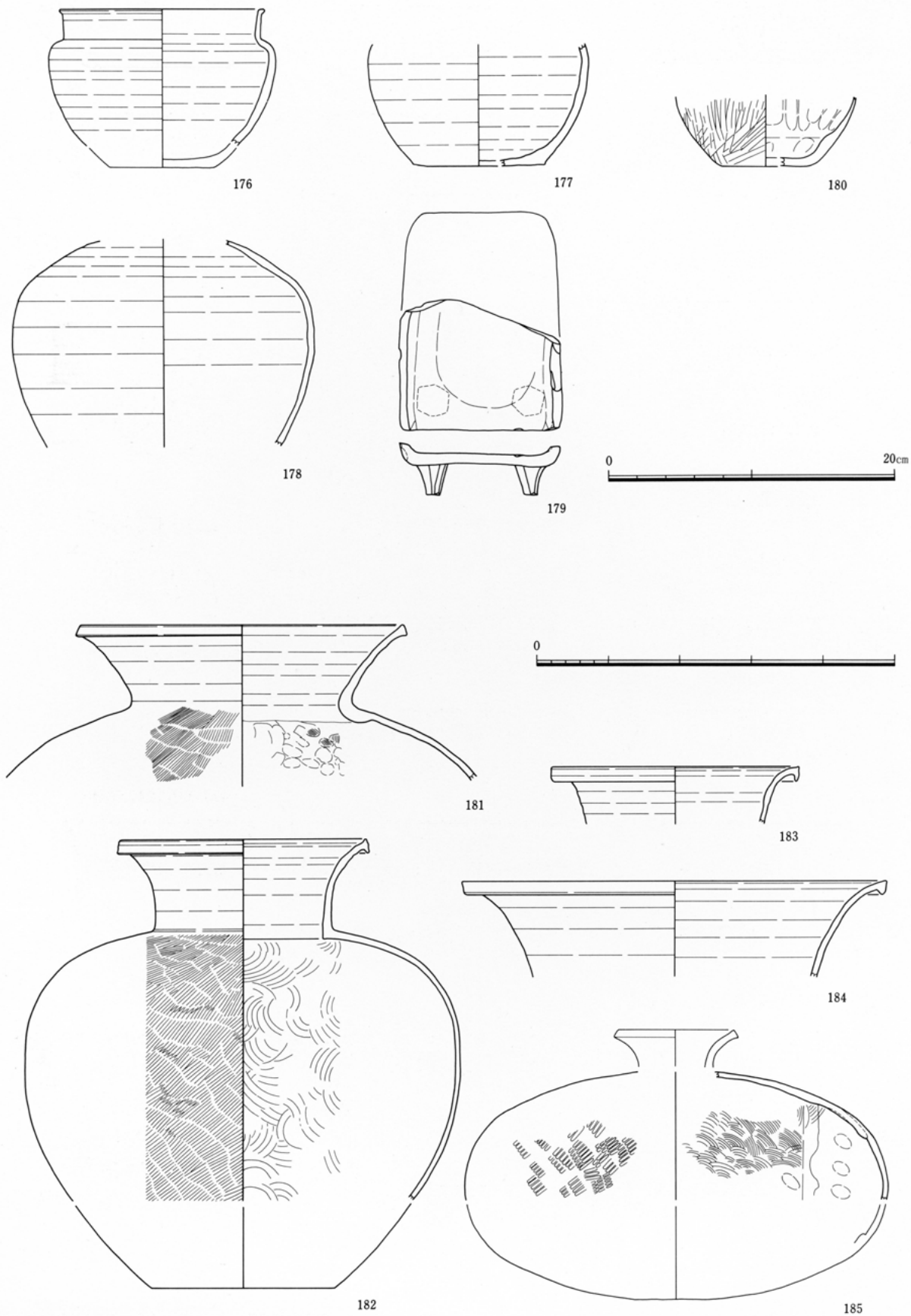


-SD13-

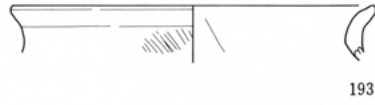
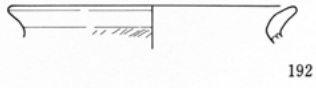
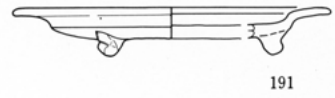
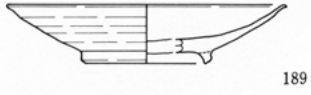
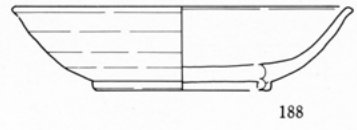
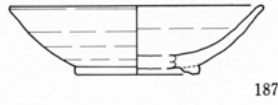
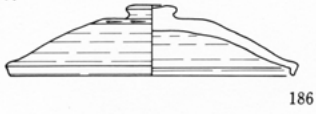


0 20cm

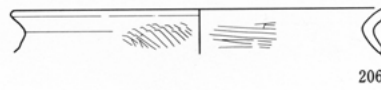
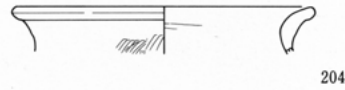
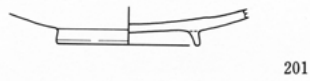
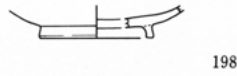
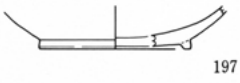
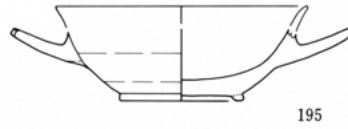
-SD13-



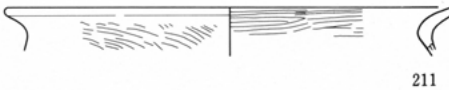
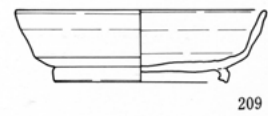
-SD15-



-SD30-

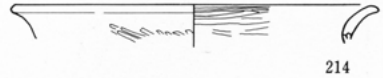


-SB02-

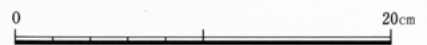
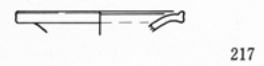
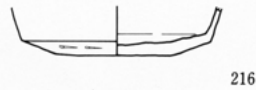


-SB02内中央土坑 SK166-

-SB04-

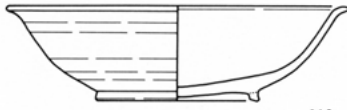


-SB06-



図版21

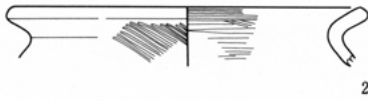
-SB07-



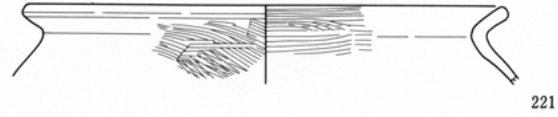
218



219

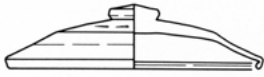


220

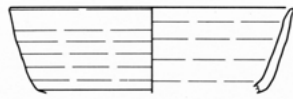


221

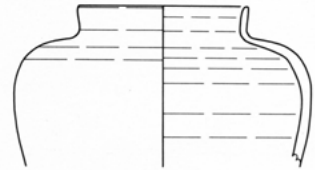
-SB08-



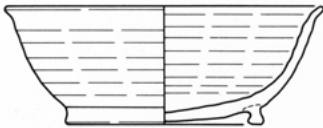
222



223



225



224



226

-SB09-



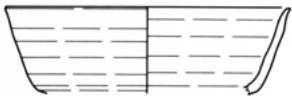
227



228



229



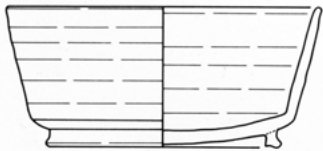
230



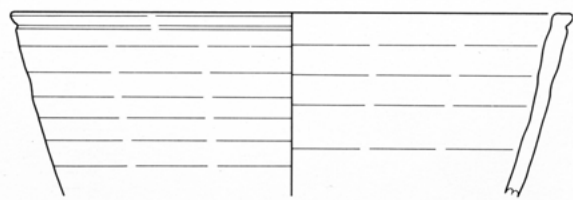
231



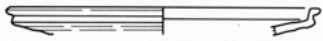
232



233

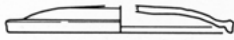


235



234

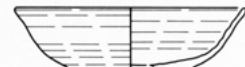
-SE04-



236



237



238



239



240

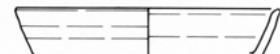


241



242

-SK59-



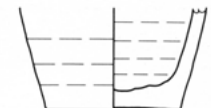
243



244

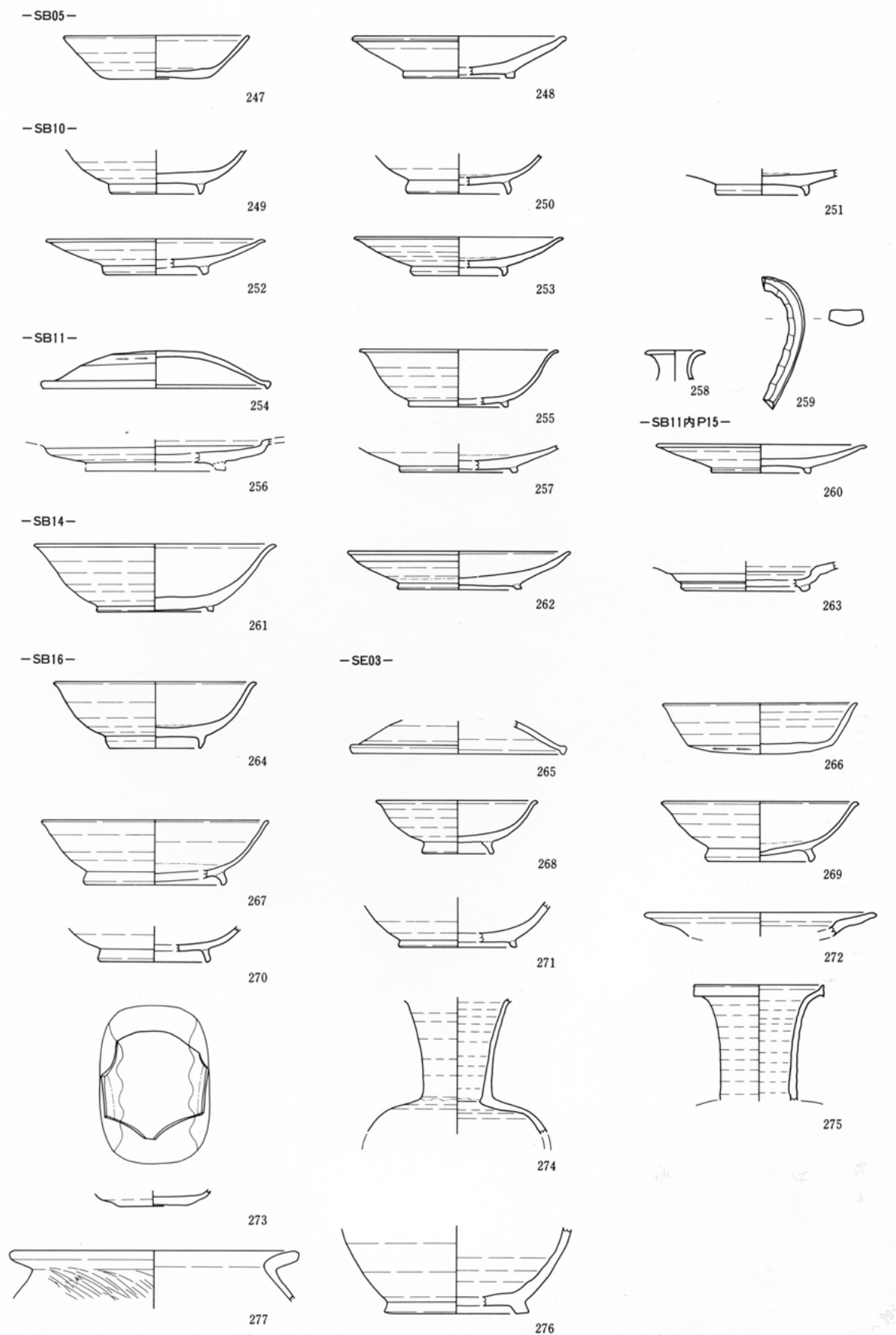


245

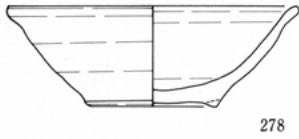


246

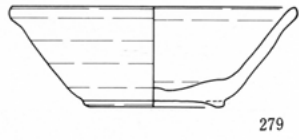




-SK100-



278



279

-SK109-



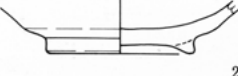
283

-SK110-



286

-SK114-



289

-SK116-



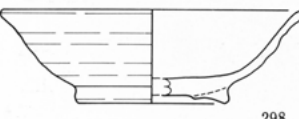
291

-SK117-



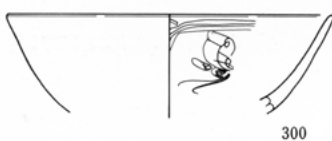
294

-SE02-

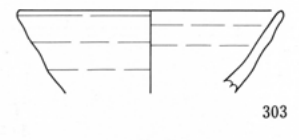


298

-SE06-



300



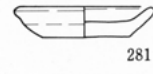
303



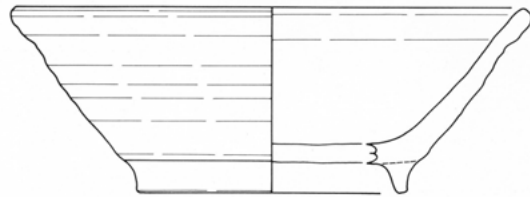
306



280



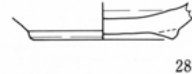
281



282



284



285

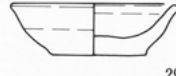


287



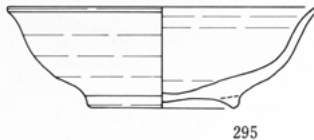
288

-SK115-



290

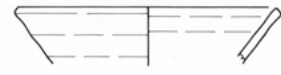
-SK122-



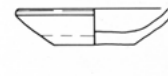
295



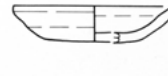
299



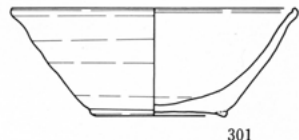
293



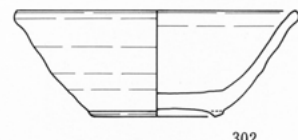
296



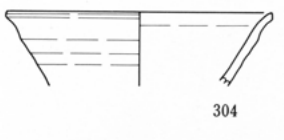
297



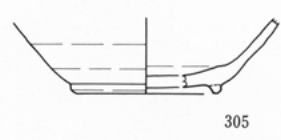
301



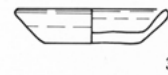
302



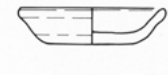
304



305



307



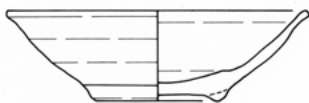
308



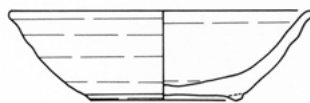
-SD100-



309



310



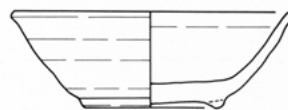
311



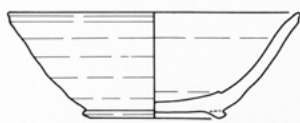
312



313



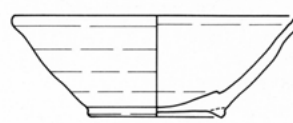
314



315



316



317



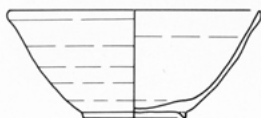
318



319



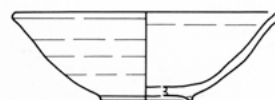
320



321



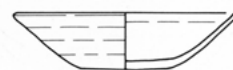
322



323



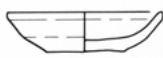
324



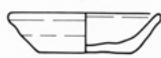
325



326



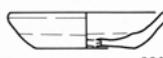
327



328



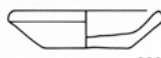
329



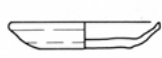
330



331



332



334



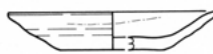
333



335



336



337



338



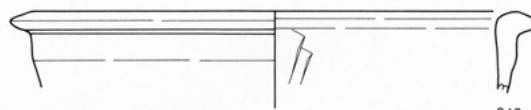
339



340



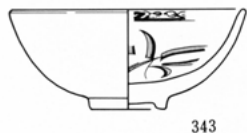
341



342



-SD27-

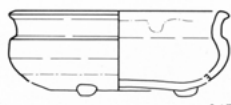


343

-SD32-



344



345

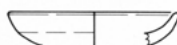
-SD47-



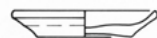
346



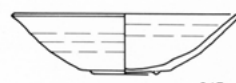
348



350



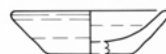
352



347



349



351

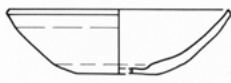


353

-SD75-



354



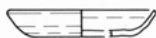
355



356



357



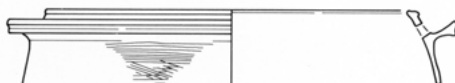
358



359



360



361



362



363



364

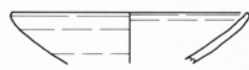
-SD91-



365



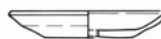
366



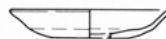
367



368



369



370



371



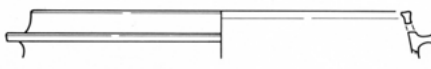
372



373



374



375



376



377

-SD110-



378

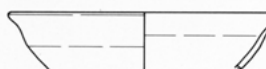


379



380

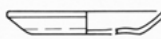
-SD117-



381



383



382



384



385

-C期その他の遺物-



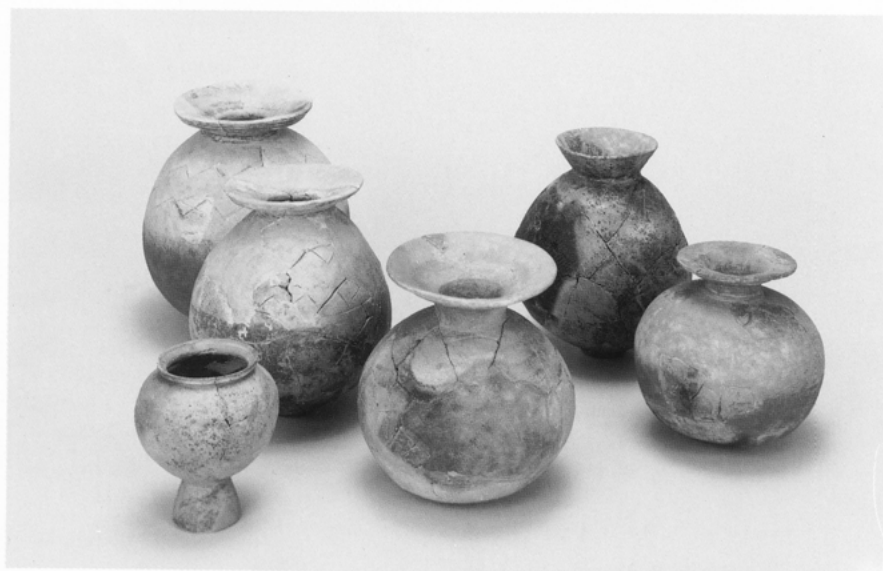
386



387



写真図版



上 SK160 出土遺物
中 SD13 出土遺物
下 SE03 出土遺物



金堂

塔

写真院門I

A B

C

Da Db Dc

Ea Eb Ec

Fa Fb Fc

G

H

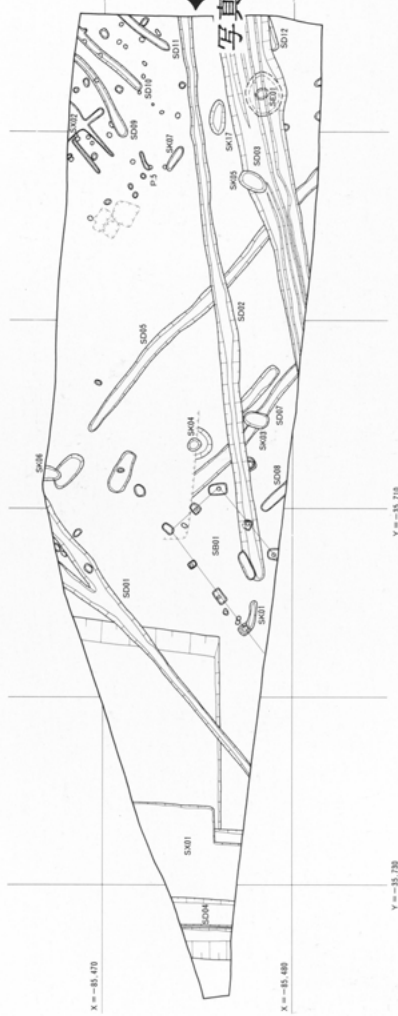


写真図版 1

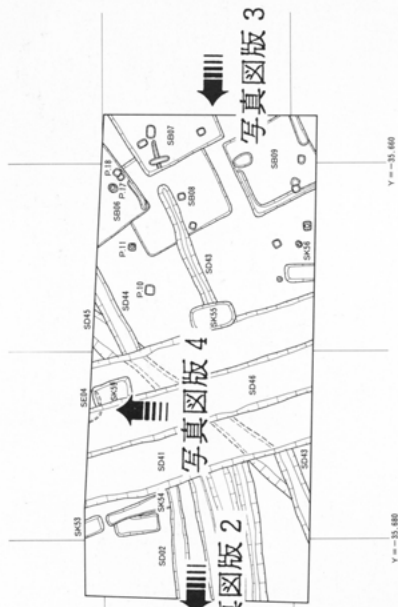
畑之内花ノ木遺跡C・E区

尾張国分寺の中軸線(推定)は写真中央の道路。写真の左右端の道路はほぼ南北に走るが、中央の道路だけは主軸方位が違う。
この方位はC区SD13・SD15とほぼ一致し、SD30と直交する。

A 区



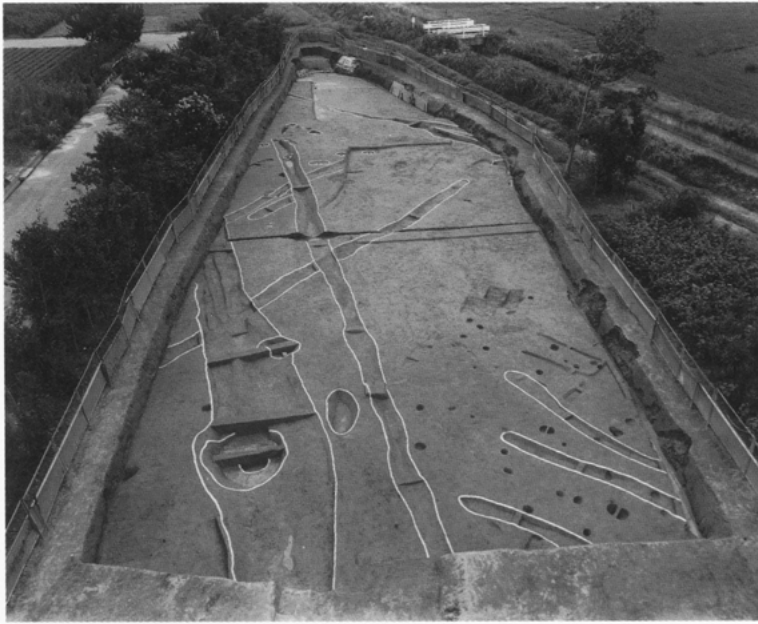
B 区



写真図版 2

写真図版 4

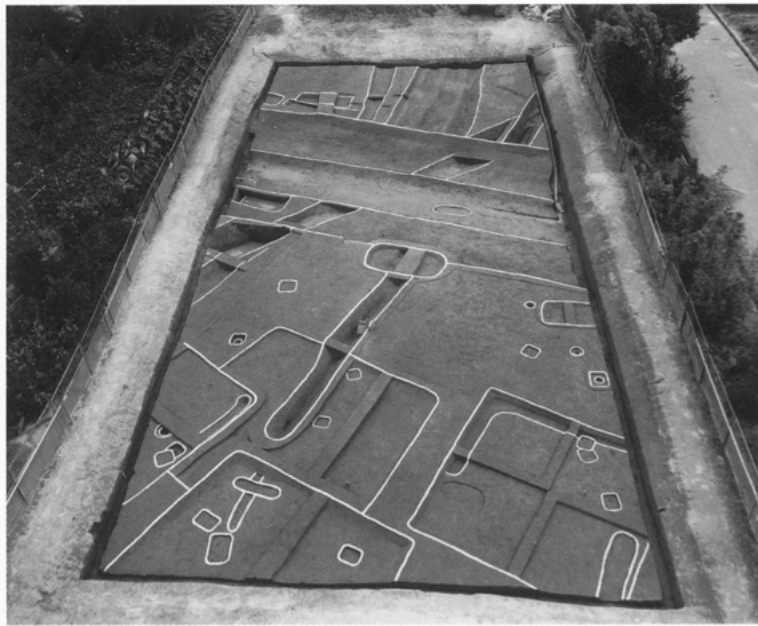
写真図版 3



写真図版2

A区全景（東から）

写真上方にSD01・SD05・SB01（B1期）



写真図版3

B区全景（東から）

写真下方にSB06～SB09（B2期）

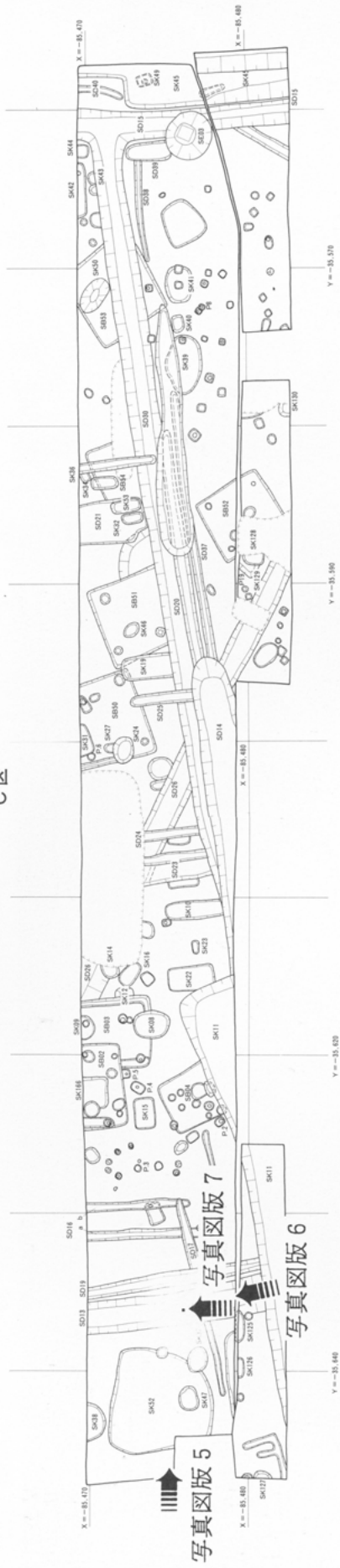


写真図版4

B区SE04（南から）

井戸枠、曲物3段が残存（B2期）

C区



Da区

Db区

Dc区

写真图版 5

写真图版 6

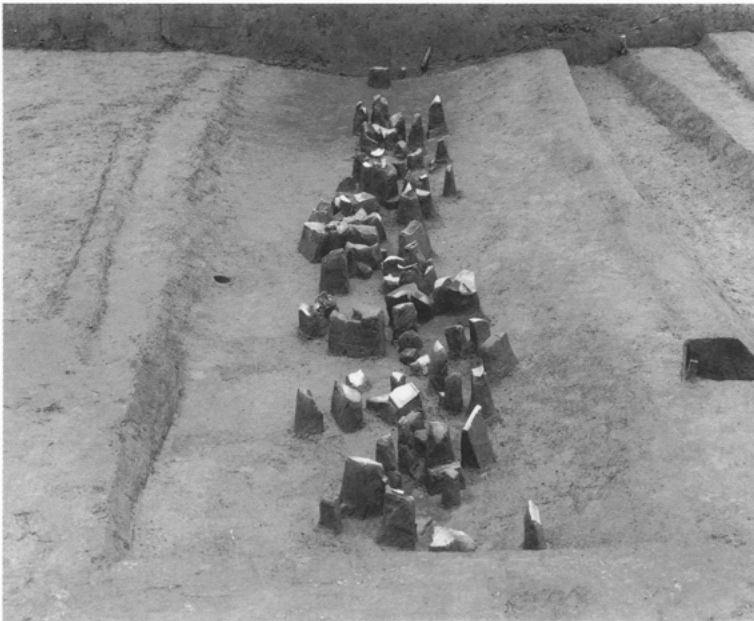
写真图版 7



写真図版5

C区全景（西から）

写真下方にSD13、上方にSD30いずれも
尾張国分寺寺域区画溝（B2期）



写真図版6

C区SD13遺物出土状況（南から）

出土遺物は鳴海32号窯式期から折
戸10号窯式期が主体の良好な一括
資料（B2期）

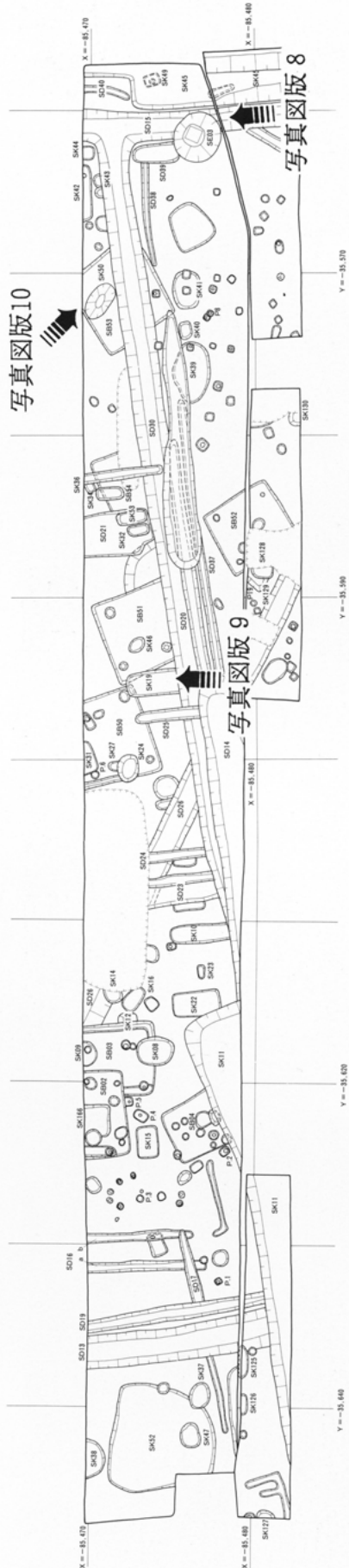


写真図版7

C区SD13遺物出土状況（南から）

尾張国分寺軒丸瓦MIV型式（B2期）

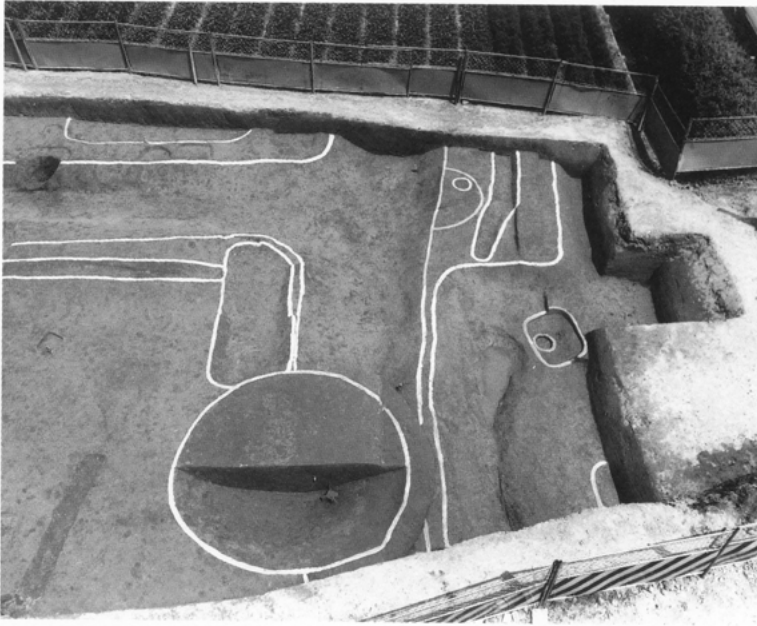
C区



Dc区

Db区

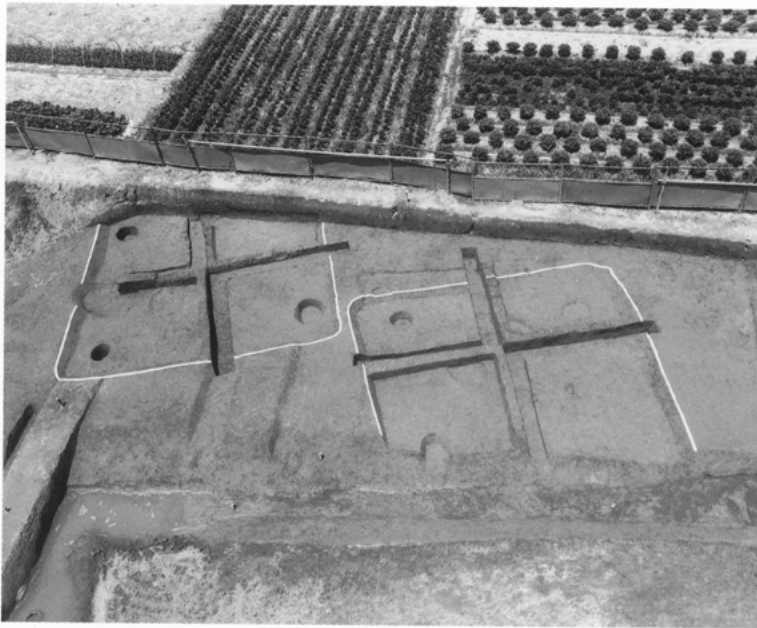
Da区



写真図版8

C区SD15・30・SE03（南から）

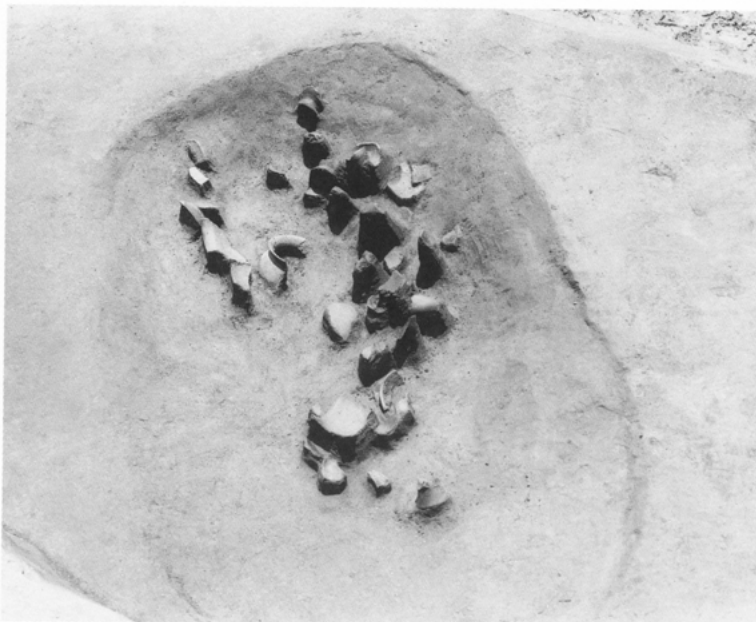
尾張国分寺寺域区画構とそれを破壊して掘削された井戸（B2・3期）



写真図版9

C区SB50・51（南から）

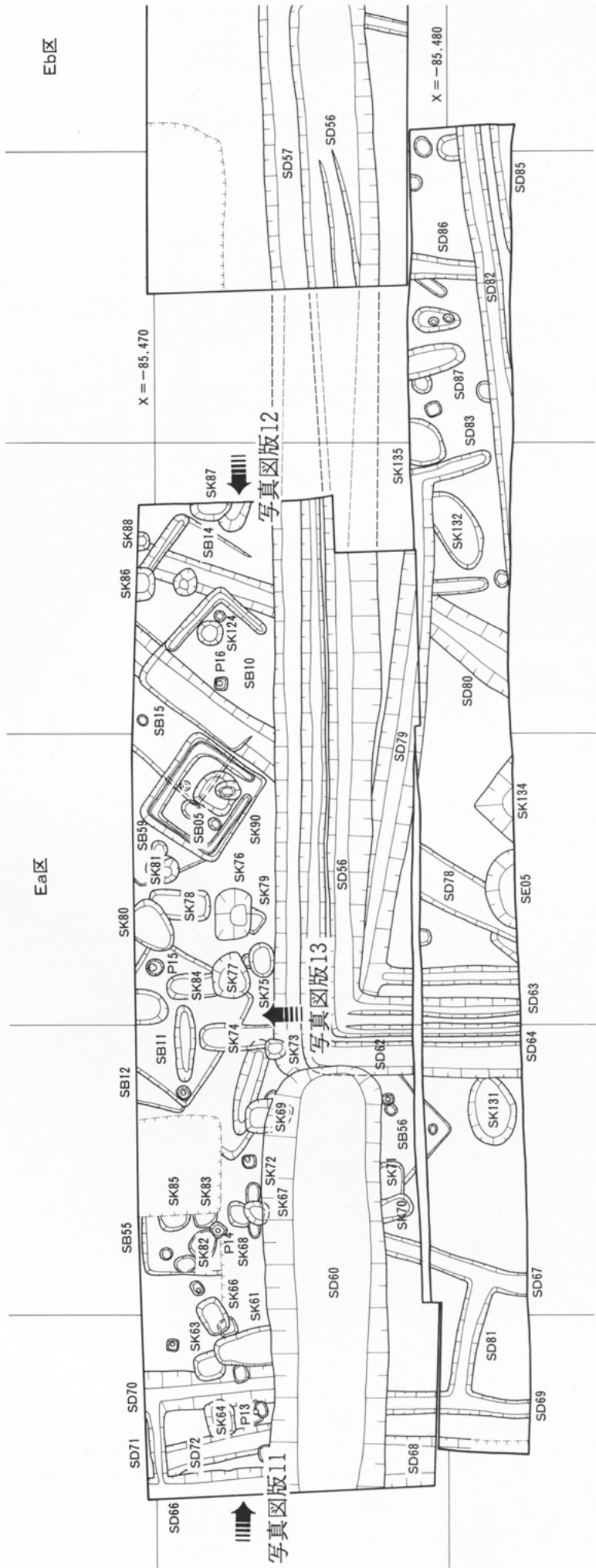
微高地上に営まれた弥生時代後期の小集落SB51は尾張国分寺寺域区画構SD30に南辺を破壊される。（A1期）



写真図版10

C区SK50遺物出土状況（北西から）

SB53内に掘削されたこの土坑からは山中式4段階の良好な一括遺物が出土した。（A1期）



Eb区

Ea区

Fa区

X = -85.470

X = -85.480

Y = -35.520

Y = -35.540

写真版12

写真版13

写真版11

SK87

SK64

SK88

SK80

SB12

SB55

SD71

SD66

SK86

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SK88

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

SK81

SB11

SK85

SD70

SD67

SB14

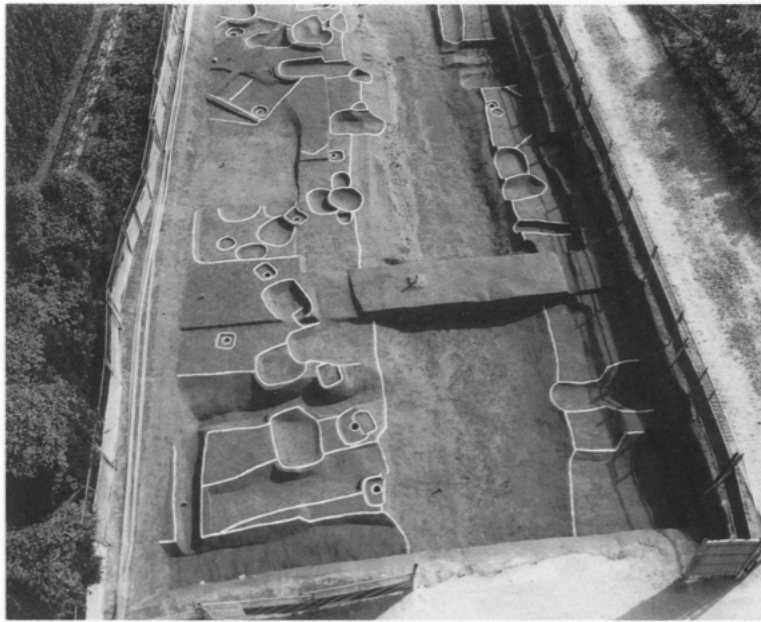
SK81

SB11

SK85

SD70

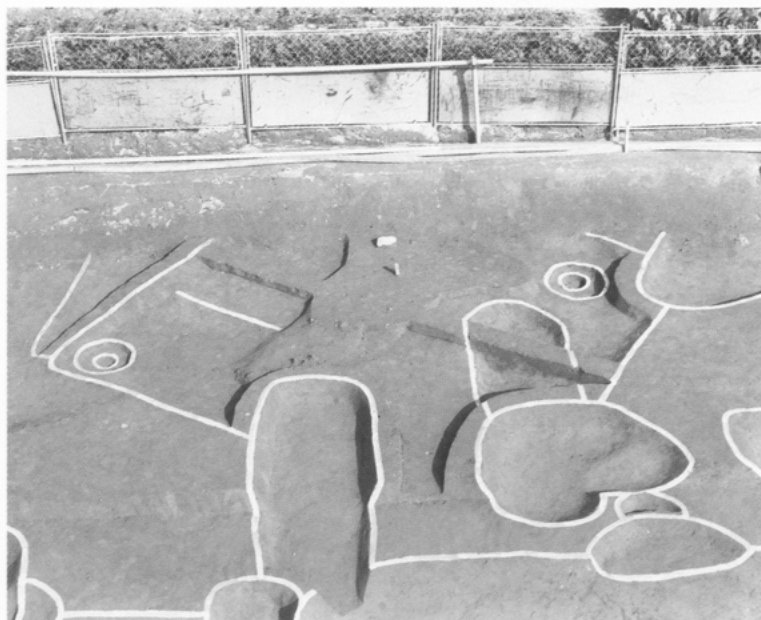
SD67



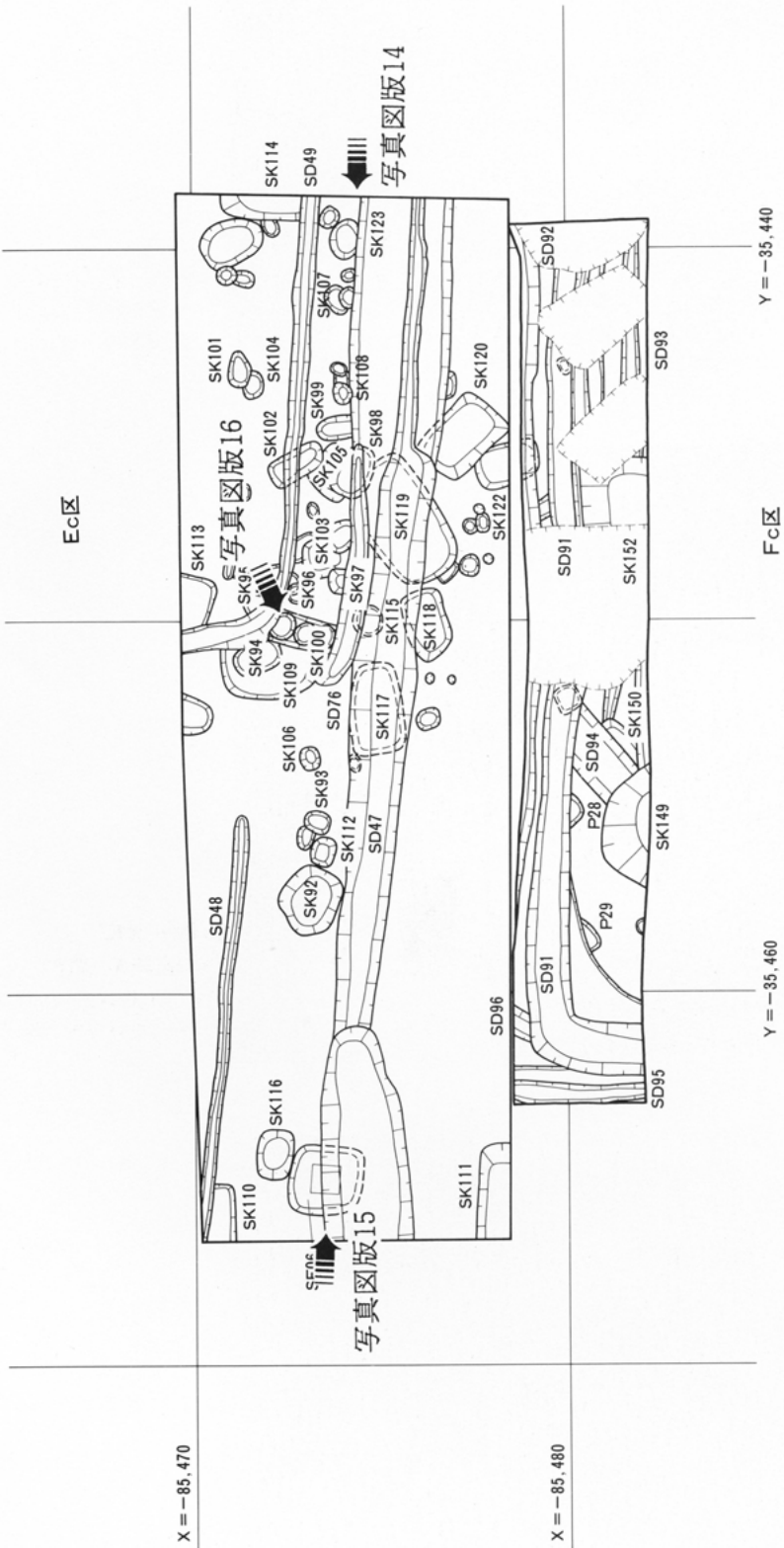
写真図版11
Ea区西半（西から）



写真図版12
Ea区東半（東から）
写真右に尾張国分寺廃絶期の竪穴
住居（B3期）



写真図版13
Ea区SB11（南から）
床面中央に焼土が広がる。（B3期）



X = -85.470

X = -85.480

Y = -35.460

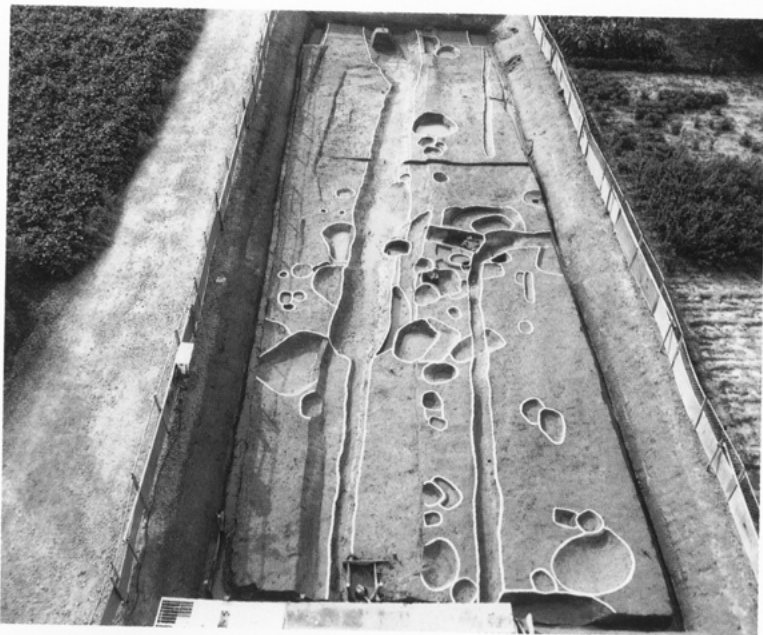
Y = -35.440

Ec区

Fc区

写真図版15

写真図版14



写真図版14

Ec区全景（東から）

土坑(壙)群とそれを破壊して掘削される方形区画溝（C期）



写真図版15

Ec区SE06（西から）

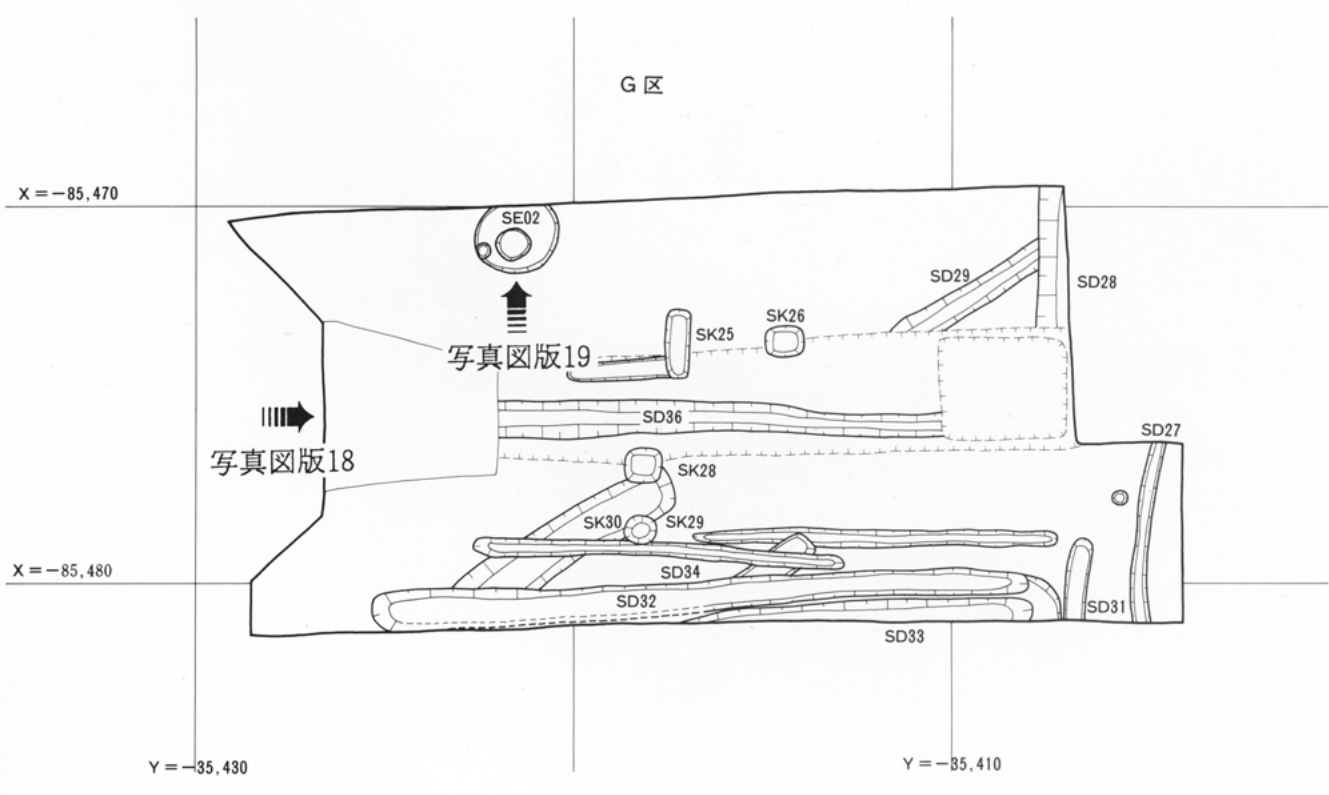
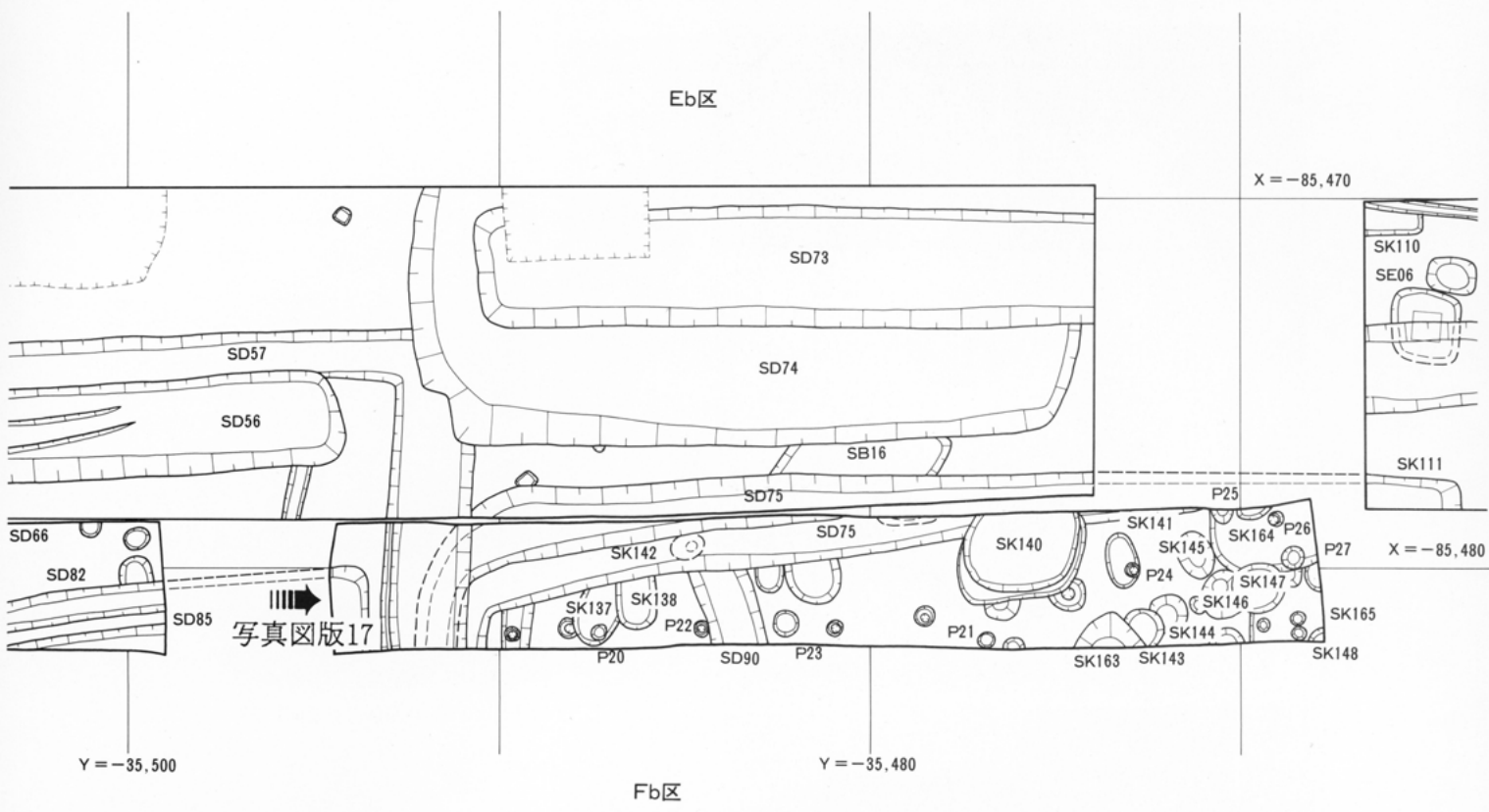
土坑(壙)群と時期を同じくして掘削される井戸（C1期）

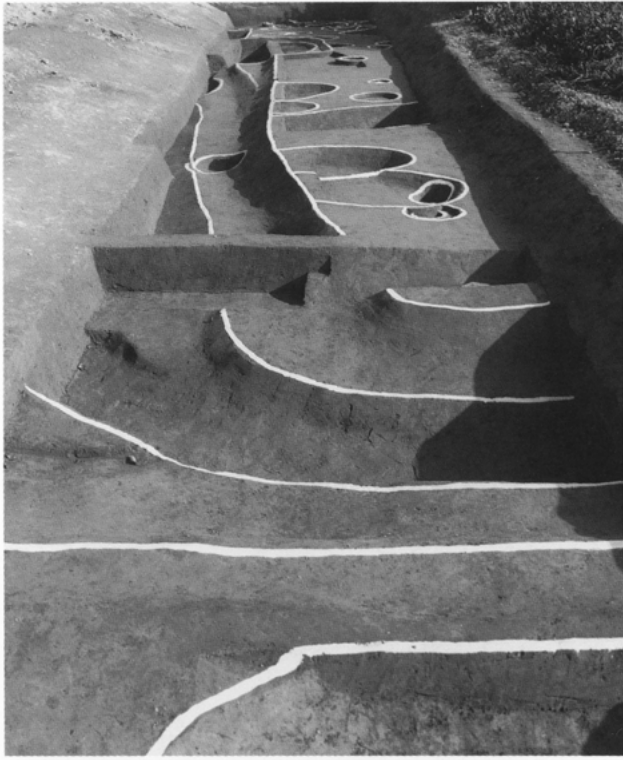


写真図版16

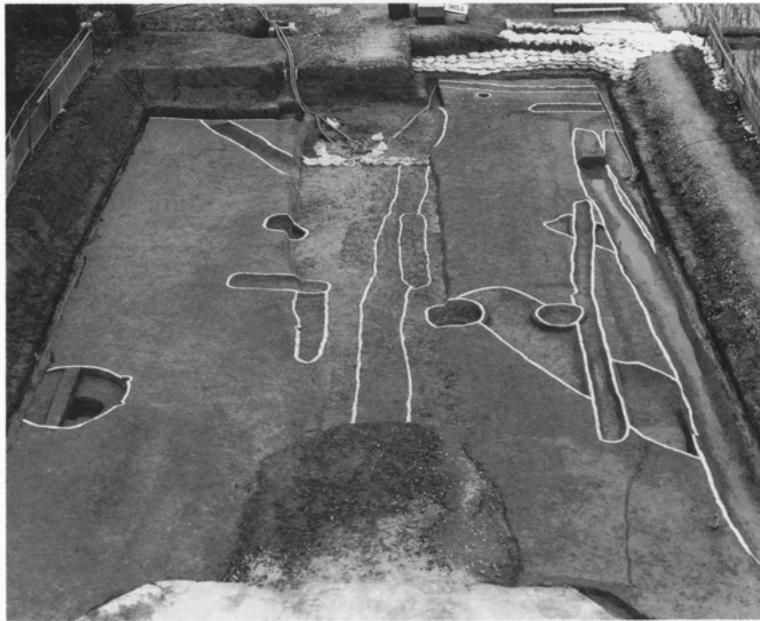
Ec区SK100遺物出土状況（北東から）

出土した灰釉系陶器は南部系の第6型式に所属する。（C1期）





写真図版17
Fb区SD75 (西から)
方形区画溝の曲部 (C2期)

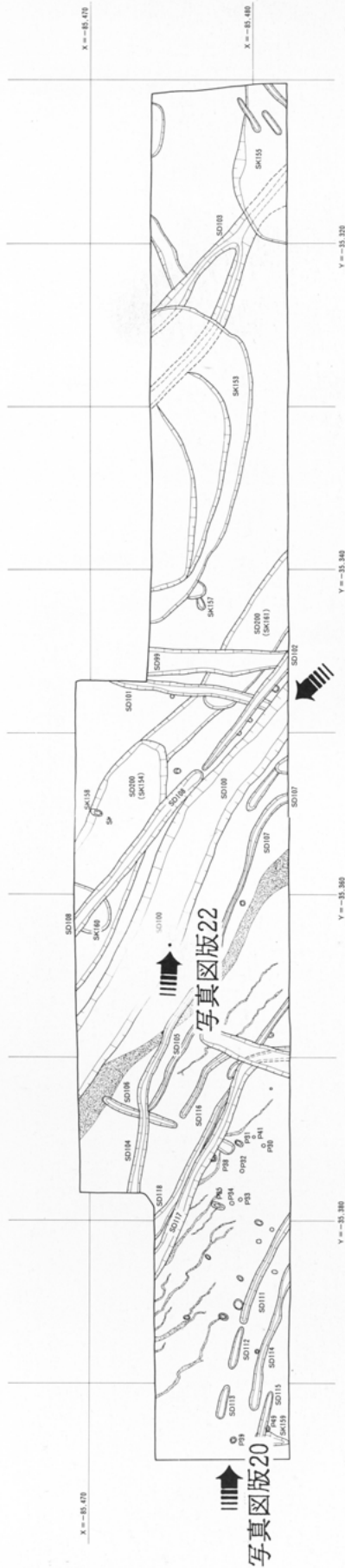


写真図版18
G区全景 (西から)



写真図版19
G区SE02(南から)
土坑(壙)群と時期を同じくして掘削される井戸 (C1期)

H区



写真図版20

写真図版22

写真図版21

X=15.472

X=15.478

Y=15.380

Y=15.380

Y=15.380

Y=15.380

X=15.480



写真図版20

H区全景（西から）

調査区西半(写真手前)には、濃尾地震のものと思われる砂脈が走る。



写真図版21

H区SD100遺物出土状況(南東から)

微高地の縁に掘削された溝。12世紀後半から15世紀後半まで継続する。(C1・2期)



写真図版22

H区SD100遺物出土状況（西から）



1



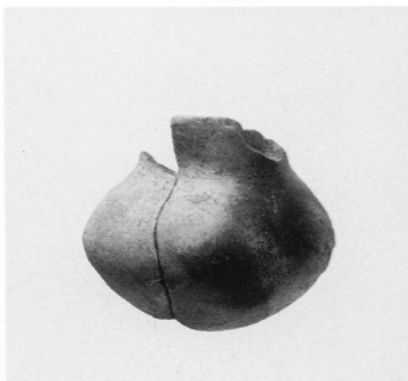
5



14



18



19



59



61



62



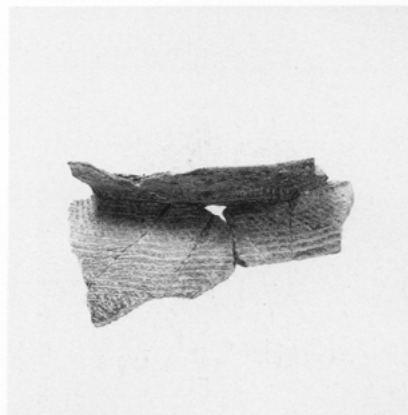
66



67



68



78



87



89



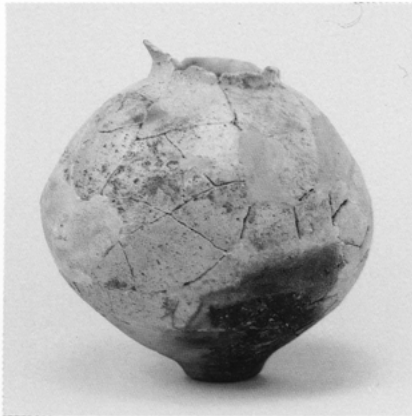
91



92



93



96



97



99



100



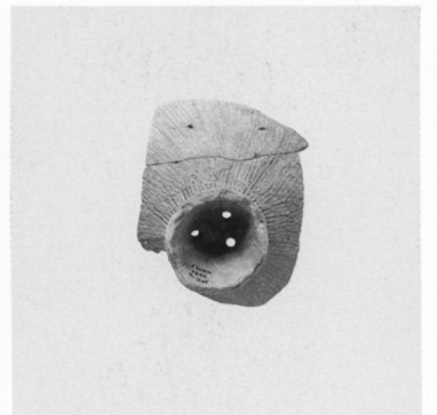
101



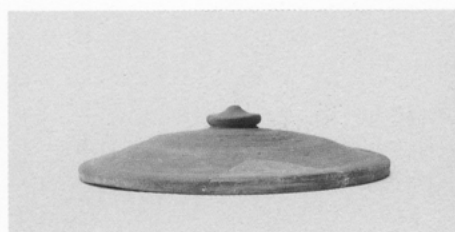
111



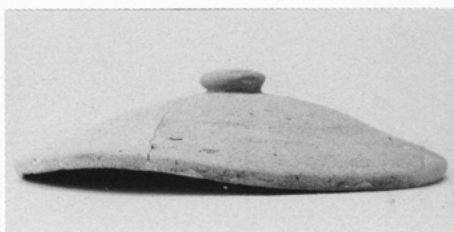
114



121



150



151



152



153



154



156



159



160



161



162



163



165



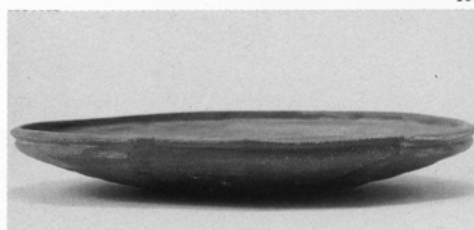
166



167



176



171



172



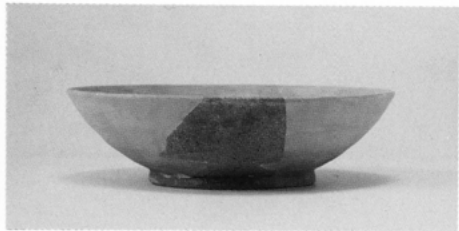
176



179



182



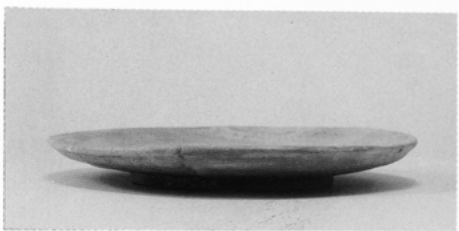
187



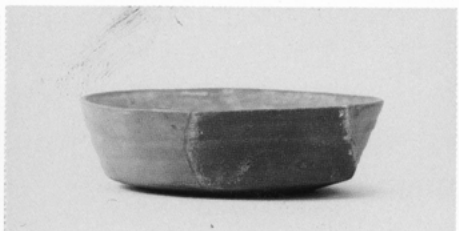
188



189



190



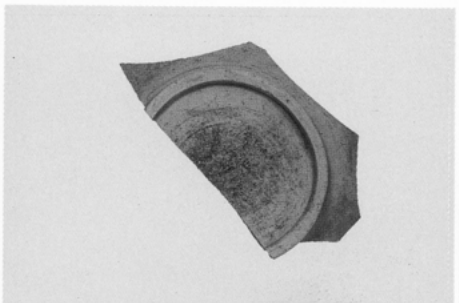
194



195



196



202



209



254



266



267



268



274



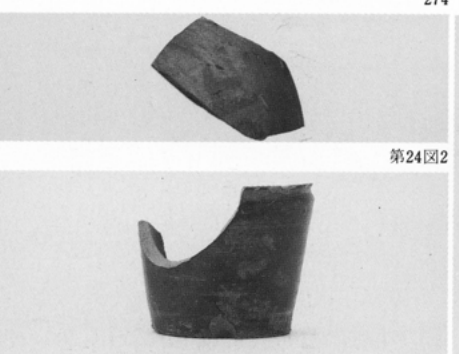
275



269



第24図1



第24図2



第24図9



278



279



281



290



295



296



300



301



302



306



307



309



310



310



311



314



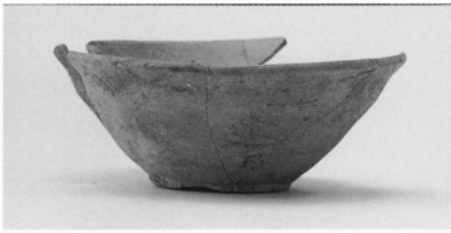
318



319



321



322



327



328



329



331



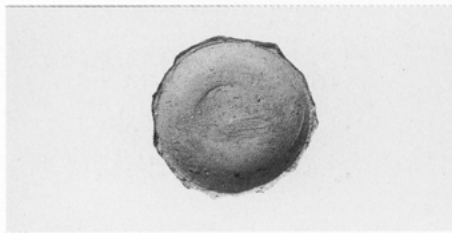
333



334



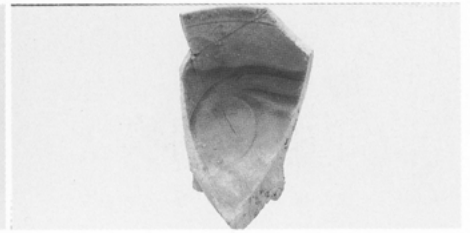
336



337



338



343



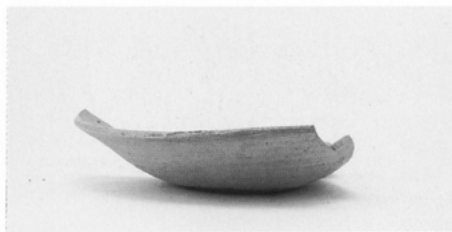
344



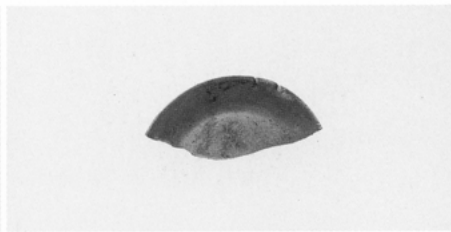
352



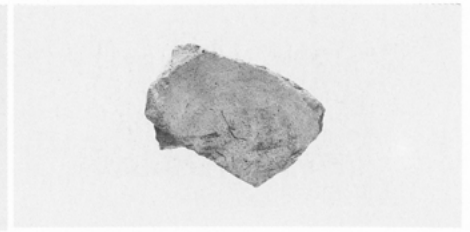
357



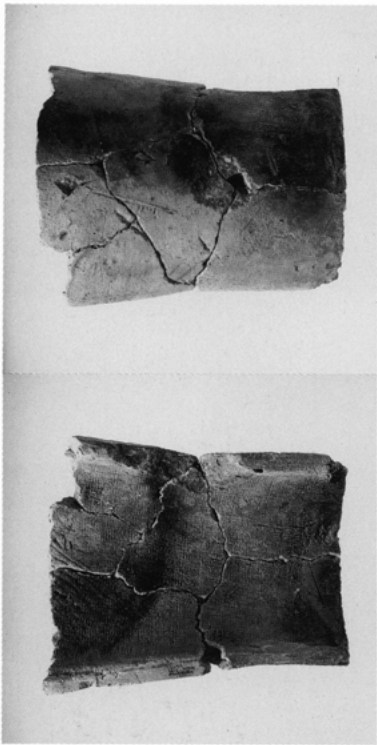
365



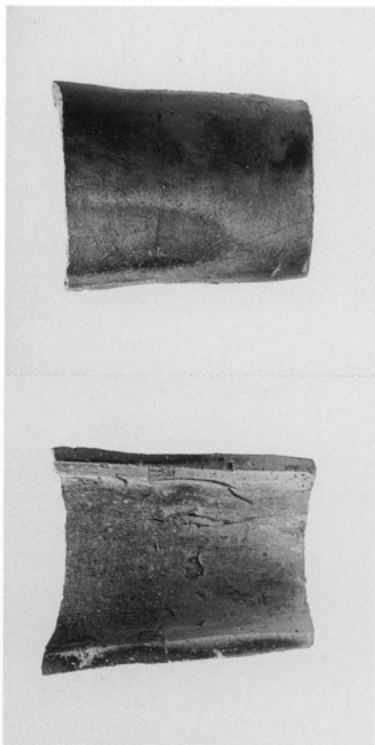
386



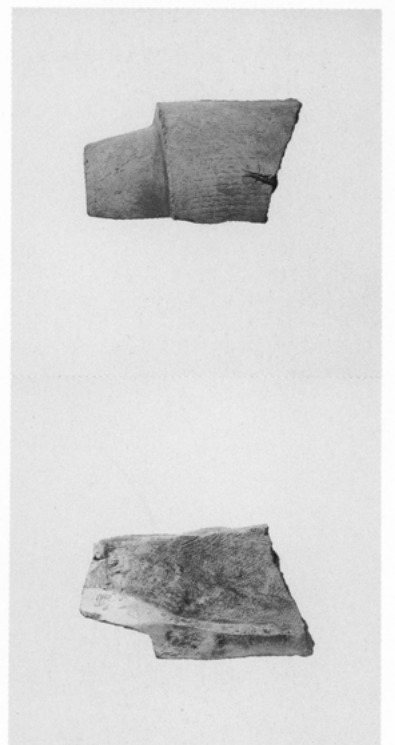
387



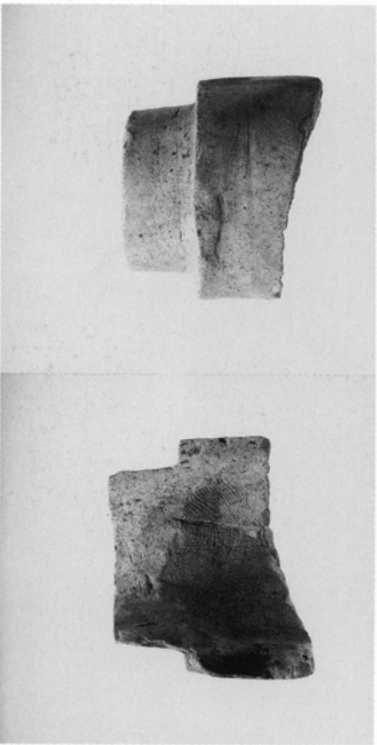
1



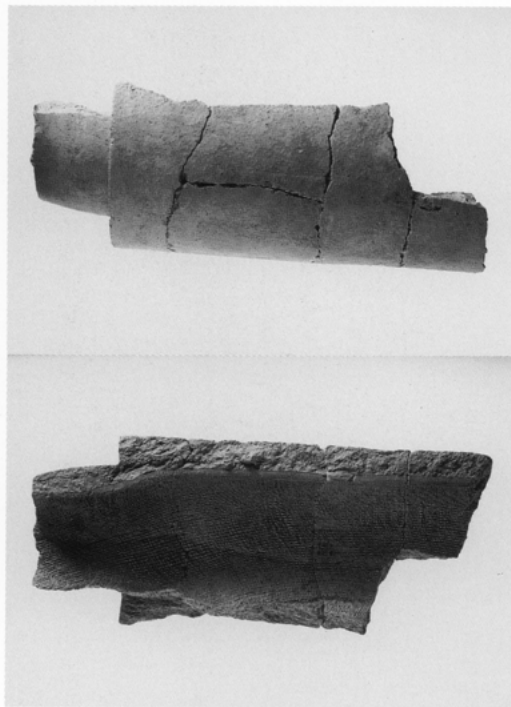
2



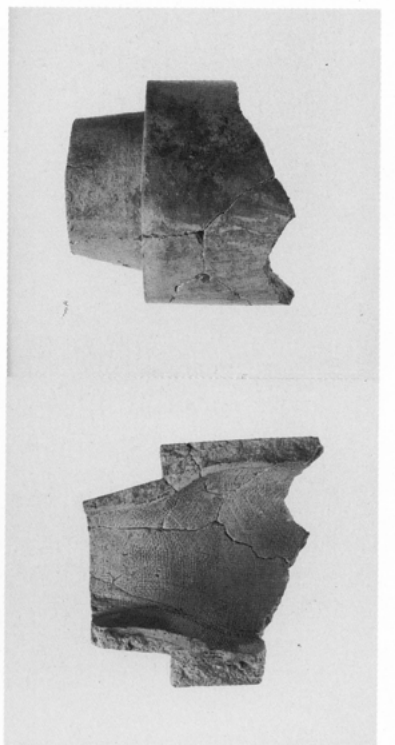
3



4



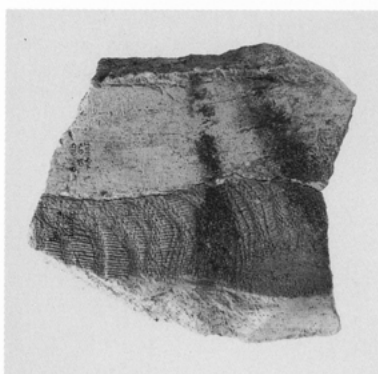
8



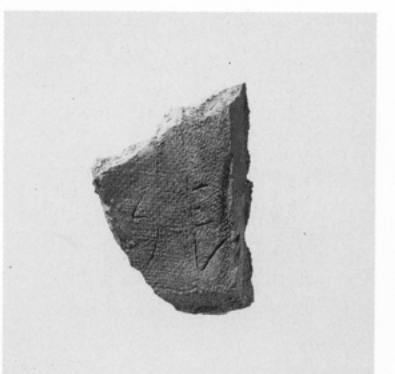
7



11



12



13

写真図版29 丸 瓦

1:5...1. 2. 3. 4. 7. 8
1:3...11. 12. 13

(遺物番号は挿図
第26図から第30図に対応)



14



16



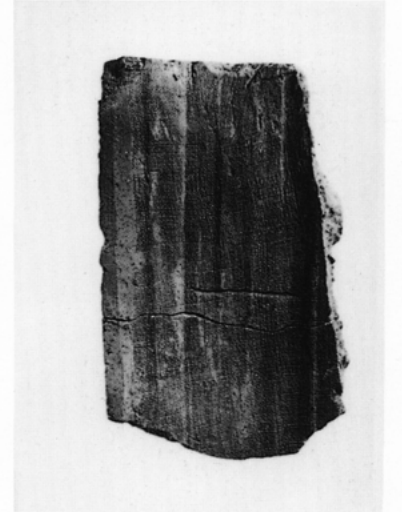
19



14



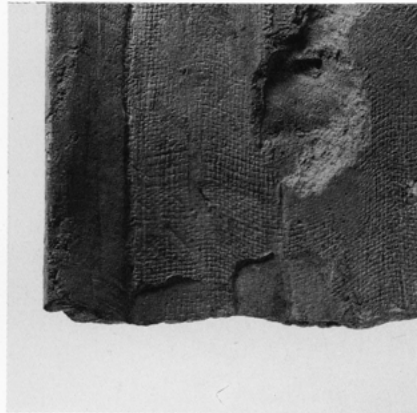
16



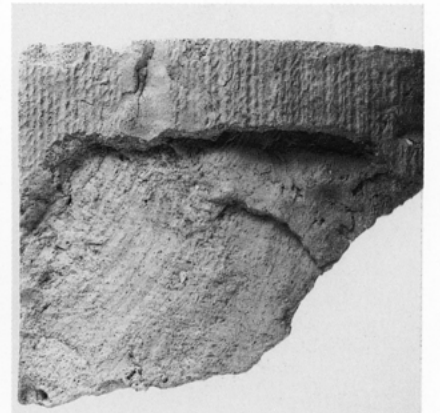
19



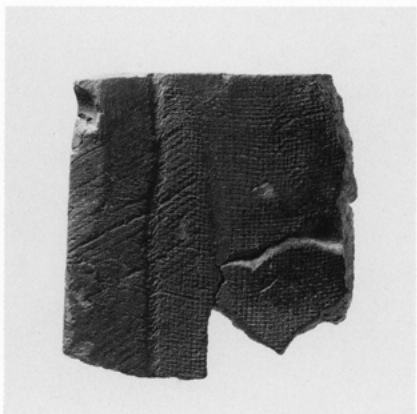
18



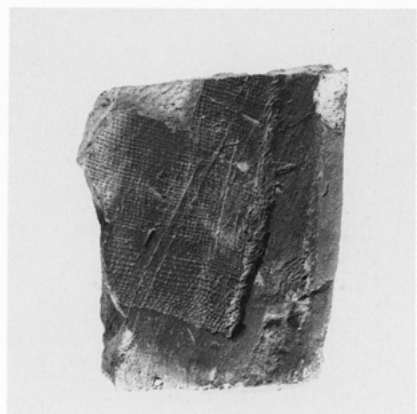
20



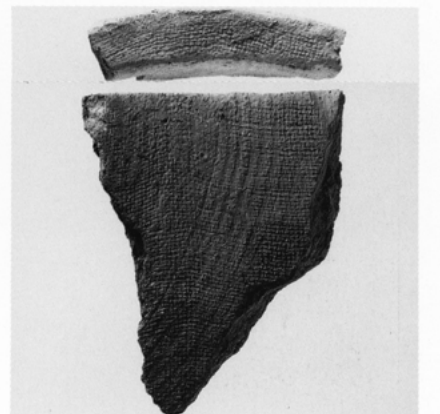
22



23



25



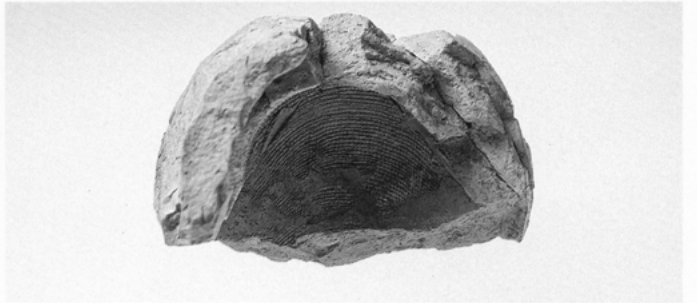
26

写真図版30 平瓦

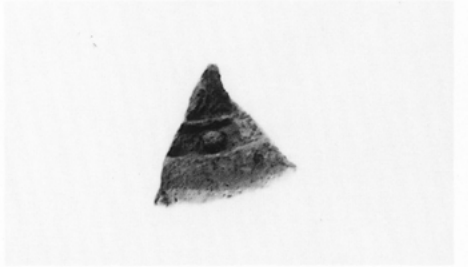
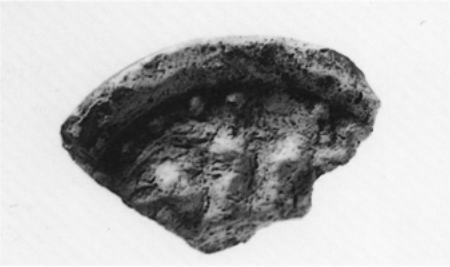
1:6...14. 16. 19

1:3...18. 20. 22. 23. 25. 26

(遺物番号は挿図
第31図~第35図に対応)



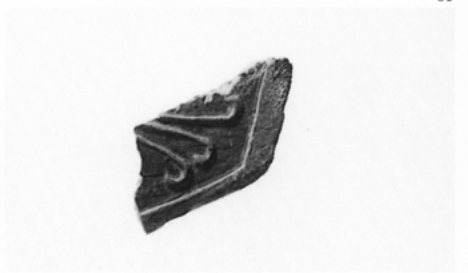
27



28

30

31



38

39

42



45

47

48



50

57

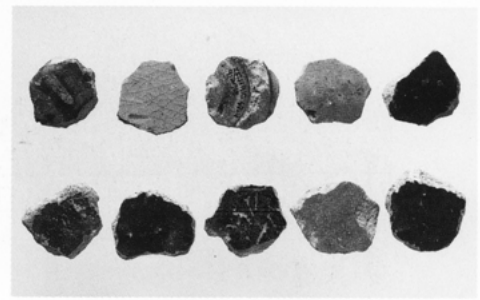


60

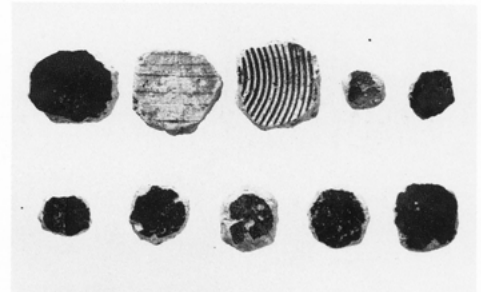
61



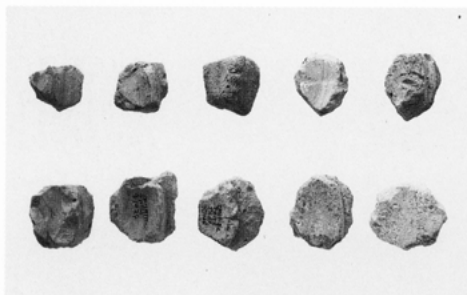
第40図
1~9



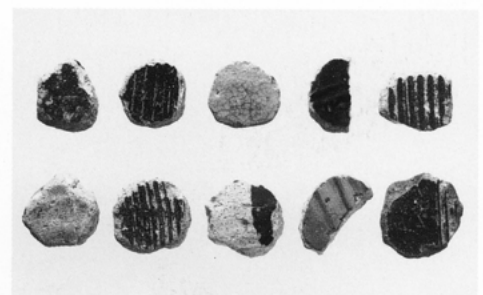
第41図
41~50



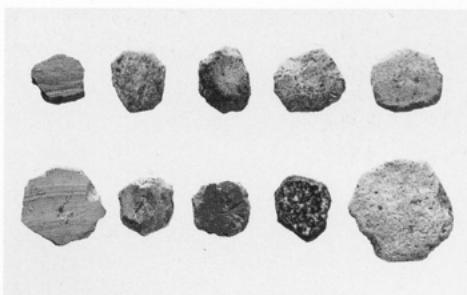
第41図
51~60



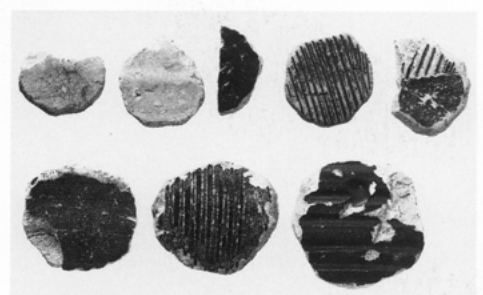
第41図
1~10



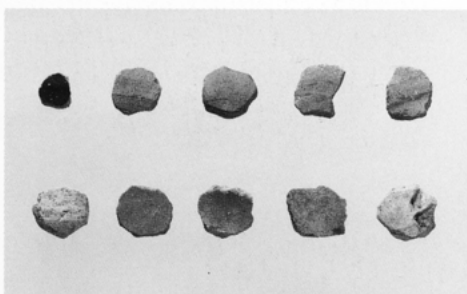
第41. 42図
61~70



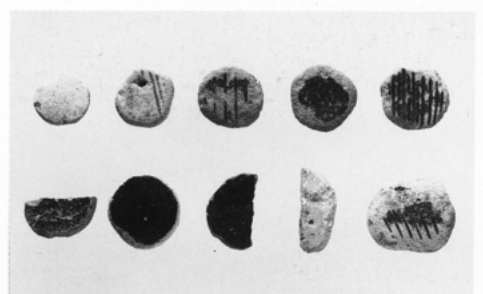
第41図
11~20



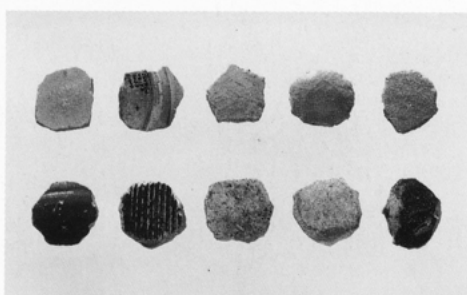
第42図
71~78



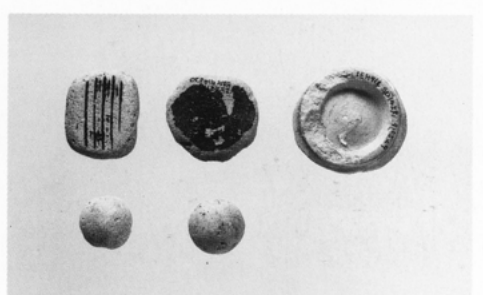
第41図
21~30



第42図
79~88



第41図
31~40



第42図
89~93

報告書抄録

フリガナ	ホリノウチハナノキイセキ
書名	堀之内花ノ木遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第52集
編著者名	蟹江吉弘・太田芳巳・赤塚次郎・服部俊之
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年	西暦1994年 3月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北 緯	東 径	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ホリノウチハナノ 堀之内花ノ 木	イザワシホリノウチ ウ 稲沢市堀之内 町	23220	09232	35°13'43"	136°46'34"	19910401 19920131	7100	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
堀之内花ノ 木	集落跡	弥生時代	竪穴住居	弥生土器	尾張国分寺寺城区画溝
	集落跡	奈良・平 安時代	竪穴住居 井戸	須恵器・灰釉陶器・ 瓦	
	寺院跡	奈良・平 安時代	溝	〃	
	集落跡	鎌倉・室 町時代	土坑・溝 井戸	灰釉系陶器	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

堀之内花ノ木遺跡

1994年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社 正 鶴 堂